

ジェンドリンのプロセスモデルとその臨床的 意義に関する研究

末武, 康弘 / SUETAKE, Yasuhiro

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

307

(発行年 / Year)

2014-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675乙第215号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2014-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(学術)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010249>

ジェンドリンの
プロセスモデルと
その臨床的意義に関する研究

末武 康弘

目次

序論

1. 本論文の意図 3
2. ジェンドリンのプロセスモデル 7
3. 先行研究 11
4. 本論文の内容と構成 16

本論

第Ⅰ部 臨床的問題としてのジェンドリン哲学——プロセスモデルへの展開——

1. はじめに——ジェンドリン哲学へのアプローチ—— 18
2. 体験過程、シンボル、意味——体験過程論の展開—— 26
3. 夢、身体、隠喩——現象学的方法による夢解釈—— 41
4. 体験の複雑性、自我と非自我、身体感覚が導くプロセス——ナルシシズム概念
批判と社会的提言—— 50
5. インプライング、生起、進化——プロセスモデルの臨床的含意について——
60
6. (第Ⅰ部の補遺) ジェンドリンからの手紙とそこから得られた応答的秩序
69

第Ⅱ部 ジェンドリンのプロセスモデル——その解読と考察——

1. はじめに 81
2. プロセスモデル第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章 87
3. プロセスモデル第Ⅳ章 身体と時間 (THE BODY AND TIME)
93
4. プロセスモデル第Ⅴ章 進化、新しさ、安定性 (EVOLUTION, NOVELTY, AND
STABILITY) 109
5. プロセスモデル第Ⅵ章 行動 (BEHAVIOR) 118
6. プロセスモデル第Ⅶ章 文化、シンボル、言語 (CULTURE, SYMBOL AND
LANGUAGE) 129

7. プロセスモデル第Ⅷ章 暗在するものによる思考 (TINKING WITH THE IMPLICIT)	178
8. (第Ⅱ部の補遺) プロセスモデルの臨床的意義を抽出するための基礎的作業	213
第Ⅲ部 プロセスモデルの臨床的意義を実例化する試み——パーソンセンタード／フォーカシング指向セラピーにおいて生起するプロセスの理論化——	
1. はじめに——研究の意図——	231
2. パーソンセンタード／フォーカシング指向セラピーにおいて生起するプロセスの理論化——TAE を用いた質的分析から——	242
3. プロセスモデルの臨床的意義の実例化	270
結 論	
1. 本論文の成果	281
2. 今後の課題	287
あとがき	289
文 献	291

序 論

1. 本論文の意図

本論文は、アメリカ合衆国（以下、米国と表記する）の哲学者そしてサイコセラピストであるユージーン・T・ジェンドリン（Gendlin, Eugene T., 1926～）¹の代表的な哲学的作品『プロセスモデル（*A Process Model*）』（Gendlin, 1997a）の内容を解明し、あわせて、このプロセスモデル²がサイコセラピーをはじめとした臨床実践にもたらす意義について考察するものである。

ジェンドリンについては、20世紀の米国を代表する臨床心理学者カール・R・ロジャーズ（Rogers, Carl R., 1902～1987）の後継者であるという点においても、また心理臨床のスキルとしてのフォーカシング（Gendlin, 1978/1981）の開発者という点においても、臨床心理学の分野では世界的にその名前と業績は広く知れわたっている。1989年よりフォーカシング国際会議（International Focusing Conference）が世界各地で毎年開催され、2009年からはニューヨークでフォーカシング指向サイコセラピー世界会議（World Conference on Focusing-Oriented Psychotherapies）が隔年で開かれている。日本でも日本フォーカシング協会や日本人間性心理学会、日本心理臨床学会をはじめとした学会や研究会等で、ジェンドリンのフォーカシングやサイコセラピーに関する学術的あるいは臨床的な研究や議論が積み重ねられてきている。

一方ジェンドリンは臨床心理学者であると同時に哲学者であり、心理学関係の業績をは

¹ ジェンドリンのファーストネームについては、日本では「ユージン」という表記が定着しているが、本論文では原語の発音に近い「ユージーン」を用いる（彼の愛称は「ジーン（Gene）」である）。また、ミドルネームの「T」については、ジェンドリン自身は常にイニシャルのみを記載しているが、彼の母の旧姓である「トベル（Tobell）」であると考えられる。（Korbei, L. (1994). Eugen(e) Gend(e)lin. In O. Frischenschlager (Hg.), *Wien, wo sonst! Die Entstehung der Psychoanalyse und ihrer Schulen*. pp. 174-181. Wien/Köln/Weimar: Böhlau. を参照）

² 本論文では、作品そのものを指す場合には『プロセスモデル』と表記するが、その作品によって提示された哲学モデルを指す場合には、『 』を取って、プロセスモデルとの表記を用いる。

るかに上回る数の哲学関連の著作や論文を著している。その哲学は、彼の臨床心理学の師であるロジャーズはじめ、ジェンドリンを知る研究者や一部の哲学者によって早くから注目されてきた (Rogers & Russell, 2002; Levin, 1997 ほか)。しかし『体験過程と意味の創造 (*Experiencing and the Creation of Meaning*)』(Gendlin, 1962a) と『プロセスモデル (*A Process Model*)』(Gendlin, 1997a) を中心とするジェンドリンの哲学的な業績は、心理学者や心理臨床家にとってはあまりにも難解であり、また彼の臨床的な視野の奥行きは、逆に哲学を専門とする研究者にとっては馴染みのあるものではなかったようだ。こうした事情から、ジェンドリンの哲学的な仕事については、それが注目すべき宝庫であることはたびたび指摘されながらも (村瀬, 1981; 池見 1999; 末武 1992/2004 ほか)、その全容や意義は十分に解明されてこなかった。

筆者は『心理臨床大事典』の初版が刊行された 1992 年に、この事典の編者の一人だった故・村瀬孝雄氏から大項目「ロジャーズ - ジェンドリンの現象学的心理学」の執筆を依頼され、そこにジェンドリンの哲学について次のように記述した。

彼〔ジェンドリン〕は、1962 年に『体験過程と意味の創造』を公刊し、体験過程とその象徴化の問題について論じ、概念の論理性を重視する論理実証主義と前概念的体験を重視する実存哲学との溝を埋めようとする論考を行った。その後も、「情動の現象学——怒り」(‘A phenomenology of emotions: Anger.’ 1971)、「体験的現象学」(‘Experiential phenomenology.’ 1973)、「ナルシシズム概念についての哲学的批判」(‘Philosophical critique of the concept of narcissism.’ 1986)、その他多数の哲学論文を著している。ただし、日本ではこれら彼の哲学的な業績についての理解や検討はまだ十分になされていない。(末武 1992 144 頁、〔 〕内は補足。)

そして『心理臨床大事典』の改訂版が 2004 年に刊行されたときにも、筆者はこの記述を書き改めることはしなかった。この間、筆者自身もジェンドリンのいくつかの哲学論文の読解に取り組み (末武 1993, 1994, 2000)、また一部の哲学者によってジェンドリンの哲学論文の訳出が行われるなど (Gendlin, 1997b 斎藤訳 1998)、まったく進展がなかったわけではなかったが、1997 年に公表された³ 彼の『プロセスモデル』については、こ

³ *A Process Model* (Gendlin, 1997a) は、ニューヨークのフォーカシング・インスティテュートから頒布され、インターネットでも全文が公開されているが、出版社を介していないため書店

の 2004 年の時点では、日本で——いや、世界的にも——まだ十分な理解や議論がなされておらず、ジェンドリンの哲学的な業績について理解や評価が定まっているとは、残念ながら言えない状況だったからである。

しかしながら、最近になって、ジェンドリンの哲学とプロセスモデルをめぐる理解にはいくつかの目ざましい進展が生じてきている。

世界的に見ると、2006 年にオランダで開かれた第 18 回フォーカシング国際会議のポストカンファレンスにおいてプロセスモデルとジェンドリン哲学についてのディスカッションが行われ、また 2007 年にはイングランド（以下では、スコットランドや北アイルランドを含めて英国と表記する）のイーストアングリア大学（University of East Anglia）でプロセスモデル・コロキウム（Process Model Colloquium）が開催された。また、2009 年に開催された第 1 回フォーカシング指向サイコセラピー世界会議では、南米チリの研究者による『プロセスモデル』のスペイン語訳（Riveros, 2009）が発表され、さらに、2011 年にイーストアングリア大学で開かれたサイコセラピー哲学カンファレンス（Philosophy of Psychotherapy Conference）では『プロセスモデル』のドイツ語版が訳出中であるとの情報が提供された。⁴

日本においても、筆者らはジェンドリンの哲学とプロセスモデルについての理解と議論を、『フォーカシングの原点と臨床的展開』（諸富 2009）、『ジェンドリン哲学入門—フォーカシングの根底にあるもの—』（諸富・末武・村里 2009）等において提起した。また、プロセスモデルを基礎とした理論構築法である TAE（Gendlin, 2004; Gendlin & Hendricks, 2004）を質的研究に適用しようとする試み（得丸 2008, 2010）や、現象学や解釈学との繋がりからジェンドリン哲学の意義を解明しようとする研究（村里 2008, 2009, 2011; 三村 2009a, 2009b, 2011, 2012a, 2012b, 2013）が行われるなど、ここ数年の日本

を通しての一般的な販売ルートでは購入はできない。そこにはジェンドリンのさまざまな意図——著作権や知的所有権、公開とフリーアクセスなどをめぐる——があると考えられる。したがってここでは「出版」という言葉は用いずに、「公表」あるいは「公開」といった表現を使用する。

⁴ 筆者自身も、2007 年のプロセスモデル・コロキウム、2009 年の第 1 回フォーカシング指向サイコセラピー世界会議、2011 年のサイコセラピー哲学カンファレンスに参加し、ジェンドリンのプロセスモデルに関する研究報告を行った。またこの間、ジェンドリンは 2008 年 3 月にニューヨークで、‘Some Philosophical Concepts That Can Illuminate The Role Of The Implicit In Psychotherapy（暗在的なものがサイコセラピーにおいて果たす役割を照射しうるいくつかの哲学的概念）’というテーマのワークショップを開催し、プロセスモデルがどのようにサイコセラピーに貢献できるかについての講演を行っている（本論文の第 I 部、6（第 I 部の補遺）参照）。

における議論には目をみはるものがある。

このような中で、本論文は、ジェンドリンの哲学的な業績の中でもその頂点にあると言える『プロセスモデル』に焦点をあて、このモデルがいったいどのような視座から、どのように生命体や世界の問題をとらえようとしているのかを明らかにするものである。本論文ではそのための基礎資料として、『プロセスモデル』の日本語による全訳を行った。さらに本論文では、このジェンドリンのプロセスモデルがサイコセラピーをはじめとした私たちの臨床実践にもたらす意義についてあわせて考察する。

2. ジェンドリンのプロセスモデル

(1) ユージーン・T・ジェンドリン

ユージーン・T・ジェンドリン (Gendlin, Eugene T.) は、1926年12月25日にオーストリアのウィーンに生まれている。ウィーン時代の名前はオイゲン・ゲンデルリン (Eugen Gendelin) であり、ユダヤ人である父レオニド・ゲンデルリン (Leonid Gendelin) と母シルビア・ゲンデルリン・トベル (Sylvia Gendelin-Tobell) の間の一人っ子として育った。1938年にナチによるユダヤ人迫害から逃れて家族3人で米国に移住。ワシントンDCに暮らし、家族はファミリーネームをジェンドリン (Gendlin) と名乗り、父はレオ (Leo)、息子はユージーン (Eugene) となった。なお、幼少期やウィーン脱出時のエピソードについては筆者らが訳した資料 (Korbei, 1994 桜本・村里・諸富・大迫・末武・得丸共訳 2011) に詳しい。

その後ユージーン・ジェンドリンはシカゴ大学 (University of Chicago) で哲学を専攻し、1958年に「シンボル化における体験過程の機能 (The function of experiencing in symbolization)」で哲学の博士号を取得している。一方で、1952年より同じシカゴ大学でサイコセラピーの実践と研究に取り組んでいたカール・ロジャーズのもとで臨床心理学を学び、サイコセラピストとしても活躍するようになった。1958～62年にロジャーズが主宰したウィスコンシン・プロジェクト (統合失調症患者に対するサイコセラピーの臨床研究) (Rogers, Gendlin, Kiesler & Truax, 1967) の主任研究員を務めた後、1963年にシカゴ大学の行動科学部の教授⁵ となり、シカゴを拠点として哲学研究およびフォーカシングを中心としたサイコセラピーの実践と研究に取り組んだ。この間、1963～76年にはアメリカ心理学会のサイコセラピー部会の学術誌 *Psychotherapy: Theory, Research, and Practice* の編集長を務め、1970年には同学会から第1回専門心理学者栄誉賞 (Distinguished Professional Psychologist Award) が贈られている。1997年以降はニューヨークに活動の場所を移し、1986年にシカゴで設立されたフォーカシング・インスティ

⁵ ジェンドリン自身は大学での地位や昇進などにほとんど関心がなく、シカゴ大学就任時から退職時まで、その肩書きは「准教授 (associate professor)」だったようである。現在は「名誉准教授」。

テュート (The Focusing Institute) は、現在ではニューヨークを中心に展開され、フォーカシングやフォーカシング指向セラピーの実践と研究の拠点となっている。

ジェンドリンの哲学的な業績は、『体験過程と意味の創造』と『プロセスモデル』の 2 冊の本を中心として、多数の哲学論文によって展開されてきている。『体験過程と意味の創造』はジェンドリンの博士論文を中心にして執筆されたもので、シンボル (symbol)⁶ と感じられる意味 (felt meaning) の根本的な関係を解明しようとした先駆的かつ画期的な作品であるが、その真価が理解されるには長い年月が必要だった。ようやく 1997 年になってジェンドリン哲学をめぐるシンポジウム「ポストモダニズム以後の言語 (Language after postmodernism)」がシカゴで開催され、その議論は『ポストモダニズム以降の言語——ジェンドリン哲学における語りと思考—— (*Language beyond Postmodernism: Saying and Thinking in Gendlin's Philosophy*)』(Levin, 1997) として編纂されている。この論文集は、あたかもジェンドリン哲学の到達点を描き出し、その価値を確証するかのような構成と内容になっているが、しかし、この論文集が出版された同じ 1997 年に、ジェンドリンは『プロセスモデル』を公表し、彼の哲学がこの時点で完結していたわけではないことを強く印象づけた。この『プロセスモデル』は、『体験過程と意味の創造』を上回る難解な哲学書で、その解読は現在に至るまで世界各地の研究者や臨床家たちによって続けられている。最近のジェンドリンは、自らの哲学を「暗在性の哲学 (philosophy of the implicit)」と呼び、プロセスモデルから導出された新たな哲学的な取り組みを公表し続けており (Gendlin, 2009a, 2009b, 2009c, 2012a, 2012b, 2013)、さらに現在でも、ニューヨークで開催される国際会議やワークショップの際には、絶えず最新の情報発信を行っており、私たちの質問や議論にも応じてくれている。本論文は、そうした最近のジェンドリンと筆者らとの交流や議論を踏まえたものでもあり、ジェンドリン本人にこの研究成果を伝えることができることは筆者自身にとっても感慨深い。

(2) ジェンドリンのプロセスモデル

本論文での議論の中心に据えるプロセスモデルとは、ジェンドリンが長い時間を費やし

⁶ ジェンドリンによる 'symbol' という用語は、いわゆる象徴を意味するだけでなく、さまざまな記号や非言語的なもの (ジェスチャーなど) も含んだ意味で使用されているので、本論文では「シンボル」との表記を用いる。

て取り組んできた、身体、生命現象、時空間、進化、行動、言語、文化、普遍性といった問題を独創的な視点から探求する彼の代表的な哲学的作品であり、生命体や人間の諸事象、そして生命体や人間が生きている世界を包括的に把握しようとする理論モデルである。

では、このプロセスモデルはどのように誕生し、その後どういった修正が加えられ、現在入手できる形になったのだろうか。

プロセスモデルは、おそらくは 1970 年代からジェンドリンによって構想され、執筆されていたと推測される。と言うのも、最初にプロセスモデルが 1 つの形として日の目を見たのは 1981 年であるからである。フォーカシング・インスティテュートのホームページに掲載されているジェンドリン・オンラインライブラリーの以前のヴァージョンには、『プロセスモデル』のレファランスとして、Gendlin, E.T. (1981). *A process model*. Unpublished manuscript (422 pp.). Revised version (1997) (288 pp.). New York: The Focusing Institute.⁷ と記載されていた。1981 年と言えば、ジェンドリンの名を広く知らしめることになったペーパーバック版の『フォーカシング (*Focusing*)』が出版された年でもある。驚くべきことに、フォーカシングが心理臨床の分野で、また社会的にも幅広く認知され活用されるようになる以前から——あるいはそうした時期と並行しつつ——、すでにジェンドリンの中ではプロセスモデルという哲学的思索が深められていたのである。

その後『プロセスモデル (*A Process Model*)』は、1997 年に 1 冊の本 (全 288 ページ) としてフォーカシング・インスティテュートから頒布されることになり、多くの人々にこの哲学書の存在が知られることになる。⁸ また、1998 年にはその全文が同インスティテュートのウェブサイトに掲載され、世界中の誰もがインターネットに接続しさえすればこの作品にアクセスできるようになった。

さらにフォーカシング・インスティテュートからは、誤植等が訂正され修正が加えられた『プロセスモデル』(全 306 ページ、索引を含む) が 2001 年より頒布されており、あわせてそれとほぼ同じ内容の全文がウェブサイトに PDF 版で掲載されている。⁹

⁷ 2013 年 4 月現在もこの記述はインターネット上に残っていて、確認することができる。

http://www.focusing.org/gendlin_articles.html

⁸ 筆者がジェンドリンのプロセスモデルに最初に触れたのは、この 1997 年に頒布されたヴァージョンである。この時期にフォーカシング・インスティテュートのセミナーに参加した大澤美枝子氏が日本にもち帰った中から分けてもらったものが、筆者とプロセスモデルとの最初の出会いだった。しかし、この 1997 年の頒布版は、おそらくはタイプ打ちの草稿と、現在の完成版との中間に位置づくような過渡的なヴァージョンだったようで、図や版組みなどが十分でない箇所が散見され、あまり読みやすいものではなかった。

⁹ <http://www.focusing.org/process.html>

今回の解説の作業においては、主にこの 2001 年に修正が加えられた頒布版と PDF 版をテキストとして用いた（PDF 版と並んでウェブサイトに掲載されている HTML 版の内容には 2001 年の修正が反映されていない箇所が少なからずある）。

なお、1997 年のものと現在入手できる 2001 年以降のものには少くない違いがあるが——とは言っても、おもに誤植や表記上の訂正であり、内容的にはそれほどの差異はないのだが——、頒布された本にはいずれも発行年は 1997 年と記載されている。そこで、以下の概要はあくまでも 2001 年以降にフォーカシング・インスティテュートで頒布されている『プロセスモデル』およびウェブサイトの PDF 版をテキストにしたものであることを断っておく（また、2001 年以降の頒布版とウェブサイトの PDF 版にも、わずかに異なる箇所があるが、第Ⅷ章 - A の補遺のタイトル変更など、最新の修正はウェブサイトの PDF 版で行われているので、記載が異なる箇所では PDF 版に従った）。

3. 先行研究

現在までに、ジェンドリンのプロセスモデルについてはどのような理解や議論が行われてきているのだろうか。

英国のキャンベル・パートン (Campbell Purton) は、2001年に頒布された『プロセスモデル』の索引の作成者であり、早くからジェンドリンのプロセスモデルの解読に取り組んできた。パートンはフォーカシング・インスティテュートの機関紙 *The Folio* の第19巻第1号に、「プロセスモデルへの道案内 (A brief guide to a Process Model)」と題する論考を投稿し、いち早くプロセスモデルの特質を把握しようとする試みを行った (Purton, 2004a)。また、この *The Folio* の第19巻第1号には、パートンによる動物行動学の知見とプロセスモデルを比較した論文 (Purton, 2004b) のほかに、プロセスモデルの概念生成の特質に関する論考 (Sterner, 2004) や、プロセスモデルの読解に関する議論 (Walkerden, 2004a, 2004b) が掲載されており、ジェンドリンのプロセスモデルに関する初めての本格的な議論が行われたと言ってよいだろう。

さらにパートンは、パーソンセンタードセラピーの国際学会 WAPCEPC (World Association for Person-Centered and Experiential Psychotherapy and Counseling) の学会誌 *PCEP (Person-Centered and Experiential Psychotherapies)* に、ジェンドリンのプロセスモデルがサイコセラピーの実践にもたらす意義についての考察 (Purton, 2004c) を行い、その考察は彼の著作 (Purton, 2004d) の中でも深められている。パートンによるプロセスモデルへの先駆的な取り組みは、多くの人たちがジェンドリンプロセスモデルに注目する契機となったという点で評価されるものである。

また *The Folio* では、その第21巻においてもプロセスモデルを含むジェンドリン哲学に関する論考が収録されており、ジェンドリン哲学による自然環境の理解 (Schroeder, 2008)、暗在性 (the implicit) についての論考 (Lou, 2008; Nelson, 2008)、ジェンドリン哲学による超越についての議論 (Krycka, 2008)、そしてプロセスモデルと西田哲学との比較に関する論及 (Murasato, 2008) などが行われている。

さらに *PCEP* は、2010年にパートンの編集で「フォーカシング指向セラピー (focusing-oriented therapy)」の特集号 (Volume9, Number2) を刊行しているが、そこに収録された6編の論文のうち、じつに5編がジェンドリンの『プロセスモデル』をレフ

アランスに掲載しており、フォーカシング指向セラピーの研究者や臨床家にとってその重要性がますます増大していることがわかる。しかしこの5編の論文の中で、ジェンドリンのプロセスモデルの臨床的な意義について正面から取り組んだのは筆者 (Suetake, 2010) だけであり、フォーカシング指向セラピーやパーソンセンタードセラピーにとってプロセスモデルがどのような理論的位置づけとなりうるのかについては、まだ多くの研究や議論が必要であることもまた明らかになった。

ジェンドリンのプロセスモデルに関する *The Folio* や *PCEP* を中心とした理解や議論は、年を追うごとに広がりや深まりを見せてきていることは間違いないが、これまでの研究では、プロセスモデルそのものの理解については断片的なものがほとんどで、特に第七章や第八章を含めたその全体を把握したうえでの議論はごく少数しかないと言わざるを得ない。プロセスモデルの難解さに起因するこうした事情については、*PCEP* のフォーカシング指向セラピーの特集号 (Volume9, Number2) における、編者のパートンによる序文が如実に物語っている。

Krycka, Madison そして Grindler Katonah の論文は、FOT [フォーカシング指向セラピー] のより哲学的な背景に触れているし、Suetake は特に、ジェンドリンが『プロセスモデル』(1997) の中で発展させている哲学に取り組んでいる。この『『プロセスモデル』という] 作品は——哲学者にとってさえも——読むのが困難なものであるが、Suetake は少なくとも、ジェンドリンが『『プロセスモデル』の中で] 何をなしているのかや、それがどのようにサイコセラピーと関連しているのかについて、いくつかの手がかり (some glimpses) を示してくれている。(Purton, 2010, p.90)

一方、日本国内に目を向けると、わが国では少数ながらも、ジェンドリンのプロセスモデルに関する質の高い理解や議論が行われていると言える。

日本におけるジェンドリンのサイコセラピーやフォーカシングについての先駆的な研究者であり紹介者である池見陽は、フォーカシングやフォーカシング指向セラピーの背景にあるジェンドリンの哲学の重要性について早くから注目し (池見 1999)、またプロセスモデルがもつ価値についても発言を行ってきた (池見 2010a)。¹⁰ また諸富祥彦 (2008, 2009,

¹⁰ 筆者は、池見 (2010b) の編集による心理臨床学会の雑誌、心理臨床の広場 第4巻第2号の特集「イメージ——体験の辺縁に動くもの——」に、池見氏からの依頼で「プロセスとしての

諸富・村里・末武 2009) は、フォーカシングがジェンドリンの意図するものとして真の役割を果たすためには、プロセスモデルをはじめとしたジェンドリンの哲学が深く理解されることが必要であることを主張し、関連するいくつかの本の編纂で中心的な役割を果たすと同時に、自らもジェンドリン哲学の解説を行っている。そして、得丸さと子 (智子) (2008, 2009, 2010) は、ジェンドリンによる理論構築法としての TAE (thinking at the edge) (Gendlin, 2004; Gendlin & Hendricks, 2004) を質的研究の方法論として活用するための提案を行う中で、プロセスモデル——特にその第Ⅶ章を中心とした——の全体を視野に入れた議論を提示している。得丸の論考は、『プロセスモデル』を『体験過程と意味の創造』および「パターンを越えた思考 (thinking beyond patterns)」(Gendlin, 1991a) と関連させた独自の解釈を示すもので、特にパターンに関するジェンドリン哲学の他に類を見ない特徴を考察している点で特筆されるものである。さらに村里忠之 (2008, 2009, 2011) は、プロセスモデルの第Ⅷ章を含めたその全体についての考察を行っており、特に「モノド (monad)」や「ダイアフィル (diafil)」といったプロセスモデル第Ⅷ章のキーワードや、それらが切り拓く新たな領域についての考察は、世界的に見てもまだほとんど着手されていないものであり、その先導的な解説は注目に値するものである。加えて、三村尚彦 (2009a, 2009b, 2011, 2012a, 2012b, 2013) による最近の論考は、ジェンドリンの哲学が哲学史の中でどのように位置づけられるのか、またそれが現代の哲学に何をもたらしているのかに関する本格的な議論——これも世界に先駆けたものと言える——を提示している。

このように、ジェンドリン哲学とプロセスモデルをめぐる日本での最近の研究や議論は目ざましいものであるが、しかし、取り組む必要のある課題も少なくない。1 つには、『プロセスモデル』をはじめとして、ジェンドリンの哲学的な作品については、その邦訳や解説がまだ少ないことである。『体験過程と意味の創造』については、かつて訳本 (Gendlin, 1962 筒井訳 1993) が出版されたことがあるが、その翻訳の内容や価値についてはほとんど議論されることなく、その後絶版になっている。またジェンドリンの哲学論文についても、いまだにその多くは邦訳されておらず、日本語で読めるものはまだほとんどない。さらにもう 1 つの課題は、上記のような日本におけるジェンドリン哲学の理解が、フォーカシングやサイコセラピーを実践している臨床家に十分に知られ、浸透しているとは言えない、という点である。確かに最近では、フォーカシング指向セラピーの事例研究などで、

イメージ——フォーカシングとジェンドリンの哲学から——」(末武 2010) を寄稿した。

ジェンドリンの『プロセスモデル』を文献に掲載する論文が少しずつ現れるようになってはいるが（矢野 2012、ほか）、その臨床的な意義を深く論じたものはまだほとんどないと
言わなくてはならない。

このような国内外での先行研究の現状を踏まえ、本論文では『プロセスモデル』全文の日本語訳を作成し、それを基礎資料としたジェンドリンのプロセスモデルの全体に対する
解説を行うと同時に、このプロセスモデルがサイコセラピーを中心とした私たちの臨床実
践にもたらしうる意義を考察することにする。

4. 本論文の内容と構成

本論文の内容と構成は次のとおりである。

上記の「序論」に続いて、「本論」は次の3つの部から構成される。

第Ⅰ部では、「臨床的問題としてのジェンドリン——プロセスモデルへの展開——」というタイトルで、『体験過程と意味の創造』から『プロセスモデル』へと至るジェンドリンの哲学的な仕事の展開を、特に臨床的な問題関心との繋がりが深い論文に焦点をあてることによって考察する。また、この第Ⅰ部の最後には、補遺として、プロセスモデルをめぐってジェンドリンと直接に議論した後、ジェンドリン本人が筆者に書き送ってくれた手紙を収録し、解説と考察を加えた。

第Ⅰ部 臨床的問題としてのジェンドリン哲学——プロセスモデルへの展開——

1. はじめに——ジェンドリン哲学へのアプローチ——
2. 体験過程、シンボル、意味——体験過程論の展開——
3. 夢、身体、隠喩——現象学的方法による夢解釈——
4. 体験の複雑性、自我と非自我、身体感覚が導くプロセス——ナルシズム概念批判と社会的提言——
5. インプライング、生起、進化——プロセスモデルの臨床的含意について——
6. (第Ⅰ部の補遺) ジェンドリンからの手紙とそこから得られた応答的秩序

第Ⅱ部では、「ジェンドリンのプロセスモデル——その解読と考察——」とのタイトルで、ジェンドリンの哲学的な仕事の頂点と言えるプロセスモデルに焦点をあて、その第Ⅰ章から第Ⅷ章にわたる全体を解読し考察を加えることで、このプロセスモデルがいったいどのような視座から、どのような問題に取り組み、何を明らかにしているのかを解明する。世界的にも、ジェンドリンのプロセスモデルの全体像を把握したうえで、その内容に考察を加えた研究はまだほとんど存在しない（この第Ⅱ部の執筆のために、ジェンドリンのプロセスモデルの全訳を行った）。また第Ⅱ部の最後では、補遺として、純粋な哲学的作品であるプロセスモデルの中で、サイコセラピーをはじめ

とした臨床実践にとって示唆的である箇所をピックアップし、プロセスモデルの臨床的意義を抽出するための基礎的作業を行う。

第Ⅱ部 ジェンドリンのプロセスモデル——その解説と考察——

1. はじめに
2. プロセスモデル第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章
3. プロセスモデル第Ⅳ章 身体と時間
4. プロセスモデル第Ⅴ章 進化、新しさ、安定性
5. プロセスモデル第Ⅵ章 行動
6. プロセスモデル第Ⅶ章 文化、シンボル、言語
7. プロセスモデル第Ⅷ章 暗在するものによる思考
8. (第Ⅱ部の補遺) プロセスモデルの臨床的意義を抽出するための基礎的作業

本論の第Ⅲ部では、「プロセスモデルの臨床的意義を実例化する試み——パーソンセンタード／フォーカシング指向セラピーにおいて生起するプロセスの理論化——」とのタイトルで、サイコセラピストとして実践を行ってきた筆者自身の臨床経験を素材としながら、プロセスモデルから導き出された理論構築法としての TAE (thinking at the edge) (Gendlin, 2004; Gendlin & Hendricks, 2004) を方法論として用いることで、プロセスモデルの臨床的意義を具体的に検討する。これは、ジェンドリンのプロセスモデルと筆者の臨床経験の交差の試みでもあり、また、プロセスモデルの臨床的意義を筆者の臨床経験から実例化する試みでもある。第Ⅲ部の 3 では、ここでの具体的な検討をふまえて、パーソンセンタード／フォーカシング指向セラピーのプロセスに関するいくつかの仮説的命題を記述し、プロセスモデルの臨床的意義の実例化を試みる。

第Ⅲ部 プロセスモデルの臨床的意義を実例化する試み——パーソンセンタード／フォーカシング指向セラピーにおいて生起するプロセスの理論化——

1. はじめに——研究の意図——
2. パーソンセンタード／フォーカシング指向セラピーにおいて生起するプロセスの理論化の試み
3. プロセスモデルの臨床的意義の実例化

以上の「本論」に後に、本論文の成果と課題をまとめた「結論」を記述した。

本 論

第 I 部 臨床的問題としての

ジェンドリン哲学

——プロセスモデルへの展開—— ¹¹

1. はじめに——ジェンドリン哲学へのアプローチ——

ジェンドリンの哲学は、『体験過程と意味の創造 (*Experiencing and the Creation of Meaning*)』(1962a) から『プロセスモデル (*A Process Model*)』(1997a) へと、どのように展開されてきたのだろうか。この章では、多岐にわたるジェンドリンの哲学的な仕事の中から、特に臨床的な問題関心との繋がりが深い彼の代表的な作品のいくつかに焦点をあてることによって、臨床的問題としてのジェンドリン哲学の軌跡について考察を行う。

*

ニューヨークのフォーカシング・インスティテュート (The Focusing Institute) のホームページに掲載されている「ジェンドリン・オンラインライブラリー (Gendlin Online Library)」というインターネットシステムの情報をもとに、ジェンドリンの仕事の全容を俯瞰してみると、2007 年までに発表された論文やエッセイ・書籍など全 137 ドキュメントのうち、哲学に関するものが 75、サイコセラピーに関するものが 58、フォーカシング

¹¹ この第 I 部の 1~5 は、末武康弘 (2009a) 臨床的問題としてのジェンドリン哲学 (諸富祥彦編著『フォーカシングの原点と臨床的展開』岩崎学術出版社 89-146 頁) を加筆修正したものである。

に関するものが24、その他のテーマ（社会変革、科学論、創造的プロセス等）を扱ったものが71編、そして書籍が7冊となっている。さらに2008年以降に発表された論文9編のうちでも、7つが哲学に関する論文である（つまり、2012年までにジェンドリンが発表した計144ドキュメントのうち、書籍を除いた137編の論文の中で哲学関係のものが82にのぼる）。¹² 複数のテーマにまたがる論文も少なくないので、各テーマのドキュメント数の合計は全ドキュメント数をかなり超える数字になる。しかしそれにしても、ジェンドリンの業績全体において、いわゆる哲学的な仕事が占める割合の大きさにはあらためて驚かされる。

ジェンドリンの哲学的な仕事は、『体験過程と意味の創造』および『プロセスモデル』の2冊の著作を中心に、その他、さまざまなテーマを扱った多数の論文やエッセイによって構築されている。主なものをピックアップしてみても、「体験的な展開と真（Experiential explication and truth）」（1965-66）、「体験的現象学（Experiential phenomenology）」（1973）、「現象学的概念か現象学的方法か——夢に関するメダルト・ボス批判——（Phenomenological concept versus phenomenological method: A critique of Medard Boss on dreams）」（1977）、「情態性——ハイデッガーと心理学の哲学——（Befindlichkeit: Heidegger and the philosophy of psychology）」（1978-79）、「生きている身体と夢についての理論（Theory of the living body and dreams）」（1986に所収）、「ナルシズム概念についての哲学的批判（A philosophical critique of the concept of narcissism）」（1987）、「パターンを超えた思考（Thinking beyond patterns）」（1991a）、「交差と浸ること（Crossing and dipping）」（1991b）、「応答的秩序（The responsive order）」（1997b）、「ヴィトゲンシュタインが“～のときに何が起きるのか？”と問うときに何が起きるのか？（What happens when Wittgenstein asks "What happens when ...?")」（1997c）、「ポストモダニズムを超えて（Beyond postmodernism）」（2003）といった哲学的な作品群がある。これらのタイトルだけを見ても、ジェンドリンによってきわめて多彩な哲学的テーマが考究されていることがわかるだろう。

このように多岐にわたるジェンドリンの哲学的な仕事は、しかし、ある首尾一貫した主題の探求に向けられていることもまた明らかである。ジェンドリン哲学の主題とはどのようなものか。彼自身の表現によれば、それは次のように語られる。

¹² 2013年4月現在。 <http://www.focusing.org/gendlin/> を参照。

本書『体験過程と意味の創造』が行う取り組みは、さまざまな概念（論理的形式、区分、法則、アルゴリズム、コンピュータ、カテゴリー、パターン、……）がどのように体験過程（状況、事象、セラピー、隠喩的言語、実践、人間の複雑性、……）と関係しているのかについて**探求する**（enter into）ことである。…〔中略〕…あるいは、次のように言うこともできる。すなわち本書は、**体験過程が私たちの認知的そして社会的な活動の中でどのように機能しているのか**（how experiencing functions in our cognitive and social activities）について取り組むものである、と。（『体験過程と意味の創造』新装版の序文、1997d, p.xi. なお、〔 〕内は筆者による補足、また、太字は原文ではイタリック体、以下同様。）

私の取り組みは、パターン（形式、概念、定義、カテゴリー、区分、法則、……）を超えているものを——について、とともに——思考することである。（「パターンを超えた思考」1991a, p.25.）

私たちは、**実際に生起していることが可能性のシステムを変化させることができる** {actual occurring could change the system of possibilities} ようなモデルを考えることができるだろうか？ …〔中略〕…問題は、次のような核心的な問いへと突き当たる。すなわち、私たちは生起（occurring）についてどのように考えたらよいか、という問いである。（『プロセスモデル』1997a, p.51）

「体験過程（experiencing）」、「パターンを超えているもの（that which exceeds patterns）」、「生起（occurring）」などと、用いられている言葉は微妙に違っている——また、最近では「暗在的なもの（the implicit）」、「辺縁（edge）」という用語も好んで使用されており¹³、さらに『プロセスモデル』において「生起」の本質は、「インプライングの中へ生起すること（occurring into implying）」と表現されている¹⁴——が、ジェンドリンがその哲学の中で一貫して探求しようとしているのは、私たちが自明なものを見なしがちな種々の抽象化された一般性（概念、論理的形式、法則、パターン、カテゴリーなど）

¹³ ジェンドリン・オンラインライブラリーでは、ジェンドリンの哲学は‘Philosophy of the Implicit’という名称で呼ばれている。また、‘the edge’については、Gendlin & Hendricks (2004) を参照。

¹⁴ Gendlin (1997a), p.90 および p.130 等を参照。

を超えた、具体的であるがままの体験・経験そのもの、現象そのものをどのようにとらえることができるか、という問題である。さらには、そうした体験や現象そのものを、私たちの世界を構成し尽しているように見える種々の一般性と関係づけ、相互作用させるにはどうすればよいのか、またそのことによって種々の一般性やシステムはいかに変容可能であるのか、そして私たちは思考や行為、実践、臨床の中でこの体験や現象そのものをどのように創造的に活用していくことができるのか、ということがジェンドリン哲学の核をなす主題である。

こうしたジェンドリンの哲学は、一方では、私たちが体験していることは制度や文化や言語といった外的システムによって構成（あるいは支配）し尽くされており、そこにはどんな独自性や創造性も見出すことはできないとする現代哲学（例えば構造主義哲学など）がもたらした閉塞感や、他方では、制度や文化といったシステムのみならず、私たちが語ることも体験することもすべては相対的で限定的なものであり、どんな体験や現象にも絶対的な真実を見出すことは不可能であるとするポストモダニズムの思想が導き出した虚無感など、現代の主要な哲学的動向が再生産し続けているネガティブスパイラルとでも言うべき潮流に対抗し、それらを超克する視座を提供していると考えられるのである。

そしてたしかに、ジェンドリン哲学のこうした独創性や可能性に期待を寄せ、それがもたらす新たな視座について議論していこうとする動向は、欧米のそして日本の哲学界の中にも少しずつあらわれてきている（Levin, 1997; 斎藤（訳）1998; 三村 2009a; 2009b; 2011; 2012a; 2012b; 2013）。

しかしながら、こうした少数の議論を除いては、ジェンドリンの哲学がこれまで十分に理解され評価されてきたとは言いがたい。このことは、ジェンドリンが開発した心理援助技法としてのフォーカシング（Gendlin, 1981b）が、いまや世界各地のサイコセラピストやカウンセラーたち、そして種々のセルフヘルプやエンパワーメントの活動にかかわっている人々に広く共有されてきていることとくらべると、あまりにも対照的である。

では、なぜジェンドリン哲学は十分に理解されてこなかったのか？ その理由なり要因についてはさまざまなことが考えられるが、少なくとも次のような点を指摘することができるだろう。

第1に、その難解さと独創性である。ジェンドリンの哲学作品、殊に『体験過程と意味の創造』と『プロセスモデル』には、彼の造語による新しい言葉や、通常の辞書の意味とはきわめて異なる含意を付与された用語が数多く創出されている。例えば、『体験過程と意

味の創造』における“IOFI (instance of itself)”や、『プロセスモデル』における“implying”、“leafing”、“held”等¹⁵である。これらは——また、単なる語句にとどまらず、ジェンドリンが書く文章や、こうした語句や文章が複雑に交差する文脈もまたそうなのだが——これまでどのような哲学や理論においても語られてこなかったような、新たな言葉であり言語である。そしてその創出の作業においては、彼が提案する理論構築の方法としてのTAE (thinking at the edge) (Gendlin, 2004; Gendlin & Hendricks, 2004) が徹底的に活用されている。こうした点で、ジェンドリンによる新たな言葉の創出や理論構築は、一般的な認識からすると、きわめて特殊な仕方で行われている、と言わざるをえない。しかし、その新たな言葉や理論は彼の頭の中で恣意的につくり出されたものではなく、私たちの中で言語化され思考されることを暗在的に待っていたような^{エッジ}辺縁についての、ジェンドリンの照射ないしは掘削の作業によって生み出されたものである。その意味で彼が用いる言葉やその哲学は普遍性をもつものであると言えるが、概念を他者と共有可能な形で明確に定義し、概念間の論理的な整合性を突き詰めていくような通常の思考方法からすると、ジェンドリン哲学の概念化や理論構築の方法はとてもわかりにくく、とっつきにくい印象を与えてしまうのかもしれない。その独創性は、場合によっては難解のための難解、あるいはトートロジカルな哲学であるとの誤解をもたれることもあるだろう。¹⁶ いずれにしても、こうしたジェンドリン哲学の難解さなり独創性が、その幅広い理解を阻んでいる理由の1つであると考えられるのである。

第2には、ジェンドリン哲学を哲学史や思想潮流の中にどのように位置づければよいのか、という^{コンステレーション}布置の難しさの問題がある。彼はすでに『体験過程と意味の創造』の中で、「実存主義と論理実証主義の要請は包含される」(1962a, p.16)と述べていたが、ジェンドリン哲学の主要な源泉や拠りどころは現象学および実存哲学である、という認識がこれまで一般的であったことは否定できないだろう。しかしながら、ジェンドリンが1990年代になってヴィトゲンシュタインの言語哲学について深く言及したり(1997c)、また「応

¹⁵ その他、『体験過程と意味の創造』における“direct reference”、“relevance”、“circumlocution”、等や、『プロセスモデル』における“evev (everything by everything)”、“sbs (schematized by schematizing)”、“kination”、“FLIP”、“diafil”等である。

¹⁶ ジェンドリン自身の用語を借りれば、彼の哲学は「再認 (recognition)」——ある概念によって、これまでも感じられたことがあるフェルトセンスが再び浮かび上がること——を生じさせにくいかもしれない。むしろ、彼が探求している辺縁に私たちもまた「直接照合 (direct reference)」することで、彼の概念や理論との相互作用が生じ、その相互作用によって私たちの中に作り出される新たな意味感覚が、ジェンドリン哲学への理解を導くのだ、と言えよう。

答的秩序」(1997b)や「一人称科学の提唱」(Gendlin & Johnson, 2004)のような新たな科学論を提案するようになると、彼の哲学がどのような哲学的な文脈に位置し、今後どのような動向を生み出そうとしているのかという問題は、それほど単純なものとしては考えることができなくなった。さらに、ジェンドリン哲学の1つの到達点と見なすことができる『プロセスモデル』に至っては、それを論理実証主義 対 実存主義、自然科学的方法論 対 人間学的解釈学的方法論といった通常思想潮流についての座標軸の中に位置づけることはきわめて困難だと言わざるをえない。また現在のところ、ジェンドリンの哲学的な立場についてそれを「～主義」とか「～派」などと形容する表現を容易に見出すこともできない。¹⁷つまり、主要な哲学的潮流における単純な位置づけを拒むジェンドリン哲学の特質が、その哲学のオリジナリティを形づくっていると同時に、理解が広まることを阻んでいる要因であるとも言えるのである。

しかし何と云っても、ジェンドリンの哲学を読み解き、理解することを困難にしている第3の、そして最大の理由は、その哲学の実践的ないしは臨床的な視野や含意の奥行きであろう。そのことが、哲学者であると同時に第一線のサイコセラピストでもあり続けているジェンドリンが創出する哲学の際立った独自性となっており、おそらくはこの点はその哲学の価値を把握するのを困難にさせている最も大きな要因であると考えられるのである。

ジェンドリンがカール・ロジャーズのもとで心理臨床の実践と研究に携わるようになったのは1952年であり、彼が20歳代半ば（一方のロジャーズは50歳前後）の頃のことである。当時、ロジャーズはシカゴ大学カウンセリングセンターにおいて全米および世界の注目を集める心理臨床の実践・研究活動を繰り広げていた(Kirschenbaum, 2007)。ジェンドリンがどのような意図や経緯のもとにロジャーズのグループへ参加するようになったのかについては後で考察するが、彼がそのグループの中で臨床的に優れた能力を発揮するようになるのにそれほどの時間はかからなかったようである。ロジャーズは晩年、当時のジェンドリンの臨床センスを評価する次のようなエピソードを語っている。

…… [シカゴ大学カウンセリングセンターでは] それ以前にどんな専門分野だったかと

¹⁷ もちろんジェンドリン自身は、現象学や実存哲学、人間学的解釈学的立場に軸足を置く哲学者であることには今も変わりはないだろうが、彼を現象学者であるとか、実存哲学者であるという言い方をしてしまうと、プロセスモデルで展開されているようなその独創的な思考の特質を希薄化させることにつながりかねない。また、最近のジェンドリンが提唱する「暗在性（暗在するもの）の哲学（philosophy of the implicit）」が哲学史の中に定着していくかどうかは、今後の動向に委ねられている、としか現時点では言えない。

いうことに縛られずに、トレーニングを受けることができました。ジーン・ジェンドリンもその一人です。哲学専攻から私のところに来て、博士論文執筆中でしたが、…〔中略〕…私は彼ならやれる、と思いました。そして実習課程への参加を許可し、彼はカウンセリングをやり始めたのです。その年度のゼミナールの終わりに、私はある試みをやってみました。そのときに皆から相当な反発を受けたので、後にも先にもその一度しかやっていないのですが、それはどういう試みかと言うと、“自分がカウンセリングを受けるとしたら誰に受けたいか?”、“友人がカウンセリングを受けるとしたら誰に受けさせたいか?”ということについて、ゼミナールのメンバー間で評定させてみたのです。一位に選ばれたのはジーンでした……。 (Rogers & Russell, 2002, pp.153-154. 畠瀬訳 2006 144-145 頁、なお訳文には多少の修正を加えた)

ジェンドリンはその後、臨床実践における優れた能力を発揮すると同時に、サイコセラピーのプロセスにおける体験過程 (experiencing) の機能についての独創的な理論 (Gendlin & Zimring, 1955 ; Gendlin, 1964) を展開するようになり、シカゴ大学カウンセリングセンターにおけるロジャーズらの研究グループの重要なメンバーとなった。ジェンドリンのサイコセラピーの分野における活躍や業績は広く知られているので、ここでは詳述しないが、主なものだけをあげても、いわゆるウィスコンシン・プロジェクト (1957～63 年) における統合失調症の人々への治療的アプローチに関する業績 (Rogers, et al., 1967, Gendlin, 1962b, 1963) や、アメリカ心理学会のサイコセラピー部会が発行する専門誌『サイコセラピー』 (*Psychotherapy: Theory, Research, and Practice*) の編集 (1963～76 年)、さらにはシカゴにおける“チェンジズ (changes)” の活動 (Gendlin, 1978/1981) ——コミュニティにおける臨床活動の草の根的な展開であり、それは現在のフォーカシング・インスティテュートを中心としたフォーカシングの世界的な広がり結びついてきた——などがある。

こうしたジェンドリンの心理臨床家としての体験や知見が、彼の哲学にさまざまな形で——他の哲学には見られないような——複雑で奥行きのある輪郭や色合いを与えていることは間違いない。殊にジェンドリン哲学の 1 つの集大成である『プロセスモデル』は、その中でサイコセラピーをめぐる議論はほとんど展開されていないにもかかわらず、臨床的にきわめて深い含意や示唆を包含する哲学的作品であると見なすことができる。

ジェンドリンにおいては、はたしてその哲学が臨床実践の基礎となっているのか、それ

とも彼の心理臨床の経験がその哲学を方向づけているのだろうか。問題はそれほど単純なものではなく、より正確には、彼の臨床実践と哲学的思索はきわめて複雑に交差し相互作用しながら、互いを推進し続けている、と言わなくてはならないだろう。そしてこの点にこそジェンドリン哲学の最大の特質や独自性を見出せるのであり、この哲学のこうした複雑性が、いわゆる哲学専門の人々にも、また心理学や心理臨床専門の人々のいずれにとっても、容易な理解を許さない大きな要因となっているのではないだろうか。とすれば、ジェンドリン哲学を理解し読み解くための鍵は、哲学と心理臨床のいずれについてもできるだけ見渡せるような地点に立ち、両者のきわめて独創的な交差や響き合いとしてジェンドリン哲学をとらえることであろう。

そこで以下では、ジェンドリンの哲学的な仕事について、純粋な哲学的思索や考察によってのみそれを解明しようとするのではなく、むしろ、その中に深く含意されている臨床的そして実践的な意味を探求し析出することを通して、ジェンドリン哲学が私たちに問いかけ、切り拓き、提示しようとしているものがどのような問題であるのかを議論していくことにしたい。

2. 体験過程、シンボル、意味——体験過程論の展開——

ジェンドリンの哲学および、心理臨床を含むその理論の全体を検討しようとする際に、その最も基本的な用語としての「体験過程 (experiencing)」¹⁸ について論じないわけにはいかないだろう。

以下では、まず体験過程という概念がどのような背景から創出されたのかを検討し、そのうえで、ジェンドリンの言う体験過程とは何であるのかを考えたい。さらに、彼の初期の哲学的名著『体験過程と意味の創造』の主要な議論をとり上げ、ジェンドリンが体験過程という用語によってどのような哲学的地平を切り拓こうとしたのか、また、そのことは哲学に、そして心理学やサイコセラピーにどのような貢献をもたらすものであったのかを考察する。

ジェンドリンが体験過程の概念を最初に提案したのは、ツィムリングとの共同執筆による論文「体験過程の諸特質あるいは諸次元とそれらの変化 (The qualities or dimensions of experiencing and their change)」(Gendlin & Zimring, 1955) であると言われている。¹⁹ この論文は心理臨床の世界で体験過程という要因が明確に記述されたエポックメイキングな研究であり、また、ジェンドリンが哲学ではなく心理学の分野ではじめて執筆した本格的な論文である (しかもそれは、広く知られている 1964 年の「人格変化の理論 (A theory of personality change)」を先取りした高い水準の内容である)。この論文が書かれたのが、ジェンドリンがロジャーズの研究グループに参加 (1952 年) した後の 1955 年であることを考えると、これも広く認められているように、体験過程の概念はロジャーズとジェンドリンとの相互影響、あるいは共同作業によって生み出されたものである、というとならえ方は間違いではないだろう。

しかし、体験過程の概念が創出された経緯やその背景については、もう少し入念な検討が必要なようである。と言うのも、ジェンドリンがロジャーズと出会い、シカゴ大学カウンセリングセンターの研究員になる以前より、体験過程 (“experiencing”) という言葉そ

¹⁸ ジェンドリンの ‘experiencing’ については「体験過程」(村瀬孝雄の訳語) という訳が使用されることが一般的であるので、本論文でも原則としてその訳語を使用している。しかし、文脈によっては他の訳語、例えば「体験 (経験) していること」「体験 (経験) そのもの」といった訳を用いたほうが適切であることも少なくないことは指摘しておきたい(ジェンドリン、E. T. 村瀬孝雄訳 1981『体験過程とサイコセラピー』ナツメ社 参照)。

¹⁹ ジェンドリン、E. T. 村瀬孝雄訳 同上 参照。

れ自体は彼が執筆した哲学論文の中に見出すことができるからである。

ジェンドリンがこの用語を最初に用いたのは、彼がシカゴ大学の哲学専攻の大学院生として提出した修士論文「ウィルヘルム・ディルタイと人間科学における人の重要性の把握に関する問題 (Wilhelm Dilthey and the problem of comprehending human significance in the science of man)」(1950) においてであった。²⁰ 全8章からなるその論文²¹ においてジェンドリンは、ディルタイの解釈学あるいは生の哲学が人間科学の方法論としてもつ重要性を論じているが、「体験過程 (experiencing)」という言葉は、その中でディルタイの「エアレーベン (Erleben)」——ドイツ語の動詞“erleben”が名詞化されたディルタイ独自の概念——を英訳する中で初めて用いられたのである。ジェンドリンは、この修士論文の第3章(「体験過程と思考 (Experiencing and thinking)」)の中で次のように述べている。

ディルタイが精神的な生 (geistiges Leben) あるいは魂の生 (Seelenleben) あるいはエアファールング (Erfahrung) を語る場合、私たちはここではそれを“経験 (experience)”と呼ぼう。それは、1つのプロセス全体としてとらえられる経験の全体性を指し示すものである。ディルタイがエアレーベン (Erleben) ——生き続けていること (to live through) ——について語る場合、私たちはそれを“体験過程 (experiencing)”と呼ぶ。それはプロセスあるいは機能を指し示すものである。そして、ディルタイのエアレープニス (Erlebnis) は、ある経験のユニットを意味している。
(Gendlin, 1950, p.13)

²⁰ 田中秀男 (2004) ジェンドリンの初期体験過程に関する文献研究 (上) (下) 明治大学図書館紀要 第8巻、56-81頁、第9巻、58-87頁 参照

²¹ 1950年にシカゴ大学に提出されたジェンドリンの修士論文の構成は、次のようなものである。

第I章 人間科学の諸特性 (The characteristics of the science of man)

第II章 人間科学と自然科学における方法論の違い (The differences in method in the human and natural science)

第III章 体験過程と思考 (Experiencing and thinking)

第IV章 内的体験の構造 (The structure of inner experience)

第V章 文化と歴史における人間 (The human culture and history)

第VI章 了解 (Verstehen)

第VII章 未解決の諸問題 (The unsolved problem)

第VIII章 了解と現代の科学的方法 (Verstehen and the modern scientific method)

この時点で、ジェンドリンが体験過程という用語にどのような重要な含意や、その後の哲学的そして臨床的な展開の可能性を見出していたかはわからない。しかし、その後の「フォーカシング (focusing)」がやはりそうであったように²²、ジェンドリンが創出する新概念のいくつかは、当初に意味づけられた中核的な中身に、その後さまざまな含意が包摂されるようになり、次第に深化・発展していき、身体知や臨床の知といった次元までその意味が拡大していく、という特質をもっていると言うことができるだろう。このような見方からすると、ジェンドリンの思考、そして体験過程の概念にとっては、ロジャーズとの出会いとそのもとでの心理臨床の実践が、その思考や概念が深化していくための豊かな土壌となったことは間違いないはずである。

では、ジェンドリンはいったいどのような意図からロジャーズのもとで心理臨床の実践と研究に携わるようになったのか。また、この2人の理論的・実践的な関心は、どのような点でリンクすることができたのだろうか。ジェンドリンは、ロジャーズの研究グループに参加するようになった経緯について、後に次のように語っている。

私は、哲学の研究と次のような問いへの関心から、1952年にシカゴのロジャーズたちのグループへ入った。その問いとは、“なまの体験 (raw experience) はどのようなシンボル化されるようになるのか？”というものだった。私は、このことがサイコセラピーの中で起きていると思った。その中で人は、不明瞭な——しかし生きている——体験をあらわすための言葉や表現をつかもうと取り組んでおり、そしてそれらを見出しているからである。(Friedman, 1976, p.240)

私は体験というものが状況や語られる言葉によってシンボル化されていることは知っていたが、私たちは同時にそれに直接接触していると言える。もしも、そこから言葉を発することができれば、そこから先へ展開できる。通常の意味や言葉を超えて先に進める。私は、セラピーでは人々はそういった話をしているに違いないと考えてロジャーズを訪れた。(Gendlin, 2002, p.xvi. Rogers & Russell, 2002 の序文より)

²² フォーカシング (focusing) の概念はまず、サイコセラピーが成功する場合に生起している現象の記述から生まれたものであり (Gendlin, 1964)、その後その現象を効果的に導くためのフォーカシング・ステップが考案され、それが現在に至るフォーカシングの幅広い活用へと発展してきた。

人間の体験はどのようにシンボル化され意味づけられるようになるのか？ その問いにこそ、ジェンドリンの哲学的な問題関心と、ロジャーズが探求を続けていた心理臨床実践とを結びつける運命的な結節点が存在していたと言えよう。ジェンドリンは哲学的課題として、体験がシンボル化され意味づけられるプロセスを解明しようとした。そしてロジャーズは、体験の新たな意味づけこそがサイコセラピーの中でクライアントに生じる重要なプロセスであることを認識しつつあった。

ロジャーズは、ジェンドリンがその研究グループに入る前年の 1951 年に、主著の 1 つ『クライアント中心療法 (*Client-Centered Therapy*)』を公刊し、その中で後に自己理論 (self-theory) と呼ばれるようになるロジャーズ独自の人格理論を展開した(「人格と行動についての理論 (A theory of personality and behavior)」。19 の命題と解説からなるその理論において、ロジャーズは「生命体的体験 (organic experience)」あるいは「感覚的かつ体感的な体験 (sensory and visceral experience)」²³ という独自の用語を用いながら、生命体 (organism) の心理的機能とその成長の方向性を示そうとした。ロジャーズは次のように書いている。

何が人格を統合するのかについてのもっともよい定義は、次のような説明によって表されるだろう。すなわち、感覚的かつ体感的な体験のすべてが正確なシンボル化を通して意識化され、その体験のすべてが、内的に一貫した自己の構造それ自体であるか、それと関係しているような 1 つのシステムへと組織化されている、と。このような統合が生起すると、成長へと向かう傾向が十分に機能するようになり、個人は生命体の生活全体において正常な方向へと動くのである。(Rogers, 1951, pp.513-514 邦訳 343 頁、訳文には一部変更を加えた)

こうしたロジャーズの着想は、精神分析学で言うところの「無意識 (unconsciousness)」を再定式化し、また無意識の概念とその後のジェンドリン哲学やフォーカシングを繋ぎ、橋渡しをする役割を担う先駆的発想であったと言えるものである (しかしこの 1951 年公

²³ ロジャーズの “sensory and visceral experience” については、筆者らが『ロジャーズ主要著作集』(全 3 巻、岩崎学術出版社)を翻訳した際に、訳語について議論があり、結局統一的な訳語を見出せなかった。ちなみに主要著作集第 2 巻の『クライアント中心療法』では「知覚的かつ直感的な体験」という訳語が、また第 3 巻の『ロジャーズが語る自己実現の道』では「五感と体の内側での体験」等の訳語が用いられている。ここでは、「感覚的かつ体感的な体験」という訳語を使用する。

刊の彼の著作の中では、まだ「体験過程 (experiencing)」という言葉は使用されていない。

その後ロジャーズは、1951 から 52 年にかけて執筆したと彼自身が述べている別の論文 (Rogers, 1961 に所収、初出は 1953 年)²⁴ の中で、明確に “experiencing” の語を用いながら次のように論じている。「すべてのケースにはっきりと現れるサイコセラピーの過程の 1 つの側面は、体験の自覚 (awareness of experience) とか “体験を体験すること (the experiencing of experience)” と呼びうるものであろう」(p.76 邦訳 72 頁)、また、「サイコセラピーにおいて人は、通常の体験に加えて、十分にしかも歪曲することなく、自分の体験過程 (experiencing) ——自分の感覚的かつ体感的な反応 (sensory and visceral reactions) ——に気づくようになる」(p.104, 邦訳 100 頁、訳文には一部変更を加えた) と。

このように、1951 年出版の『クライアント中心療法』の中にはまだ見られなかった “experiencing” の語を、この 1951~52 年に執筆されたロジャーズの論文の中にはっきりと見出すことができる。ジェンドリンと出会う以前にロジャーズの中でも体験過程の概念がすでに芽生えはじめていたのか、それとも (上記の論文の完成が 1952 年であることからすると) 若きジェンドリンとの議論によってロジャーズにも体験過程の概念の重要性が——「感覚的かつ体感的な体験」との重なりによって——感得されたのだろうか。その真相を解き明かすことは今となっては難しいかもしれないが、いずれにしても、少なくとも次のようなことは指摘できるだろう。すなわち、「体験過程 (experiencing)」の概念は 1950 年代のかなり早い時期にジェンドリンおよびロジャーズによって着想されていたこと、そしてロジャーズが体験過程というものの意味を彼の「感覚的および体感的な体験」と結びつけて考えようとしたことが、ジェンドリンの中で体験過程の概念が深められていく——特に身体およびそのフェルトセンス (felt sense) を重視するという方向で——重要な手がかりになったに違いない、ということである (Ikemi, 2008)。²⁵

²⁴ この論文は当初、“Some directions and end points in therapy” とのタイトルで、O. H. Mowrer (Ed.) (1953) *Psychotherapy: Theory and Research*. New York: Ronald Press, pp.44-68 に掲載されたものであるが、それが *On Becoming a Person* (1961) の第 5 章に再録されている。再録時にロジャーズは、「この章を書いたのは 1951 年から 52 年にかけてである… [中略] …拙著『クライアント中心療法』が出版されたばかりだったが、私はもうすでに、この本のサイコセラピーの過程について書いた章に不満を抱いていた。」と述べている (Rogers, 1961, p.73 邦訳 70 頁)。

²⁵ 筆者は特に、ロジャーズの「感覚的かつ体感的 (sensory and visceral)」という言葉と、ジェンドリンの「感じられる (felt)」という言葉の交差に注目している。この点では、ロジャーズはジェンドリンに多大な影響もしくはインスピレーションを与えたと言えるのではないだろ

もちろんジェンドリンが提案しその後哲学的に展開されていく体験過程の概念と、ロジャーズが彼の自己理論の中に組み込もうとした体験過程の概念はまったく同じものであるとは言えないし、また、ロジャーズがその後のジェンドリンの哲学的思索を完全に理解していたかどうか、という点にも若干の疑問が残る。²⁶ ジェンドリンによる体験過程の概念とその哲学の展開については以下で考察するが、ここでは、ジェンドリンとロジャーズとの出会いと相互影響がこの概念の創出の重要な背景ないしは土壌になったことをまず確認しておきたい。

では、ジェンドリンの言う「体験過程 (experiencing)」とはいったい何なのか。彼は体験過程という用語によって、人間やその現象をどのようにとらえようとしたのだろうか。

ジェンドリンは『体験過程と意味の創造』(1962)の冒頭で次のように述べている。

知 (knowledge) には論理的次元および操作的次元のほかに、直接に感じられる、体験的な次元 (a directly felt, experiential dimension) が存在する。意味とは事物に関してあるだけでなく、また、ある特定の論理的な構造であるだけでなく、**感じられる体験過程 (felt experiencing)** を含んでいる。」(1962a, p.1、邦訳 23 頁、訳文には修正を加えた、以下同様)

ジェンドリンは、言葉や概念、論理、事物といった私たちを取りまく、あるいは私たちが所有する事ごととは異なる次元に存在する、刻々と体験され感じられている、より主観的で根源的な次元に向けて私たちの注意を喚起しようとする。

…私たちは、前論理的 (prelogical) であり、自分が何を考え、何を認知し、どのように行動するかということにおいて重要に機能している、体験の力強い感じられる次元が存在していることを認識するようになってきている。(p.1、邦訳 23 頁)

うか。

²⁶ ロジャーズとジェンドリンによる体験過程の概念、および哲学的な人間理解は、両者がともに人間を生命体 (organism) としてとらえ、その全体性を重視し、進行するプロセスや外界との相互作用を重視する点では共通している。しかし、ジェンドリンが批判するように (Gendlin, 1962a, pp.242-243)、ロジャーズは生命体としての人間やその体験を何らかの内容的な構成要素 (例えば「自己」) からとらえようし、また人間の成長の条件についても「受容」や「共感」といったある固定した環境的要素によって説明しようとするような、いずれかと言えば生命体と環境についてのやや静的 (スタティック) な見解にとどまっている、と言えるだろう。

この、刻々と体験され感じられている次元は、私たちがそこにいつでも注意を向けることができるという意味で、つねに確かに存在している。これがジェンドリンの言う体験過程である。ジェンドリンは次のように言う。

私は“体験過程” (“*experiencing*”) という言葉を、具体的な体験を意味するものとして使用する。なぜなら、私とその用語によって指し示そうとしている現象は、一般に経験や体験と呼ばれているものの、(私たちの中の) **なまの、現在の、進行しつつある機能** (*the raw, present, ongoing functioning*) であるからだ。(p.11、邦訳 33 頁)

ジェンドリンにとって体験過程とは、私たちに於いてつねに生じている所与の、疑うことのできない、最も根本的な現象そのものことであり、「体験過程 (*experiencing*)」という用語は、そうした現象を指し示めそうとするジェンドリン哲学の根源語あるいは根本概念である、と言えよう。例えば、デカルト (*Descartes, R.*) があらゆる懐疑の根源に、疑うことのできない「思惟する我 (“*cogito, ergo sum*”)」を見出したように、またハイデッガー (*Heidegger, M.*) が通常の哲学的な範疇ではとらえられない人間の実存的次元において、実存範疇としての「世界内存在 (“*In-der-Welt-Sein*”)」の概念を提示したように、ジェンドリンは私たちが生きており、存在していることにおいて最も確かで、疑うことのできない根源的な次元の現象を「体験過程 (“*experiencing*”)」と呼んだのである。²⁷

体験過程という根本概念の創出は、ジェンドリンを、哲学においても心理学やサイコセ

²⁷ ここで留意しておかねばならないのは、体験過程とはジェンドリンにとって、さまざまな定義や概念化を超えた人間存在のあり様を指し示す根源語であり、そのあり様そのものはすべて言葉によって置き換えられたり、数値として測定されるようなものと同様ではない、ということである。ロジャーズらと共同で行われたサイコセラピーの実証研究 (*Rogers, et al., 1967*、ほか) の中で、体験過程の様式という要因がサイコセラピーの成否を握る重要な変数として抽出されたこともあって、私たちはともすれば、体験過程というものを個人の中にある心理的要因として定義したり、測定可能な変数として操作化できるものとしてとらえがちである。もちろんジェンドリンの言う体験過程は、ある種の仕方によって (つまり言葉やシンボルとの相互作用のある仕方によって) は、そうした定義や操作化が可能なものとして私たちに応答する。しかし、それが体験過程のすべてではない。それは、きわめて多様なあり方や応答の仕方存在し、しかも推進されていくような、私たちに於ける根源的な現象そのもの、過程そのものであって、これまで体験や経験という言葉で呼ばれていた事柄について新しい認識をもたらす根本概念なのである。ジェンドリンは、「体験が私たちの“中”にあるのではない。私たち自身が、感じられる体験過程そのものなのである」(1966, p.240 邦訳 292 頁、訳文には修正を加えた) と言う。

ラピーの分野においてもそれまで未開拓だった仕事の展開へと導いていくことになった。心理学やサイコセラピーの領域における体験過程の概念の活用と展開については広く知られているが²⁸、もう一方の、体験過程という視座によって切り拓かれた彼の哲学とはどのようなものであったのだろうか。

ここで、ジェンドリンの初期の哲学的名著『体験過程と意味の創造 (*Experiencing and the Creation of Meaning*)』(1962a) で論じられた主要なテーマを解説することを通して、彼の体験過程の哲学の成果を抽出してみよう。『体験過程と意味の創造』は、ジェンドリンの博士論文「シンボル化における体験過程の機能 (*The function of experiencing in symbolization*)」(1958) をもとに公刊された著作で、序章と第 I ～VII 章の計 8 つの章から構成されている。²⁹

きわめて難解な内容からなる『体験過程と意味の創造』であるが、その骨子を要約すると、以下のように言うことができる。この著作の中心的な主題は、“体験過程は人間の認識や知の中でどのように機能しているか” というものである。そしてこの主題は、より具体的には、私たちの認識や知の中心をなすものとしての「意味 (*meaning*)」の問題の解明へと向けられる。私たちはいかにして意味を形成し、所有しているのだろうか。また私たちはどのように意味を使用し、他者と共有しているのだろうか。さらに『体験過程と意味の創造』においては、こうした「意味」の問題についてきわめて独自の視座が設定される。その独自の視座とは、“意味は体験過程とシンボルとの相互作用の中で形成される” というものである。通常、私たちは「意味」を記号や表現といったシンボルがあらわす内容として理解している。しかしジェンドリンは、シンボルだけでは意味は形成されないと言う。意味が形成されるには、私たちがシンボルを体験しなくてはならない。意味とは、私たち

²⁸ 末武 (2006) 「クライアント中心療法の展望」(久能徹・末武康弘・保坂亨・諸富祥彦『ロジャーズを読む (改訂版)』岩崎学術出版社 所収) 等を参照。

²⁹ 『体験過程と意味の創造』は次のような章立てから構成されている。

序章 (Introduction)

- I 体験される意味の問題 (The Problem of Experienced Meaning)
- II 認識において感じられる意味が機能する実例 (Demonstration That Felt Meaning Functions in Cognition)
- III 感じられる意味はいかに機能するか (How Felt Meaning Functions)
- IV 新たなシンボル化の中で機能するものとしての体験される意味の諸特質 (Characteristics of Experienced Meaning as Function in New Symbolization)
- V 普遍性の原理: “IOFF” (Principle of Universals: “IOFF”)
- VI 哲学における適用 (Application in Philosophy)
- VII 心理学の理論と研究への応用 (Application to Psychological Theory and Research)

と切り離されて存在する何ものか（辞書的意味、文法、言語コード、アイデア、……）なのではなくて、私たちに体験され、感じられるものなのである。こうした視座から『体験過程と意味の創造』においては、「体験される意味 (experienced meaning)」あるいは「感じられる意味 (felt meaning)」という独自の概念が創出される。

注目すべきは、この「感じられる意味 (フェルトミーニング)」という言葉は、その後のフォーカシングの中心概念として用いられる「フェルトセンス (felt sense)」に直結する概念である、ということである。その点では、『体験過程と意味の創造』はフェルトセンスの機能を哲学的に解明しようとするものであった、ということもできる（もっとも、この著作が公刊された時期にはまだフォーカシングという方法も、その言葉自体も存在していなかったのだが）。

以上が『体験過程と意味の創造』の中心的主題の骨子であるとすれば、そこからどのような哲学的議論や成果が引き出されたのだろうか。ここでは次の2点に絞って体験過程の哲学の成果を抽出してみたい。1つは、認識や知の中で、感じられる意味あるいはフェルトセンスがどのように機能しているか、という問題についての取り組みであり（おもに第三章）、もう1つは、普遍性の原理としての IOFI (instance of itself) についてである（おもに第五章）。

第1の点は、この著作の根本的な主題である“体験過程は人間の認識や知の中でどのように機能しているか”というものを、“感じられる意味（あるいはフェルトセンス）とシンボルとの機能的関係”という具体的問題への取り組みによって解明しようとするものである。ジェンドリンはその機能的関係として、次の7つを挙げる。それらをごく簡潔に示してみよう（わかりやすくするために、原著の「感じられる意味 (felt meaning)」を以下ではすべて「フェルトセンス」に言い換える）。

「直接照合 (direct reference)」とはシンボルの展開が生じる前の、フェルトセンスへの直接的な注目や指示のことである。シンボルが用いられるとしても、ここでは「これ」「この感じ」といった、フェルトセンスを指し示す機能をもつだけである。

「再認 (recognition)」は、シンボルがフェルトセンスを呼び起こす機能のことである。あるシンボルは、あるフェルトセンスを選択的に喚起する。

「展開 (explication)」は、フェルトセンスからシンボルが次々に得られるという関係である。フェルトセンスに導かれてシンボル化が生じる。

以上は、フェルトセンスとシンボルが並列的な対応関係にあり、またシンボルは既存の

(われわれが慣れ親しんでいる) 意味によって用いられるために「並行的関係」であるとジェンドリンは言う。しかし、フェルトセンスとシンボルとの関係はこれらにとどまらない。その両者が創造的に変容し、新たな意味が形成される、以下のような「創造的關係」がある。

「隠喩 (metaphor)」とは、シンボルがフェルトセンスの新たな側面を創造的に引き出す関係である。「隠喩」によってフェルトセンスは先へと推進される。

「把握 (comprehension)」は、フェルトセンスが新たな隠喩的シンボルを導く関係のことである。そこでは、そのフェルトセンスの細部が明らかにされながら、その全体が包括的にとらえられ、ある隠喩的シンボルへと収斂していく。

「連関 (relevance)」とは、隠喩的なシンボルが生まれる背景にある、複雑なフェルトセンスの相互作用のことである。それは、あるフェルトセンスがある隠喩的シンボルを生み出す際に、他のさまざまなフェルトセンスが影響しているということである。

そして「婉言 (circumlocution)」とは、シンボルがフェルトセンスの「連関」を生起させる関係である。シンボルとフェルトセンスの複雑な相互作用関係をシンボルの側からとらえると、それは「サーカムロケーション婉言」と呼ばれる。³⁰

³⁰ シンボルと感じられる意味 (フェルトセンス) の7つの機能的関係については、ここにあげた要約的な解説のみでは、その意味するところは理解が困難であろう。そこで、「私」が「あなた」に自分の感じていること (フェルトセンス) を語るという場面を例にして、それぞれの概念の内容を以下に描写しておく。

1. 「ダイレクトレファランス直接照合」: 私は、自分が感じている漠然とした感覚 (フェルトセンス) をあなたに語ろうとしている。私にとって、その感じや気持ちはたしかに感じられているが、まだ言葉にはなっていない。私はこのフェルトセンスに直接に注意を向け、その全体的な感触や、その中に感じられる細部の複雑さを味わっている。私は、その全体や細部を言葉にしようとするが、どのように言い表せばよいのかまだわからないので、「この感じは…」とか「これは…」といった言葉によって、このフェルトセンスが自分から離れてしまわないようにしている…。ここでは、シンボルを介さずに直接にフェルトセンスに注意が向けられている (注意を向けること自体がシンボリックな行為であるとも言えるが)。あるいは、わずかに「この感じ」「これ」といった言葉が用いられているが、それらはフェルトセンスを指し示すためだけに使用されている。このように、ダイレクトレファランスシンボルの展開や分節化が生じる前の、フェルトセンスへの直接的な注目や指示のことを「直接照合」と呼ぶ。そこでは、まず何かしらの感じ、フェルトセンスがあり、意味は其中で暗々裏にあるいは身体的に感じられている。

2. 「リコグニション再認」: 私が感じているものは、言葉にならないものだけではない。少し前にこれに近いフェルトセンスを自分の中で感じたときに出てきた言葉は、「不安」であり「疲れ」であった。こうした言葉を思い起こすと、私がいま感じているフェルトセンスのある部分が、これらの言葉でピッタリと表現できることに気づく。しかもこうした言葉は私だけでなく、あなたもよく知っているもので、私たちはこうした言葉を使うことによって、お互いが感じていることや知っていることを共有することができる…。ある言葉は、ある感じ (あるフェルトセンス) を呼び起こす機能をもっている。そこではシンボルは、ある具体的なフェルトセンスを選択的

に喚起する役割を果たしている。シンボルとフェルトセンスのこうした関係を「再認^{リコグニション}」と呼ぶ。私たちはおそらく、数千いや数万にもおよぶ、こうしたシンボルを所有している。しかも、そのうちの1つにすぎない「不安」という言葉だけを考えても、それが呼び起こすフェルトセンスには、この言葉に関連した私のあらゆる体験と、他の人たちの体験や言葉との交差が複雑に含まれている。そのうえで私（たち）は、この言葉を所有し使用しているのである。

3. 「展^{エクスポジション}開」：私は「不安」という言葉から語り始めた。しかしいま感じているものは、この言葉だけで到底語りつくせるものではない。「疲れ」でもそうである。私はフェルトセンスに注意を向けることで、別の言葉を探し、選りすぐり、見出すことができる。「寄る辺なさ」「逡巡」「あきらめ」…、どんな言葉であってもしいのかかもしれないが、このフェルトセンスを正確に表せる言葉は、そうでないものから区別される。私はそのような言葉を選んで語り続ける…。あるフェルトセンスから、それを表現できるシンボルが次々に得られるという関係が

「展^{エクスポジション}開」である。私は無造作に語っているわけではなく、このフェルトセンスからシンボルを導き出しているのである。このようにフェルトセンスに導かれてシンボル化が生じることを「展^{エクスポジション}開」と呼ぶ。

4. 「隠^{メタファー}喩」：語り続けるうちに、私の中から「心が海に沈んでいる」という言葉が出てきたとする。この言葉は、私のいまのフェルトセンスのある側面をピッタリと言い表すと同時に、このフェルトセンスに新たな意味感覚をもたらす。「心が海に沈んでいる」、私はそう言ってもよいくらいの重い不安をたしかに感じている、これほどに重い不安…。シンボルがフェルトセンスを導くという意味では「再認^{リコグニション}」であるが、ここで生じていることの中にはそれを超えた創造的な何かが含まれている。ここには、「心」、「海」、「沈んでいる」という言葉の交差によって、それぞれの辞書的な意味の合成を超えた意味感覚が形成されると同時に、私のいまのフェルトセンスと相互作用することによって、この時限りの（ここでしか起き得ない）新鮮な意味が創造される。このように、シンボルがフェルトセンスの新たな側面を創造的に引き出す関係を「隠^{メタファー}喩」と呼ぶ。「隠^{メタファー}喩」によってフェルトセンスは先へと推進されるのである

5. 「把^{コンプリヘンション}握」：「心が海に沈んでいる」という言葉は、私が感じていることのある側面をはっきりと導き出した。しかし、この言葉が、私の感じていたことが先に進む以前に浮かんだという点では、言葉の方が先行していたのだろうか。そうとも言えるが、私が感じていたこととまったく関係のないところでこの言葉が浮かんできたわけではない。この言葉はたしかに私のフェルトセンスから出てきたものである…。「隠^{メタファー}喩」はシンボルがフェルトセンスに新たな側面を引き出すことであるが、逆に、フェルトセンスが新たな隠喩的シンボルを導く関係のことを「把^{コンプリヘンション}握」と呼ぶ。フェルトセンスからシンボルが導かれるという点では「把^{コンプリヘンション}握」は「展^{エクスポジション}開」に似ているが、シンボルが導かれる過程に相違がある。「展^{エクスポジション}開」ではシンボルの既存の意味が用いられるが、既存の意味によるシンボルによってはフェルトセンスが推進されないうとき、そこにはフェルトセンスから隠喩的シンボルが創造される必要がある。そこでは、そのフェルトセンスの細部が明らかにされながら、その全体が包括的にとらえられ、ある隠喩的シンボルへと収斂していくのである。

6. 「連^{レリヴァンス}関」：「心が海に沈んでいる」という私の言葉の意味は、あなたに正確に伝わったのだろうか。おそらくこの言葉を唐突に聞かされたとしたら、その意味はすぐには伝わらないかもしれない。しかし私は先ほどから、「不安」をはじめとして私が感じていることを語ってきた。その語りは、私の中にも、そしておそらくあなたの中にも、きわめて複雑なさまざまなフェルトセンスとシンボルとの相互作用を生み出してきた。いまあなたは、「心が海に沈んでいる」という私の言葉の意味を正確に理解しているだろうが、しかしそれはあなたがとらえた（私のものとは違った側面をもつ）独自の意味を含んだものだろう…。隠喩的なシンボルが生まれる背景にある、このようなきわめて複雑なフェルトセンスの相互作用を「連^{レリヴァンス}関」と呼ぶ。それはあるフェルトセンスがある隠喩的シンボルを生み出す際に、他のさまざまなフェルトセンスが

以上がジェンドリンの言う、感じられる意味（あるいはフェルトセンス）とシンボルとの7つの機能的関係である。彼は、「これらは人間の現象におけるすべての意味、論理、秩序にとって根本的なものである。これらの異なる様式は相互に還元されないし、相互に“混ぜ合わせる”こともできない」（p.90、邦訳 117 頁）と言う。つまり、これら7つの関係は、ジェンドリンによって提起された、感じられる意味（フェルトセンス）とシンボルとの根本的な関係様式であり、これ以上は分割したり他のものと交換することができない、いわゆる根源的範疇である。そしてこの機能的関係の議論からジェンドリンが強調するのは、私たちのあらゆる意味の形成や使用には感じられる意味（フェルトセンス）が必ず何らかの形で関与している、ということである。つまり、私たちは言語や文化や歴史などを、自分とは無関係なところで構造化されている何ものかとしてではなく、フェルトセンスを媒介としながら私たちと関係し合っている、したがってフェルトセンスの活用によって私たちの体験過程の中に主体的かつ創造的に組み込んでいくことが可能なものとしてとらえられる、ということである。³¹ そしてこのような認識は、たんに言葉やシンボルの使用や意味形成といった問題にとどまらない、より深い哲学的な展望をもたらすことになった。それが、普遍性の原理としての IOFI（“IOFI 原理”）である。

『体験過程と意味の創造』の哲学的成果の第2点として取り上げなくてはならないのが、この“IOFI 原理”である。“IOFI ³²”とは、“instance of itself”（それ自身が実例であ

影響している関係のことである。われわれが同じ言葉を理解したり使用するとき、それぞれ微妙に異なる意味感覚をもっているのはこのためである、その言葉が隠喩的であるほど、さまざまな体験やフェルトセンスが暗々裏に影響している、と言えよう。

7. 「サーカムロキューション婉言」：「心が海に沈んでいる」という私の言葉は、私のいまのフェルトセンスを正確に表現しているだけでなく、この言葉の含みには、いまはまだ十分に気づいていない、もしかしたら今後ははっきりと感じられるようになるかもしれない、そうした多様な含意がある。あなたもこの言葉から、私のものとは少し違った含意を展開させていくかもしれない…。ある隠喩的なシンボルは、連関的に数多くのフェルトセンスと絡み合っているだけでなく、隠喩的シンボルとして複雑な含意をもっている。シンボルとフェルトセンスの複雑な相互作用関係をシンボルの側からとらえると、それは「サーカムロキューション婉言」と呼ばれる。「サーカムロキューション婉言」とはシンボルが生起させるフェルトセンスの「レリヴァンス連関」である。例えば、芸術的なシンボルは「サーカムロキューション婉言」として機能するとき、私たちの中に多様なフェルトセンスの「レリヴァンス連関」を作り出す。「レリヴァンス連関」と「サーカムロキューション婉言」は、私たちの意味の創造（そして芸術や文化、歴史の形成）の過程に複雑に機能しているのである。

³¹ ここでは詳しく論じないが、シンボルと感じられる意味（フェルトセンス）の7つの機能的関係については、筆者は人間の言語獲得過程や共感性の発達、あるいは質的研究におけるデータ解釈の方法論など、幅広い分野で活用できる可能性をもっているのではないかと考えている。今後そうした方向での適用の議論が生じることが期待される。

³² 第2回フォーカシング指向サイコセラピー世界会議の際に、ジェンドリンの哲学に詳しいロ

ること)であり、IOFI 原理とは、いわゆる普遍性や真理についてのジェンドリンの独創的な哲学的提案である。彼は次のように言う。

原理：人は、新しい方法論的カテゴリー (new methodological categories) を創造的に生み出すことができる。それは、あらゆる所与の特定化された意味 (any given specified meaning) を、ある (新しい) 方法論的カテゴリーの 1 つの実例 (an instance) としてとらえることによってである。つまり、それが、そのカテゴリーの (関連する) どんな側面であるか、あるいはどんな役割を担っているかを言明することにおいて、そうできるようになるのである。(p.176 邦訳 204 頁、なお訳文には大幅な修正を加えた)

ここで言われている「方法論的カテゴリー」は、理論や公式、普遍性、真理などとも言い換えることができるだろう。すなわち、私たちが具体的に感じている意味は、既存のカテゴリーや理論から生じたものというだけでなく、新しい何らかの実例としてとらえられるならば、そこに新しいカテゴリーや理論 (ひいては新しい普遍性や真理) の創造の可能性が開かれる、ということである。固定的で絶対的な普遍性が実例を生み出すのではない。そうではなくて、普遍性や真理とは、次々と生起する実例との相互作用によって変容していく可塑的で可変的なパターンである、と言える。わかりやすい例をあげると、新種の化石の発見という実例は、生物の進化やその種目のカテゴリーの認識に影響を与えるだろう。とすると、哲学や心理学の理論、社会システムの普遍性、政治的あるいは倫理的な真理などは、こうした生物の種目を分類するカテゴリーよりもはるかに多様で可塑的であり、私たちの体験過程 (そのフェルトセンス) との相互作用に開かれているはずのものである。

どんな人間の意味も、常に“そのような (such)” 意味である。しかもそれは 1 つのカテゴリーの中や、1 つの普遍性のもとにあるのではない。そうではなくて、私たちは、あるカテゴリーのもとに仮に包摂されるような“特定性” から、無限の新たな普遍性を生み出すことができる。IOFI に沿って動くとき、思考ははるかに力強いものになる。(『体験過程と意味の創造』「新装版の序文」1997d, p.xx)

ブ・パーカー (Robert Parker) 氏に尋ねたところ、‘IOFI’ は「アイ・オヴ・アイ」と発音するとのことだった。

とジェンドリンは言う。IOFI 原理の提案は、私たちが自らの体験過程（そのフェルトセンス）を実例、すなわち根拠としながら、理論や普遍性や真理の探究に創造的に参入する可能性を開いてくれる。それは、決して恣意性（エゴイズムやナルシズム、自己中心性など）によってではなく、個と普遍を橋渡しする私たちの体験過程（そのフェルトセンス）という豊かな基盤によって、私たち一人ひとりが真理の探究や、社会システムの変革にかかわっていく可能性と方向性を示すものである。

以上、ジェンドリンにおける体験過程の概念の創出、体験過程とは何か、さらに『体験過程と意味の創造』における主要な哲学的議論として、感じられる意味（フェルトセンス）とシンボルとの機能的関係、および普遍性の原理としての IOFI 原理について考察を加えてきた。ここで、ジェンドリンによる体験過程論の展開が、哲学や心理学などにもたらした意義についてまとめておこう。彼による体験過程という視座が切り拓いた新たな地平はどのようなものであったのだろうか。

第 1 に指摘できることは、体験過程（その感じられる意味、フェルトセンス）という、私たちに具体的に感じられ、注意を向けることができ、さまざまな形で活用できる体験的な側面が、哲学の議論の中に明確に位置づけられるようになった点である。「哲学が純粋に理性的な地盤の上で考えてきた多くのものは、現在では前概念的な体験過程との関連において考えなければならない。」（1962、p.5、邦訳 27 頁）とジェンドリンは言う。そしてそこから哲学に求められるものを、彼は「通常の哲学的な秩序の逆転（the reverse of the usual philosophical order）」と呼んだ。それは、哲学的な真理を私たちの体験過程と離れたところ——純粋な論理や図式、普遍的な類型化やシステムなど——に求めるのではなく、私たちの体験過程の感じられる意味感覚に優位性をもたせようとする根本的転換である。

そして第 2 には、この体験過程の哲学から、心理学やサイコセラピーをはじめとした種々の応用的な展開が生まれていった、という点である。ジェンドリンは次のように述べる。

ここ『体験過程と意味の創造』で提案されたリサーチのためのプロセス変数は、体験過程スケール（Experiencing Scale）および現在も続けられている一連の実証研究を導いた。また、さまざまな分野で活用されている“フォーカシング”の方法——それはどんな気がかりや取り組み、議論の接点においても生じる（最初は不明確な）身体感覚へと直接に注意を向けていく教示法である——もここから生まれたものである。さらに本書において展開された思考は、物理学、文章表現の教育を含む、さまざまな分野に適

応されてきている。」(1997d, p.xxi)

フォーカシングに代表される、ジェンドリンの実践的な活動や方法の提案は、これまで見てきたような哲学的な視座から切り拓かれたものであった。そしてここで留意すべきは、ジェンドリンの中で哲学的な考究と実践的・臨床的な探求が別個に繰り広げられてきたわけではない、ということである。両者は深く絡み合いながら、複雑かつ交差的に展開されているのである。ジェンドリンの哲学は、私たちの具体的な体験過程（その感じられる意味、フェルトセンス）を中心に据えるという基本的な着想それ自体からしても、きわめて実践的で臨床的なものであると言えよう。この哲学の視座によれば、例えばサイコセラピーの中で生じるクライアントの気づきも、また私たちの日常におけるさまざまな経験知なども、それらが IOFI 原理に導かれるならば、ある普遍性や真理へと展開されていく価値をもっていると考えられるのである。

このようなジェンドリンの体験過程の哲学は、しかし、これまで考察してきた地点にはけっしてとどまることなく、哲学的にも臨床的にもさらに推進されていくことになる。その具体像のいくつかについて、章をかえて論じていきたい。

3. 夢、身体、隠喩——現象学的方法による夢解釈——³³

ここまで見てきたように、ジェンドリンの哲学はまず、体験過程という視座による理論的展開によって提示された。そして『体験過程と意味の創造』において示された哲学的視座は、その後、真理の解明の問題（1965-66）、現象学への提言（1973）、さらにハイデッガー哲学への言及（1978-79）などによって深められていった。また、その哲学は同時に、きわめて臨床的な問題とも交差しながら展開していくことになる。

ジェンドリンにとっては、サイコセラピーの実践、殊にフォーカシングの提案と展開の中で、人間の体験過程や身体のもつ複雑で精緻な機能がよりいっそう重要なものとして認識されていったことは間違いないだろう。『体験過程と意味の創造』においては、まだそれほど詳細には論じられていなかった身体の機能——特に夢をはじめとしたその隠喩的な働き——について、1970年代以降ジェンドリンの考察がより深められていく。

以下では、ジェンドリンの哲学と臨床的見解の独特の交差によって生まれた問題認識の具体例の1つとして、夢の解釈に関する彼の哲学的かつ臨床的な見解を考察することにした。

ジェンドリンが夢の問題について初めて詳しく論じたのは、「現象学的概念か現象学的方法か——夢に関するメダルト・ボス批判——」（Gendlin, 1977）と題する論文においてである。彼はこの論文で、スイスの精神医学者で現存在分析の臨床家として知られるメダルト・ボス（Boss, M.）の夢解釈への評価と批判を通じて、夢についての現象学的な認識のあり方、そして夢の臨床的な取り扱いを論じている。この論文の主張の骨子は以下のようなものである。ボスは、フロイト（Freud, S.）やユング（Jung, C. G.）らとは異なる立場から、夢を現象学によって取り扱おうとした先駆的な臨床家だった。しかし、ボスが行ったのは夢解釈に「現象学的な概念」をもち込んだことであって、結果的に個人の体験とは無関係な何らかの恣意的な解釈を夢にあてはめようとしたことにおいてはフロイトやユングらと同様であり、そこに妥当な「現象学的方法」が用いられていたわけではない。そこでジェンドリンはこの論文で、夢を現象学的方法によって取り扱うとはどういうことかを独自の観点から論じている。

³³ 本章の初出は、末武康弘（1990）来談者中心療法と夢解釈—ジェンドリンによる夢の世界への参入— 女子美術大学紀要 第20号、11～29頁である。

この論文の中身をもう少し詳細に見てみよう。ジェンドリンは次のように言う。

私の理解するところでは、夢解釈についてのボスの貢献は以下の 3 点にある。(i) 夢を生きている人間以外の何ものかに翻訳してしまうことへの拒否、(ii) 相互作用としての人間についての認識、(iii) “関与 (bearing)” と “可能性 (possibility)” という 2 つの基本的な概念それ自体、である。(1997, p. 287)

ジェンドリンはボスの現象学的夢解釈について、おもに 3 つの点で評価している。第 1 に、ボスが夢についての恣意的な解釈を拒否した点である。従来の夢解釈においては、夢は何らかの理論に基づく概念へ翻訳され解釈されていた。しかも理論の違いによって、同じ夢がまったく相反する概念によって解釈されかねなかった。例えば、「フロイトにとっての夢は、エネルギー力学における特定の事象の部分的な放出の結果である。またユングにとっては、夢の背後には古代の神話の神々が行き来している」。しかし「ボスはこうした構成概念を拒む。ボスは夢を超えるものとして、夢を見た人の現実の覚醒生活だけを考えている」(p.285) のである。

第 2 に、人間を世界との相互作用としてとらえる見方である。夢解釈を含めた従来のサイコセラピーにおける人間のとらえ方には、現象学や実存哲学が見出してきた、世界や状況の中に投げ込まれた世界内存在としての人間、つまり世界に開かれ相互作用の中に生きている人間という認識が欠如していた。「フロイトやユング (そしてその他の人々) は、夢を個々人の主観性において解釈している」。しかし「対照的に、ボスにとって人間とは、相互作用的に生きていることそのものである」(p.286) とジェンドリンは言う。

そして第 3 に、ボスがサイコセラピーおよび夢解釈において “関与 (bearings)” および “可能性 (possibilities)” といった現象学的な概念を用いた点である。「人は実際、どのように自分自身を他者へと向けて、そして世界や人生へと向けて “関与させて” いるのか、そして人が人生や他者へと自分自身を関与させることにおける、いまだ生きられていない “可能性” とはどのようなものか？」(p.287) とボスは問う。ジェンドリンは、ボスによるこれらの概念は強力なものであり、夢解釈において採用される価値をもっていると評価している。

しかしジェンドリンは、夢解釈に関するボスのこのような貢献を高く評価しながらも、実際の具体的な夢解釈の中ではこうしたボス自身の主張が十分にいかされていないのでは

ないか、との疑問を投げかけている。ジェンドリンの疑問そして批判は、次のような点に向けられている。すなわち、現象学的な立場から夢解釈において「関与」および「可能性」といった概念を用いるにしても、ただそれだけであれば、ある夢において夢を見た本人にどのような「関与」が表現されており、どのような「可能性」が開かれているのかは、解釈者によってどういうふうにも語るができる。つまり、解釈の恣意性は何ら解決されていないのではないかと、という問題である。³⁴ ジェンドリンは次のように言う。

すでに見たように、“関与”および“可能性”という**一般的な**概念は現象学的なものである。しかしこれらの概念をただ用いるだけでは、ある人の関与のあり方もしくは生きられていない可能性について、私たちが語るあらゆる**具体的な**ものの、現象学的な基盤を確保することにはならない。私たちは、…… [中略] ……その人が**何らかの**特色ある関与や**何らかの**生きられていない可能性をもっているだろうと語ることはできる。しかし、ある夢を聞くことによって、または覚醒時の生活におけるその人を観察することによって、さまざまな異なる解釈者は、さまざまに異なった結論に達するだろう」(pp. 287-288)。つまり「ボスの解釈的な概念の**使い方**は、(サイコセラピーにおける)他の

³⁴ ジェンドリンは、以下のような例をあげてボスの解釈の恣意性を指摘している。ボスは、あるユング派の分析家によって公表されたクライアントの夢の解釈について議論した。そのクライアントの夢は、“私は分析家から体の手術を受けていた。その時、一人の見知らぬ白髪の老人があらわれて、彼の肉を2片ほど切り取って、私の腹に移植した。そのために私の命は救われた。”というものであった。ボスはユング派の解釈、すなわち、その白髪の老人が神話や多くの人々の空想や夢の中に見出されると言われる“老賢者 (old wise man) ”、つまり神話学的な崇高な人物であるという考えを拒否すると同時に、自分は助けられ、救われ、喜ばしい援助を受けたのだという夢を見た人の体験そのものも拒否した。ボスの解釈は次のようなものである。「……男性的な、成熟しており、我欲がなく助けになる同胞であるという可能性が、夢を見ている間に彼に開かれつつあるのである。この夢の登場人物がなぜ見知らぬ者としてあらわれたのか、その理由は、この最も成熟した人間のあり方が、夢を見た人にとってはまだほとんど未知のものであるという事実にあるだろう。… [中略] …夢の中で、他者から移植してもらうことによって彼の命が救われることには当惑させられてしまう。手術中の彼はまったく受身的なままであるからだ」(p.289)。

しかし、ボスはどのような根拠からこのような解釈を採択したのか明らかにしていない。またこうした解釈が、本当にこの夢の解釈として妥当なものであるかどうかも定かでない。それは、ボスの価値観や好みを反映した恣意的な解釈に過ぎないように思われる、とジェンドリンは言う。夢に登場した白髪の老人を、自我の外から訪れた崇高な元型として解釈することと、“男性的で……助けになる同胞”というその人の可能性であると解釈することの違いについて、あるいはその人の関与のあり方を“喜ばしい援助を受けた”と解釈するのか、それとも“まったく受身的なままである”と解釈するのかの違いについて、いったいどのような基準でその適否が決められるのだろうか。ボスはそのクライアントの夢の内容だけを取り上げているにすぎず、そのクライアントに会ったわけでもなく、自分の解釈をその本人へと伝え返しているわけでもないのである。

体系における仕方とかわりがない。一般的な概念のみが現象学的になっているにすぎない。その解釈はきわめて恣意的であるように思われるのである。(p.292)

以上のようなボスへの評価と批判に基づいて、ジェンドリンは現象学的方法による自らの夢解釈の観点を以下のように論じている。

ボスは、夢を超えているのは夢を見た人の覚醒生活だけであると言う。そうであるならば、私たちは夢をその覚醒生活と接触させなければならない。そこに新しい何かが示されるのである。ボスはまた、夢を見た本人が今人生をどのように生きているのか、ということだけを取り扱うのではなく、いまだ実現されていない可能性をも取り扱わねばならない、と言う。だからこそ私たちは、人間の人生と体験とを有限な事物、要因、実体、すでに完了され規定されたパターンであると考えのではなく、まだ見られていない可能性を含むものとして考えなければならない。(p. 294)

これまでの夢解釈についての議論は、夢を見た本人の体験や感じていることからあまりにもかけ離れたところで行われていたのではないか。また、従来の夢解釈は、往々にして断定的で固定的な概念や言葉への翻訳にすぎなかったのではないか。そうした解釈からは、夢を見た人自身にとって新しいものは何も生じないし、その人の可能性を開示することにも結びつかない。ジェンドリンは、夢についてのある解釈が妥当なものであるかどうかの基準は、その解釈によって、夢を見た本人にとって暗々裏に感じられてきた、あるいは場合によっては思いもかけなかったような何かが、その人の中で“浮かび上がる (lift out)”かどうかということにある、と言う。

人間の体験は基本的に、こうした何かが“浮かび上がる”ことの可能性をもっている。根本的に、人間の体験は世界における、そして他者に対する私たちの関係そのものであり、何かを通しての可能性である。……〔中略〕……人間の体験は、概念が何かを浮かび上がらせるという役割を果たすことによってのみ、概念的に触れることができるようなものなのである。(p.294-295)

それゆえ、夢の解釈の妥当性は、その解釈的な概念の理論的な正しさや論理的な整合性

にあるのではなく、それが何かを浮かび上がらせることができるかどうかにある、とジェンドリンは言う。「解釈の“正しさ”はセラピストの判断によるのではなく、クライアントの判断によるのではない。それは浮かび上がってくるものにかかっているのである」(p.295)。

では夢を見た人にとって本質的な何か浮かび上がるときには、その当人においてどのようなプロセスが生じるのだろうか。

……夢を見た体験と覚醒体験が1つになり、夢についてのある解釈が満足のいくものとなる時、ある明白でインパクトに満ちた出現 (emergence) が生じる。外的には、その人の表情がいきいきとなるのを見ることができる。深い呼吸をするかもしれない。その人の夢がその人自身のものであると体験されるとき、そこには、あるほとぼしり (flood) が、ある開けや開示が (opening and unfolding)、ある出現が生じる。この明白な体験は、ある解釈が“ちょうどよさそうだ”とか“おもしろい”とか、ある予感を与えるものだとか、興味を覚えるなどといったこととはまったく異なるものである。(p.298)

こうしたプロセスが実際に生じるかどうかということそのものが、夢についての解釈の妥当性を例証することにはほかならない。「浮かび上がることが基本的な基準にされるならば、人はもっとさまざまな仕方で夢に光をあてることができるし、出現ももっと多く生じるようになるだろう」(p.298)とジェンドリンは言う。彼は、「関与」や「可能性」といったボスの概念を含め、フロイト派やユング派などの諸概念をも、こうした現象学的な夢解釈の方法によって統合することができると思う。ジェンドリンはこの論文の最後に、夢解釈の中で用いることができるいくつかの問いを提示している。「あなたの人生の中の何がそれに似た感じがしますか?」「その夢の登場人物、その人はどんなふうでしたか、誰がその人に似ていますか?」「通りのその場所は何に似ていましたか、あなたはそこに行ったことがありますか?」「立ち上がって、しばらくの間、その男になったつもりで振舞ってみてください。彼は何を感じていますか、どんなふう動いていますか?」等々である。夢に恣意的な解釈を当てはめようとするのではなく、こうした問いによって夢をその夢を見た当人の体験と相互作用させながら、その人の体験過程の推進をはかること、これがジェンドリンによる夢解釈についての新たな提言であった。

その後、これらの夢解釈のための問いは『夢とフォーカシング』（原題は『あなたの身体に夢を解釈させよう（*Let Your Body Interpret Your Dreams*）』（1986）の中でより具体的かつ詳細に提案され論じられることになる。この本の出版以来、夢の解釈や臨床的取り扱いにフォーカシングを活用する方法——日本では「夢フォーカシング」という呼称が一般に流布している——は広く知られるようになり、クライアント中心療法やパーソンセントラードセラピーにおける夢やその他の隠喩的表現（描画、造形、イメージ等）への臨床的アプローチを発展させることとなった。

そして、そうした夢や隠喩的表現への臨床的アプローチの展開の背景には、以上見てきたような夢と夢解釈に関するジェンドリンの哲学的な思索が重要な理論的基盤として存在していることが認識される必要があるだろう。

『夢とフォーカシング』についても少し触れておきたい。この本は、フォーカシングを夢解釈に活用するための問いを中心とした実践的で具体的な内容の本であるが、その巻末に「生きている身体と夢についての理論（*Theory of the living body and dreams*）」と題する哲学的論考があわせて掲載されている。こうした、きわめて実践的な内容と哲学的な内容の両方からなる著作は、いかにもジェンドリンの作品らしい哲学と臨床の重層性を示していると言えるだろう。そしてこの「生きている身体と夢についての理論」は、『体験過程と意味の創造』（1962）と『プロセスモデル』（1997a）（その草稿はすでに1981年に書き上げられていたが）を繋ぐ重要な概念や理論的モチーフによって展開されている注目すべき論考である。

以下は、この理論を構成する2つの問題——生きている身体、および夢——についての筆者による要約的な素描である。

ジェンドリンはまず、私たちの生きている身体について次のように論じる（I. 生きている身体）。

すべての動物の、そして人間の身体にはさまざまな行動のパターンが暗在的に含意されている。遺伝によって受け継がれるのは、生物としての形態や臓器だけでなく、複雑な行動のパターンが含まれている。「私たちは親から胸や肺だけでなく、呼吸の仕方も遺伝として受け継いでいる」（p.143）。つまり、私たちは物質的なモノであるだけでなく、生まれながらに行為する存在である。しかもそうした行為は、私たちの身体が単独で行うものではなく、外界との相互作用の中ではじめて生起する。「身体は生物どうし、そして周囲の環境との間の、きわめて複雑な相互作用のパターンを含んでいる」（p.143）。

さらに私たちの身体には、つねに状況との複雑な相互作用の中で生起する身体感覚 (body-sense) が感じられており、そこには、その次に起こることが可能な動作や言葉が暗在的に含意 (imply) されている。例えば、「見知らぬ人があなたの後ろをついてくるような時、身体感覚は、その人が何かをしそうかとかその時あなたがどのような行動をとるのかを含意 (imply) している」(p.145)。その他どんな場合においても同様である。このような身体感覚が存在しないところでは、その次の行動は生起しない。

「行動は、“身体とその環境 (body-and-its-environment)” から生まれる。いずれか一方の変化は、他方の変化を引き起こす。そしてさらに両方の変化が生じる」(p.145)。日々、実際には私たちにとっての環境も私たちの身体も変化している。しかし、日常の私たちにおいては、新たな身体感覚が生じて、同じようなやり方が——何かしっくりこないと感じられながら——繰り返されることが多い。そこで私たちは行き詰まったり、新鮮味に欠けた、似たような体験を繰り返すことになる。「通常の体験は、日常的な感情、言葉、行為そして出来事から成り立っている。私はこれらの日常的な出来事を“完了した事象 (finished events)” と呼ぶ」(p.145)。だが、この新たに生じた身体感覚が、いまだ行為としては形になっていないのに、新しいステップを明白に含意していることがまれにある。そうした感覚がフェルトセンスである。それは“完了以上のもの (more than finished)” である、とジェンドリンは言う。そこから新しい言葉や行為が浮かび上がり、新しい何かが生じるのである。

私たちの生きている身体をこのようにとらえたうえで、ジェンドリンは夢について次のように語る (II. 夢)。

夢は隠喩的に語りかけてくるものである。隠喩 (metaphor) はそれ自体完了されていないという意味で、言語およびあらゆる現象の本質的な姿であると言える。「本質 (そして人間の本性) は、完了した形態ではない。“本質 (nature)” の語源は “natus”、つまり生まれるということである。本質とは隠喩的なものなのである」。したがって夢の本質も、「夢は“メッセージ”を隠喩的な暗号の中に隠しているのではない。夢は隠喩的に生まれるものである」(p.150) ととらえることができる。

隠喩の働きは、古い状況を新しい状況と“交差させる (cross)” ことにある。私たちの体験にはすべて、こうした“交差”が複雑に含まれている。ある物体やある音は、たんにそう見るとかたんにそう聞こえるといったものではなくて、状況や過去の体験との複雑な交差の結果なのである。しかし、私たちの通常の体験においては、交差の結果だけが体

験されていて、結果へと向かっている過程そのもの、つまり交差の過程は体験されていない。そこでは、すでに完了した日常的な事象が、物体の見え方や音の聞こえ方を規定し、縛ってしまっている。つまり、“完了した事象”だけが体験されているのだ。

だが、夢（および他の変性意識状態）では、その交差過程を実際に見ることができる。ジェンドリンは、こうした体験を“未完了の事象 (unfinished events)”と呼ぶ。“未完了の事象”においては、完了した日常的な事柄からの制約を離れて、どんな小さなことでもあらゆることと“交差する”可能性に開かれている。例えば、日常の“完了した事象”においては、自分の怒りと部屋の中にある椅子との間には何の関連性もない。椅子は椅子のままであり、たとえ怒りをぶつけようとも椅子は椅子としてしか反応しない。一方、夢におけるような“未完了の事象”の中では、怒りと椅子の間にはさまざまな交差の可能性が開かれている。椅子は形を変えるかもしれないし、動き出して自分に何かをするかもしれない。あるいは椅子ではない違うものへと姿を変えてしまうかもしれない。そこでは、夢を見る人にとってある独特でユニークな交差が生じるだろう。

そこに示される“交差過程”は、たんなる偶然ではないし、何の意味ももたないのではない。そこには、生きている身体によって含意された何かが含まれている。「私たちは生きている身体が、次に生じる行動を暗在的に含意していると言った。身体が空腹でない時にはあなたはものを食べない。息を吸ったあとでないと、息を吐くことはできない。次に形づくられるものは、あなたの身体が次に含意しているものである。それが生起しない時には、それは暗在的に含意し続けるのである」(p.155)。つまり、夢の中のある独特の交差の中には、夢が私たちにもたらしてくれる、身体の中に含意されているもの、すなわち、いまだ十分に自分の中に生きられてこなかったものの意味や姿が暗在的に示されているのである。

しかし、“未完了の事象”の中だけでは、それを私たちの現実の生活へと統合させることはできない。そこには、私たちが今、どのように状況をとらえ、状況を生きているかという身体感覚が欠如しているからだ。「身体感覚とは、人がどのように状況を解釈しているのかを示すものである」(p. 154)。こうした身体感覚や状況の解釈を欠いた世界においては、私たちは“未完了の事象”の中に見られる交差過程の意味を、自分自身や自分が生きている状況へと結びつけることができない。ジェンドリンはそのことを「統合のジレンマ」と呼ぶ。

そこでジェンドリンは、“完了した事象”に縛られず、可能な限り日常より身体をリラッ

クスさせ意識を弛緩させつつも、同時に“未完了の事象”におけるよりも身体感覚を維持させておくことができるような微妙な次元の必要性を主張する。そこにフェルトセンスが生まれ、フォーカシングを行うことができるスペースが生じる。そうすることではじめて、私たち自身と私たちが生きる状況を変革するような、“完了以上のもの”が生まれる、とジェンドリンは言う。

以上が「生きている身体と夢についての理論」の骨子である。この論考においては、メダルト・ボス批判の論文ではあまり論じられていなかった、生きている身体についての理論化が試みられ、またそこから夢の隠喩的機能についての考察が加えられている。また「インプライング」をはじめとして、『プロセスモデル』へとつながっていくような新たな概念の提案もなされている。夢と身体という、哲学と臨床をつなぐテーマを探求することで、ジェンドリンの哲学はより独自の輪郭や色合いを鮮明に示すことになっていった、とも言えるだろう。

4. 体験の複雑性、自我と非自我、身体感覚が導くプロセス

——ナルシシズム概念批判と社会的提言——³⁵

ジェンドリンは一般に知られている以上に、社会的問題や社会変革に強い関心をもっている哲学者であり臨床家である。彼の師であったロジャーズは「静かなる革命」というスローガンのもとに、個々人の主体性と精神的自由を最大限に実現しようとする社会変革に取り組んだが (Rogers & Russell, 2002)、ジェンドリンもまた独自の視点から社会的問題にアプローチし、社会変革の可能性を追求してきている。ジェンドリンによる“チェンジズ”の活動や、フォーカシングコミュニティの形成はその具体的な実践的展開であると言えるし、哲学的にも彼はいくつかの注目すべき社会変革に関する提言をおこなってきた。

そこで以下では、その中でもジェンドリンの社会哲学とでも言うべき仕事の代表的な論考である「ナルシシズム概念についての哲学的批判」(1987)を中心に、彼の哲学の社会的臨床的な展開を検討してみたい。

「ナルシシズム概念についての哲学的批判——アウェアネス・ムーブメントの意義——」(1987)は、精神分析的な病理論や治療論において、さらには現代の人間心理や社会状況を解説しようとする種々の文化論や批評の中で、強力かつ魅惑的な鍵概念として使用されることの多い「ナルシシズム (narcissism)」という用語について、ジェンドリンが独自の立場からその前提や意味を批判的に検討しようとした論考である。

ジェンドリンが問題にするのは次のようなことである。今日多くの精神分析家や精神分析的な思想家たちは、現代の人間の心理的傾向が以前にもまして利己的で自己耽溺的になってきていると言う。彼らはそれをナルシシズムと呼び、それは人々の社会的な関係や現実検討を阻害する内的なひきこもりであると見なしている。また社会学的そして政治学的な思想家たちも、現代の人間が社会的・政治的な責任を引き受けず、社会的支配や統制の問題に無関心である傾向をナルシシズムと呼び、人々は社会的な現実から逃避していると言う。現代に生きる私たちははたしてナルシスティックなのだろうか、とジェンドリンは問う。

彼はこのナルシシズム概念批判の論文に「アウェアネス・ムーブメントの意義」という

³⁵ 本章の初出は、末武康弘 (2000) ナルシシズムと身体——ジェンドリンによるナルシシズム概念批判 (3) —— 法政大学文学部紀要 第 45 号、115-144 頁である。

サブタイトルをつけている。アウェアネス・ムーブメントとは、カウンセリングやサイコセラピーの社会的浸透に加えて、1960～70年代から米国を中心に世界的に広がったエンカウンターグループや種々のヒーリングやエンパワーメントの活動、セルフヘルプのネットワークの発展など、新たなタイプの自己探求や人間性回復の運動の総称である。こうした動向については、一部の思想家や臨床家たちからは孤独な現代人のナルシスティックな自己耽溺に過ぎないと批判されることも少なくなかった。³⁶

ジェンドリン自身、現在のアウェアネス・ムーブメントをすべて肯定的に評価しているわけではない。しかし彼は、「もはやそのすべてをたんに是認したり、非難したり、あるいは無視することはできない。…〔中略〕…言えるのは、良かれ悪しかれ大きな社会的変化が起きていることである」(p.252)と言う。その社会的変化とは、かつてなかったほどの自分の内面や感情に触れようとする多くの人々の出現である。こうした現代の人々の傾向をナルシズムであると断定することは、ある意味ではたやすい。たしかに今日の社会的な秩序の弱化や崩壊、その中での現代人の孤独や不安は、深刻な問題をはらんでいるからである。しかし、そこには新たな関係や秩序の可能性もまた存在しているはずである。それをナルシズムと言うのは、自分の内面に触れようとする人々の傾向を、それが発達論的に見て「自我」が成立する以前の原初的で幼児的な段階への退行であるということを暗に意味するものである。ジェンドリンは次のように言う。

“ナルシズム”とは雑多なものを寄せ集めたカテゴリーである。自我以外の何でもがナルシズムであるとされる。精神分析的な理論は人間の多くの価値ある体験を幼児的な退行へと還元してしまう点でつねにおかしい。…〔中略〕…精神分析的な理論にしたがうと、自我を通さないどんな体験も非現実的で非相互作用的なものになってしまう。(p.254-5)

ジェンドリンが問題にするのは、ナルシズムの概念、そして現代の人々の自己探求やアウェアネス・ムーブメントを批判する言説の中には、“個人およびその体験は外部から与えられた秩序や形式によって構成されている”という仮定が潜んでいるのではないかと

³⁶ 例えばフーコー (Foucault, M.) はアウェアネス・ムーブメントについて、「カリフォルニアにおける自己カルト (cult of self) では、人は自分の真の自己を発見するとされており…〔中略〕…あなたに真の自己とは何かを教えてくれるとされる心理学や精神分析に感謝が寄せられている」(p.256)と辛辣に批評している。

いう点である。そして、現代の人々がサイコセラピーやアウェアネス・ムーブメントの中で感じ、取り組んでいる「体験の複雑さ (experiential intricacy)」も、結局こうした外的なものを反映しているに過ぎないと考えられている。しかも精神分析理論に限らず、多くの思想家や批評家たちは、そのような外的なものは歴史や文化、社会、権力といった個人を超えた次元にあるもので、個人には認識されえない「無意識的なプログラミング」あるいは「無意識的統制」であると見なしている。

こうした思想家たち (例えばフーコー) は、外から強いられた統制を除くと、個人はただの混沌であると仮定してきた。そうした統制から自由になるということは、したがって幻想であり欺瞞であると。…… [中略] ……彼らは混沌もしくは自閉的な欲動を除けば、個人とは権力のシステムが強いるもののことであるという仮定を共有している。私はそのことを問題にしたいのである。(p.258)

ジェンドリンが問題にする仮定は、端的に言うと、自我は外的な統制からもたらされるが、その統制を受ける以前の状態がナルシズムである、という考えである。つまりそれは、“自我、さもなくばナルシズム” という二律背反の論理によって構成されている。では、こうした仮定はどのようにして形づくられ、現代の思想や人間観の中に浸透してきたのだろうか。

ジェンドリンは、この“自我、さもなくばナルシズム” という図式を生み出した最大の責任はフロイトのメタ心理学に求められるが、その背景にある“人間およびその体験はもともと混沌としたものであり、秩序は外的な統制によって与えられる”という仮定は、それ以前の思想や哲学の系譜の中で形づくられてきたものである、と言う。

そうした系譜について彼は次のように論じている。その仮定は、1 つには西洋近代科学の発展と深い関係をもっている。自然についての組織化された観察や数学的な法則化の方法が発展するとともに、法則や秩序が見出されない自然は存在しないと考えられるようになった。森羅万象はきわめて秩序だって構成されており、科学はそのことを見出す力であるとされた (それは神が森羅万象を創造したのだという、キリスト教的な世界観と深く合致する考えであった)。そしてその論理を、人間を中心にして再構成したのがカント (Kant, I.) だった。カントは、自然の秩序とは人間の理性が与える秩序にほかならないと考え、この理性的な秩序や形式をもたらすものが“私” という形而上学的な“主体” であるとし

た。カントにとっては、人間の体験もまた、無秩序な感覚の寄せ集めに対して与えられる理性的な秩序から構成されるものであり、そこからはみ出したもの（体験の複雑性）は単なる余剰物であると見なされたのである。しかしカント以降の哲学者たちは、カントの言う“主体”の見直しと、この余剰物の復権に取り組んだ。カント的な観念論的形而上学への批判は、こうした哲学的文脈において生じたのである。そしてその中で、多くの哲学者や思想家たちは、秩序をもたらす源泉は私たち人間の中の“主体”ではなく、私たちが外部から統制している“権力”（あるいは“歴史”、“文化”、“社会”……）であると考えようになった。また、私たちに生じる秩序だっていない体験を、例えばニーチェ (Nietzsche, F. W.) は「ディオニュソス的なもの」と、またフロイトは「無意識」と呼んでその復権に取り組んだが、このような哲学的文脈から生まれたのは結局のところ、秩序は外部から与えられるものであり、そうでないものは混沌（ディオニュソス的なもの、無意識、ナルシズム……）に過ぎない、という人間についての仮定だったのである。

ジェンドリンは、フロイトの精神分析学の全体の中には、人間とその体験がもつきわめて多様なあり方への関心が含まれていた、と言う。フロイトは夢や精神病の中に見られる複雑な身体の機能に着目していた。しかし、彼がその後完成を目指したメタ心理学においては、なぜかそうした関心は捨象され、もっぱら人間の精神機能は「イド (id)」とその一部として形成される「自我 (ego)」によって説明される。そこで用いられる論理は、イドはそれだけでは外界と接触をもちえない自体愛的な欲動の渦巻く世界であり、その一部が自我として形成されてはじめて外界との交流の水路ができる、というものである。つまり人間とはもともと混沌とした存在、つまりナルシズムなのであって、自我という外的統制によって形づくられる装置なくしては外界と関係をもちえないということである。あくまで科学的で合理主義的なものを目指そうとしたフロイトにおいて、その理論の抽象化と整合性を追及する中で、“秩序とは混沌としたものに外部から与えられるものである”という西洋哲学のアプリオリな前提が潜在的に受け継がれてしまった、というのがジェンドリンの見解である。そしてそのフロイトのメタ心理学において定式化された、“自我、さもなくばナルシズム”という仮定が、現在のさまざまな精神分析的な言説や、社会思想、政治思想の中に浸透し、繰り返し再生産されている、とジェンドリンは指摘する。

以上の議論は、ナルシズム概念とそこに潜む仮定についての、いずれかと言えば哲学的側面に関するものである。しかしナルシズムの問題にはそうした側面だけでなく、フロイト以後の精神分析学の展開における臨床的な議論や問題も含まれている。そうした点

については、ジェンドリンはどのように考えているのだろうか。

ジェンドリンは、フロイト以後のナルシズム問題についての最大の功労者と言われるコフト（Kohut, H.）の見解を取り上げて議論している。フロイトのメタ心理学においては、自我を通さないすべての体験（イド、欲動、夢、無意識、精神病、……そしてナルシズム）が一括りのカテゴリーの中に閉じ込められ、これらは現実の外界とのつながりをもたない混沌とした自閉的な「非自我」の現象であると見なされていた。そしてこうした現象が個人の心的世界を支配する非自我の病理は、フロイトの精神分析療法においては治療不可能であると考えられていたのである。それはフロイトの時代の精神分析学が、自我が成立するとされるエディプス期にもっぱら焦点をあてていたこととも関係している。しかし「コフトはエディプス期の問題よりもむしろ前エディプス期的な非自我体験に関係する困難をもつ人々の中にも、治療可能な人たちが存在することを明らかにした。コフトはその人々を“ナルシスティック”な人たちとして分類した」（p.270）とジェンドリンは言う。ではコフトにとってのナルシズム、あるいはナルシスティックな人たちとはどのようなものなのか。ジェンドリンは次のように述べる。

コフトは“ナルシスティック”な人たちの特徴を内的な体験が欠如した状態として記述している。ナルシスティックな人たちとは、自分自身の感覚を得るために他者の反応を絶えず求めなければならないような人たちのことである。…〔中略〕…彼らに対する他者の知覚だけが、彼らが自分の内面を感じることを可能にするとコフトは言う。（p.271）

コフトはある面ではフロイトのメタ心理学の限界を超えており、しかしまた一面では同じ問題や仮定を共有している、とジェンドリン指摘する。コフトの功績は、メタ心理学においては介入不可能と考えられていたエディプス期以前の非自我体験の一部を治療可能なものとしてとらえ、それを意味ある複雑な何ものか——コフトがナルシズムと呼ぶもの——として抽出したことである。しかし、コフトは治療可能な複雑な非自我体験をナルシズムと呼んだが、それは彼によれば内的な体験の欠如を意味するものであった。ナルシズムとは意味ある複雑な体験なのか、それとも無意味な内的欠如なのか。その点はコフトにおいても曖昧なままである。そこには、内的な混沌や無秩序をナルシズムと呼ぶフロイトのメタ心理学的な慣習の反復が潜んでいる。他者やセラピストによる応答

によって相互作用することが可能であり、推進することが可能であるようなクライアントの内的状態を“ナルシズム”と呼ぶことは基本的に誤りなのではないか。コフトは非自我体験がすべて精神病であるとは限らないことを示したが、ジェンドリンは「精神病でないすべての非自我体験がナルシズムである必要もまったくない」（p.271）と述べる。

そしてフロイト以降の精神分析学の展開のあらゆるところに、こうしたメタ心理学に潜むこうした仮定がいまだに浸透している、とジェンドリンは見ている。自我心理学、クライ学派、対象関係論、そしてコフトの自己心理学などは、それぞれの新しい用語を使いながら精神分析学の理論と臨床対象を前エディプス期的なものへと拡大させてきた。しかし、こうした精神分析学の展開に共通しているのは、前エディプス期という理論的な箱を設けてその中に人間の体験の複雑性をすべて投げ入れようとしてきたことである、とジェンドリンは指摘する。つまり前エディプス期に焦点をあてることによっても、結局は非自我体験を何かの中に閉じ込めようとすることや、自我あるいは非自我（ナルシズム）という二律背反的な論理そのものにかわりはない。むしろ各理論によるさまざまな光のあて方によって、ナルシズム概念にはいつその多義性といくつもの矛盾や混乱をはらんだ意味内容が付与されることになったのである。³⁷ こうした多義的でモザイク的なナルシズム概念によっては、結局非自我的な体験のあらゆるものがナルシズムであると言われてしまいかねない。

私たちはこれまでナルシズムや非自我体験として考えられてきた人間の体験の複雑性を、どのようにとらえればよいのだろうか。“自我、さもなくばナルシズム”と言う二律背反的な論理はどのようにすれば乗り越えられるのだろうか。

ジェンドリンは、自我（と見なされているもの）と体験の複雑性（非自我体験と見なされているもの）との関係の様式を次のように分類している。

- a) 非自我体験が生起しないように身体生活を自我の形式の中だけで推進する：自我がこのように機能しているかぎり生起するのは自我のプロセスだけであり、非自我体験は生じない。

³⁷ ジェンドリンは、現在までにナルシズム概念には少なくとも次のような多様な意味が混在してきたと言う。「人類の無意識の底に潜む歴史性」、「誕生から1歳までの言語を獲得する以前の乳児」、「1歳から4歳までの前エディプス期の幼児」、「一次過程すなわち精神病」、「隠喩」、「フロイトが“日常生活の病理”と呼ぶものの複雑性」そして「病理に限らないすべての体験の複雑性」（p.271）等である。

- b) 排除、締め出し：自我は非自我体験を排除し、締め出すゲートの機能を果たす。したがって非自我体験は身体生活の中では生起しているが、意識の中では覚知されない。
- c) 統制：非自我体験は意識的に統制される。非自我体験が自我の社会的な形式と葛藤を起こすときには、それは脅威として覚知される。
- d) 選択：自我と非自我的な複雑な体験のいずれにも関心が払われる。場合によっていずれの方が重要であるか選択される。

そして、現代の私たちの多くは、明らかに a) や b) のような単純な様式ではなく、c) を乗り越えつつ d) の体験を実際に生きている、とジェンドリンは言う。

今日私たちは、古い明確な役割や規準にではなく、体験の複雑性に導かれなければならない。こうした古い形式は今も存在しているが、それらはもっぱら道徳や理想的な規範といった実現不可能なものになっている。それらはあたかも唯一の“社会的現実”であるかのように期待されたりもする。しかし身体生活はもはやそれらによっては推進されない。私たちが感じている、より複雑で不確実な側面をもつ状況は、私たちにとって今やもう1つの“社会的現実”なのである。(p.275)

さらにジェンドリンは、私たちがこうした体験の複雑性により開かれ、状況の複雑性と相互作用するようさらなる様式が存在することを指し示そうとする。それは、

- e) 複雑性の中へと進行していく、ある種の数多くのステップをもつプロセス：このプロセスの中では、人は解決できない複雑性の中にとどまってははいない。ここでは新たな秩序が新たな言葉や行為を伴いながらたえず生起する。その秩序は1つの形式ではない。きわめて多くの暗在的な複雑性が新たな可能性の中で顕在化していく。

というものである。

ここに示されるようなプロセスの中では、もはや自我と非自我という精神分析的な2分法は存在しない。そこに生起するのは現在までに覚知されていることと、まだ覚知されていないこととの新たな関係であり、体験の複雑性の中に開かれた新たな可能性である、

とジェンドリンは言う。

では、こうした方向性によってナルシズム概念の問題はどのように克服できるのだろうか。以下、この論文の後半におけるジェンドリンの提言をまとめてみる。

第1にジェンドリンが重視するのは「身体感覚に導かれるプロセス」に開かれることである。彼は、身体を直接に感じることによる実感の中に、ナルシズム概念やそれに関連した言説に潜む問題を乗り越える鍵があると言う。そこには、精神分析学が言う原初的なものも確かに含まれているが、身体を通して感じられるものがすべて原初的で退行的な性質をもつのではない。むしろ、身体の実感（フェルトセンス）には、それまで明らかでなかった意味や可能性が暗在的に、そして豊かに示されている。この、身体を感じることを通して生じる複雑な体験は、ある種のステップをもったプロセスとして動き、変化する。

「人はこうした方向性を意図的に作り出すことはできない。それはやってくるものであり、生じるものである。しかし、すべての人が注意深く行えることがある。それは、語りうることを超えたものとしての身体の実感に注意をフォーカスすることである」(p.283) とジェンドリンは言う。

第2には、自己や言語についての私たちの認識を修正することが必要であるとジェンドリンは主張する。私たちはこれまで、人間の多様なあり方、そしてその複雑な体験のプロセスをあまりに単純な図式やパターンの中に閉じ込めてきた。それは、統一性という形式以外には何も存在しないとしばしば考えられ、自己もまたそのようなものだととらえられてきたからである。しかし、自己とは何らかの定義可能な実体ではなく、自分自身の反応および他者や外界との相互作用を通してたえず新しく秩序を形づくっているプロセスそのものなのである。言語もまた、フェルトセンスに導かれるプロセスの中ではこれまで考えられてきた以上の機能を示す、とジェンドリンは言う。そのプロセスの中では、ある言葉はその言葉自体を、そしてそれが指し示す意味を変化させる。言語とその他のシンボル化——行為、イメージ、芸術表現など——は異なるカテゴリーにおける別個の形式や実体なのではなく、身体感覚を基盤として相互に関連し変化するシンボルである、と彼は考えている。「身体の秩序は、つねに推進されることが可能なものであり、また言語もそうである。言語や文化は私たちが動物であることを放棄させるものではない。複雑な身体は言語を語り、また私たちの歴史を——現存する諸形式よりもはるかに複雑に——語りうるのである。」(p. 293) とジェンドリンは言う。

第3に、では私たちは精神分析学や社会思想、政治思想などが仮定している外部からの

無意識的統制の問題を乗り越えることは、どのようにすれば可能なのだろうか。サイコセラピーの場面においても、また人々の社会的活動や政治とのかかわりにおいても、そうした統制に縛られ、そこから逃れられないようなケースは多々あるように見える。しかし、身体の複雑なプロセスはそうした無意識的統制を乗り越える可能性をもっている、とジェンドリンは主張する。それはどのように可能なのか。ジェンドリンによる提言は、およそ次のように要約できる。

① 私たちを統制していると考えられるもの、例えば政治的・経済的な概念等を、私たち一人ひとりが自分の身体の複雑性と相互作用できるように入手し修正していくこと。

② 一人ひとりが自分の置かれている社会的状況についてフォーカシングを行うだけでなく、フォーカスしたものを他の人々とコミュニケーションすること。

③ 例えば女性解放運動や黒人の公民権運動に示されてきたように、私たちの体験は政治的・社会的な次元と関連をもっていることを知ること。

④ 私たちの体験の複雑性と政治や社会についての認識は結合できるものであり、そうすることで政治・社会的な概念や制度はそれまでとは異なる意味を現し、その変化も可能になるということを認識すること。

このような条件が満たされるならば、私たちは自分たちの具体的な身体的実感を通して、社会的な問題と相互作用し、システムや形式を変化させていくことが可能になる、とジェンドリンは言う。彼によれば、これまで「統制」という概念はあまりに一般的なものとして考えられてきた。政治や経済や教育のシステムが私たちを統制していると考え、それらは各個人にとっては無意識的で支配的なもののように見えてしまう。しかしそうしたとらえ方においては、各個人が体験し感じているものの意味や複雑性がまったく捨象されてしまっている。ジェンドリンは、身体が感じ体験しているものの中には、状況やシステムを変化させ推進させる可能性がつねに存在している、と言う。彼は、女性解放運動や黒人の公民権運動などの社会変革について、その当事者たちの身体感覚や体験の複雑性が根底にあり、それへのフォーカシングに基づいた表現や行為や協同が社会的なシステムや制度を変化させ推進させてきたのだ、という認識を示している。今日のアウェアネス・ムーブメントもまた、現代の人々が感じとっている体験の複雑性を原動力として生まれてきたものであり、その中で多くの人々がかつての人々が体験しなかったような複雑な身体と状況との相互作用のプロセスを体験し、感じ、シンボル化しようとしているのである。

以上がジェンドリンによる「ナルシズム概念についての哲学的批判」における主要な

議論であり、また彼の代表的な社会哲学的な提言でもある。筆者は、ジェンドリンの提言は、たんなるアウェアネス・ムーブメントの擁護や心理主義的な社会変革の提案を超えた、私たちの体験の複雑性の意味と可能性を社会の制度やシステムの変革に活用しようとする、きわめてラディカルでしかもポジティブな社会臨床的な哲学である、と考えている。そうしたジェンドリンの社会哲学もしくは社会臨床哲学的な側面の仕事についても、今後いっそう理解や議論が深まっていくことが求められる。

5. インプライング、生起、進化——プロセスモデルの臨床的含意について——

ここまでの考察に基づきつつ、ジェンドリン哲学の集大成とも言えるプロセスモデルを取り上げ、その臨床的な含意を探求してみたい。

『プロセスモデル』(Gendlin, 1997a) はジェンドリンの多岐にわたる哲学的な仕事の1つの頂点といえる作品である。それは生命体と人間の現象、および私たちが生きている世界を「プロセス」および「相互作用」というジェンドリン独自の視座から解き明かそうとする壮大な哲学的作品であり、また、身体、時空、進化といった哲学と科学のいずれにも深くかかわる根源的な問題に対して、これまでになかった新しい見解を示そうとするきわめて意欲的な仕事である。『プロセスモデル』は8つの章から構成されている³⁸が、このうちⅠ～Ⅴは生命体と世界のあり様についての根本的な解明であり、基礎理論と呼べるものである。そしてⅥ、Ⅶ、Ⅷは、動物から人間への、そして人間の進化のプロセスがきわめて独自の思索と概念によって詳細に論じられている。

プロセスモデルの内容についての詳しい解説は次の第Ⅱ部で行うが、その臨床的な含意について考察を加えるために必要であると思われる点に絞って、プロセスモデルの特質を素描しておきたい。プロセスモデルの特質はどのようなものか？ すなわち、これまでの種々の哲学的小説および科学的なモデルと異なるその独自性はこういった点にあるのだろうか。

プロセスモデルの第1の特質は、それが生命体や世界についての静的で固定的なモデル(ジェンドリンはそれを「ユニットモデル」と呼ぶ)の対極にある、という点である。私たちが通常、世界は——そして生命体や空間も——原子や分子といった分割可能なユニットから構成されており、また時間は過去から未来へと進んでいく直線的なものである、という認識をもっている。しかしプロセスモデルはそのように考えない。すべての現象をプ

³⁸ その全体は、次のような構成から成っている。

- I 身体—環境 (BODY-ENVIRONMENT : B-EN)
- II 機能的循環 (FUNCTIONAL CYCLE : FUCY)
- III 対象 (AN OBJECT)
- IV 身体と時間 (THE BODY AND TIME)
- V 進化、新しさ、および安定性 (EVOLUTION, NOVELTY, AND STABILITY)
- VI 行動 (BEHAVIOR)
- VII 文化、シンボルおよび言語 (CULTURE, SYMBOL AND LANGUAGE)
- VIII 暗在するものによる思考 (THINKING WITH THE IMPLICIT)

プロセスとして、そして「インタラクションファースト（まず相互作用ありき）（interaction first）」という観点からとらえようとするのである。プロセスモデルでは、空間や世界をユニットからなる名詞的（主語的）なものとしてではなく、動詞的（述語的）なものとして把握しようとする。そして、時間は直線的で物理的な連続ではなく、生命体が生きることによって創り出される——ジェンドリンは「インプライングの中へ生起すること（occurring into implying）」によって時間は生み出される、と言う——と考えられるのである。

その第2の特質は、生命体およびその身体について、それは機械ではないという観点から新たな認識を示していることである。人間およびあらゆる生命体の身体は、分解したり組み立て直したりすることが可能な機械のようなものでは決してなく、環境との相互作用の中でつねに新しい秩序を生成しているプロセスそのものである、ととらえられている。ジェンドリンは、「身体は機械ではない。……身体は継続する新しいプロセスである。……身体-環境のある側面が停止し、しかも身体が死んでいないときには、身体はある直接に異なる仕方で存続する」（pp. 18-19）と言う。そしてプロセスモデルでは、身体の新たな機能の生成や、より複雑なプロセスへの推進を「進化」としてとらえ、進化はあらゆる個体の中で生じている——適者生存やランダムな変異などによってではなく——という、進化についてのきわめて独自の考えを提示している。

そしてプロセスモデルの第3の特質は、それが、現代のポストモダニズム的な思想の蔓延や、科学技術や市場経済の制御不可能にも見える拡大によってもたらされている、私たちの閉塞的な状況を乗り越えようとしている、という点である。プロセスモデルのVI～VIIIは、動物および人間が新たな空間を獲得し形成していくプロセスが進化論的に考究されているのであるが、「行動空間」（VI）から「内的空間」（VII）を獲得・形成した人間が、これから獲得・形成していくであろう——その一部は端緒が切り拓かれつつあるとジェンドリンは見ているが——新たな空間（「VIII的な空間」、あるいは「IOFI 空間」）の地平を拓き、見据えることこそがプロセスモデルの究極的な課題であると言える。「IOFI（instance of itself）空間」とは、私たちの存在や身体から切り離されたところにある何かによってではなく、私たちの全体的な身体感覚から生まれる直接照合体（Direct Referent: DR）の形成によって開かれる新たな空間のことである。すなわち、私たちはどのような方向へと向かって進化しているのか、また進化していくべきなのか、という根源的な問題をプロセスモデルは解き明かそうとしているのである。

では、このような特質をもつプロセスモデルが、サイコセラピーをはじめとした私たちの実践や臨床にもたらす意味はどういったものであろうか。つまり、プロセスモデルの臨床的な含意はどのようなものかについて考えてみたい。以下では、そのプロセスモデルの臨床的含意について、いくつかの論点を取り上げてみよう。

まず、プロセスモデルの第1の臨床的含意は、人間および生命体の根源的な体験世界をどのように認識するか、という点に求められる。私たちは、いわゆる困難ケースとのサイコセラピーの中で、対象関係や自己イメージのスプリッティング、投影性同一視、全能的コントロールといった現象に出会うことが少なくない。そして、こうしたいわゆる原初的で退行的な現象に直面するとき、私たちはしばしば、このような妄想的・分裂的態勢 (paranoid-schizoid position) (Klein, 1952) が人間の根源的な体験世界であって、誰もが乳幼児期には——そして大人になっても心の最深部では——そうした世界の中に生きており、そして精神的な苦悩やトラウマによって人は容易にそうした世界へ退行してしまう、と見なし (錯覚) がちである。

フロイト (1923) は、「エス (イド)」は知られざる無意識的な何かであり、外界との通路をもたない自閉的で自体愛的なものであると言う。そしてそれは、生の本能としての「エロス」と死の本能としての「タナトス」をもっていると考えた。またメラニー・クライン (Klein, M.) (1952) は、「……良い乳房と悪い乳房のきわだった対照は、自我中での分裂過程 (splitting processes) と対象関係についての分裂過程に加えて、おもに自我の統合が欠如しているために生じ」 (p.62、邦訳 79 頁)、また「投影性同一視 (projective identification) の基礎となる諸過程は、初期の乳房との関係の中ですでに機能しているように見える」 (p.72、邦訳 88 頁) と述べる。はたして私たちの最も根源的な体験世界は、このような妄想的・分裂的態勢によって形づくられた、自他未分化で精神病理的な世界なのだろうか。

ジェンドリンのプロセスモデルは、こうしたフロイト-クライン的な見解とはまったく異なる観点を提供する。プロセスモデルでは、私たちの身体の「インプライング (implying)」——身体感覚、フェルトセンス——には、人間が人間へと、そして人間として進化してきたすべてのプロセスが複雑に織り込まれていると考える (それをジェンドリンは、「メッシュ化 (meshed)」、「ピラミッド化 (pyramiding)」などと呼ぶ)。

ジェンドリンは次のように言う。「……身体は、私の過去の諸体験をもっており (であり)、そして民族や人類という種の諸体験をもっている (である)」 (p.64)。プロセスモデルによ

れば、私たちの身体——そしてすべての生命体の身体——は基本的に、きわめて複雑にまた精緻に秩序づけられているものであり、またさらなる新しい秩序を生み出すプロセスそのものである、と言える。私たちの身体のインプライングは、もちろん誕生時から精密に備わっており複雑に機能しているのであって、環境との相互作用や交差を通して自らをたえず推進している。それはフロイト-クライン的な外界との相互作用の通路をもたない自閉的な何ものかではないし、スプリッティングや投影性同一視といった原初的な現象に彩られた妄想的・分裂的な世界でもない。このような観点からすると、私たちがサイコセラピーの中で直面する原初的な心的機制は、人間の根源的な体験世界への退行なのではなくて、複雑かつ精密に秩序づけられた身体-精神プロセスの部分的な——しかし、病的で重篤な——機能不全やアンバランスであると見ることができる。したがって、そうした心的機制は外界との交流の通路を閉ざすような原初的世界への退行なのではなく、外界や環境とのある種の相互作用——もちろん、しばしば困難な^{エッジ}辺縁におけるものではあるが——の様式そのものであり、その意味で私たちとの接触や応答に開かれ、相互作用することが可能な体験過程であるにとらえることができるのである。

プロセスモデルの臨床的意義の第2点は、私たちの生命や身体をたえず進行しつつあるプロセスとしてとらえる、その哲学的観点に求めることができる。ジェンドリンは、「自然は、繰り返し反復する同じような、しかしまったく同じではない諸ビットの多くの例を示してくれる。心拍、まばたき、神経伝達……。私はそれを“リーフィング (leafing)”³⁹ と呼ぶ」(p.76) と言い、また「例えば、見ることは……固定した受容性 (steady receptivity) のようであるが、実際には連続する律動的なスキャニング (continual rhythmic scanning) である。多くのコンスタントな身体の状態は、たえず繰り返し生起している1つかそれ以上のプロセスによって作られ、維持されているのである」(p.87) と述べる。このような見方からすれば、サイコセラピーの中で問題となる多くの現象やクライアントの内的世界のあり様も、その本質は“たえず繰り返し生起しているプロセス”である、にとらえることができるだろう。

私たちは、クライアントがもっている対象関係や自己についての「表象 (representation)」や「イメージ (image)」をサイコセラピーにおける重要な要因とし

³⁹ “リーフィング (leafing)” とは、次々と芽吹く葉々のようなものというアナロジーから概念化された、生命現象の連続——ほとんど同じであるが、まったく同じではないものの連続——を指し示す言葉である。

てしばしば取り上げ、扱おうとする。例えばスターン (Stern, 1995) は、「表象」を空想、希望、恐れ、家族の伝統や神話、意味ある個人的経験、現在のプレッシャー、およびその他多くの要因から成る重要なものと見なしているが、同様に多くの精神分析的な理論において、自己および対象関係の表象はクライアントの内的な体験世界を把握する際の鍵となる要因であると考えられている。また、認知行動療法においては、ベック (Beck, 1976) やラザラス (Lazarus, 1989) らは、私たちの認知を構成する重要な要素の 1 つに「イメージ」をあげており、特にその自己破滅的で抑鬱的な機能の問題について臨床的に注目している。

しかしこれまで私たちは、表象やイメージを、クライアントの——そしてすべての人間の——過去の体験の中で形づくられた、静的で固定的な意識内容として認識してきたのではないだろうか。つまり、過去のどこかの時点で形成された表象やイメージが、その人の精神内界の中に動かし難いものとして固定化されてしまい、それがその人の認知や行動や対人関係に深い影響を及ぼしてしまうのだ、というように。だが、プロセスモデルの観点からすると、表象やイメージの本質はけっして固定的で不変的なものではなく、たえず生起し進行しているプロセスである、と考えることができる。またそれらは、基本的には、身体の新たな体験や環境との相互作用につねに開かれ、推進され変化していく可能性に開かれていると言える。

では、なぜスプリッティングした対象関係の表象や、自己破滅的なイメージは、固定した不変のものであり、クライアントの認知や行動を決定しているように見えるのだろうか。そこでは、同じ表象やイメージの内容や体験の様式だけがつねに繰り返される形で生起している——フロイトが「反復強迫」と呼んだもののように——と考えられるのである。しかし、そうした表象やイメージも本質的には変化の可能性をもった進行しているプロセスのはずである。そのように認識することができれば、私たちは変化や修正が不可能なように見えるクライアントの表象やイメージに対して、それと相互作用しそれを推進するようなかかわり方を見出していくことが可能になるだろう。⁴⁰

⁴⁰ 例えばワーナー (Warner, 2000) は、ジェンドリンの理論を基盤としながら、困難なケースの 1 つのあり様を「脆弱なプロセス (fragile process)」と呼ぶ。そしてワーナーは「脆弱なプロセスをもつクライアントが抱える主要な問題は、グッドとバッドのイメージを 1 つのゲシュタルトの中に統合できない問題というよりも、自分自身の体験を保持することができないことにある」(p.158)と言い、こうしたプロセスをもつクライアントに対して有効に機能しうる共感的な傾聴——その体験に触れ、それを保持することを可能にするような——のあり方を提案している。

プロセスモデルの臨床的意義として第3にあげられるのは、人間の精神病理に関する新たな理論が生み出される可能性である。もちろん、プロセスモデルは精神病理に関して書かれたものではないし、そうした問題についての言及はほとんどない。しかしそれにもかかわらず、プロセスモデル哲学は、人間の精神病理についてこれまでになかったような新たな知見を提示できる可能性をもっていると考えられるのである。

ひとくちに精神病理学と言っても、そこにはきわめて多様な理論や見解が混在し、並存しており、例えばパーソナリティ障害の人格構造やその成因についての精神分析的・力動的な説明と、アスペルガー症候群など発達障害の器質的な原因やメカニズムに関する認知科学的な説明とでは、用いられる概念も方法論もまったく異なっている。おそらく精神病理学——およびそれに基づくサイコセラピーの理論——に今後必要なものは、互いに関係をもつことができないでいる説明概念の間に、交差や相互作用をもたらすことができるような、そして新たな説明概念を作り出すことを可能にするような新しいパラダイムやメタ理論の創出であろう。

ではプロセスモデルからはどのような展望が開かれるのだろうか。その手がかりを探してみよう。ジェンドリンは、「新しい事象は、私たちが“停止したプロセス”と呼ぶものそれ自体の中で発達する」(p.75)と云う。例えば「(足の下半分を切り取られた)カブトムシは、それほど時間がかからずに、以前の歩き方から次第に新しい歩き方を発達させる。新しい歩き方は、私たちが生起の法則⁴¹と呼ぶようなものとして生起する。事象の新たなつながりがすぐに形成される。私はこの種の新しい事象を“**介在する事象 (intervening events)**”と呼ぶ。通常のプロセスが停止しているとき、こうした事象が〔前に生じていたビットと次に生じるビットとの間に〕介在する。」(p.79)

すなわち、進行しつつあるプロセスのある側面が停止する——休止すると言ったほうがよいかもしれない——ことによって、新たな変化をもたらす「介在する事象」が生じる、ということである。私たちの身体機能の発達や、心理社会的な成長もそのようにして生起している、とプロセスモデルでは考える。そしてそうであるなら、対象関係のスプリッティングや全能的コントロール、精神病的な妄想や幻覚、広汎性発達障害に見られる常同行

⁴¹ 「生起の法則」についてジェンドリンは次のように言う。「秩序はインプライングと生起から生じる。……〔中略〕……“可能である”という言葉は、より複雑に使用される必要がある。インプライングと生起の中で可能なものは、あらかじめ決定されているのではない。……〔中略〕……それが生起したから、それは可能だったのである。**所与の結節点で生起しうることが、生起したのだ。私はこれを“生起の法則”と呼ぶ。(What could occur at the given juncture, did I call this the “law of occurrence”.)**」(p.52)

動などは、それらが反復し連続する場合、そこには「介在する事象」が生起できないような何らかの「停止の不全」があると考えられないだろうか。つまり、精神病理学的な体験や行動は、動かない固定した何ものかではなくて、たえず繰り返される「停止の不全」あるいは、新しい新鮮な事象が間に介在することができない自動的で反復的な「止まらないプロセス (running process)」⁴²であるにとらえることができるだろう (このような観点からすると、ジェンドリン (1964) による「構造拘束的 (structure-bound)」な体験という概念にも多少の再定式化が必要になるかもしれない。というのも構造拘束的な体験はしばしば、固定した動かない体験、すなわち「凍結した全体 (frozen whole)」として考えられてきたからである。プロセスモデルの観点からすると、構造拘束的体験とは介在する事象が生起できないような空転する「止まらないプロセス」であると言えるだろう。⁴³)

このようにプロセスモデルは、人間の心身の機能についてそれをプロセスという視点からとらえようとする。したがって、プロセスモデルでは人間の精神病理について、養育環境や親子関係に基づく内的対象関係からのみ説明するのでもなく、また脳内の伝達物質の異常や認知機能の障害といった精神生理学的な説明だけでも十分ではない、という立場を

⁴² 「止まらないプロセス (running process)」という言葉は、筆者らが 2008 年春にニューヨークで開かれたワークショップに参加し、その翌日にジェンドリンの自宅でディスカッションを行う機会に恵まれ、その後ジェンドリンから頂いた私信の中で彼自身が用いたものである (本論文 第 I 部、6 (第 I 部の補遺) を参照)。

「…誰かがケアしてくれている、誰かがそこにいる、リアルな誰かがいる、自分がこの止まらないプロセスの中にはめ込まれていることを理解してくれている誰かがいる、自分がいまも存在していることを知っている誰かがいる、この止まらないことが自分のすべてではないことを知っていて、自分の中には多くの多くの意味があり、暗在的に推進されている、ということを知っている誰かがいてくれる。…」 (2008 年 4 月 7 日、ジェンドリンからの私信より)

⁴³ “停止” と “構造拘束 (structure bound)” の概念 (Gendlin, 1964) との異同について私の質問に、ジェンドリンは私信で次のように述べている。

「…あなたは私に、プロセスモデルにおける “停止 (stoppage)” の概念が “構造拘束的 (structure-bound)” の概念とどのような関係にあるのか質問しましたね。……プロセスモデルでは、ある停止とはプロセスがないことを意味しているのではなく、プロセスのあるコンスタントなインプライング (インプライング) なのです。そしてそれはまだ形づくられていませんが、いずれそのインプライングは推進されるものです。そうです。構造拘束とはある種の停止です。……しかし “構造拘束” は病理について何かを語っており、一方 “停止” はそうではありません。通常の停止やリーフィングの中では、どんな反復も、新鮮に形づくられた細部をもった少し違ったものです。構造拘束的な反復は、新鮮な細部をもたない同じようなものに見えますし、“少し違った” 反復ではないように見えます。私はいま、次のように論じたいのです。つまり、どんな反復も少し違ったものですが、われわれが構造拘束的であるときには、少し違ったものから動くことができません。その代わりに、そこではわれわれは同じものから、また同じものから、また同じものから…動いているのです。なので、そこには構造拘束的な反復 (新鮮な細部をもたない) を停止させる相互作用が求められるのでしょう。新鮮な細部をもたないで進行するどんな瞬間も、すでに 1 つの新鮮な瞬間です。たとえ私たちがそれをたんなる停止であり、進行しないものであると考えたとしてもです。…」 (同上)

とる。こうしたプロセスモデルの観点からは、人間の精神病理——およびそれ以外のさまざまな心身の機能——を説明する新たな概念や方法論が生まれる可能性が開かれていると考えられるのである。

最後にプロセスモデルの第4の臨床的意義として、それがサイコセラピー実践にもたらず示唆ないしは含意のいくつかを抽出しておきたい。

まずは、プロセスモデルは私たちの臨床実践の中に「インプライング (implying)」という着眼点と手がかりを与えてくれる、という点である。私たちは、スプリッティングや投影性同一視、あるいは妄想や幻覚、常同的で儀式的な行動といった、了解したり接触もったりすることが困難な^{エッジ}辺縁——しばしばそこが行き止まりであると感じさせられるような——にも、応答され推進されることを待っているインプライングがつねに存在している、ということのプロセスモデルは教えてくれる。そこから導かれるのは、このようなインプライングを信頼し、それに応答し、触れ、それが推進されるようにかかわっていくことの大切さである。

次に、プロセスモデルからは、「治療的な停止 (therapeutic stoppage)」と呼べるような働きかけの重要性が示唆されている、という点である。これはクライアントの問題となっている、場合によっては精神病理的なプロセス——例えば“止まらないプロセス”——のある側面を停止させ、「介在する事象」や「リーフィング」が生じるように働きかけるといふことの臨床的な価値に焦点をあてるものである。種々のサイコセラピーの理論と方法は、意識的にしろ無意識的にしろ、こうした治療的な停止を実践の中で活用してきている。ロジャーズが面接中に生じる沈黙を大切にしたことや、あるいは内省や瞑想といった手法がさまざまなサイコセラピーの中に組み込まれていることなどが、そのことを例証していると言えよう。“治療的な停止”が生じないサイコセラピーにおいては、クライアントの変化や成長も生起しない、と言うといい過ぎになるだろうか。しかし、成功したサイコセラピーには必ずと言っていいほど、クライアントの反復していた思考や感情のプロセスの一部が停止し、新しい何かがそこに生じるという瞬間があるはずである。それを“治療的な停止”と呼ぶことができるだろうし、サイコセラピーの中でより活用されるべきものだろう。⁴⁴

⁴⁴ この問題に関して、ジェンドリンから次のようなコメントをもらった。

「あなたは、ある人が病理的なプロセスの中にいるときに、あなたの腕と指を上げて“ストップ [ちょっと待ってください]”と言うことがあると言いましたね。それはもちろん、あなたという人間の全体を、このことと次に続くことの間にはさしはさもうとしてのことでしょう。あな

さらにプロセスモデルは、私たちの臨床実践がクライアントを——そしてセラピスト自身をも——いったいどのような方向に推進させていこうとしているのかについて、ある明確な解答を提示している。プロセスモデルの主要なテーマの1つは「私たちが進む方向はどのようなものか」であり、その第Ⅷ章においてこのテーマが深く掘り下げられている。サイコセラピーは病理的な症状の消失や精神的な病の治癒だけを目指すものではないし、またたんなる社会適応のための手段でもない。それはクライアントの生き方や価値観、人生の意味などに深くかかわらざるを得ないものである。とすれば私たちは、私たちが向かおうとしている方向がどのようなものであるのかについて、常に反省的に考える態度をもっていなければならないだろう。プロセスモデルは、私たちの直接照合体 (Direct Referent: DR) ——身体感覚あるいはフェルトセンス——へのフォーカシングによって切り拓かれる新たなスペースを「Ⅷ的空間」あるいは「IOFI 空間」と呼んでいる。この「Ⅷ的空間」を目指し、そこに生きること、これがプロセスモデルが私たちの臨床実践に示唆している重要な含意である。

*

以上、ジェンドリンの哲学がサイコセラピーをはじめとする私たちの臨床実践にもたらす意義について考えてきた。しかし、ここで扱うことができたのは、ジェンドリンの哲学的な仕事のまだ一部に過ぎない。彼の哲学やその臨床的意義については、まだ広大な探求の可能性が残っており、さまざまな角度からのアプローチが可能であると考えられる。

たは、これはある種の“停止 (stoppage)”であり、プロセスモデルで私が書いたことと同様に、このような停止には新しい違った何かが訪れる可能性がある、と書いていましたね。……私はそのことがプロセスモデルで表現した停止の特質を併せもっていることに同意します。そして少し補足させてほしいのですが、このことが有効に働きうるのは、“ストップ”と言うことで、そのときあなたが、あなたにかかわってもらっていると相手を感じられるように働きかけているからなのです。その人は、あなたがイライラしていたり、非難しようとしたり、あるいは怒っているからではなくて、自分が直面し、もがき苦しみ、乗り越えなければならないことに手を差し伸べようとして、あなたがそのように言っている、ということを知っているのです。こうした働きかけは、あなたが病理的なプロセスをストップさせようと試みているということを知り、感じているからこそ有効に働きうるのです。あなたは決して、その人をストップさせようとしているわけではありません。」(同上)

6. (第 I 部の補遺) ジェンドリンからの手紙とそこから得られた応答的秩序⁴⁵

(1) はじめに

以下は、2008 年 3 月にニューヨークで開催されたジェンドリンのワークショップへの参加体験と、その翌日にジェンドリンの自宅に招かれた際のディスカッション、そしてその一週間後に彼から送られてきた手紙の内容に関する、筆者の連想的な考察および筆者の中に形成された応答的秩序の描写である。

*

2008 年の年明けに、「この春にニューヨークでジェンドリンのワークショップが開かれる」という情報を知った。カール・ロジャーズが創始したクライアント中心療法 (client-centered therapy) を体験的セラピー (experiential therapy) そしてフォーカシング指向セラピー (focusing-oriented therapy) (Gendlin, 1996) へと発展させた貢献者として、また心理援助スキルとしてのフォーカシング (Gendlin, 1978/1981) の開発者・指導者として世界的に著名なジェンドリンであるが、高齢であることや最近腸閉塞の手術を受けたとの情報もあり、今後こういう機会はそう何回もないかもしれないという気持ちもあって、今回のワークショップには何としても参加したいと思った。

2008 年 3 月 29 日にマンハッタン中心部のブラッドセンター (Blood Center) で開催されたワークショップ、“Some Philosophical Concepts That Can Illuminate The Role Of The Implicit In Psychotherapy (暗在的なものがサイコセラピーにおいて果たす役割を照射しうるいくつかの哲学的概念)” は印象的なもので、ジェンドリンが彼のプロセスモデルをベースにしてサイコセラピーの問題を語ってくれたことや、彼自身がセラピー面接のデモンストレーションを実演してくれたことなど、実り豊かな 1 日だった。(なおこのワークショップは、企画者のナダ・ルー (Nada Lou) によって DVD が製作されている。
http://www.nadalou.com/video_philosophy.htm)

⁴⁵ この章は、末武康弘 (2009c) ジェンドリンからの手紙とそこから得られた応答的秩序 現代福祉研究 第 9 号 99-119 頁 を加筆修正したものである。

そして、それにもまして今回のニューヨーク滞在で最も充実した、しかも感動的だったひと時は、ワークショップの翌日（3月30日）、ジェンドリンとメアリー・ヘンドリックス（Mary Hendricks）夫妻にニューヨーク郊外のご自宅へ招いていただいて、そこで哲学や心理臨床に関する質問とディスカッションを行うことができたことだった。

メアリーが教えてくれたのだが、ジェンドリンが筆者たちを招いてくれたのは、筆者たちが彼の哲学的名著『プロセスモデル（*A Process Model*）』（Gendlin, 1997a）に関心をもって、東京で研究会を開いていることを知っていたから、ということだった。

筆者の中には『プロセスモデル』の内容を中心に、ジェンドリンに尋ねてみたいことや話してみたいことがたくさんあった。しかし、時間の制約と（訪問は2時間という約束だった）、今回は通訳者を同行できなかったので言葉の制約もあって、伝えたいことや聞きたかったことの一部しか言語化できなかった。

それでも、直接に話を伺うことができた成果は大きく、特に『プロセスモデル』のキーワードの一つである“leafing”の意味が確認できたことや、ジェンドリンの進化についての考えがわかったことなど、これまで筆者の中で今ひとつ曖昧だったいくつかの点を明確にすることができた。

前者の“leafing”（リーフィング。定訳はまだないが、日本語に置き換えるとしたら「葉状化」ないしは「葉態化」などと言えようか）とは、生命プロセスの中で刻々と生起している、ほとんど同じであるが、しかしまったく同じではない現象の連続（例えば、心拍や呼吸、まばたきといった身体的なものから、感情やイメージ、表象などの心理的・認知的なものを含む）を指し示すジェンドリンの述語だが、2006年10月にアン・ワイザー・コーネル（Ann Weiser Cornell）が来日して開かれたワークショップで、彼女が“leafing”を「木々の葉が風にそよぐ」イメージで語っていたのに対して、筆者は「次々と芽吹く葉々」のイメージとしてとらえていた違いを、ジェンドリンに確認してみたかったのである。ジェンドリンは明確に、“leafing”は「芽吹き（leaves budding）」のイメージから概念化したものである、と答えてくれた。

また進化の問題については、『プロセスモデル』では、生物や人間の進化は突然変異や自然淘汰によって起きるのではなく、あらゆる個体の中で瞬間瞬間に生起している個別の現象が総体的に進化を引き起こすのだ、という考えが述べられているが、ほんとうにジェンドリンがそのように考えているのかを確かめてみたかった。彼の答えはこれについてもきわめて明確で、「もちろん、そうだ」と言った後に、「そうではない例があれば（つまり、

1 つの個体の突然変異だけで進化が生じ、その他の個体が自然淘汰されてしまうような具体例を)、見せてもらいたい」と語っていた。

しかし、こうした議論にもまして筆者がジェンドリンに尋ねてみたかったのは、『プロセスモデル』における“stoppage”（「停止」あるいは「休止」）の概念をめぐるいくつかの重要な問題についてだったのだが、それは、次のような内容からなる複雑なものであった。生命体に進化をもたらすのはどのような「停止」においてなのか？ 「停止」と「構造拘束的（structure-bound）」（Gendlin, 1964）な体験との異同は？ サイコセラピーにおける「治療的停止（therapeutic stoppage）」——これは筆者の造語である——の重要性は？ 等々。これらについては、十分な時間を割いて言葉にすることができなかった。

そこで筆者は、2007年7月に英国のイーストアングリア大学で開催されたプロセスモデル・コロキウム（Process Model Colloquium）で発表した筆者のプレゼンテーションの原稿をジェンドリンに手渡し、「よかったらこれを読んでほしい」と伝えた。その原稿の中には、“stoppage”に関わる上記の問題についての筆者の考えの一部をしたためていたからである。⁴⁶

すると、その一週間後（4月7日）、帰国した筆者のもとに電子メールの添付ファイルで、ジェンドリンから以下のような手紙が届いた。

以下は、その手紙の内容と、筆者の連想的な考察および筆者の中に形成された応答的秩序（Gendlin, 1997b）——応答によって、生命体の中に生起する新しい秩序のこと——である。

(2) ジェンドリンからの手紙とそこから得られた応答的秩序

Dear Professor Suetake,

Please let me check whether I understood you correctly.

拝啓 末武教授

私があなただのことを正確に理解したのか確認させてください。

⁴⁶ このときのプレゼンテーションの内容をもとに執筆したのが、次の論文である。Suetake, Y. (2010) The clinical significance of Gendlin's process model. *Person-Centered and Experiential Psychotherapies*, 9(2), 118-127.

——ロジャーズの系譜を受け継ぐサイコセラピストである、ジェンドリンならではの問いかけである。このように問いかけられると、筆者の注意は必然的に、ジェンドリンが語りかけようとする事と筆者自身の思考そしてフェルトセンスが交差するところへと向かう。そしてそこに、応答的秩序が形成され得るスペースが生じる（願わくば筆者も、一人ひとりのクライアントにつねにこのように問いかけたい）。——

I think you said that you are working with “very pathological” people. I spent five years working in a hospital, and have also worked with such people since then. So I know how difficult this work is and I value it very highly.

私は、あなたが“かなり病理的な”人々とかかわっていることを話していたと思います。私も病院で5年間を費やし、それ以来そうした人々とかかわってきました。なので、私はそのかわりがいかに困難であるかを知っていますし、そのことにとっても高い価値を置いています。

——ジェンドリンが「私も病院で5年間を費やし」と書いているのは、ロジャーズが主宰し、ジェンドリンがその主任研究員を務めたクライアント中心療法の統合失調症患者への適用プロジェクト（いわゆるウィスコンシン・プロジェクト、1957～1962年に実施された）（Rogers, et al., 1967）での経験を指すものであろう。筆者は当時のジェンドリンの仕事（例えば、統合失調症患者とのサイコセラピーの手続き（Gendlin, 1962）や、セラピストの自己表明性と言語下のコミュニケーションの重要性（Gendlin, 1963）等）は注目に値するものだと考えており、またその後の『フォーカシング指向心理療法』（Gendlin, 1996）などの著作の中にも、いわゆる困難ケースや重症ケースにおける対応の手がかりや留意点がちりばめられている。筆者はこのような側面におけるジェンドリンの仕事に対しても、深い尊敬の念を抱いてきている。——

You said that when a person is in a pathological process, you sometimes say “stop,” putting up your hand and finger, and of course thereby putting your whole person in between this and the next running on.

You said that this is a kind of “stoppage,” and like in the Process Model, this stoppage has possibilities of something new and different coming.

This is a very beautiful thing you are doing, and (if I understood you correctly) I agree that it has the characteristics of a stoppage as in the Process Model.

あなたは、ある人が病的なプロセスの中にいるときに、あなたの腕と指を上げて“ストップ [ちょっと待ってください]” と言うことがあると言いましたね。それはもちろん、あなたという人間の全体を、このこと [病的なプロセス] と次に続くことの間、差しはさもうとしてのことでしょう。あなたは、これはある種の“停止 (stoppage)” であり、プロセスモデル [で私が表明したこと] と同様に、このような停止には新しい違った何かを訪れる可能性がある、と言っていましたね。このような、あなたがやっていることはとても素晴らしいことであり、そして (私があなただを正確に理解しているならば)、私はそのことがプロセスモデルで表現した停止の特質を併せもっていることに同意します。

——筆者がジェンドリンに伝えようとしたのは、サイコセラピーの中でクライアントの反復する病的な行動や思考を「停止」(あるいは「休止」) させることの重要性であり、それを筆者は「治療的停止 (therapeutic stoppage)」という用語で呼びたい、ということであった。しかし、それを説明しようとした際に、日本における座禅や止観といった仏教的伝統や、森田療法や内観療法における不問技法などを例として用いようとしたために、かえって会話が錯綜してしまい、ジェンドリンにうまく伝わらなかったという印象を抱いていた。だが彼には、筆者がボディランゲージで示した「シーツ」という沈黙を促す(日本的な?) しぐさが印象に残っていたようだ。筆者は、言語的説明を超えて、筆者が伝えようとしたことの本質をジェンドリンが正確に把握していたことに喜びを感じると同時に、驚きすら覚えた。——

I would only add that this can succeed because from the time you have worked together the person can feel your care in your saying this “stop.” The person knows you are not saying it because you are impatient or judging or angry, but feels that you are trying to help the person with what the person is up against, struggling with, having to go through.

This can work because the person knows and feels that you are trying to stop the pathological process. You are not trying to stop the person.

そして少し補足させてほしいのですが、このことが有効に働きうるのは、“ストップ”と言うことで、そのときあなたが、あなたにかかわってもらっていると相手を感じられるように働きかけているからなのです。その人は、あなたがイライラしていたり、非難しようとしたり、あるいは怒っているからではなくて、自分が直面し、もがき苦しみ、乗り越えなければならないことに手を差しのべようとして、あなたがそのように言っている、ということを知っているのです。

こうした働きかけは、あなたが病理的なプロセスをストップさせようとしているということを相手が知り、感じているからこそ有効に働きうるのです。あなたはけっして、その人をストップさせようとしているではありません。

——たしかにそのとおりである。「治療的停止」とは、たんにクライアントの病理的で反復的な反応を止めさせようとする機械的な技術や介入のことではなく、クライアントがよりその人自身でいられるようなスペースを内的に形成してもらえるように働きかける、セラピストの全人的なかかわりであるべきものである。しかし、筆者がこれまでうまく援助できなかった、あるいは中断してしまったようなケースにおいて、筆者がクライアントその人自身のプロセスをストップさせてしまったことも少なからずあったはずである。では「治療的停止」とそうでないものは、どのように違うのだろうか？ そして「治療的停止」はどうすれば有効にもたらされるのだろうか？——

Sometimes talented and sensitive therapists, when they teach or write, omit this essential factor, perhaps because of modesty or because to them it seems obvious. But it is not generally known. And without experience people might not feel this as I could, just seeing you and the way you made the gesture and said “stop.”

時々、才能も感受性も豊かなセラピストが、セラピーについて教えたり書いたりする際に、この本質的な要素を省いてしまって、それに触れないことがあります。おそらくはそれを語ることを遠慮しているのか、あるいはあまりに明白なことだからなのかもしれません。しかしそれ【この本質的な要素】は一般に広く知られていることではないのです。人々は経験することがないので、こうしたことを感じるができないでいるのです。つまり、私が【自分の仕事やプロセスモデルの中で】感じているようには。またあなたと会って、あなたが“ストップ”と言った時のしぐさや言い方に触れたときに感

じたようには。

——ジェンドリンは、サイコセラピーのこの本質的な要素（筆者が「治療的停止」と呼びたいもの）は、才能も感受性も豊かなセラピストであれば当然知っているはずである、と言いたいようだ。しかし、こうした質の「停止」は、あくまでも経験知や身体知といった類いのものであって、経験や実感によってはじめて知られるものであり、そうした体験がなければその大切さは認識され得ない、ということである。とすれば、「治療的停止」が有効にもたらされる鍵は、その独特の体験や質感をクライアントに豊かに提供することができるか、そしてその人とその体験や味わいを共有することができるかどうかにある、と言えるだろう。——

Then you asked me how the Process Model concept of “stoppage” (implying with new possibilities) relates to the concept of “structure-bound.”

I have been thinking about it since you left.

In the article “Personality Change” this is connected with the concept of “reconstituting,” (when just explicating what is already implicit in the client's experiencing is not enough. Something more from the interaction is needed to reconstitute a missing experiencing process).

それからあなたは私に、プロセスモデルにおける“停止 (stoppage)”の概念（新たな可能性を暗在的に含意している）が“構造拘束的 (structure-bound)”の概念とどのような関係にあるのか質問しましたね。私はあなたが帰ってから、そのことについて考えました。

“人格変化の理論”の中で、構造拘束の概念は“再構成化 (reconstituting)”の概念と関係をもっていました（つまり、クライアントの体験過程の中にすでに暗在しているものを展開するだけでは不十分であるときに、失われている体験過程のプロセス (a missing experiencing process) を再構成化するためには相互作用から何かそれ以上のものが生まれる必要がある、と)。

——ジェンドリンが「人格変化の理論」(Gendlin, 1964)で提出した「構造拘束的」の概念は有名である。それは体験過程が推進されない病理的な様式として彼が概念化したも

のであるが、これもある種の「停止」と言えるものである。では構造拘束的で病的な「停止」と、『プロセスモデル』で言うような「停止」とではどのような違いがあるのだろうか、というのが筆者の問いかけであった。ジェンドリンの答えは、手紙の続きに述べられているが、その前にここで1点だけ触れておきたいことがある。それは「構造拘束の概念は“再構成化 (reconstituting)” の概念と関係をもって」いると彼が書いている点である。たしかに「人格変化の理論」を読み返してみると、「構造拘束的」の概念は、「パーソナルな関係の役割——他者の反応がいかにして個人の体験過程に影響を及ぼすか…」の節の中で記述されており、「構造拘束的」な体験が他者の反応（応答）によっていかに「再構成化」されることが可能であるかが理論的に述べられている。これまで私たちは、ジェンドリンの「構造拘束的」の概念を、変容困難な病的体験を指すものとしてリジッドにとらえすぎていたのではないだろうか？「構造拘束的」な体験とは、他者の反応（応答）によって「再構成化」されることが可能な様式であることを、ジェンドリンは「人格変化の理論」の中ですでに解明しようとしていたのである。——

So now I would say that the Process Model fills in how reconstituting works. The interaction reconstitutes a missing experiencing process. A missing experiencing process is a stoppage. The Process Model explains that a stoppage is not just no-process, rather a constant implying of the process, and not just that formed process but any way that might carry the implying forward.

そこで私は今、次のように言いたいのです。プロセスモデルでは、いかに再構成化が機能するかを説明しているのだ、と。相互作用は失われている体験過程のプロセスを再構成化します。ある失われている体験過程のプロセスが、ある停止です。プロセスモデルでは、ある停止とはプロセスがないことを意味しているのではなく、プロセスのコンスタントな（継続する、不断の）インプライング（暗在的含意）なのです。そしてそれはまだ形づくられていませんが、いずれそのインプライング（暗在的含意）は推進され得るものです。

—— “implying”（インプライング。これもまだ定訳はないが、あえて日本語に訳すと「暗在的含意」とでも言えようか）は『プロセスモデル』の重要な根本概念である。“implying”とは、生命体に生起（“occurring”）を引き起こす何かであって、生命現象の

基底を指し示そうとする『プロセスモデル』の根源語の一つである。生命体が死んでいないときには、つねにこの“implying”にしたがって生命体は推進される。フォーカシングで言われるフェルトセンスは、人間特有の“implying”のあり様であると言えるだろう。しかしすべての生命体にはフェルトセンスというよりももっと根源的で原初的な生命現象の基底が共通してあるはずで、それを『プロセスモデル』では“implying”と呼んでいる。

So yes, structure-bound is a kind of stoppage. The concept of “stoppage” came later and has more concepts in it.

But “structure-bound” says something about pathology, whereas just “stoppage” does not. In the usual stoppage and leafing, each repetition is a little different with freshly-formed detail. Structure-bound repetitions seem to be the same without any fresh detail, not each repetition “a little different.” I would argue today that each repetition is a little different but when we are structure-bound we do not move on from the little different. Instead, we go on from the same, and again from the same, and again from the same. So it may require interaction to stop the structure-bound repetition (means without fresh detail). Any moment of not going on without fresh detail is already a fresh moment, even if we think it is only the stop, the not-going on.

そうです。構造拘束とはある種の停止です。“停止”の概念は〔私の中で〕あとからやってきたものであり、その中に多くの概念を包み込んでいます。

しかし“構造拘束”は病理について何かを語っており、一方“停止”はそうではありません。通常の停止やリーフィング (leafing) の中では、どんな反復も、新鮮に形づくられた細部をもった少し違ったものです。構造拘束的な反復は、新鮮な細部をもたない同じようなものに見えますし、“少し違った”反復ではないように見えます。私は今、次のように論じたいのです。つまり、どんな反復も少し違ったものですが、私たちが構造拘束的であるときには、少し違ったものから動くことができません。その代わりに、そこでは私たちは同じものから、また同じものから、また同じものから...動いているのです。なので、そこには構造拘束的な反復 (新鮮な細部をもたない) を停止させる相互作用が求められるのでしょう。新鮮な細部をもたないで進行するどんな瞬間も、すでに 1

つの新鮮な瞬間です。たとえ私たちがそれをたんなる停止であり、進行しないものであると考えたとしてもです。

——ここには、「停止」と「構造拘束的」の概念の異同に関する筆者の問いかけに対して、ジェンドリンの答えが明確に述べられている。しかしここには、筆者の問いかけをはるかに超えた、人間や生命体の本質に関するジェンドリンの深い示唆が表明されている、と筆者は感じる。特に最後の、「新鮮な細部をもたないで進行するどんな瞬間も、すでに1つの新鮮な瞬間です。たとえ私たちがそれをたんなる停止であり、進行しないものであると考えたとしてもです」という箇所がそうである。これはどういう意味なのだろうか。

筆者は今、次のように考える。私たちは例えば、あらゆる人間の指紋がまったく一致することはないこと、あるいは同じ樹木の葉々の模様が1枚1枚微妙に異なっていること(おそらく“leafing”の概念はそのことをモチーフにして考えられたものだろう)などを知っている。また、自分と骨格や顔つきや声などがまったく同じ人間が、今の地球上にだけでなく、数万年もの人類の歴史の中にもけっして存在しないことを知っている。さらに、自分という1個の個体においても、心拍や呼吸などはほとんど同じこと繰り返しであるが、長いタイムスパンの中で見ると、幼児期と老年期ではそれらはまったく違う生起の様式である、という事実は疑うこともできない。『プロセスモデル』がとらえようとする私たちの生命のプロセスとはどのようなものなのか。それは、個々の生命体の“implying”に基づいた、新鮮に形づくられた細部をもつ、ほとんど同じであるが少し違ったものの連続によって成り立っているプロセスである。たしかに、個体としての生命体は、さまざまな病理におかされるし、いつかは死んでしまうものである。しかしそうだとすると、身体が死んでいない間は、生命体はつねにその個体としての独特の様式で生きており、推進されているのである。そのように考えると、いわゆる「構造拘束的」な体験(例えば妄想や幻覚、常同行動など)は、新鮮な細部を欠いた病的な体験様式であるし、それだけの反復はその個人の生命プロセスを脆弱化させてしまうだろう。しかしある意味では、そうした「構造拘束的」な体験も、(それが生起しつつも身体は死なないとしたら)その人、その個体固有のプロセスであるという意味では、基本的に「1つの新鮮な瞬間」であると言える、いや、言わなくてはならないのである。——

You coming in and reaching the person with your “stop” would be that kind of

interaction. As I feel this from me-in a pathological process, what a relief that “stop” would be to me! Someone caring, someone there, someone real, someone that knows I am trapped in this running process, someone knows I still exist, this running on is not all I am, many many meanings of this kind, together, carried forward implicitly. A breath.

“ストップ”と言うことで相手を訪れ、相手に届こうとしているあなたは、その種の相互作用そのものです。病的プロセスの中にいる私の中からこのことが感じられるときには、その“停止”は私の中にとっても安心をもたらすでしょう！誰かがケアしてくれている、誰かがそこにいる、リアルな誰かがいる、自分がこの止まらないプロセス (**this running process**) の中にはめ込まれていることを理解してくれている誰かがいる、自分が今も存在していることを知っている誰かがいる、この止まらないことが自分のすべてではないことを知っていて、自分の中には多くの多くの意味があり、暗在的に推進されている、ということを知っている誰かがいてくれる。ああー（深いため息）。

——この手紙の最後で、ジェンドリンは、彼自身を病的なプロセスの中にいるクライアントに見立てて、筆者の言う「治療的停止」が有効に機能する瞬間を描写しようとしている。ニューヨークでのワークショップで、高齢の彼がセラピー面接のデモンストレーションを披露してくれたことに筆者は驚いたが、振り返ってみれば、かつて来日した時（村山、1991）にも彼はこうしたデモンストレーションを行うことにとっても積極的だったし、ジェンドリンの師ロジャーズもまた 80 歳を越えて来日したワークショップでセラピーのデモンストレーションを見せてくれていた（畠瀬、1986）。

しかし、自分をクライアントの側に見立てて表現するようなこのような描写は、おそらくロジャーズと言えどもそうできることではなかったのではないか。ここには、ジェンドリンのきわめて豊かなクライアントへの共感的な想像力が表されていると言えよう。

この表現に触れたとき、筆者の中には、自分がクライアントの人たちに、（ことに困難で重症なケースにおいて）セラピーの中で体験してもらいたいと思っている事象が、筆者自身が言語化できるレベルをはるかに超えて的確に描写されている、と感じた。最後の深いため息は、身体的な共鳴として、筆者自身の中でも深く、深く生起した。

This is a very beautiful thing, which you brought, if I understood you correctly.

Greetings from Gene

あなたもたらしてくれたもの、もしも私があなたのことを正確に理解しているならば、これはとてもすばらしいものです。

敬具 ジーンより

(3) おわりに

以上がジェンドリンから届いた手紙である。この手紙とそこに込められたメッセージは、筆者の中に言葉にならないほどの推進と、実践や臨床における新たな秩序形成の実感をもたらしてくれた。これは、ジェンドリンによる応答と相互作用が筆者の中に創造した「応答的秩序 (responsive order)」の紛れもない実例 (Iofi: instance of itself) (Gendlin, 1962a) である、と感じている。

第Ⅱ部 ジェンドリンの プロセスモデル ——その解読と考察——

47

1. はじめに

(1) 問題

この第Ⅱ部では、ジェンドリンの哲学的な仕事の頂点と言える『プロセスモデル (A Process Model)』(Gendlin, 1997a) の解読と考察を試みる。

序論で述べたように、近年、ジェンドリンのプロセスモデルについては国内外でさまざまな研究や議論が行われるようになってきているが、しかし、その全体像を明らかにした解読や考察はまだほとんど存在しない。パートンによる「プロセスモデルへの道案内」(Purton, 2004a) をはじめとして、これまで公表されているプロセスモデルについての解説は、その全体を見通すものというよりも、プロセスモデルの一部に焦点をあてた断章(フラグメント) 的なものがほとんどである。

そのような中で、筆者らは『ジェンドリン哲学入門——フォーカシングの根底にあるもの——』(諸富・村里・末武 2009) において、『プロセスモデル』の第Ⅰ章から第Ⅷ章の全体を見通した解説を試みた。それは、ジェンドリンのプロセスモデルの全体像を明らかにしようとした、世界的に見ても初めての試みと言えるものだったが、何人かの執筆者の分担によって書かれた(『プロセスモデル』の第Ⅰ～第Ⅵ章については筆者が、第Ⅶ章に関しては得丸さと子(智子)氏、第Ⅷ章については村里忠之氏が執筆した)ため、訳語の統一や解釈の整合性などについてまとまりを欠く部分もあった。

⁴⁷ この第Ⅱ部の1～5は、末武康弘(2009b) 身体・環境、暗在的含意と生起、進化そして行動——『プロセスモデル』第Ⅰ章～第Ⅵ章——(諸富祥彦・村里忠之・末武康弘編著 ジェンドリン哲学入門 コスモス・ライブラリー 191-254頁) を加筆修正したものであり、6～8については今回新たに書き下ろした。

そこでこの第Ⅱ部では、『ジェンドリン哲学入門』における筆者の解説を加筆修正し、そこに第Ⅶ章および第Ⅷ章についての解説と考察を加える形で、『プロセスモデル』の全体像を1つの筋の通った見通しのもとに解明することにする。そのために、『プロセスモデル』の中に次々と出現する新しい用語についての訳語をできる限り統一して、一貫性と整合性のある考察を行いたい。また、英語の原著および訳文の両方からの詳細かつ正確な引用を付した（以下の引用箇所後の p. あるいは pp. 以下は原著のページ、そして〇〇頁は筆者による全訳のページを指す）。また、きわめて難解な本文の、わかりにくいけれども重要な箇所については、本文が言わんとする含意から逸脱しない範囲で筆者の解説や考察を加えた。

なお、本論文の序論にも記載したが、以下の解説と考察のテキストとして用いたのは、2001年以降にフォーカシング・インスティテュートから頒布されている『プロセスモデル』および、インターネットのジェンドリン・オンラインライブラリーに掲載されているそのPDF版である。

以下に『プロセスモデル』の全体的構成（各章のタイトル）を示す。

- I 身体 - 環境 (BODY-ENVIRONMENT : B-EN)
- II 機能的循環 (FUNCTIONAL CYCLE : FUCY)
- III 対象 (AN OBJECT)
- IV 身体と時間 (THE BODY AND TIME)
- V 進化、新しさ、安定性 (EVOLUTION, NOVELTY, AND STABILITY)
- VI 行動 (BEHAVIOR)
- VII 文化、象徴、言語 (CULTURE, SYMBOL AND LANGUAGE)
- VIII 暗在するものによる思考 (THINKING WITH THE IMPLICIT)

このうちⅠ～Ⅴは生命体と環境、身体、時空間のあり様についての根本的な解明であり、基礎理論と呼べるものである。そしてⅥ、Ⅶ、Ⅷは、動物から人間への、そしてこれから生起するであろう人間の進化のプロセスがジェンドリン独自の思索と概念によって詳細に論じられている。

(2) プロセスモデルが要請する視座

プロセスモデルの第 I 章に入る前に、このモデルが要請する視座について触れておく。そうするのは次のような事情からである。

プロセスモデルの冒頭には、導入部や問題設定にあたるような記述がまったくない。一般に、学術的な書物や論文であれば、その冒頭部分で「はじめに」とか「序論」といった見出しのもとに、執筆の意図や問題の設定、本論の構成の概要などが述べられるのが通例である。しかしプロセスモデルでは、唐突に「身体 - 環境」の概念化から記述がはじまる。

プロセスモデルへのとっつきにくさは、この本が何の問題について論じているのかを見えにくくしている、こうした冒頭の記述のあり方にも一因がありそうだが、そのような書き方をせざるをえなかったことには、それなりの理由があったと考えられる。その理由とは、そもそもこのモデルがどのような視座からどんな問題に取り組もうとしているのかを説明するためには、これまでになかった新たな諸概念——それらはこのモデルの中で段階的に創出される——が必要であった、ということである。つまり、このモデルがどのような特質をもっているのかを指し示すためには、このモデル自体が作り出す新概念が必要であり、ある程度の概念が創出された後でないと、このモデルがどのような視座から何を問題としているのかを明確に論じることができなかった、と考えられるのである。

ただしジェンドリンは、冒頭に短い注を付けて、第IV章の A の d (その d-2、pp.28-38) に私たちの注意を喚起する。その箇所ではじめて、このモデルが要請することは何であるかが論じられている。

したがってここでは、プロセスモデルの全体的な特質についての見通しを入手するために、いくぶん性急であることは承知の上で、このIV-A-d-2の内容を素描することからはじめたい。しかし、繰り返しになるが、この内容は以下の各章（特にIVの前半まで）における新たな諸概念が理解されて、ようやくその真の意味が了解されうるものであることを断っておきたい。

プロセスモデルが要請する視座は、以下の 6 つの点である。

① **インタラクションファースト (interaction first : まず相互作用ありき)** : これはプロセスモデルが要請する最も根本的な視座である。われわれの認識や言語は、通常、個体がまず存在し、それから個体どうしが相互作用するかのよう到来事や事象をとらえている。しかし真実はその逆であるとジェンドリンは言う。あらゆる事象は相互作用として生起している。相互作用そのものが事象の本来的なあり様である。「相互作用的な事象が、個々の

実体……を規定している。個々は“それ自身としてではなく、すでに変化したものとして”機能する。」(p.38 邦訳 43 頁)。このような視座は、ある意味では、名詞(主語)を中心とした通常の言語における認識ではなく、動詞(述語)を中心にした世界認識であるとも言える。また、静的でリジッドな構成要素から生命体や世界を認識するのではなく、動的な流れや動きとしてそれらを把握する視座であるとも言えるだろう。

② **過去と未来が現在において機能する時間のモデル**: 通常、われわれは時間というものを、過去 - 現在 - 未来という直線的な流れとして考え、また物理的に等間隔に刻まれるものと認識している。しかしプロセスモデルでは、時間は生命体(身体)が生きることを通して生成されるものである、と考える。このことをジェンドリンは、「インプライングの中へ生起すること (occurring into implying)」(第II章を参照)によって時間は生まれる、と言う。また、プロセスモデルでは、過去および未来を、現在と切り離された何かとしてではなく、現在において機能し相互作用するものとしてとらえる(時間については第IV章で詳細に論じられる)。

③ **プロセス事象 (process events)**: 事象はプロセスとしてとらえられなければならない。私たちが通常、構造やパターンとして認識しているものは、本質的にはプロセスとして推進し変化していく可変性や可塑性をもつものである。その意味で、構造 (structure) やパターン (pattern) は、本来は構造化 (structuring) でありパターン化 (patterning) と呼ばれるべきものなのである。

④ **非ラプラス的連続 (A nonlaplacian sequence)**: 時間と空間はピエール・シモン・ラプラス (Pierre Simon Laplace; 1749~1827、フランスの数学者、天文学者) が考えたような連続から構成されているのではない。ラプラスは、空間は等間隔に連続的に広がっており、また、現在何が起きるのかは過去によって規定されていると考えた。しかしそうではない、とジェンドリンは言う。プロセス、相互作用、身体 - 環境はそれ自体の変化をインプライ (暗在的に含意) しており、「生起の法則 (law of occurring)」(第IV章を参照) にしたがって自らを、そしてお互いを推進する。その連続は恣意的なものでもなければ、まったくの偶然でもない。それはラプラスが想定したような時空間の中で生じるのではなく、むしろ生命体が生きることによって時間と空間は生み出される、とプロセスモデルでは考える。

⑤ **1つの事象を形成する多数の要因**: ある出来事や、あるパターンは相互に影響しあうきわめて多数の要因によって形成されている。ジェンドリンはこのことを「連関

(relevance)」と呼ぶ。この「連関」という概念は『体験過程と意味の創造』(Gendlin, 1962a)の中でも用いられていた。そこでは、シンボル化のプロセスにおいて機能している感じられる意味は、それ単独ではなくて、きわめてさまざまな感じられる意味との関係において機能していることを指し示す用語としてこの概念が創出された。プロセスモデルでは、「連関」の概念は言語化やシンボル化のみならず、あらゆる出来事や事象の形成にかかわる事態を理解するための概念として用いられる。つまり、ある1つの事象の形成にはきわめて多数の要因が複雑に関係している、ということである。さらにプロセスモデルでは、連関が生じる背景ないしは基盤を把握する概念として、「万事連関 (everything by everything: evev)」(第IV章を参照)という新概念が創出される。万事連関 (evev) とは、あらゆることがきわめて複雑に連関し相互作用していることを示す用語である。ある1つの事象は単独で生起しているのではなく、万事連関 (evev) という無数の事象の相互作用的なメッシュ(網の目)を背景として、連関的に生起しているとプロセスモデルではとらえるのである。

⑥ **ユニットの出現、および異なる仕方での再出現**：プロセスモデルでは、すべての事象をプロセスおよびインタラクシオンファーストの観点からとらえようとするが、あるまとまりをもった形態や構造が生成されることを否定しているわけではない。このモデルでは、ユニット(まとまり、単体)がまず存在し、そこからプロセスや相互作用が生まれると考えるのではなく、プロセスの連続や相互作用の連関の、ある種の様式からユニットや構造が出現する、ととらえるのである。つまり、われわれにとって一見、固定的で不変的なものに思えるユニット(身体の構造、自然の秩序、言語コード、文化のパターン、...)も、絶対的で変わらない何ものかではなくて、変容する可能性をもった可変的で可塑的なものであり、プロセスや相互作用の変化によっては、それまでとは異なった仕方での再出現しうるものなのである。

以上が、プロセスモデルが要請する根本的な視座である。

このように、プロセスモデルは身体、生命現象、時空間といったあらゆる事象をプロセスおよび相互作用という観点からとらえなおそうとする画期的な哲学モデルであり、構造やパターンといったユニットの形成やその再構成化のあり方について従来のモデル(ジェンドリンは「古いモデル」あるいは「ユニットモデル」などと呼ぶ)とはまったく異なる視座から解明しようとするものである。そしてそこから、身体、生命現象、時空間といった問題のみならず、進化(第V章)、行動空間の形成(第VI章)、言語や文化そして普遍性

(第Ⅶ章)、新たな空間の創造(第Ⅷ章)が論じられるのである。

こうしたジェンドリンのプロセスモデルについて、以下、第Ⅰ章からその内容を概説し考察していくことにする。

2. プロセスモデル第I章、第II章、第III章

まずプロセスモデルの第I章、第II章、第III章を検討する。これらの各章は、あわせても20頁に満たない短い記述であるが、第IV章以降の詳細な論考の基礎となる概念と観点が論じられている。

(1) 第I章 身体 - 環境 (BODY-ENVIRONMENT : B-EN)

プロセスモデルの第I章は、「身体 {body} と環境 {environment} は1つであるが、もちろんこれはある特定の観点から見た場合である。」(Gendlin, 1997a, p.1 邦訳1頁) という文章に始まり、環境 (environment: en) が次の4つに切り分けられる。

環境#1 (en#1) は観察者が見る環境である。例えば科学者が、ある動物の環境を定義するような場合、環境の諸要因はその動物から切り離されたものとして規定される。これは通常の認識における環境であり、生命体と切り離された環境であると言える。

環境#2 (en#2) は、身体と反射的に同一の環境 (the reflexively identical environment) である。それは生命体の生きているプロセスと同一のものである。ここでは、身体と環境は1つの事象であり、1つのプロセスである。例えば、肺に吸引される空気と肺の拡張を、また、歩いている足と地面を分かつことはできない。これはプロセスモデルにおける環境についての基本的認識であり、環境#1とは異なるものである。身体と環境#2はお互いをインプライ (imply)、つまり暗在的に含意している。(足と地面のように) 両者は似てはいない (非アイコン的、非表象的な関係である) が、ある相互作用のプロセスにおいてお互いをインプライしているという意味で1つなのである。

環境#3 (en#3) は、身体 - 環境#2 のプロセスによって織りなされる環境である。蜘蛛の巣や貝の殻などは、生命プロセス (環境#2) の結果つくり出されるものである。生命プロセス (環境#2) はそのプロセスそのものを1つの環境としてアレンジし、織りなしていく。これは「自ら織りなす (home-made)」環境、あるいは「馴染みの (domesticated)」環境と呼ぶことができるものである。同じ種の同胞や、人間にとっての生活環境や文化なども環境#3であると言える。そして生命プロセス (環境#2) は、この環境#3の中で進行する。

環境#0 (en#0) は、生命プロセスにいつか影響を与え、**環境#2** になる何かのこと、しかし今はそうではない何かのことである。生命プロセスの中でまだ機能していない環境についての用語が必要であるが、それをここでは**環境#0** と呼ぶ。

以上の4つの種類の環境の中で、プロセスモデルが焦点をあてるのはおもに**環境#2** と**環境#3** である。わかりやすい言い方をすると、**環境#2** は身体 - 環境 (b-en) の機能的側面であり、**環境#3** は身体 - 環境の構造的あるいは構成的な側面であると言えるだろう。そして、身体と**環境#2** および**環境#3** はお互いをインプライしている。これらは、より大きなプロセスあるいは循環の部分として、お互いに切り離されることなく、お互いをインプライしているのである。**インプライング** (implying) とは、生命体に**生起** (occurring) を引き起こすものであり、プロセスモデルの基本的概念の1つであるが、その意味は第II章でより明確に論じられる。

(2) 第II章 機能的循環 (FUNCTIONAL CYCLE: FUCY)

プロセスモデルにおけるプロセスとは、いったいどのようなものとしてとらえられているのだろうか。その基本的なあり様を指し示す用語が「**機能的循環** (Functional Cycle: FUCY)」である。

私たちは通常、時間というものを過去 - 現在 - 未来という1次元的な連続からなるリニア (線的) なものであるととらえている。しかしプロセスモデルではそのようには考えない。現在、過去、未来というものは、プロセスについてこのモデルが解明する新しい言葉によって分かちことができるのであるが、その前にプロセスとは何なのかが明確にされなければならない、とジェンドリンは言う。

身体 - 環境は、**環境#2** の全体的な繋がりをインプライしている。例えば空腹は食べることをインプライし、食物をインプライしている。空腹と食べることは同じではないし似てもない (これも非アイコン的、非表象的關係である) が、分かちがたく繋がっている連続である。空腹はまた、消化すること、休息すること、排泄すること、そして再び空腹になることをインプライしている。そのプロセスは連続的であると同時に循環的である。空腹は、再び空腹になることをインプライしているからである。生命プロセスのこのような基本的なサイクルが機能的循環である。しかしこの循環は、同じことが機械的に繰り返されるような決まりきった連続ではない。

環境#1 を見るような観察者は、次に何が生じるか知っていると言うかもしれない。同様の事象が起こることをたびたび観察しているからである。しかし、プロセスというものを、すでに決定された事象の連続であると考えすることはできない。食べること1つとり上げても、無数の異なる食べ方がありうるはずである。つまり、インプライミングと生起は同じものではないのである。

インプライミングは、生起とまったくイコールではない。したがって、インプライミングはまだ生起して“いない {not yet}”ことが生起することではない。インプライミングは、ある時間軸の異なる位置における生起ではない。……〔中略〕……私たちは、生起とインプライミングの関係を語るようになる用語をさらに必要としている。(p.10 邦訳 12 頁、太字は原文のまま。)

とジェンドリンは言う。

生起はいかに生じるのだろうか。そしてインプライミングは生起にどのように関与しているのだろうか。言い換えると、「機能的循環」であると見なされるようなプロセスとは、そもそもどのようなプロセスなのだろうか。

ここでジェンドリンがインプライミングと生起の関係を指し示すために用いるのが、“into”という前置詞である。そして、「インプライミングの中へ生起すること (occurring into implying)」という表現が、インプライミングと生起の根本的關係として定立される。

ジェンドリンは次のように言う。

生起とは変化であり、何かが生じることである。インプライミングの中への生起は、そのインプライミングを変化させうる {**Occurring into implying can change the implying**}。生起の連鎖はまた、インプライミングにおける変化の連鎖でもある。……〔中略〕……プロセスとは、すべてこうした方向に沿って動く、ある変化したインプライミングである {**The process is a changed implying all along the line**}。(p.10 邦訳13頁)

つまり、プロセスモデルにおけるプロセスとは、基本的に、インプライミングの中へ生起することの連続であるということが出来る。それは機能的な循環をなすものであるが、しかし同時に、つねに変化の可能性をもつものでもある。なぜなら、インプライミングはそれ

自体の中に何らかの変化をインプライしているからである。しかもそのインプライされているものとしての変化は、恣意的に、あるいはやみくもに生じるものではなくて、ある種の複雑で精緻な秩序において生起するのである。ジェンドリンは次のように言う。

インプライングは何かをとっても複雑にインプライしているので、あるきわめて特別な生起だけが、それ自体の変化がインプライされているように、それを“変化させる”のである。その他のことはすべて、身体を混乱させるか、インプライングを変化させないままにするだろう——それまでのインプライングのまま。 (p.11 邦訳 13 頁)

(3) 第Ⅲ章 対象 (AN OBJECT)

第Ⅱ章で示されたように、生命プロセスは基本的には、コンスタントに継続する機能的循環であると考えることができる。しかし、身体 - 環境のある側面が変化したり、失われるような場合は、そこに何が生じるのだろうか。結論を先取りして言えば、そこに「**対象 (object)**」が生じる、とプロセスモデルではとらえる。これはどういうことだろうか。

「あるプロセスが停止して、しかし生物がすぐに死なない場合、ある生起によって変化しなかったインプライングを私たちはもつ。」 (p.12 邦訳14頁) とジェンドリンは言う。例えば、餌が見つからない場合、餌を見つけようとするものがインプライするものは、他のどんな事象が生起しても同じものととどまる。餌が見つからないかぎり、そこでインプライされているもの（つまり、餌が見つかること）に変化は生じないからである。そしてジェンドリンは、「**私たちのモデルにおいて初めて、“同じ”であるという意味感覚がここで引き出されるのである {For the first time in our model we have derived a sense of "the same"}**」 (p.12 邦訳14頁) と言う。

これは、環境#2のある側面が欠如することによって、そこでインプライされているものが同じものととどまる、という事態である。言い換えると、そのインプライングは推進されずに同じものとして反復する、ということである。ジェンドリンは、このような事態において初めて、私たちは分離され停止している、あるプロセスについて認識したり語ることができるようになる、と言う。そして、そのプロセスを停止させているある部分、環境#2の欠如した部分が「対象」として出現する、とプロセスモデルではとらえるのである。

対象は、はじめから何らかのユニットとして存在しているのではない。また、環境#2は、もともとバラバラに分離している対象の集まりから構成されているのではない。プロセスモデルでは、プロセスの停止によって、そこに欠如として出現するものが対象であると考ええる。「私たちが“ある対象”と呼んでいるものは、環境#2の部分であり、機能的循環の部分である。それはすでに環境#2の部分であるが、もともと分離されていたものではない……〔中略〕……欠如していることによって、それは分離される」(p.13 邦訳 16 頁)とジェンドリンは言う。

環境およびプロセスの何らかの欠如した部分が生命体にとっての対象である、というきわめてユニークな認識は、一見、とても理解しがたく、また突拍子もない発想のようにも思える。通常の私たちの認識では、対象とは外界としての環境の中に存在する何らかの実体であると考えられているからである。しかしプロセスモデルにおいては、欠如することによって分離される環境#2の部分が対象であると考えることによって、対象がもつ特別な役割や力にスポットライトが当てられる。これは対象についての通常の認識からは決して得られない知見であると言える。

どういうことかと言うと、プロセスモデルでは、身体-環境は基本的に分かっことのできない同一のものであるので、対象とは環境の側の何らかの欠如を意味するだけでなく、身体のプロセスにも同時に何らかの差異(それまでとは違う何か)をもたらすものでもある。この差異は、プロセスの機能的循環という点から見ると、それまで連続していたプロセスの「停止 (stoppage)」であると言える。プロセスモデルにおいては、この停止(およびプロセスの「再開 (resumption)」)の概念にきわめて独特の、しかも重要な意味が付与される。プロセスモデルにおける停止とは、生命プロセス全体のストップ(つまり個体の死、あるいはプロセスがまったく無くなってしまうこと)を意味するのではなく、機能的循環としての生命プロセスを複雑に分化させ——推進されるプロセスと停止したプロセスの分化——、分化したプロセス間に新たな相互作用と協働をもたらすような、生命体の生成や進化にかかわる重要な契機を指し示す概念として用いられるのである。

プロセスモデルにおけるプロセスというもののきわめて複雑で精緻な秩序や推進のあり様については、以下の第IV章以降でさらに厳密に解明されていくが、以上の第I、II、III章において、その大まかな見通しを描き出すための基本的な概念とモデルが用意された、とすることができるだろう。

ジェンドリンは第III章の最後に、「ここまでで得られたこのモデルのモチベーションと

力」という見出しで、なぜ、このプロセスモデルが身体 - 環境、機能的循環、対象といった、人間の高次の認識的な働きから遠く離れた、生命プロセスのきわめて基本的な現象から論じなければならなかったか、について触れている。そこで彼は、第Ⅲ章までに創出されたプロセスモデルの最も基本的な概念とモデルのことを、「起源的なモデル (rudimentary model)」と呼ぶ。「起源的なモデル」とは、あらゆる生命体の生命プロセスのあり様を解明するための理論モデルという意味である。私たちはともすれば、人間がつくり出した抽象的な表象や数学的認識を用いて時空間や世界を説明しようとしてきた。しかし、そうした説明では、あらゆる生命体の生命プロセスを十分に解明することができない。なぜなら、例えば等間隔に広がり連続するという時空間のモデルは、座標軸といった抽象的な数学的認識のうえにはじめて成り立つものであり、人間を含めたあらゆる生命体はたしてそのような時空間の中に存在しているのか（あるいは、そのように体験をしているのか）は不明であるからだ。ジェンドリンは、抽象的な表象や数学などから生命プロセスの根源を説明するのではなく、逆の手順をとらなければならないと言う。つまり、あらゆる生命プロセスを説明し解明できる起源的モデルに基づいて、進化や複雑な行動の生起を、そして言語や文化の誕生や発展といったことを解明していく、という手順である。プロセスモデルが身体 - 環境、機能的循環、対象といった問題から論考をはじめなければならなかったのは、このような理由からだったのである。

3. プロセスモデル第IV章 身体と時間 (THE BODY AND TIME)

第IV章では、これまでの第I～III章で創出された概念とモデルの基礎のうえに、身体と時間の問題を中心として生命プロセスを解明するための諸概念が次々と創出される。

(1) IV-A 機械ではない身体についての従来とは異なる概念 (A Different Concept of the Body, Not a Machine)

第IV章の前半 (IV - A) では、「身体は機械ではない」という観点から、人間およびあらゆる生命体をもつ身体の諸特質についての詳細かつ精緻な概念化が行われている。その概要を見ていこう。

a) (あるプロセスが停止したときの) 身体は継続する何かである ; それは別のプロセスである **The body (when a process stops) is what continues; it is the other process.**

ジェンドリンは次のように言う。

私たちは今、停止したプロセス {a stopped process} を定義しよう。環境#2 のある側面が失われ、しかも身体が死んでいないときには、身体はある直接に異なるあり方で継続する。通常のプロセスのいくつかはそこでは進行しなくなる。ある違い {distinction} がつくり出される。そこには、停止したプロセスと、継続する何らかの別の {other} プロセスが存在する。(p18 邦訳 21 頁)

そして続けて、「**身体とは、継続する新しいプロセスである {The body is the new process which does continue}**」(p.18 邦訳 21 頁) と述べる。

先にみたように、プロセスモデルにおける停止とは、生命プロセス全体のストップ (つまり個体の死) やプロセスが無いことを意味するのではない。そうではなくて、プロセスモデルにおける停止とは、生命体に次のような変化ないしは推進をもたらす契機なのであ

る。すなわち、それまで機能的循環として継続していたプロセスが、身体 - 環境の何らかの変化によってこれまでと同じような循環によっては継続されなくなったとき、そこには停止したプロセスと、進行する別のプロセスの分化が生じる、ということである。あるプロセスが、一方では停止したプロセスへ、他方では進行する別のプロセスへと分化し、しかもそれらの分化したプロセスは互いに密接に協働しながら全体としてのプロセスを推進する。ここに、私たちの身体がもつ複雑かつ精緻な機能の根源的な様式がある。身体の諸プロセスは、個々に分離したバラバラのものではない。それらは「**協働的に分化されて (coordinately differentiated)**」おり、また「**根源的な相互影響 (original interaffecting)**」の関係にあるのである。

b) 全体としてのインプライングだけが存在する There is only the whole implying.

「身体のインプライングは常に、すべて 1 つのインプライングである」(p.22 邦訳 26 頁) とジェンドリンは言う。

私たちの“プロセス全体 {the whole process}”という概念を、協働的に分化された諸プロセスのいずれかに、うっかり置き換えてはいけない。プロセス全体は、**協働的な諸プロセスの次なる生起をインプライする {The whole process implies the next occurring of the coordinated processes}**。(p.23 邦訳 27 頁)

呼吸や歩行といった身体の諸プロセスは、きわめてさまざまに分化し、それぞれのプロセスを形づくっている。しかしそうした諸プロセスはバラバラに進行しているのではないし、それぞれが他とは無関係に何かをインプライしているのでもない。身体プロセスの全体が、1 つの全体としてのインプライングをもたらすのである。インプライングはつねに 1 つのインプライングであるという原理は、私たちの身体が、あるフェルトセンスの中にとっても多くのことをインプライすることができる、ということを理解するための重要な鍵になるとジェンドリンは指摘する。しかし、人間の高次の心理的機能を詳細に論じるには、もっと数多くの概念が必要であるし、そうすることはここではまだ早すぎる（それは第VII章以降の主題である）。

そこでジェンドリンは、歩き始めた子羊の例⁴⁸をあげて、全体としてのインプライングの存在を説明する。すなわち、歩き始めたばかりの子羊は崖にさしかかったとき歩行を止めようとしなないかもしれないが（そのような場合、母羊がそれを止めさせるだろう）、ほどなく崖の手前で歩行を停止するようになる。環境#1を見る観察者は、子羊が崖という環境の差異を“認識する (recognize)”ようになったと言うかもしれないが、“認識”という概念をここで用いるのはあまりに性急である。子羊の身体の全体的なインプライングが崖の手前で歩行を停止させ（つまり、歩行の継続がインプライされなくなる）、そしてその停止が別のプロセス（後ずさりするとか、後ろを振り返るといった）を生起させるようになるのである。さらにジェンドリンは、母羊が歩行を止めさせることと、子羊が自分で歩行を停止するようになることの間にも、密接な相互作用があると指摘する。早期に母羊と切り離された子羊は、十分な空間知覚の経験をもつことができたとしても、ときに正常な知覚・運動システムを発達させることが困難である（例えば崖から落ちてしまう）ことがわかってきている。早期の母子関係の剥奪が、羊の生殖や子育ての機能に影響を与えることは知られているが、影響はそれにとどまらないのだ。つまり、知覚・運動機能と生殖機能、そして母子の相互作用も、バラバラな別個のシステムなのではなく、分化しながらも全体のプロセスの中で密接に協働している諸プロセスなのである。

c) 身体はサブプロセスである；そのサブプロセスはつねに身体 - 環境#2 および環境 #3 である The body is the subprocesses; they are body-en#2 and #3 all the way in

歩行のような動きをともなう身体の機能的側面（環境#2 的側面）については、それが他のさまざまな諸プロセスと協働するプロセスである、というイメージはつかみやすいかもしれない。では、身体の構造的な側面（環境#3 的側面）はどうだろうか。私たちの身体は骨格や皮膚や内臓といった物質的なモノ (stuff) から成り立っているようにも見える。一見、それらは別個の構造をもっており、分離されたユニットのようにもとらえられる。しかし、例えばある内臓の組織をつくる一部の細胞が欠損しても、別の細胞がその内臓組織の組成に寄与する例にみられるように、身体の構造的側面も本来的には密接に相互作用し協働している諸プロセスなのである。

⁴⁸ ここでの子羊の例は、プロセスモデルの原著にあげられている例をわかりやすくするために多少変更した。

プロセスモデルでは次のように考える。内臓組織や細胞組織など身体の諸部分は、それぞれ別個のまとまりなのではない。個々バラバラな身体の諸部分というものは存在しない。ある部分は、他の多くの諸部分と協働することによってのみその部分でありうる。つまり、身体のどの部分にもきわめて数多くの諸プロセスが関与し、進行しているのである。そのような意味で、身体は数多くのサブプロセスからなっていると言える。またそのサブプロセスは、サブプロセス間の、そして環境との相互作用そのものでもある。ジェンドリンは次のように言う。

身体も、そのどの部分も、単なる環境的なモノ {stuff} ではない。身体は多くの諸プロセスの中で組織化されているので、それは、あたかも時空間の一部として定義可能なものであるかのような、1 つのかたまり {glob} の中だけに存在するものではない。同様に、身体のどの部分も、そのようには存在していない。あるプロセスが進行している **環境#3** である身体は、単一の時空間の構造をなす環境的なモノではありえない。なぜなら、モノとプロセスを分かちことはできないし、身体は1つの意味でプロセスなのではなく、別の意味ではモノのすべてでもあるからである。(p.27 邦訳 31 頁)

d-1) 身体のシンボリックな諸機能 Symbolic Functions of the Body

以上の論考をふまえて、ジェンドリンはここでプロセスモデルの中心的概念である“インプライング”について、1つの概括的なまとめをおこなっている。

「インプライングはシンボル化の1つの起源的な種類である {Implying is a rudimentary kind of symbolizing} 」(p28 邦訳 35 頁)と彼は言う。シンボルとは他の何かを表す何ものかであるが、同時に他の何かを超えた何ものかであるとも言える。インプライングとは、私たちの身体が現在どのようにあり、さらにどのように今生起していない他の何かでありうるのか、ということを示す全体である。その意味で、身体のインプライングは私たちにシンボル化をもたらす最も起源的な契機であると言えるのである(言語のような高次のシンボルの形成についてはもっと後で説明されるのである)。

では、こうしたインプライングを絶えず有している生命体の身体は、どのようなシンボリックな諸機能をもっているのだろうか。それらは大きく6つのカテゴリーに分類されるが、その中のはじめの3つはインプライングのいわば同時的な協働に関する概念である。

(I)「身体と環境#2 は1つの事象であり、それぞれが事象全体をインプライしている。」

<身体と環境の相互作用>

(IV - Aa)「分化された諸プロセスは互いをインプライしている。そのいずれも、他の諸プロセスがある特定のあり様で存在することをインプライしている。」<分化した諸プロセス間の相互作用>

(IV - Ac)「どんな身体の部分 (1つのプロセスにとって“身体”である何か、あるいはそのように機能する何かの部分) も、数多くの他の諸プロセスの中に包含されており、他の諸プロセスによって維持されているが、ある異なる部分、あるいは諸部分としてそのようなのである。それは他の諸プロセスをインプライしているが、“それ”そのものとしてあるわけではない。他の諸プロセスをインプライする中で、それはそれ自体として機能するのではなく、そのインプライングの中で機能するものとして機能するのである。」

<諸部分間の相互作用>

さらに次の3つはインプライングの継時的な連続に関する概念であり、そこから時間が生まれるとジェンドリンは言う。

(II)「どんな生起も、さらなる諸事象のインプライングである。」<生起とインプライングの連続>

(IV - Ab)「諸プロセスのそれぞれは、次の事象全体、さらには諸事象全体の連鎖をインプライしている。」<諸プロセスと次に生起する事象全体との連続>

(III)「あるプロセスがどのように異なって継続するかということが、停止したプロセスをもたらし、それを再開するであろう対象 (環境の側面) をインプライする。(失われた身体プロセスがインプライされ、それは環境#2 の対象とともにのみ生じうるので、同じようにインプライし続ける。)」<停止したプロセスと再開するプロセスの連続>

なお、プロセスモデルの原著では、d-2) として「私たちがさらに概念を形成していくためのいくつかの要請」との見出しで、“インタラクションファースト”、“過去と未来 (インプライング) が現在において機能する時間のモデル”、“プロセス事象”、“非ラプラス的連続”、“1つの事象を形成する多数の要因”、“ユニットの出現、および異なる仕方での再出

⁴⁹ 以下の「」は原著 (Gendlin, 1997a, p.28.) の訳であり、< >は筆者による要約的な補足である。

現”という、プロセスモデルの根本的な要請が論じられているが、本稿では1(2)ですでに触れておいたので、ここでは割愛する。ただ、ここで指摘しておかねばならないのは、これらの根本的な要請が土台として形成されたことを受けて、第IV章の以下 e) ~ h) においてプロセスモデル独自の種々の新概念が次々と創出されるようになる、ということである。

以下、そうしたきわめてユニークな新概念をみていこう。

e) 万事連関 Everything by everything (evev)

プロセスモデルにおいては、諸プロセスの分化、諸プロセス間・諸部分間の相互作用、変化、推進といった事象が、インプライングのもとに進行する1つの全体であるにとらえられる。ジェンドリンは次のように言う。

私たちは個々に独立したユニットも、あいまいなまま分化されない全体も仮定しない。協働的に構造化された全体においては、他の諸側面がそのように存在しなければどんな側面もそのようには存在しない (IV-Aa)。各側面は、そのすべてがそうであるようなさらなるインプライングである (IV-Ab)。具体的な“諸部分”は、諸プロセスと連関しており (IV-Ac)、それらは同一性を保ちつつバラバラに存在しているのでもなければ、その後プロセスに入るのでもない。(p.41 邦訳50頁)

そして、この協働的に構造化された全体を指し示す概念が「万事連関 (evev)」である。分化された諸プロセスと諸部分は協働的に構造化され、差異化されている。しかもその構造や差異は互いに影響し合い、相互作用しているのである。

単一の生起はすべての差異を包含しており、こうした差異によって互いにつくられた差異、そのまたそうした差異がつくる差異によってつくられた差異を包含している。生起とは、万事は万事によるということ [万事連関] {evev} の相互影響である {Occurring is an interaffecting of everything by everything (evev)}。(p.41 邦訳50頁)

とジェンドリンは言う。

わかりやすい言い方をすると、万事連関 (evev) とは、あらゆることはあらゆることに

よって相互影響されている、ということを表す概念であり、生命体の身体を考えるうえで欠くことのできない観点であると言える。生命体の身体は、機械のようにバラバラに解体して再び組み立て直したり、ある部分を別のものと交換して修理できるようなモノではないからである。しかも、その万事連関 (evev) の複雑で精緻な秩序は、諸プロセスや諸部分の差異の構造以上に秩序的なものであるとジェンドリンは言う。何が実際に生起しうるのかは、生起してみないとその姿は最終的にはわからない。しかし、どのような生起であっても、その生起が万事連関の複雑で精緻な秩序から (によって、の中へ) 生じるものであることは疑いえないのである。

またジェンドリンは、「**万事連関は、生起それ自身以上に時間を費やす (あるいはつくる) ことはない {everything x everything does not take (or make) more time than the occurring itself}**」(p.42 邦訳 51 頁) と言う。さらに、

私たちは時間について問う必要がある。万事連関 {evev} の概念を用いると、あらゆることが一度に生じ、そこには時間がないように思われるだろう。時間については、あらゆることは実際には一度には生じない {**everything does not actually happen at once**}、という事実が指摘されなければならない。(p.43 邦訳 52 頁)

万事連関 (evev) は、協働的に差異化され構造化された全体のメッシュ (網の目) を指し示す概念であり、あらゆる生起の背景であるとも言えるものである。しかしそれもまた、生起によって変化し推進されるプロセスであるという側面もあわせもっている。そこでジェンドリンは、「万事連関化 (eveving)」という用語によって、そのプロセス的側面を言い表そうとする。⁵⁰

“万事連関化 {eveving}” の概念は、差異そのものを仮定せずに、インプライングについて思考する 1 つの方法である。ある新しい全体が形成される中で、すべての差異は、互いに“インプライしながら交差する {**implyingly cross**}” (ここで“交差 {crossing}” の概念を引き出すことができる) が、それは、それぞれがそれ自身としてではなく、す

⁵⁰ プロセスモデルの原著では、「万事連関 (evev)」と「万事連関化 (eveving)」の意味内容の違いについて、特段の具体的な記述は見当たらないが、おそらくはここに示したような違いがあると考えられる。

でに交差しているものとして、他に影響を与えるような仕方においてそうするのである。

(p.41 邦訳 51-52 頁)

さらにジェンドリンは、次のように言う。

インプライングは1つの生起とイコールではない…… [中略] ……。インプライングは常に、環境的な生起がなしうる以上に、より複雑に組織化されており、その意味では、生起よりも精緻なものである。私たちの万事連関化 {eveving} の概念は、この複雑さから語るための1つの概念的な方法である。(p.43 邦訳 52 頁)

f) 焦点化 Focaling、 g-1) 連関 Relevance

万事連関 (evev) のメッシュを背景にして、生命体の身体は、ある行為を生起させる。無数の可能な行為や生起がありうるにもかかわらず、次に生起するのは1つの行為である。プロセスモデルでは、多くの諸プロセスが、ある1つの生起へと方向性をもって収斂していくことを「**焦点化 (focaling)**」と呼ぶ。そして、その焦点化された生起に、多くの諸プロセスが協働し相互作用していることを「**連関 (relevance)**」と呼ぶ。

ジェンドリンは次のような例をあげる。芸術家が未完の絵画の中に線を描き加えようとするとき、彼は“何かが必要だ”と感じている。はじめから彼の中に完成された絵があるわけではない。しかし、ある特別な線だけが、その絵を完成に導くことを彼は暗黙のうちに知っており、実際に描き加えられる線はそうのように焦点化されながら生起する。しかも、そのとき焦点化され生起した特別な線の描写には、他の異なる線の描き方やその他もろもろのことが連関的に関与しているのである。ジェンドリンは次のように言う。

インプライング、万事連関化、焦点化、そして連関化は、“前進的 {forward} ”な関係である。これらは“推進 {carrying forward} ”によってつくられる。振り返ってみて、人はそれらを(さまざまな仕方)で明確にすることができるのだ。しかし私たちは、先にあるきわめて重要な何かを知っている。私たちはプロセスが連関的に形成されることを知っているのである。(p.48 邦訳 58 頁)

なお、ここでジェンドリンは g-2) として、この新しいプロセスモデルと古いモデルについての対比をおこなっている。古いモデル（つまり、生命現象や世界に関する通常の私たちの認識）の特徴は、それが固定的で分割されたユニット（物質を構成する粒子、空間的ポジション、時間軸上の点、など）を出発点にしてすべてを説明しようとするところである。構造やシステムはそうしたユニットから成り立っていて、“可能性 (possibility)” とはユニットの組み合わせ方の差異であるかのようにとらえられたりする。しかしプロセスモデルでは“可能性”についてまったく異なる理解を提供する。プロセスモデルにおいては、インプライミングと生起はまったくイコールではないと考え、しかも生起はインプライミングを変化させるととらえる。つまり、プロセスモデルにおける“可能性”とは、こうした変化するインプライミングの中へ生起が連続していくことである。それは、あらかじめ存在していたユニットの組み合わせによって予測したり、制御したりできるようなものではない。ジェンドリンはプロセスモデルが解明しようとしているテーマを次のように表現している。

私たちは、実際に生起していることが可能性のシステムを変化させることができる {actual occurring could change the system of possibilities} ようなモデルを考えることができるだろうか？ …… [中略] ……問題は、次のような核心的な問いへと突き当たる。すなわち、私たちは生起についてどのように考えたらよいか、という問いである。
(p.51 邦訳60-61頁)

これがプロセスモデルが解明しようとしている 1 つの大きなテーマなのである。

h-1) 交差、隠喩、生起の法則 Crossing, Metaphor, Law of Occurring h-2) 自由度 Degrees of freedom

では、生起——インプライミングの中へ生起すること——においてはいったいどのようなことが起きているのだろうか。プロセスモデルでは、隠喩および交差といった概念によってそれを解明しようとする。

通常、隠喩とは 2 つの異なる事柄の間にある、あらかじめ存在していた類似性に基づい

た表現であると考えられている。AのことをあたかもBのことにように語る場合、Bに見られる特性がAの中にもとから存在していたかのように。これは古いモデルにおける見解である。

プロセスモデルではそのように考えない。プロセスモデルがとらえる「**隠喩 (metaphor)**」とは、AをBのことにように語る（そこに「**交差 (crossing)**」が生じる）ことによって、Aのある側面が以前はそのようには存在しなかったものとして創り出されることである。「**隠喩とは、万事連関化 (eveving) であり、焦点化であり、交差である**」(p.51 邦訳 61頁) とジェンドリンは言う。

交差とは、論理やアルゴリズムを超えた何かである。コンピュータは隠喩を解釈することも生み出すこともできない、と彼は言う。コンピュータには交差がおこなえないからである。隠喩を創り出せる、すなわち交差（万事連関化、焦点化、…）が可能なのは生命体の身体においてのみである。

ジェンドリンはさらに、次のように言う。

私たちは秩序を逆転する (*ECM* [『体験過程と意味の創造』] を参照)。あるいは、より正確に言うと、従来のモデルが秩序を逆転させていたので、私たちはそれを再び正しいものにしようとしているのである。つまり、秩序がどのように生起するのかをそのままとらえられるようにしようとしているのである。(p.52 邦訳61-62頁)

そして続けて、

秩序はインプライングと生起から生じる。生起とは、ある抽象的な秩序に何かを書き込むことではない。“可能である {possible} ”という言葉は、より複雑に使用される必要がある。インプライングと生起の中で可能なものは、あらかじめ決定されているのではない。もちろん、生起したことが生起しえたのだ。それが生起したから、それは可能だったのである。私たちは、このことを逆転させて、次のように言うことができる。所与の結節点で生起しうるものが、生起したのだ。私はこれを“生起の法則”と呼ぶ {**What could occur at the given juncture, did. I call this the "law of occurrence"**}。(p. 52 邦訳62頁)

と言う。

生起の法則とは、実際に生起しうるものは何であるのかについてのプロセスモデルによる公理的規準である。私たちは通常、あることが起こるべくして起こったかのように認識し、それが生起する以前からその生起の姿を知っていたかのように語る。しかし、どんな生起も、それが生起するまでは明瞭にその姿をあらわしていたわけではないのである。つまり、プロセスモデルで言う秩序とは、あらかじめ規定されている抽象的でリジッドなものではなく、生起の法則にしたがって次々に生成され推進されていくプロセスの秩序である（ある生起やプロセスが生起の法則に沿っていない場合、そこに生じるのは身体の混乱である）。

またジェンドリンは、「自由度 (degrees of freedom)」という言葉を用いて、いかに複雑な事象が精緻な秩序をもって生起するようになるのかを原理的に示そうとする。どういふことかと言うと、古いモデルでは、秩序とはユニット間の関係についての公式化であり、生じうるものに対する制限であると考えられてきた。したがって、決定因が多ければ多いほど生じうることはより公式化され、新しさや自由度は残らなくなってしまうと仮定されてきたのである。例えば、自動車のさまざまな部品がコンピュータ制御されるほど、安全な一定スピードでの走行だけが可能になるように。しかし生命体やその身体においてはそうではない、とジェンドリンは言う。高等動物であればあるほど、より多くの複雑性や多様性を示すし、人間もたくさんのかたちを理解するほど、次の生起により多くの複雑性を持ち込むことができる。つまり、より多くの複雑性のもとでは、より多くのことが交差できるようになり、隠喩的な創造が生まれる可能性も高まるのである。

h-3) スキーマ化することによってスキーマ化される ("sbs") Schematized by Schematizing "sbs" h-4) Sbs の2つの方向 The two directions of sbs

第IV章-Aの最後に創出される概念が、「スキーマ化することによってスキーマ化される (sbs) (schematized by schematizing)」である。これは、万事連関化 (eveving) の中で互いに交差する2つの事柄の関係を指し示す概念である。つまり、Aという事柄や事象がある特別な生起によって新しく推進されるとき、それと交差するBという事柄も相互作用的に新しく推進されていく、という事態を“sbs”とジェンドリンは名づけるのである。プロセスモデルの中で“スキーマ (schema)”という言葉は、「推進された停止 (carried

stoppage)」⁵¹という意味で用いられる。わかりやすく言うと、プロセスにおけるそれまでとは質的な違いをともなった停止の局面のことである。

Sbs の概念は、さまざまな例で語ることができる。例えば身体 - 環境 (環境#2) である生命プロセスは、環境#3 の中で進行しているが、進行している生命プロセスは環境#3 を sbs しており、また生命プロセスは sbs された環境#3 の中で進行している、とすることができる (蜘蛛は蜘蛛の巣にかかった餌との格闘の中で、そしてその結果として、微妙に蜘蛛の巣のはり方を変えていく、というように)。

またジェンドリンは、現在は過去を sbs する、とも言う。現在の生起や推進のあり様は、過去をこれまで以上に、あるいはこれまでと違った形でスキーマ化する、ということである。このようにして過去は現在の中で新たに機能することができるのである。また、過去が現在を sbs しているとも言える。過去のある生起のあり様が、現在の生起に影響を及ぼしていることも疑いえないからである (時間については、次のIV-Bで詳しく論じられる)。

(2) IV-B 時間:環境#2 と環境#3、生起とインプライミング (Time: En#2 and En#3, Occurring and Implying)

第IV章のBでは、時間の問題がプロセスモデル独自の視点から論じられる。

ジェンドリンは次のように言う。

私たちの時間のモデルを発展させるためには、私たちは、生起 {occurring} とインプライミング {implying} を、環境#2 {en#2} と環境#3 {en#3} に、そして身体 {body} に関係つける必要がある。そうすることで、時間はこれらから出現できるのである。“生起”の観点によって現在が、“インプライミング”の観点によって未来が見えてくるだろう。また、“環境#2”の中にある現在、“環境#3”の中にある過去が見えてくる。そして身体は、これらのいずれでもある。私たちがこれらの用語から時間を概念化するときには、現在、未来そして過去は、従来のモデルとはまったく違ったものになるだろう。(p.60 邦訳 67 頁)

彼は、このプロセスモデルの第I章から第V章は基礎的な一般モデルであると言う。第

⁵¹ Ibid., p.19.

VI章以降で、動物の行動、知覚、そして人間の諸機能と諸プロセスが詳細に論じられる。では、なぜこのような論述の順序をとる必要があったのだろうか。先にもみたように、人間の高次な精神機能から先に論じると、生きているすべての生命体の基盤となっている重要なプロセスを見落とすことになってしまうからである。ジェンドリンは次のように言う。

私たちは、生起とインプライングを私たちのモデルの最初に置くことを**選択**し、そしてこれらから知覚や対象を引き出そうとしてきた。私たちはインプライングの中への生起 {occurring into implying} (推進 {carrying forward}) を始まりに置いたが、それは、このことが他のあらゆる用語において本来的なものであるからである。空間、時間、そして知覚はここから生じる。(p.60 邦訳 67 頁)

つまり、“インプライングの中へ生起すること”という生命プロセスの根源的事態を基礎に置かなければ、時間（そして空間）がどのように生まれるのかという問題は解明できない、ということである。

古いモデルにおけるリニアな時間概念では、過去 - 現在 - 未来は、1 つの時間軸上の位置の違いとして考えられてきた。そしてその時間軸は、無限の過去から無限の未来へと向かって同じスピードで進行するものととらえられてきた。しかしこのような時間概念は、ある種の虚構に過ぎず、またどのようにして時間というものが生まれるのかについては、古いモデルでは解明することができなかった。

プロセスモデルでは“インプライングの中へ生起すること”という、生命プロセスの根源的なあり様から、時間の生成をとらえようとする。ジェンドリンは次のように言う。「ある何かは、インプライングの中への生起においてそれが機能するあり様によって、過去、未来あるいは現在である。(ここでの過去、そして未来は、身体それ自身のプロセスの内的な連続性である。)」(p.62 邦訳 69 頁)と。

プロセスモデルにおける時間とその生成に関する論述はきわめて難解であるが、それを大づかみにとらえると、次のように言うことができるだろう。

まず、ジェンドリンは、“インプライング”と“生起”は、身体のプロセスの 2 つの撚り糸 (strands) だと言う。

インプライングはある種の未来、そして生起はある種の現在であるが、…… [中略]

……これらは通常の種類未来や現在ではないことが私たちにはわかるし、そして過去とは（これら2つの中で機能するものではあるが）また違った何かであるということもわかってくる。（p.62 邦訳 69 頁）

生起はつねに現在生じるものである。その意味で、生起とは現在である、と言える。しかし、生起は必ず“インプライングの中への生起 (occurring into implying)”として生じるので、現在はつねに未来への推進として生起しているのである。つまり、未来と切り離された現在はない、ということである。

一方、インプライングは生起を生み出すという意味で、未来であると言える。「インプライングはどんな1つの生起よりも複雑である。したがってインプライングは、生起するであろうもの {what will occur}、という意味感覚で“未来”なのではない。」（p.62 邦訳 69 頁）とジェンドリンは言う。インプライングは生起とまったくイコールではない。生起はインプライングの中へ生じるが、実際の生起がインプライングのすべてではないし、また、生起はインプライングを変化させ推進させる。プロセスモデルにおける未来とは、直線的な時間軸上の現在よりも先にある数学的な位置のことで、生命体の身体と切り離されたところで進行する歴史や予定調和（あるいは世界の消滅）の物語のことでもない。未来とは生命体の身体におけるインプライングのことであり、生起の法則にしたがって推進される“インプライングの中への生起”が、生命体に時間をつくり出す、とプロセスモデルでは考えるのである。すなわち、時間とは身体プロセスから生み出されるものである、ということである。ジェンドリンは次のように言う。

変化する身体 {the changing body} が時間——その中で身体は、身体自身を“同じもの”として再生する——を生み出すのだ。身体は、記憶された、比較された時間の中だけで持続しているのではない。身体はただ持続しているのではない。何よりもまず、身体は、それ自身の変化が生まれる時間の中で持続しているのである。（p.64 邦訳 71 頁）

では過去とは何なのだろうか。プロセスモデルでは、過去もまた身体が生きることによって生み出され織りなされるものである、ととらえる。過去とは、身体から切り離された、時間軸上の現在よりも前の位置のことで、あるいは文献や映像に記録された歴史のことでもない。

過去とは身体である。身体は幼少期の傷跡をもたらすものである。身体は昨夜の二日酔いをもっている。身体は、私の過去の諸経験、そして民族や種としての諸経験をもっている（である）。……〔中略〕……身体のはほとんどは、新鮮に再生され続けなければならない。身体は、循環が停止するとその瞬間に崩壊し始める。……〔中略〕……生きている中では、身体は再生されることを維持している。（p.62 邦訳 70 頁）

身体 - 環境の蓄積的で構造的な側面である環境#3は、それが生命プロセスの推進の中で織りなされてきたものであるという意味で過去であると言うことができる。しかしプロセスモデルでは、そのような環境#3としての過去を、環境#2（現在）から切り離されたものであり、過ぎ去った何かであるとは考えない。環境#3（手づくりの環境、馴染みの環境）は、静止した蓄積物や構造ではなく、絶え間なく生み出されているものである。「過去の環境#3の身体は、もしもそれが環境#2として進行しないなら、崩壊してしまう {The past en#3 body disintegrates if it is not gone on in as en#2} 」(p.65 邦訳72頁) とジェンドリンは言う。また彼は、「環境#3は現在の中の過去 {a past in the present} として機能する」(p.66 邦訳74頁) とも言う。

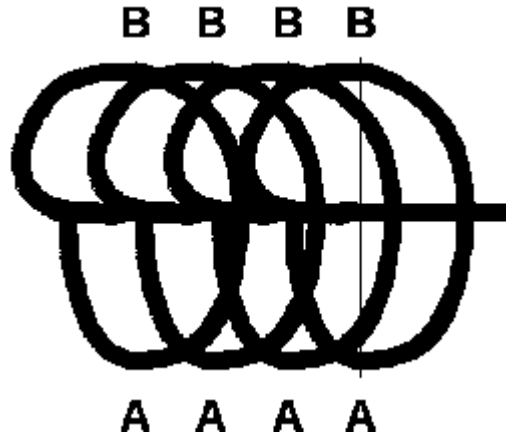
このように、プロセスモデルでは現在、未来および過去を身体プロセスの複雑で精緻なあり様から生み出されるものとしてとらえるのである。

生起は身体 - 環境#3 を再生する。生起また、インプライングおける変化でもある。その環境#3 の身体が過去において機能するあり様が過去である。インプライングの機能するあり様が未来である。生起は、過去と未来を変化させる {Occurring changes the past and the future} 。 (p.70 邦訳 78 頁)

とジェンドリンは言う。

彼はこの章の最後で、なぜ時間は直線的に進行していくリニアなものであるととらえられがちなのか、という点について、次のような比喩的な図を用いながら説明を試みている。

プロセスモデルでは、インプライングの中へ生起することによって時間は生み出されると考える。その動きを示したものが次の図である（シータの図）。



この図の A と B はリニアな時間軸を仮定すれば、同じ時間の点になる。しかし、実際の生起はシータの文字を書くときのように、A から B を通りつつ、つまり未来および過去と交差しつつ（インプライングの中へ）生起しているのである。

こうした生起の連続が停止することなく進行するとき、シータの図は 1 つのストライプとなり、リニアな時間軸としてとらえられるようなる、とジェンドリンは指摘する（下図参照）。このようにして、私たちは時間を直線的なものとしてとらえようとするのだが、実際には上のシータの図のように、未来および過去と交差しつつ（そしてそれらを変化させながら）生じるのが時間なのである。



4. プロセスモデル第V章 進化、新しさ、安定性 (EVOLUTION, NOVELTY, AND STABILITY)

第V章では、基礎的な一般理論の最後のテーマとして進化と安定性の問題が扱われる。そのAでは、“新たな精緻な事象はどのようにして生まれるのか”という問いが、またBでは、“安定した身体 - 環境のコンテキストはどのように発展するのか”という問いが考究される。

(1) 第V章 - A 介入する事象 (Intervening Events)

ジェンドリンは第V章の冒頭で、「私たちの新しいモデルによって、進化論 {the theory of evolution} の概念を発展させることができるだろうか？」(p.74 邦訳 82 頁)と問いかける。生物の進化を説明しようとする進化論は、ダーウィニズムの登場以降、さまざまな考え方や概念を発展させてきた。しかし、自然淘汰や適者生存といった概念では十分に説明できない現象も多く指摘されており、いまだ進化のプロセスは謎に包まれている点が少なくない。近年では、ランダム理論 (“ランダムな” 変化によって新しい形態が生まれる、という考え方) が有力であるが、ジェンドリンは、ランダム理論は (細胞や身体構造などの) ユニット間の関係としてのみ秩序をとらえようとしているという点で古いモデルの産物である、と言う。

ではプロセスモデルにおいて、生命体の進化はどのようにとらえられるのだろうか。

ジェンドリンは、“新たな精緻な事象はどのようにして生まれるのか”という問いは、“生命体は環境への新しい感受性をどのように発展させるのだろうか”、と言い換えることができると言う。

そしてこの問いに答えるためには、新しい事象、しかもそれまでのものとはかなり違った事象が身体のプロセスの中でどのように発展するのかについて考えなければならない、と彼は言う。第IV章では、あるプロセスが停止するとき、停止したプロセスと進行するプロセスへの分化が生じ、プロセス間の分化と協働という発展が生じることがとらえられたが、そこで生じる相違は微細なものであるかのように論じられたからである。しかし、プロセスの停止がもたらす相違は、ときに進化につながるような大きなものであることもあ

る。プロセスの停止によってもたらされる相違が、とても大きな新しい事象になりうるということを念頭に入れなければならない、とジェンドリンは指摘する。

そしてここで、

新しい諸事象は、私たちが“停止したプロセス {the stopped process}”と呼ぶもの
それ自身の中で発展することができる。(p.75 邦訳 83-84 頁)

という、進化と新しさの発展を解明するための公理的見解が提案される。これはいったい
どのような意味なのだろうか。

彼は、新しい事象が発展する筋道には、大きく分けて2つの種類があるという。

第1の様式を説明する概念として創出されるのが「リーフィング (leafing : 葉体化、葉
状化)」である。ジェンドリンは次のように言う。

プロセスが継続できない地点で、生じることができる最後のビットが繰り返し生じる。
これはよく見られることである。私たちは、この繰り返し生じているビットを、進行す
ることができないそのプロセスの最初のビットであるとも考えることもできる。生起でき
るのはこのビットだけであり、そしてそれは繰り返し反復する。(p.75 邦訳 84 頁)

ここで言う“ビット (bit)”とは、プロセスの停止によってもたらされる、反復する生
起のひとまとまりのことである。ジェンドリンは次のような例をあげる。例えば、部屋
の中から外へ出ようとして、窓ガラスに何度もぶつかる虫。あるいは、ガラスの仕切りをは
さんで闘いをしようと腕を振り上げ、歯をむき出しにする2匹の雄猿などである。ここ
では、虫が外へ飛び立つプロセスは生起せず、しばらくは窓ガラスにぶつかるというビ
ットが反復し、またガラスをはさんだ猿にはケンカのプロセスは生起せずに、闘いの始
まりのビットが繰り返される。こうした例では、ガラスという人為的な環境が生命体
の通常のプロセスを停止させているのだが、私たちの身体プロセスの中には、こうした
反復するビットに類似した例を無数に見出すことができる。

ジェンドリンは次のように言う。

自然は、繰り返し反復する、同じような、しかしまったく同じではない、諸ビットの

たくさんの実例を示してくれる。心臓の鼓動、まばたき、神経インパルスなどがそうであり、そして構造的にもそうである。生命体の“サブプロセス {sub-processes}”の概念 (IV-Ac) は、このことが身体の構造——皮膚の細孔、毛髪、樹木の葉といったもの——の中に反映されているあり様を、私たちに考えさせる。私はこうした介在する生起 {intervening occurring} を、1つの動詞として用い、それを“リーフィング {leafing}”と呼ぶ。(p.76 邦訳85頁)

リーフィングとはリーフ (leaf : 葉) を動名詞化した、プロセスモデル独自の概念である。これはおそらく、次々と芽吹く葉々——しかも、まったく同じ形や模様の葉は決して存在しない——のアナロジーから概念化されたもので、生命体における生起や構造に見られる、ほとんど同じであるがまったく同じではないビットの反復という事象を指す用語である。私たちの呼吸や歩行などを考えてみても、日々ほとんど同じビットの繰り返しであると同時に、1つひとつのビットはどこか微妙に違った新鮮な生起でもある(したがって、長いタイムスパンをとおして見るとかなり違った生起になる)。また構造的にも、指紋がまったく一致する人間がないように、ある個体の骨格や顔つきや声質など身体構造は、他の個体とよく似ているが、しかしまったく同じではない無数の構造によって成り立っている。ジェンドリンは、このリーフィングという概念によって、こうしたほとんど同じであるが、まったく同じではない新鮮な生起によって形づくられる身体プロセスの継続の様式、そしてその進化の可能性を指し示そうとするのである。

例えば、窓ガラスにぶつかることを繰り返していた虫は、しばらくたつとそうした飛び方の反復をやめて、ガラスの表面を這うように動く。また、ガラスにじゃまされて相手を攻撃できない猿は、攻撃行動とよく似てはいるが、少し違った身体の動かし方をするようになる(例えば相手を威嚇するような)。つまり、こうしたビットの反復、その律動の中で新しい生起への推進ないしは焦点化の可能性が高まる、ということである。ジェンドリンは、リーフィングの中でインプライされているものへの感受性が高まり、引き続き生じるプロセスのインプライングが微妙に違ったものに変化する、という言い方をする。こうしたリーフィングによって、私たちの身体の機能と構造は絶え間なく変化し発展しているのである。

次に、新しい事象が生じる2つめの様式はどのようなものだろうか。「新しい諸事象の2つめの種類は、いわゆる“停止した”プロセスの中で生起する」(p.78 邦訳 86 頁) とジ

ジェンドリンは言う。そして、ここで創出される新概念が「**介入する事象 (intervening events)**」である。

これはどのような事態かという、それまで機能する循環として継続していたプロセスが、ある身体 - 環境の大きな変化にともなって停止してしまうような場合である。ジェンドリンは次のような例をあげる。陸上を歩いていて水の中に落ちてしまった動物は、地面から受ける抵抗や圧力がなくなり、かわって水の圧力を受けることになる。そしてそこでの動きは、それまでとはかなり違ったものになる。私たちはそれを、“もがくこと (thrashing) と” 呼んだりするが、それはある新しい継続であり、停止した歩行にすぐに引き続いて生起する事象である。ここで生じるのは、それまでの歩行の連続でもなく、かといってまったくの混沌でもない。それは新しいまとまりと秩序をもった事象である。

このような新しい事象の形成は神秘でも偶然でもない、とジェンドリンは言う。プロセスモデルの視点からは次のようにとらえることができる。すなわち、それまで継続していた歩行が停止したとき、インプライされた歩行と水が相互作用することで“もがくこと”が形成されたのである。では歩行はどうなったのか。

それは、もがくことの中にあるが、文字通りあるのではなくて、あるインプライングとしてあるのだ。これまでも述べてきたように、インプライングは、ある特定の顕在的な形式ではない。今、この単純な例の中で、私たちはそのことを明確に見た。歩行そのものは生起していないが、インプライされた歩行が、もがくことの形成に関与しているのである {**The implied walking participates in the formation of thrashing, yet the walking does not occur**}。(p.78 邦訳 87 頁)

つまり、ある停止によってインプライされたものが生起できなくなったとき、それは新しい事象の形成の中で機能することができる、ということである。そしてそこで生じることは、それまでのプロセスよりももっと複雑で精緻な事象であるかもしれないのである。

彼はまた、次のような例をあげる。細胞膜に損傷を与える化学物質によって膜が溶解させられたとき、細胞は膜を修復する新しい物質をつくり出す。さらに別の例として、足の一部を失ったカブトムシは、それでも歩き続ける。それまでのレパトリーになかったような歩き方で。第IV章でみたように、身体はそれ自体が死なない限り、新しく継続するプロセスなのである。ジェンドリンは次のように指摘する。

そのカブト虫は、それまでの歩き方から新しい歩き方を発展させるのに、時間をゆっくりと取ることはない。私たちの生起の法則 {law of occurrence} が述べるように、その新しい歩行は、それが可能なときに生起するのである。事象の新たなシリーズは瞬時に形づくられる。私はこの種の新しい事象を、“**介在する事象 {intervening events}**”と呼ぶ。通常のプロセスが停止するとき、こうした事象が介在することができる。(p.79 邦訳88頁)

介在する事象とは、それまでのプロセスが停止し、インプライされたものが生起できなくなったときに生じる、ある種の質的な飛躍をともなった新たな“インプライングの中への生起”である。

プロセスの停止の中で生じるリーフィングと介在する事象。プロセスモデルがとらえる新しい事象の生起はおよそ以上のように説明できる。そして、いずれの事態においても決定的な役割を果たしているのが、プロセスの“停止”である。繰り返しになるが、プロセスモデルにおける停止とは、生命プロセス全体の停止やプロセスがないことを指すのではなく、それまでの仕方では進行しないプロセスの様式を意味する用語である。ジェンドリンは、こうした停止を別の言葉で表現すると、それは「ストップ/オン (stop/on)」とも言えるという。つまり、ここでいう停止とは、ストップすると同時に新たな差異が生まれるような局面のことである。そうした局面において、身体はそれまでとは異なる新たな感受性と事象を生み出すようになる、とプロセスモデルでは考えるのである。

ジェンドリンはさらに、生命体に生じる新しさ (novelty) について論じている。プロセスモデルでは突然変異の概念は採用されない。なぜなら、突然変異というものは、そうした観察事実が十分にあるわけではなく、新しさがなぜ生まれるのかを説明するために用いられる構成概念に過ぎないからだ、とジェンドリンは言う。

それではプロセスモデルでは、生命体に新しさはどのように生じると考えるのだろうか。そこには次のような2つの筋道があるという。1つは、あるプロセスにおける停止（あるいはストップ/オン）が他の諸プロセスと相互影響しあうような事態であり、もう1つは、他の諸プロセスに共有されている環境が変化することで、さらなる変化が生まれるような事態である。

前者の新しさとは、1つのプロセスにおける停止が、他の諸プロセスにも差異を生み出

し、これらがさらに相互影響しあうような場合である。先ほどの例で言えば、水中に落ちて手足をばたつかせている動物は、もがくことによって他の身体的な諸プロセスにも大きな違いが生まれる。その相互影響が全体としての身体の新しい機能や構造を生み出しているのである。

後者の新しさとは、諸プロセスに共有されている環境が変化することで、ある変化がさらなる変化を生み出すような場合である。事象は身体と環境の双方から成っているので、ある停止（ストップ/オン）は、ある変化した環境#2 を作動させる。そしてこのことが他の諸プロセスの環境#2 を変化させる。諸プロセスにとって環境は共有されているからである。同じ例で言うと、水の中に落ちた動物にとってはそのこと自体が大きな環境の変化であるが、それだけでなく、水中で新しい身体の動きをすることによって環境はさらに変化（はねかかる水が目や呼吸にどう影響するか、など）。こうして、身体 - 環境の全体に新しさがもたらされるのである。

ジェンドリンは、新しさが生じるときには、身体の諸プロセスの相互影響と共有されている環境の変化が一度に起きる、と言う。身体とは、そのような新しさを生み出すことのできる何かなのである（例えば、特殊な巣箱の中に入れられたミツバチは一代で身体の構造や機能を変化させることが知られている）。プロセスモデルにおいては、生命体とは、プロセスの停止という事態の中で環境への感受性を高め、継続的に発達と進化を遂げていく身体をもった存在であるととらえられている。生命体の進化という現象を、プロセスモデルはこうした観点から解明しようとしているのである。

以上のようなプロセスモデルの進化の考え方について、ひとこと解説めいたことを付け加えるならば、次のように言えるだろう。ジェンドリンは、適者生存や自然淘汰によって進化が起きるとは考えていない。こうした考え方には、次なる進化にふさわしい個体の選別ということが暗に意味されており、個体間の優劣が安易に論じられかねないという問題が潜在している（これはダーウィニズムが招いた選民思想などの社会的進化論の悲劇と無関係ではない）。また一方で、プロセスモデルは突然変異の概念も採用しない。一個あるいは少数の個体の突然変異がその種全体の進化をもたらす、という考え方は、一見合理的であるようだが、そうした観察事実はほとんど報告されていないとジェンドリンは指摘する。例えば、今後ヒトという種の一部に突然変異が生じるのだろうか。そうでなければヒトという種に進化は生じないのだろうか。プロセスモデルはこのようなとらえ方とはまったく異なる、進化についての新しい認識を提案していると言える。それは、進化はあらゆる個

体の生きているプロセスの中で、そして個体間の相互作用においてつねに生起している、という認識である。どういうことかと言うと、身体生命プロセスそのものが進化的な連続であり、またインタラクションファーストの観点からすれば個体間の相互作用によって、進化はつねに総体的に生み出され続けている、と考えられるのである。

プロセスモデルでは個体の死や、あるいは遺伝の問題についてはあまり触れられない。しかしそうした問題に触れなくても、インタラクションファーストの観点からすればあらゆる個体は万事連関 (even) の中で相互作用しているのだから、ある個体の生命プロセスの進化的推進 (あるいは、例えばある個体の死によってもたらされるインプライング) は、当然他の個体へ影響を与えないはずがない、と考えることができるだろう。

(2) V-B 安定性：開かれた循環 (Stability: The Open Cycle)

第V章のBでは、生命体が自らを精緻化し、発展させ、進化させながら、しかし同時に、いかに安定性を獲得し維持することができるのか、という問題が論じられる。

V-A でみたように、生命体はリーフィングと介在する事象によって新しさや精緻さを獲得していく。そしてこの新しさや精緻さを獲得することと同時に (つまりリーフィングや介在する事象の中で) 安定性を維持できるようになる、というのがプロセスモデルの見解である。これはどういうことだろうか。

ジェンドリンは、リーフィングおよび介在する事象によってもたらされるのは、II でみたようなシンプルな機能的循環ではない、と言う。リーフィングは、まったく同じビットの繰り返しではなく、わずかに違ったヴァージョンの反復であり、その連続であるので、そこでインプライされるものも微妙に変化していく。また、介在する事象は、停止したプロセスそのものの再開ではなく、新しい特別な種類の推進であるので、機能的循環そのものとしてはとらえられない。

リーフィングおよび他の介在する事象は、それ自身が機能的循環なのではない。……
[中略] ……その新たな精緻化は、それ自身ではどこにも進んでいかない。あるいは、次のようにも言える。すなわち、それらはブルーの中へ {into the blue} 進んでいく、と。(p.85 邦訳 94-95 頁)

ここで言う“ブルー”とは、青空や青海の広がり（もちろん比喩的な意味で）のことであり、はるかな遠方、未知の領域といった意味であろう。イメージとしてジェンドリンは、川が新たな支流をつくろうとするさまを例にあげる。そこで流れは停止しているが（正確に言うと、停止と新たな動きを同時にもったストップ／オンである）、しかし少しずつ水は四方へ広がってセクター（sector：扇形状の広がり）を形成する。

「IIで見た機能的循環 {functional cycle} が円環であった…… [中略] ……のに対して、この新しい反復するクラスターは円環的なものではない。その代わりに、この反復する文脈は開かれている {open}。」 (p. 86 邦訳 95 頁) とジェンドリンは言う。そして彼は、これを「開かれた機能的循環 (open functional cycle: opfucy)」、あるいは「開かれた循環 (open cycle)」と名づける。この開かれた循環の中で、生命体は安定している（つまり「反復するコンテキスト (reiterative context)」の中にいる）と同時に、新しさに開かれているのである。「開かれた循環は、私たちのモデルにおいて初めて、ある安定性 {stability} を提供する。」 (p.86 邦訳 95 頁) とジェンドリンは言う。

開かれた循環というものをどのようにとらえればよいのだろうか。反復するリーフィング、および介在する事象（その結果生じる新たなストップ／オン）においては、さらなる何かが生起することがインプライされながら、さらなる何かが生起しない間は、ほとんど同じ反復が繰り返される、ということである。例えば私たち人間の手は、機能的循環の一部としての動物の手でありつつ、それをはるかに超えた開かれた循環でもある。私たちの手は、食べ物を食べたり子どもの手を握ったりするだけでなく、さまざまな道具をつくり、文字や絵画を書き、コンピュータを通じて世界と交信するような、はるかなる（ブルーへと広がる）循環に開かれている。ただし、つねに手はそうした機能をつかさどっているわけではなく、そうしたはるかな開けを暗黙のうちにもちつつ、しかも手として安定しているのである。

このように考えると、人間のみならず複雑な身体構造や行動パターンを示す生命体のプロセスは、シンプルな機能的循環という安定性から成り立っているというよりも、こうした開かれた循環という複雑さと新しさに開かれた安定性の中で進行している、ととらえることができるだろう。そしてこのようにとらえることで、安定性の中にじつはきわめて複雑なプロセスの分化と協働、動きと流れが含まれており、そして変化と進化への開けが暗在しているのだ、という認識がもたらされるのである。

ジェンドリンは、従来のモデルではユニット間の力関係や組み合わせから変化を説明し

ようとして、そしてうまく説明できなかつたと言う。プロセスモデルでは逆に、「静的に見えるものを、プロセスから、すなわち反復する変化のパルスからどのように引き出」(p.87 邦訳 96 頁) せるかが問題なのである。彼は例えば、目で何かを見るということも、視覚という安定した受容器によるインプットであるかのように考えがちであるが、実際には律動的なスキニングの連続である、という例をあげる。たしかに眼球の動きが静止させられると、私たちが何かを見ることの一部は機能しなくなる。

律動的でありつつ同時に安定している開かれた循環、その反復するコンテキストは、生命体の身体に安定したセクター (広がり) を形成するようになる、とジェンドリンは言う。そして生命体の身体 - 環境が変化するとき、この安定したセクターはその変化を“記録する (register)” ようになる。つまり、安定したセクターは“レジストリ (registry : 記録の蓄積)” としての働きをもつようになり、生起した事象や環境の変化が身体により多くの複雑な変化をもたらすようになる、と彼は述べる。

このような、より複雑な変化を通して、生命体は行動、知覚、感情といったものを獲得し発達させることになるが、そういったテーマは、次の第VI章の中で詳しく論じられる。

5. プロセスモデル第VI章 行動 (BEHAVIOR)

第VI章では、これまでのI～Vで構築された基礎的な一般理論の土台のうえに、生命体の行動がどのように出現し発達するのか、そして行動空間がいかに形成されるのかという問題が考究される。

(1) VI-A 行動と知覚 (Behavior and Perception)

これまでの古いモデルにおいては、動物や人間の行動が論じられるときに、本来であれば密接に関連するものとして考えられるべき多くの重要な特性——生命、動機づけ、意識など——が切り捨てられていた、とジェンドリンは指摘する。例えば行動主義の心理学のように、行動のメカニズムや連鎖だけを公式化しようとする、そこでは生命体に生じている行動以外の重要な特性や側面が見落とされてしまう。

プロセスモデルでは、生命体のいわゆる未分化で始原的な現象と、人間の言語や意識といった高次の現象とを別個のものとしてはとらえない。そこには大きな質的な差異とともに、しかし確かな連続があると考えるのである。こうした観点からプロセスモデルでは、行動とは一方では身体プロセスのうえに成り立つものであり、他方では知覚や意識といった一般に行動以上の精神機能と考えられているような現象とも密接に連続するものであるととらえられる。「知覚は常に行動の部分であり、そして行動とは身体プロセスの特殊な種類である。」(p.90 邦訳 99 頁) とジェンドリンは言う。

それではプロセスモデルにおいて、生命体はどのようにして身体プロセスの中から行動や知覚を生み出すと考えるのだろうか。

このモデルでとらえられるプロセスとは、基本的に“インプライングの中へ生起すること (occurring into implying)”であり、そのプロセスにおいてインプライングはつねに変化に開かれている。そして第V章において、こうしたプロセスが“開かれた循環”という安定したセクターをもつようになることが論じられた。開かれた循環というもののイメージはなかなかつかみにくいだが、例えば、環境との間で多くの相互作用を起こしながら生命体の変容していくような場合を考えてみよう。さまざまな環境の変化に複雑に応答する中で、生命体は多様な環境の変化に対応できるような、そしてまだ出会ったことのない変化

にも対応できるような“開かれた循環”の身体プロセスを包含するようになる。いまだある新しい変化に出会わないときには、その変化に出会ったときに生じるであろう身体プロセスは“停止”したままである。しかしそこには“停止”だけがあるのではなく、開かれた循環としてさまざまな身体 - 環境の変化との相互作用も生起している。ジェンドリンは、こうした開かれた循環（その安定したセクター）は身体 - 環境の変化を「記録する（register）」働きをもつようになる、と言う。変化が身体——そのプロセスおよび構造——に刻み込まれる、ということである。生命体は、安定したセクターとしてその中に数多くの身体 - 環境の変化を記録しつつ、新たに出会う変化にともなうであろうプロセスを停止させている。そして新しい変化に出会ったとき、その生命体にはそれまでに見られなかったようなプロセス——例えば変化を先取りするような、あるいは自らを動かすような——が生起する。このようにして、生命体に“行動”と呼ばれるような新しい動きの可能性が高まるのである。

またジェンドリンは次のように問う。生命体ではない石も環境の影響を受け、それ自体に影響を刻み込む。しかし石が環境の変化を知覚するとは言わないし、石は行動もしない。一方、生命体、その身体はただ影響される以上のものである。その違いは何なのだろうか。生命体は、身体に刻み込まれ、記録される変化を通して、つまり身体的なインパクトを通して、変化した身体と生命プロセスそれ自体を「知覚する（percept）」ようになる、と彼は言う。古いモデルでは知覚を、感覚器官を通して受容される受動的な取り入れであるかのように考えていたが、プロセスモデルでは知覚というものを、行動と切り離すことができないう動的な働きであるととらえるのである。

生命体は、開かれた循環という安定したセクターの中で自らの身体と生命プロセスを知覚し、新たな環境の変化との出会いにおける生起を用意する。環境の変化はすなわち身体の変化でもあるので、新しい生起は身体の変化をともなうことになる。そしてこうした身体の変化もまた記録され、その変化の「レジストリ（registry：記録の蓄積）」は、身体プロセスおよび身体全体に影響を及ぼすようになる。こうした身体 - 環境の増大する変化と、そのレジストリの蓄積、そして変化する身体の知覚の発達、これらによって新しい種類の連鎖が生じる、とジェンドリンは言う。

身体は、身体がどのように環境#2の中にあるのかということにおける変化を通り抜けるようになる。そしてその変化は、開かれた循環のセクターの中にある身体のあり様を

変化させている。開かれた循環の変化はどれも、身体をさらに変化させる、そしてこのことが再び、その開かれた循環の中にある身体のあり様を変化させるのである。身体は、新しい種類の身体環境 {b-en} の変化の連鎖を通して、自分自身を動かすようになる。……〔中略〕……身体はそれ自身を変化させ、その変化を通してそれ自身を動かす。私たちはここに、行動を引き出す！ {We have derived behavior !} (p.92 邦訳101頁)

プロセスモデルにおいてとらえられる行動とは、身体プロセスの特別なケースであるとも言える。つまり、行動とは身体プロセスとの連続によって生起するものである。しかし同時に、行動はそれまでの身体プロセスとは大きく異なる複雑なプロセスでもある。行動においては、身体が動くので、あるプロセスの停止が身体の動きとともに存在しうるのである。例えば空腹の猫は、飛んでいる鳥を見つけて追いかけるが、周囲の環境は猛スピードで変化する中で、猫は鳥を安定したものとしてとらえている。しかし実際に猫がその鳥をつかまえて食べるまでは、鳥を食べるというプロセスは停止したままである。しかもその停止——同時に追いかけるという行動が生起している——の中で、猫は鳥をつかまえ食べることに関連したインプライングへの感受性を高めていくのである。

行動が身体プロセスの特別なケースでありながら、同時に新しい種類の連鎖でもあるということ、ジェンドリンは「二重の (double)」(インプライング、生起、プロセス、……) という形容詞で表現する。この言葉は、あるインプライングや生起の中に存在する重層性を指し示そうというプロセスモデルのキーワードの1つであり、このVI章以降たびたび使われるものである。

ジェンドリンの考究はさらに進められる。

身体は、それがどのように動いたのかについてのレジストリの影響として、さらに動いていく。身体は動く、そして身体が何をしたのかを再 - 認識することによって影響される。その連鎖の各ビットは、それがまさにどのようにあったのかについての身体的インパクト {the bodily impact} (そのレジストリ) を包含する (によって形成される)。私たちは、身体が、身体自身がやっていることを感じている {the body feels its own doing}、ということが出来る！ 私たちは、このことを“感情 {feeling} ”と呼ぼう。(p.94 邦訳104頁)

これまで、私たちが感じる“感情”については、その真の意味が理解されることはほとんどなかったし、多くの場合、感情とは曖昧で不明確な内的不透明体 (opaque) のようなものとしてとらえられてきた、と彼は指摘する。感情はどのように生じるのか、また、なぜ感情は多くの重要な情報をもたらすことができるのか、といったことは謎であったのだ。ジェンドリンは、“感情”とはつねに、ある種の行動の連鎖の部分であり、身体的インパクトの連続によってつくられる変化のシリーズである、と言う。彼は、「感情はそれ自身、ある変化のプロセス {a change-process} である。それは、名詞としてではなく、動詞として——連鎖として——考えられるべきものである。」(p.95 邦訳104頁) と言う。

プロセスモデルがとらえる感情とは、環境的な刺激によって引き起こされる受動的な反応ではなく、また、行動や身体プロセスと切り離されて存在する内的で主観的な心的状態のことでもない。“感情”とは基本的に、身体がどのように動き、行動しているかということの連続から生まれる身体感覚であり、したがってそこから生命体にとっての重要な情報——しかも変化の連続としての動的な情報——がもたらされるのである。こうした感情を、ジェンドリンは「**行動の中の感情 (feeling in-behavior)**」と呼ぶ。彼は、顕在的な行動とともなわないで生じるような感情の存在も認めているが(それは第Ⅶ章以降で論じられる)、感情はまず、こうした“行動の中の感情”として出現すると考えられるのである。

また彼は、次のように述べる。

感情の中で、身体は“それ自身を感じる”が、他のさまざまな対象の中のある、1つの対象であるかのように身体を感じるのではない。むしろ身体は、身体が何をなしたのかを再-認識することによって、その環境を感じるのだ。感情とは、身体がまさになしたことのインパクトのシリーズである。感情とともに、身体はそれが何で“あった”かのインパクトそのものであるだけでなく、そのインパクトを感じるのである。これが**感受力 {sentience}** である。私たちはここに、**意識を引き出す！！ {We have derived consciousness !!}** (p.95 邦訳105頁)

ここでジェンドリンが言う“意識”とは、生命体がとらえる自己の姿の鏡映的な認識のことでも、他者の目を通して見られる客観的な自己像のことでもない。そうではなくて、身体的インパクトの連続から生まれる感情は、さらにそれ自体がそのインパクトをレジス

トリの中に刻み込み、その蓄積によって“センシエンス（感受力）”と呼べるようなセクターを形成し発展させる。これが“意識”というものの始原的な出現のあり様である、とプロセスモデルでは考えるのである。

このようにとらえることによって、意識は身体プロセスや行動、感情と連続的かつ密接に関連した事象であることが明確に理解できる。すなわち、意識とは生命プロセスや身体プロセスと切り離されたところに存在する内的表象なのではなく、センシエンスあるいは「自己レジストリ（self-registry）」——自らの身体の動きとそこでの感情のインパクトの蓄積——と呼べるようなセクターから発達する何かなのである。

さらにジェンドリンは、“知覚”とは何なのかという問題に戻り、次のように言う。

開かれた循環におけるレジストリのシリーズ（自ら発達する環境 {the home-grown environment}）——それは何だろうか？ ああ！ 開かれた循環の表出のシリーズ、それが知覚である！ {The series of open cycle renditions is perception!}（p.96 邦訳105頁）

知覚とは、感覚器官による外界刺激の受動的な受容でも、環境の静止画像的な取り入れでもない。そうではなくて、自らの身体が動くことを通して蓄積される開かれた循環におけるレジストリの、その細部や陰影を含んだ複雑な全体が連続的に動的に表出されることが、“知覚”と呼ばれるものの本来の働きである。例えば、空を飛ぶ鳥が知覚する山や谷は、飛ぶという行動によって開かれている空間の動的な流れの中にあり、野を駆ける犬が知覚する山や谷は、走るという行動が切り開く空間に連続的に広がっているものであるはずだ。ここで両者が知覚する山や谷が同じものか、と問うのはナンセンスである。それらは静的な画像のようなものとして同じとか違うとか言えるようなものではない。知覚とは行動によって推進される環境の動的で連続的な表出であり、その変化である。

知覚は、取り入れ {an in-take}、受信 {a reception}、静止画像 {a still photo} といったものではない。それは、知覚されつつある環境の中で進行していくことである {It is the going-on-in the en that is being perceived}。（p.96 邦訳106頁）

とジェンドリンは言う。このような意味で、知覚とは本来的に「行動の中の知覚（feeling

in-behavior)」である（後に、顕在的な行動をとまわらないで生じる知覚についても考察されるのであるが）。

以上論じられてきたような、感情、知覚そして意識とともにある行動は、その発達と精緻化、複雑化とともに環境#2 および環境#3 のあり様を飛躍的に変化させる、とジェンドリンは指摘する。そしてここに形成され、発展するのが“行動空間”である。

(2) VI-B 行動空間の発展 (The development of Behavior Space)

第VI章のBでは、行動する動物にとってその行動空間がどのように発展するのかという問題が、ここでもまたプロセスモデル独自の新概念の創出とともに考究される。

1. 動機づけ (Motivation)

ジェンドリンは次のように言う。

いったんある行動の連鎖が生起すると、その連鎖は1つの全体としてインプライされるようになる。これは、行動だけの新たなインプライングではなくて、身体プロセスの部分——その中で行動は、ある迂回 {a detour}、何らかの身体プロセスの停止の、ある停止の諸ヴァージョン {versions of a stoppage of the stoppage of some body-process} のひと繋がり——である。身体は身体プロセスの再開をインプライするので（それは行動の最後に生じる）、その連鎖全体がインプライされるようになる。ここに私たちは、“動機づけ”を引き出す。(p.100 邦訳 110 頁)

わかりやすい例で言えば、獲物をつかまえる行動の連鎖を獲得した動物は、その連鎖の全体をインプライングとしてもつようになる、ということである。しかし、獲物をつかまえるという行動は、獲物を食べ空腹を満たすという身体プロセスそのものではなく、その一部であり、迂回であって、しかも行動の生起中はその身体プロセス（獲物を食べる）は停止している。だが同時に、行動という迂回によって、空腹を満たすというプロセスの再開が生起するのだ。このようにして、(獲物を食べるという)身体プロセスの停止によって、(獲物をつかまえるという)行動が“動機づけられる”ようになる。そしてこの動機づけ

の中に、複雑な行動の連鎖がインプライされるようになるのである。

2. 交差 - 文脈的な形成 (Cross-contextual formation)

また、ジェンドリンは次のように言う。

新しい行動が形成される時、それは、開かれた循環 {the open cycle} によって、それまで形成されえなかった連鎖のインプライングの中へ生起していくだろう。…… [中略]……古い連鎖は、新しい連鎖の生起の中に暗在している {the old sequence is implicit in the occurring of the new one}。新しい連鎖は、古い連鎖のインプライングの中へ生じるのだ {The new one happens into the implying of the old one}。このことは、古い連鎖は今、新しい連鎖を暗在的にもっていて、新しい連鎖は古い連鎖をその中に暗在的にもっている、ということの意味する。…… [中略] ……どの連鎖も、その“文脈”の諸ヴァージョンのひと繋がりであり、そこには他の連鎖が暗在している {Each sequence is a string of versions of the "context" in which the other sequences are implicit}。(p.101 邦訳111頁)

第IV章において“介在する事象”の例として、水中に落ちてもがく動物の動きをみたが、その動物が水中を泳ぐという、より洗練された行動を獲得したと考えてみよう。この泳ぐという行動の連鎖の中には、もがくという古い行動の連鎖が暗在しており、またそこには陸上での歩行という連鎖も暗在しているのである。そして泳ぐことを獲得した動物にとっては、再び陸に上がって歩くときの歩行の中に、泳ぐことの連鎖が暗在することになる。このように、行動の連鎖はきわめて複雑な“万事連関化 (evening)”であり、そのことをジェンドリンは「交差 - 文脈的な形成 (cross-contextual formation)」と呼ぶ。

3. 行動空間 (Behavior Space)

「いったん多くの行動が生起すると、それぞれの連鎖は、それらの行動の諸万事連関化 {evenings} のひと繋がりから構成される。それぞれの連鎖は暗在的に、自らの連鎖の形成の中に他のものを含んでいる。それぞれの連鎖は、他の連鎖からなるメッシュを推進す

るあり様である。」(p.102 邦訳 112 頁) とジェンドリンは言う。そして続けて「行動文脈は、それぞれの連鎖が生起する際の生起のあり様から成っているので、私たちはそれを、すべての種類の方向性と関係の中で身体がインプライしている、1つの空間 {space}、起こりうる行動の1つのメッシュとして考えることができる。それを“**行動空間 {behavior space}**”と呼ぶことができる。」(p.102-103 邦訳 113 頁) と述べる。

画家が絵の中に、ある特別な線を描くとき、その他のあらゆる線の描き方の可能性においてそれが描かれるという例は、平面上のキャンバスにおける万事連関 (evev) のメッシュをあらわしていた。ここでの「行動空間」という概念は、動物の身体が動き、行動するあらゆる連鎖 (sequences) の諸万事連関化 (evevings) のメッシュのことである。ジェンドリンは、こうした行動空間は虚 (empty) ではなくて、そのメッシュによって“満ちている (full)”と言う。ある行動は、他のあらゆる暗在的な諸行動の諸万事連関化 (evevings) の中で、1つの推進として生起する。そして、それが身体 - 環境を変化させていくのである。

ジェンドリンは「行動空間は“**所有される空間 (had space)**”である」(p.104 邦訳 114 頁) とも述べる。それは知覚され、感じられる空間である。また、対象が出現する空間でもある。1つの行動が生起するが、その背景にはあらゆる行動の諸連鎖の諸万事連関化 (evevings) のメッシュが満ちている。また、行動は1つの対象とかかわっていたとしても、その空間内の他の対象とも暗在的に相互作用している。例えば、鳥を追いかける猫は、行く先にある岩を飛び越え、そして木に登る。そしてこのような行動空間は新しい種類の環境#3 (馴染みの環境、自ら織りなす環境) である、とジェンドリンは言う。

ジェンドリンはまた、では時間はどのように所有されるのだろうか、と問う。古いモデルでは、空間は三次元からなり、時間はそれとは別のもう1つの次元であると考えてきた。しかし、そのような時空間を体験できるのは、身体を動かさずにじっと静止して、ある対象を見つめ続け、時間の経過にともなうその対象の変化を観察するような場合だけである。だが実際には、私たちは行動している。

「私たちのモデルでは、行動のインプライングの中に、空間と時間の固有の結びつきが存在している。」(p.105 邦訳 114 頁) とジェンドリンは言う。彼は次のような例をあげる。誰かが雪の球をこちらに向かって投げてきた。そのとき私は、未来の時間 (球があたる) を生きて (感じて、知覚して) おり、またそれと自分との間の空間を生きて (よける、身をかがめる、キャッチする、飛ぶ、伏せる、投げ返す、...)。こうしたあらゆるこ

とが空間だけでなく、時間をつくっているのである。

ジェンドリンは次のように言う。

私たちが“空間”そして“時間”と呼んでいるもの間の関係は、あるインプライングの中へ行動が形づくられ、生起する、まさにそのあり様にとって内的なものである
{The relation between what we call "space" and "time" is internal to the very way behavior forms and occurs into an implying}。 (p.106 邦訳 117 頁)

そして彼は、空間と切り離された時間は存在しないと指摘する。「インプライングと行動空間はすでに時間を包含している。“行動空間”とはすでに、“所有される空間と時間 {had space and time} ”であったのだ。」 (p.106 邦訳 117 頁) と述べる。例えば、外に出たくてドアの手前でないている猫は、ドアの外に出た後の行動を生きている。そこには、植物やアメーバがもたない空間と時間が所有されている、と言える。⁵²

4. ピラミッド化 (Pyramiding)

ある新しい行動の連鎖が発達するとき、それは、それまでの連鎖のうえに「ピラミッド化 (pyramiding)」しながら形づくられるとジェンドリンは言う。このピラミッド化の概念は、私たちの行動が進化の積み重ねのうえに連鎖化されることを示すものである。ピラミッド化された暗在的な行動のほとんどは実際に連鎖化しないが、しかしそれらは、新しい行動の連鎖の発達において暗在的に関与しているのである。

5. 対象の形成：諸対象の出現 (Object Formation: Objects fall out)

鳥を追いかける猫の例のように、行動空間においては、行動の連鎖が対象を安定したものに保つ。第三章では対象とはプロセスの欠如であったが、行動空間の中では対象は存在することも、また欠如することもできる、とジェンドリンは言う。なぜなら、行動の連鎖

⁵² なお、原著では“2つの開かれた循環のセクター (Two open cycle sectors)”という見出しで、ほとんどの動物の身体がもつ対称的なシンメトリー (the bi-lateral symmetry) と行動空間との関係が論じられているが、ここでは割愛した。

が対象を安定したものとして存在させるし、また、対象が欠如しているときでも行動空間にはその対象の「スロット (slot)」が存在するからである。スロットとはインプライされた対象の存在のことである。猫は鳥に逃げられたとしても、行動空間に鳥が再びあらわれることや別の鳥と遭遇することを知っている。行動空間におけるこうした対象のスロットは、そのスロットに合致する対象を数多く生み出す。猫にとっての鳥は、ある鳥に限らず他のさまざまな鳥でもありうるのである。このようにして行動空間には数多くの諸対象が出現することになる。「多くの対象が生じている行動空間は、高等動物にのみ見出される進化した段階である。行動空間は、初めから対象によって構成されているのではない。」(p.110 邦訳 121 頁) とジェンドリンは言う。

第VI章の補遺 (Appendix to chapter VI)

原著には第VI章の末尾に、“第VI章の補遺”として、下記の概念が提案され、解説が加えられている。それらを簡潔に素描してみる。

6. 休止知覚、インパクト知覚、背後にあるものの知覚：開かれた循環が身体プロセスの部分として万事連関化 (eveved) されると、身体はそれ自身を反復的にインプライされる連鎖のメッシュの中に静かに感じるようになるが、そうした身体の知覚が「休止知覚 (resting perception)」である。また、環境の変化は行動をとまなわなくても知覚され感じられるようになるが、その種の連鎖を「インパクト知覚 (impact perception)」と呼ぶ。さらに、直接に見たり触れたりできるものの背後にある空間への知覚を「背後にあるものの知覚 (perception behind one's back)」と名づける。

7. 連関化：連関 (relevance) を動詞化してみる。行動の連鎖が進行するとき、ある対象はその連鎖を連関化 (relevanting) する。鳥を追って猫が木に登る。鳥や木は猫の行動の連鎖を能動的に連関化する。

8. 結節化：ある対象は、1つの結節点で、ある連鎖を連関化できるのであって、別の結節点ではそうはできない。鳥を追っていないときには、同じ木が、木に登るという行動を猫に生起させないように。行動は結節化 (juncturing) によって組織されているのである。

9. 圧縮：行動は進化の段階において単純化され、儀式化され、より圧縮されるようになる。圧縮 (compression) はある種のピラミッド化である。

10. より原初的な水準の“逆行”：例えば、満ち足りている猫がネズミを見て突然追いかける。ピラミッド化された中の、より原初的な行動が生じることがある。人間におけるフェルトセンスと情動の違いを説明するためにも、より原初的な水準への“逆行” (“breaking back” to a more primitive level) の概念が必要である。

11. 行動的な身体発達：行動の発達によって身体構造の変化がスピードアップする。例えば、巣箱の中のミツバチが一世代で身体構造を変化させるように。こうした現象を行動的な身体発達 (behavioral body-development) と呼ぶ。

12. 習慣：行動の反復が習慣を形成するように見える。しかしそこで生じているのは反復だけではない。習慣 (habit) の発達とは、ある特定の種類の身体的な変化なのである。

13. キネーション (想像とフェルトセンス)：イメージはただ視覚的なものであるだけではない。想像は、運動感覚的 (kinesthetic) な機能と結びついているのである。“キネーション (kination)” とは、そうした想像の本来的なあり様を概念化するものである。

6. プロセスモデル第Ⅶ章 文化、シンボル、言語 (CULTURE, SYMBOL AND LANGUAGE)

第Ⅶ章では、いよいよ、人間の基本的な能力であり営為であるシンボル（記号、象徴）や言語を伴ったプロセスに焦点があてられる。第Ⅶ章の A ではシンボリックなプロセスがどのように生まれたのかについて、プロセスモデル独自の視点から精緻に解き明かされていく。そして第Ⅶ章の B では、人間にとっての言語や文化の生成と構造化のプロセスが考究される。

(1) 第Ⅶ章 - A シンボリックプロセス (Symbolic Process)

a) 身体の見え {Body Looks}

ジェンドリンは、Ⅶの冒頭で次のように述べる。

ついに私たちには、シンボルの生成 {symboling} を引き出す用意が整った。“引き出す {derive}”とすることによって、もちろん私は、何がシンボルになりうるのか、その何かは、どのようにして——シンボルがそうであるようなあり方で——“～の {of}”になりうるのかに関して明確に思考することを可能にする諸概念を構築する、と言っているのである。(p.122 邦訳 135 頁)

「シンボルの生成 (symboling)」という用語は、シンボル (symbol) を動名詞化した、プロセスモデル独自の概念であるが、これはおそらく、「シンボル化 (symbolizing)」といった用語よりも、シンボルが生まれる始原的なプロセスを指し示すためにつくり出された言葉であると考えられる。

ジェンドリンは、「なぜ私たちはここまで身体プロセスや行動を再定式化する必要があったのだろうか？」という問いに対して、「それは、ここまでつくり出してきた諸概念をさらに明確なものにして、そしてそれらをシンボル生成とは何かという問題にさらに沿う形で発展させることによってのみ、私たちはシンボルについて思考する希望をもつことがで

きるからである」(p.122 邦訳 135 頁)と言う。つまり、シンボルの生成、そして言語の誕生と発展は、身体プロセスや行動との連続性においてはじめて適切にとらえることができる、というのがプロセスモデルの基本的な立場である。言語は、どこからともなく——身体の外側から——私たちに降ってきたようなものではないのだ。

動物も、「動物のジェスチャー (animal gestures)」や「動物の儀式的行動 (animal rituals)」と呼ばれるような行動をもっており、種によっては、とても社会的で複雑なパターンによる相互交流を行っている。しかし、動物は人間がもっているようなシンボルや言語をもってはいない。その決定的な違いは何なのだろうか？

動物がもたない、言語が含まれるような種類の経験とはどのようなものなのか？ 私はそれを“～について [ということの認識] {aboutness}”と呼ぶ。(p.123 邦訳 136 頁)

とジェンドリンは言う。

「～について [ということの認識] (aboutness)」——これは、「～の (of)」とほぼ同じ意味であり、あるいは、「～の (of)」の中の、ある精緻化されたあり方とも言えるものだろう——とは、わかりやすく言うと、例えば、A が B に関連したものであるということを理解し、たとえ B が目の前に存在していない場合でも、A にかかわりながら B のことを想起したり体験することができるようなあり方や能力のことである。

動物は「像 (pictures)」に、単なる像としては反応しないし、実際にある行動文脈の中でしか、その文脈を推進したりシフトさせることができない。像やパターンそのものとかかわり、それらを推進できるのは人間だけである。ただし、猿が闘いを避けるために相手に背を向けることはよく知られており、これは、「ある特別な様式の身体の見え {look} もしくは聞こえ {sound}」(p.124 邦訳 137 頁) がもっている、機能的な役割の例である。このような行動が「ジェスチャー」や「儀式的行動」と呼ばれるのは、身体が見える、あるいは聞こえる小さな 1 つの動きが、とても大きな差異——例えば、闘うか闘わないか——をもたらすからである。このような、身体の見え (body looks) ——あるいは聞こえ (sounds) ——は、シンボルであるようなものにきわめて近いが、しかしそれは、“～について [ということの認識] (aboutness)” に相当するものではない、とジェンドリンは言う。

b) ダンス (The Dance)

ジェンドリンは次のように言う。

2匹の猿が出会うが、(例えば、2匹の間に川があるとか、新しい何か**形づくられた**、といった理由で) どちらも背中を向けず、しかも闘いの連鎖も形成されないと仮定してみよう。次のように想像してみよう。闘うことや背中を向けることの代わりに、最初の“威嚇のジェスチャー {threat gesture}”が、わずかに異なる形で繰り返される、と。(p.124 邦訳 138 頁)

このような事態では、闘いも、闘いの回避も生起せずに、「威嚇のジェスチャー」が繰り返される。そのジェスチャーは、闘いの連鎖の最初のビットであると同時に、闘いの準備という大きな身体的シフトでもある。

“威嚇のジェスチャー”は、身体をシフトさせる大きな効果をもっている。この“ジェスチャー”、つまり身体が見え、聞こえ、腕を動かすそのあり様が、それまでとはどこか違ったものであれば、相手の猿に与える効果もまた違ったものになる。それは相手の猿の身体の見えや聞こえや動きをわずかに違ったものへと変化させるだろう。そしてその変化は、今度は最初の猿をわずかに違った何かへと推進するだろう。(p.124 邦訳 138 頁)

そしてジェンドリンは、「ここで私たちは、同じ“ジェスチャー”のわずかに異なる諸**ヴァージョン {versions}**の連鎖を得たことになる。私はこれを**ダンス {a dance}**と呼ぶ。(それは新たな種類の連鎖のヴァージョニング {versioning} である)」(p.124 邦訳 136 頁)と言う。ここで彼は、動物のジェスチャーのような行動が、ほとんど同じであるがわずかに違って繰り返されることを「(諸)ヴァージョン (versions)」と呼び、そしてそれを動詞化、さらに動名詞化して「**ヴァージョニング (versioning)**」という新概念を提示している。「ヴァージョニング」とは、ほとんど同じように繰り返される動きのことであり、そこでは行動文脈は停止し、次の行動の連鎖の最初のビットが——わずかに異なって——反復される。ここから、同じジェスチャーがヴァージョン化されることによって——次第

に洗練されて——「ダンス」が生まれるのである。

行動が身体プロセスの迂回であったように、ダンスは行動の迂回である。ダンスが生起している間、生起する可能性のある身体プロセスが停止すると同時に、生起する可能性のある行動文脈も停止する。

c) 表象 (Representation)

このような新たな連鎖には、他者の身体がどのように見えるのか、ということについての新しい種類の推進やシフトがある。一方、本来であればそこから連鎖化していくはずのものであった行動文脈は、推進されずにそこにあり続けるものとしてインプライされるようになり、それはもたれ、所有されるようになる。そしてそのインプライされる行動文脈は、新たな種類の環境でもある。

ここで初めて、私たちは“～の {of}”、あるいは“～について {about}”という言葉を使用することができる。ダンスは闘いをインプライする行動文脈についてのものである。ダンスは闘いそのものでも、また闘いの準備でも、闘いの終わりでもない。ダンスは、行動文脈をつくる行動の連鎖の中にはないが、行動の連鎖についてのものなのである。(p.127 邦訳 140 頁)

とジェンドリンは言う。そして続けて、「共感 {empathy}、表象、類似性 {likeness}、普遍性 {universality}、シンボル、意味、像 {picture}、さらにもっととても多くのことがここから現れる」(p.127 邦訳 140 頁) と述べる。

ジェンドリンは、共感が最初に来る、と言う。最初に、他者の身体がどのように見えるかによって作り出される身体的なシフトがある。それから自分の身体が他者の身体の見えをインプライするようになり、その次に自分の身体がそれ自身の見えをインプライするようになるのである。こうした連鎖から、はじめて他者の身体と自分の身体の「類似性」が生まれる。そしてそこから、身体の見えの連鎖が生じるのである。類似した自分たちの身体の見えが、それまでにはなかった推進やシフトを生み出していくようになる。ここで身体の見えは、(もともと生じるはずであった)行動文脈と同じものではまったくなく、その行動文脈「について」の新たな連鎖を形成する。

この、「～の (of)」、あるいは「～について (about)」の段階へ至ることは、とても大きな質的發展である。

見えとしての〔身体の〕見えが今や、インプライされ、推進される。それはもたれ、連鎖化される。ある見えは具体的な事物ではない、と言える。では、それは何なのか？ 同じ種のこれら 2 つの身体は、それらがその行動文脈にあるときには、同じ種類の見えをもっており、よく似て見える……。 (p.128 邦訳 141 頁)

ここにあるのは、それまでには存在していなかった「表象 (representation)」の出現である。

d) 二重化 (Doubling)

こうした連鎖 (ダンス) は、それ自体、ある特別な種類の行動でもあり、かつ、行動文脈についての (つまり行動文脈を表象する) ものもある。その意味で、この連鎖は、行動の推進 (VI) であると同時に、新たな種類の推進 (VII) でもあるという、二重化されたものである。行動は行動空間の中で生起し、連鎖化される。では、新たな種類の推進はどこで生起し、連鎖化されるのだろうか。

行動は行動空間、つまり、あらゆるインプライされた行動の連鎖からなる、ある“満ちた {full}” (と私たちが言った) 空間の中で進行する。しかし、単純なジェスチャーの動きはそれとは別の空間、つまり、身体の見えの空間、あるいはジェスチャーの空間、もしくは単純な動きの空間の中で進行する。そしてこの空間は二重化されている。それは単純な動きの二重化された空間である。 (p.129 邦訳 142 頁)

とジェンドリンは言う。この、新たな種類の推進が生じる「単純な動きの空間」は、何かについての (何かを表象する) 動きが生起するという意味で「シンボリックな空間」と言えるものであるし、推進されるはずの次の行動を変化させないという意味では「虚の空間 (empty space)」と呼べるものである。

今や、**純粋な動き** {**pure movement**} というものが、私たちのスキーマに初めて存在するようになった。初めて私たちのモデルに**虚の空間**、いわば**純粋な動きの空間**が現れた。(p.129 邦訳 143 頁)

とジェンドリンは言う。ダンスの中で生起する動き、その身体の見えや聞こえは、行動空間とはまったく異なる空間を形成する。ここには、ある明確な形で「～について [ということの認識]」がある。ダンスの連鎖には、まだ言語や言語を伴う思考はないが、シンボリックな虚の空間の形成を見ることができるのである。

一方でジェンドリンは、「しかし私たちは、こうした連鎖のこの空間が二重化されていること、この空間はまた、満ちた空間である行動文脈のヴァージョンの身体的な連鎖でもあることを忘れてはいけない」(p.129 邦訳 143 頁)とも述べる。ダンスは行動空間とまったく無関係なものではない。腕を上にあげるとは、最初は闘いと関連していた。しかし、ダンスの中では闘いの連鎖は生起せず、ダンスの連鎖のヴァージョニングによって、闘いがどのようにインプライされているのかが変化するのである。そのようなあり方で、ダンスの連鎖は、行動だけでは為し得なかった形で行動空間を変化させるのであり、そのようにダンスは行動空間と関連しているのである。

e) 表現 (Expression)

VII以前にも「表現 (expression)」という言葉はプロセスモデルの中で使用されてきたが、「適切な意味での表現は、このVIIにあるものである」(p.131 邦訳 144 頁)とジェンドリンは言う。

では、表現とはいったい何なのだろうか? 「表現は常に、推進されること (being carried forward) を含んでいる」(p.131 邦訳 144 頁)。ジェンドリンは、美しい氷の結晶のパターンは、そのパターンによって推進される私たちにとっては表現的なものであるが、氷自身にとってはそうではない、という例をあげる。動物においても、互いを推進するのは行動することによってであり、動物たちはお互いに表現しているのではない。動物の行動の中に表現を見て、推進されるのは人間だけなのである。

表現的なパターンがどのように私たちを推進するようになるのかが正確にわかるようになることで、シンボリックなプロセスという新たな種類の連鎖の特質が明らかにされる、

とジェンドリンは言う。

d) 新たな種類の推進 (The New Kind of CF)

このような連鎖は、シンボル生成 (symboling) であると同時に、行動文脈のヴァージョニング (behavior-context-versioning) でもあるような新たな種類の連鎖である。「身体は“同一”の行動文脈の諸ヴァージョンのひと繋がりへと進んでいく。行動や行動文脈はこのような繋がりを持っていなかった。それは、これまでにはヴァージョン化されていなかった行動文脈の、推進されつつある表出である {a cting rendition}」(p.132 邦訳 145 頁) とジェンドリンは言う。

これは何を意味するのだろうか？ 身体はすでにVIにおいて、身体がどのように行動しているのかを感受し意識していた。しかし今や、ある身体の見えのわずかに異なるヴァージョンの中で、この行動文脈は常に繰り返されている。その行動文脈の生起はすでに感受され、感じられていて、この新たな連鎖は今や、こうした感じられる行動文脈の諸ヴァージョンのひと繋がりなのである。その諸ヴァージョンは、その行動文脈によってではなく、身体の見えによって成り立っている。この連鎖の中で、身体は、すでに感じ、知覚していたもの——すなわち、行動文脈における身体の存在 (being) ——についての感情や知覚をもつのである。おお！ 私たちのモデルは、自己意識 {self-consciousness} についての思考を可能にするようないくつかの概念を形成した！ (p.132 邦訳 145 頁)

ここでは、行動文脈の中での自分のあり様を連鎖化し、もち、感じるようになるが、ここで感じられる行動文脈は、以前からあったものではなくて、今ヴァージョン化され、そのヴァージョニングによって同じ行動文脈が再構成化され創造されているのである。

私たちが～の (of) 自己意識をもつということは、前に何があったかということではなく、自己意識の連鎖の新たな創造である。この新たな連鎖にまたがる“同一”の行動文脈は、もちろんそれ以前にヴァージョン化した行動文脈に関係しているが、しかしそ

それは、すでにあったものを鏡のように神秘的に映し出すものではない。それは新たに生まれるものなのである。(p.132 邦訳 146 頁)

とジェンドリンは言う。「自己意識」とは、以前からあったものについての文字通りの意識ではない。そうではなくて、身体がその行動文脈の (of) 諸ヴァージョンの (of) 意識をもつというあり方においてはじめて、その行動文脈の中にいることの感情を感じているのである。ここには、以前には生じなかった「感情の感じ (a feel of feeling)」があるとジェンドリンは指摘する。

あるヴァージョニングの連鎖の中で、自分たちが人間であると突如気づいた最初の動物たちは、ある昂揚した時間 {an exciting time} をもったに違いない。自己を意識しながら！ 互いに動く中で、ダンスをする中で、その動物たちは突如、自分たちが気づいていることに気づいたのである {they were aware of being aware}。(p.133 邦訳 147 頁)

これが、この後でジェンドリンが「最初のダンス」あるいは「新しいダンス」と呼ぶことになる「自己意識」——あるいは「自己覚醒 (self-awareness)」——の誕生の瞬間である。このプロセスモデルでは、自己意識とは、はじめから自己と見なされるような何かについての意識としてあるわけではなくて、何か（例えば、他者の身体の見えやダンス、ジェスチャーなど）を意識していることを意識していることから生じる、と考える。この段階ではまだ、他者との相互作用の中でのみ自己を意識しているに過ぎない。自分の身体の見えに1人でパターンを見出し、推進していくような連鎖はこの後で生じるが、それもここでの発展と連続したものであることは間違いない、とジェンドリンは考える。

g) 像 (Pictures)

「像 (picture)」とは、今目の前には存在しない何かについてのものであり、その何かを表象するものである。動物たちは、何かの像に対して、像そのものとして反応はしない。ただの紙切れとして反応するか、あるいは実際に存在する仲間や敵として反応することはあっても、人間がするように像そのものに反応はしない。

動物には、身体プロセスと行動の連鎖という 2 つの水準があるが、「～について [とい

うことの認識] (aboutness)」の水準はない。「例えば、動物も共感をもっているが、それは分離された“～について”の水準においてではない。動物は、あなたの気分を感じ取り、その気分の中にいるあなたにかかわるだろう（しかし、その気分について、ではない）」(p. 138 邦訳 149-150 頁) とジェンドリンは言う。

猫は、自分の縄張りに現れた別の猫について、次の日にその猫がまたやってこないか見つけ出そうとするが、それは行動であって、その猫について語ることはできない。私たちもこの猫に、その（昨日やってきた）猫について言葉やジェスチャーで示すことはできない。

h) 見られたものと聞かれたもの (Seens and Heard)

今や行動空間は、行動の休止（例えばジェスチャー）を伴った連鎖を包含するようになった。そして、その連鎖を一緒につくっていた他者がそこにはいないとき、ジェスチャーの休止が焦点的にインプライされ、そのジェスチャーは生起するかわりに暗在的に機能するようになる。他のことが生起しても、インプライされたままで生起しないジェスチャーは同一のものとして保持され、このジェスチャーのインプライングへと対象が生起するようになる。

ジェンドリンは次のように言う。

ここで初めて、対象は見え、聞こえ、あるいはまさに動きをもつ。言い換えると、人間が対象の見えや聞こえや動きをもつのである。そのジェスチャーの連鎖は二重化されている。したがって、その対象は行動対象でもあり、同時にこの連鎖の中でその見えによって推進される。私はこうした二重化された対象を、**見られたもの {seen}** と呼ぶ（見られたものと短く書くが、それは聞かれたもの {heard}、動いたもの {moved}、などを含んでいる）。(p.137 邦訳 151 頁)

「見られたもの (seen)」とは、他者のジェスチャーといった身体の見え (body-look) が、今目の前になくても、インプライされているものとして保持され、感じられるようなあり方のことである。ここではもはや、その対象は行動からだけではなく、ジェスチャー (身体の見え - 身体の見えの推進) からも、そしてその欠如からも出現するようになる。

ジェンドリンは次のようにも述べる。

こうしたことがあらゆる対象によってたちまち生じたのか、それとも最初にそのような見られたものの連鎖 {seen sequence} が特定の対象によってのみ形成されたのか、私にはわからない。もしも后者である場合は、私たち人間である猿はダンスをしている間にのみ、この対象をとて貴重なものとして見出したことだろう。そしてその対象は、私たちの猿を断続的に {intermittently} 人間へと切り替わらせる力をもっていたはずである。確かにそれは、あるきわめて高い価値をもつ対象であったはずである。(p.138 邦訳 151 頁)

「見られたもの (seen)」、「聞かれたもの (heard)」あるいは「動いたもの (moved)」という新たな対象は、動物 (猿) を人間へと進化させたきわめて価値ある対象である、ということである。

ちなみに、ここでの「断続的に」という言葉の原語である ‘intermittently’ には、生起が単に断続的であるという意味だけでなく、生起の強さや間隔が不規則であるというニュアンスが含まれている。つまり、はじめは不確かで、断片的に、いわば「まだらに」生起していたこの新たな対象は、しかしとても長い時間をかけて、次第に洗練され、精緻化され、秩序的で律動的なものになっていったのだと言えるだろう。

さらにジェンドリンは、「ここにはその対象についての自己意識がある。1 人であるときでさえ、それはあるのだ。その対象の見えはシンボリックである。その対象の見えはシンボリックな空間 {symbolic space} の中で推進されていく。ダンサーのように。その見えは虚の空間 {empty space} の中に存在するパターンである」(p.138 邦訳 151 頁) とも言う。

「見られたもの (seen)」はダンスをしているときのみならず、ダンスの休止においても、そしてダンスをする相手が誰もいないとき——つまり、1 人であるときにも——もたれるようになる。ここから、それまでにはなかった「内的な空間 (internal space)」が生まれるのである。

i) 行為

そして、このような「見られたもの (seen)」としての対象が数多く生起し、その連鎖

が生まれ、さらにその諸連鎖も多数出現するようになると、行動空間には「見られたもの」の休止をもつ諸連鎖が暗在するようになり、行動することによってそれらは間接的に推進されることになる。「見られたもの」は自己意識的なものであるので、ここには自己意識の休止も暗在するようになる。行動が、「見られたもの」や自己意識を推進させたり休止させたりするようになるのである。「このような行動は暗在的に自己意識的である。私はそれを行為 {action} と呼ぶ。こうした休止をともなう行動文脈が、状況 {situations} である」(p.138 邦訳 152 頁) とジェンドリンは言う。

j) 普遍 (Universals) (類 (Kind))

j-1) 分離した感覚 (Separate Senses) j-2) 類 (Kinds)

ジェンドリンは次のように言う。

見られたもの {seen} はパターンである。… [中略] …見られたものは行動を再開しないし、行動の中で連鎖化されることもない。… [中略] …見られたものは、～の {of} である。それは、～について {about} である。それはヴァージョニングである。見られたものは新たな種類の対象であり、類 {kind} である。(pp.138-139 邦訳152頁)

私たちは、食べ物見え (food-look) を食べることはできないし、木の見え (tree-look) を登ることもない。しかし人間は、食べ物から見えや匂いを取り出し、また景色の中から木の見えや風の音を取り出すことができる。「異なる感覚 (視覚、聴覚、嗅覚) の分離がここに出現する」(p.139 邦訳 152 頁) とジェンドリンは言う。人間だけが、純粋な「音 (sound)」を聞き、視覚的であるだけのもの (例えば「像 (picture)」) を見るのできるのである。

ある視覚的なもの、ある聴覚的なもの (すなわち、ある見られたもの) ——これらは普遍 {universals} である。これらは、……の聞こえであり、……の見えである。私たちはこのことを、その対象がそのように見える {looks like} とか、そのように聞けるとも言う。(p.139-140 邦訳153頁)

こうした分離した感覚から、ある種の普遍（この後で、これは「第2の普遍」と呼ばれる）が現れる。ジェンドリンはそれを「類 (kinds)」と呼ぶ。「類」とは、分離した感覚によってとらえられる、何らかの類似性をもったパターンである。

j-3) 3つの普遍 (Three Universals)

そして、「普遍 (universals)」とはいったい何であり、それはどのように形成されるのかが、このプロセスモデル独自の方法によって明らかにされる。

私たちは、思考することの根底へとさらに深く分け入りつつある。(p.141 邦訳 154 頁)

とジェンドリンは言う。西洋哲学の伝統は、「個 (particular)」と「普遍」の関係をとらえる際に、圧倒的に「普遍」の方に優先権を与え、高い価値を置いてきた。

プラトンは、個と普遍の関係について議論する中で、個は普遍を“形づくる部分である”と言った。彼はまた、個は普遍の形式を“模倣している {imitate}”とも言った。このようなスキーマを確立したアリストテレスもまた、“模倣”されるものが究極的な原因であると見なした。カントはこのことを、カテゴリーの分類あるいは総合 {unifying} の問題としてとらえた。カントは、対象が理性による総合によってどのように形づくられるのかについて、ある形式的な説明——やはり、対象がカテゴリー分けされうる仕方——を提示したに過ぎない。(p.141 邦訳 154 頁)

とジェンドリンは指摘する。しかし、このプロセスモデルの立場からすると、「普遍」とは「個」——すなわち「実例 (instance)」——に先立って存在し、そこから「個」を生み出すような絶対的な何かではない。「普遍」とは、「個」(「実例」)とともにつくり出されるものなのである。

ジェンドリンは、「普遍」を次のように定義する。

“普遍 {universal}”とは、多くの“実例 {instances}”に“適用する {apply}”ことができる何かである。(p.141 邦訳 154 頁)

そしてこの定義からすると、「普遍とは何であるかを理解するためには、私たちは実例とは何なのかを問わなくてはならない」(p.141 邦訳 154 頁) のである。

ジェンドリンは、普遍を3つの種類においてとらえている。私たちが通常、普遍であると考えているものを、彼は「第3の普遍」と呼ぶ。

私は、私たちが通常、普遍であると考えているような種類の普遍を“第3の普遍 {third universals}”、あるいは短く“第3 {thirds}”と呼ぶ。さらに基本的な2種類の普遍が理解されなければならない。そうしないと私たちは、通常の普遍に含まれているものを把握することができないからである。(p.141 邦訳154頁)

私たちが普遍であると通常考えているものは、「そのようなものとして (as such)」用いられるものであり、そしてその使用によって特定の状況が変化したり、特定の対象が現れたりする。このような普遍は個々の実例に適用されるというよりも、単独で生起しているように見える。また、それが顕在的になっていないときでも、それは暗在的に機能しており(例えば、私たちが一匹の猫と接しているとき、それが猫という「類」にあり、他の「類」にはないことは私たちには暗々裏にわかっている)、やはり個とは無関係に普遍があるかのように考えられたりする。しかし、普遍と個(実例)の間には、より深く密接な関係がある、とプロセスモデルではとらえる。ジェンドリンはそのために、第3の普遍が形成される以前にある、2つの普遍に注目する。

私が論じたいと思う、より原初的な2つの“普遍”は、そのようなものとして、いわゆる普遍としては生じない。それらが実際に生起するとき、それらは普遍として機能してはいない。それらは**暗在的にのみ**、普遍として機能しているのである。(p.141 邦訳 155 頁)

とジェンドリンは言う。彼によれば、新たな身体の見えのヴァージョニング、新しい表現が「第1の普遍」であり、それは行動文脈の中に形成されるものである。また、この「第

1 の普遍」が、多くに見られたもの (seens) や聞かれたもの (heard) の形成の中で暗在的に機能するようになるとき、それは「第 2 の普遍」と呼ばれうるものになる。

わかりやすい言い方をすると、第 1 の普遍とは、最初のダンスの形成の中に適用される (apply) 何かであり、第 2 の普遍は、見られたもの (seen) の形成の中に適用される何かである。

しかしなぜ、その新たな表現のダンスの連鎖を、普遍と言うのだろうか？ それが通常の普遍へと至る最初のステップであるがゆえに、私はそのように言うのだ。それはパターンの連鎖であり、多くの異なる実例の中で機能している同一の連鎖である。(p. 141 邦訳 155 頁)

実際に生起する多くの実例は互いに異なっており、対象はどれも他とは異なるそれ自体のパターンをもっている。しかし私たちは、その中から繰り返し生起する同一の対象を選り分けることができるし、それとは違った対象から分離することができる。これは私たちが第 3 の普遍を使用しているからそうできるのだが、そのような普遍はどのようにして構成されるのだろうか。ジェンドリンは、多くの異なる対象のパターンの形成において暗在的に機能するダンス (つまり、新しい表現) の役割に注目する。私たちが「同じ」であると呼ぶような対象の類似性は、ダンスそのものではない。むしろダンスの中で、類似性を生み出すような新しい表現が創造されるのである。これは、「パターンや類似性の創造」と言ってもよいだろう。

ジェンドリンは次のように言う。

このようにして私たちは、暗在的に機能する、“第 1 の” 種類の普遍を理解する。それは、新しい何かが生起するその形成において機能するときに “適用される {apply}” のである。(p.142 邦訳 156 頁)

そしてダンス (新しい表現) の中に「見られたもの」が出現し、ダンスの休止の間にもその「見られたもの」がインプライされるようになることによって、「第 2 の普遍」と呼ぶことができるものが暗在するようになる。これは、パターンや類似性をもつこと (「パターンや類似性の所有」と言えるものである)。

このような第 1 と第 2 の普遍のうえに、私たちが通常、普遍であると考えているもの、すなわち第 3 の普遍が成立するとプロセスモデルではとらえるのである。

ここまでで得られた段階について、ジェンドリンは次のように記述する。

対象が人間のパターンの空間の中に入ってくる。より正確に言おう。対象が多く連鎖から出現してくるようになり、連鎖は、それ自身の休止として、今まさにパターンの連鎖を獲得するのだ。対象は、対象がなしうるように——その対象のパターンあるいは類似性として生じるものとともに——、パターンの連鎖を推進する。人間の、身体の見えのパターンの連鎖に推進がもたらされるとき、対象はそれ自身のパターンをもつようになる。(p.145 邦訳159頁)

j-4) 前形式的な暗在性 (タイプ a) (The pre-formed implicit (type a))

しかし、この段階では「類似性を“そのような {such}”ものとして連鎖化するあり様は、まだここにはない」(p.145 邦訳 160 頁)とジェンドリンは言う。類似性は形成されてはいるが、それはまだ暗在的なものであり、連鎖化されていない。ジェンドリンは、暗在的であるもの (the implicit) を、2つのあり様によって区別する。「暗在性のタイプ a」は、すでに形成されてはいるが、まだ連鎖化されていないものである。一方、すでに連鎖化されているものは「暗在性のタイプ b」と呼ばれる。

例えば、鳥は風の中を飛んでいるときに、風そのものを知覚しているのであって、風の音 (sound) を知覚しているのではない。しかし、人間は風から風の音 (聞こえ) を分離して、音のパターンとして聞くことができる。風に直接あたらないところにおいても、風の音だけを聞くことができる。空を見上げて、雲が描くパターンを見ることができる。木は、木とともに行動することからまったく離れて、ある見え (look) をもつようになる。

そうすると、こうした風や音のパターン、木の見えの形成の中に、人間の身体の見えが暗在的に機能するようになる。人間が呻くことや歌うことの暗在的な機能の中に風が生起する。人間の身体の見えの単純な動きの空間の中に木が入ってきて、こちらに届くような見えをもつようになる。

しかし、このような人間はまだ、人間の呻き声と風の間にある、あるいは人間が〔木

のように] 手足を伸ばすことと木 [そのもの] との間にある類似性を連鎖化する (もつ、感じる) ような事態にはいない。人間のパターンの暗在的な機能とともに、風や木のパターンがつくられただけである。(p.146 邦訳 161 頁)

これが「暗在性のタイプ a」であり、ここでは風は風のように聞こえ、雲は雲のパターンをもっているが、誰かが呻くことと同じように風の音が聞こえ、雲が誰かのように見える段階にはまだない。そのような段階に至るためには、ある文脈 (例えば、風の音を聞いている) にいながら、別の文脈 (例えば、人の呻き声を聞いている) にも確かにいるようなあり方がなければならない。「暗在性のタイプ b」は、このような段階を経て連鎖化されるのである。

見られたこと {seens} が生み出されることにおけるダンスの暗在的な機能は、類似性をつくり出してきた、と私たちは言うことができる。しかし、類似性はあらかじめそこにあったのだろうか? いや、類似性があったのではない。[あらかじめそこにあったのは] タイプ a の暗在性 {type a implicit} である。(p.146 邦訳 161 頁)

とジェンドリンは言う。

k) 行為とジェスチャー (Action and Gesture)

ここまでは行為——特に行動——とジェスチャーは別個のものだった。行為とジェスチャーは異なる暗在的な連鎖とともに進行するが、しかし、いずれかの精緻化は、もう一方に影響を与える。

ジェンドリンは次のように言う。

新しいダンス (第 1 の普遍、あるいは“第 1 の連鎖 {first sequence}”) は、それが暗在的に機能するときには、行為における新たな、あるいは変化した見られたもの {seens} とジェスチャーの休止の全領域を生み出す。新しいダンスが、再び何らかの行動文脈をバージョン化するとき、上述の発展は行動文脈 (行為の文脈) の部分となる。その新しいダンスは、そのすべてをバージョン化し、したがって行為の発展によって影響を

受けるようになる。(p.146 邦訳 161 頁)

このように、新しいダンス（新たな表現）によって、行為（行動）とジェスチャーは互いに影響を及ぼすようになる。

l) スロット化された儀式 (Slotted Ritual)

動物の行動の連鎖は行動空間の中で常に新鮮に形成されるが、ジェスチャーは特定の結節点で形成される行為（行動）の休止である。ジェンドリンは、このようなジェスチャーの連鎖は、「スロット化されて (slotted)」いると言う。

このようなジェスチャーの連鎖は、行為が進んでいくことを可能にする。(それは、行動が身体プロセスにおける迂回 {detour} であったように、行動における迂回である。) スロット化されたジェスチャーの連鎖とダンスは儀式である。(p.147 邦訳 162 頁)

「儀式」とは、行為の直前、あるいは行為のただ中における休止である。ある結節点で、ある儀式がなければ、行為は先へと進んでいかない。こうした儀式は、一見不必要なものにも見えるが、それがないと人は食べたり、性交したり、眠ったりしないのである。それらは、ある身体的な変化を可能にするものであり、その身体的変化が生じなければ、その後の行為は形成されないかもしれない。スロット化された儀式とは、ある精緻化されたパターンである。

そして、文化的な連鎖の文脈はここから生み出される、とプロセスモデルではとらえる。

最初のダンスとしての儀式は、文化的な諸形式の生成 {generative} として、あるいは、それが再び生起するときには、文化的な諸形式の再 - 生成 {re-generative} として理解することができる。(p.148 邦訳 163 頁)

m) つくることとイメージ (Making and Image)

動物は巣といった物そのもの (things) をつくるが、人間は物そのもののパターンを再

編成することで何かをつくる。最も人間に近い類人猿でも、高いところにあるバナナを取るために、1本の棒のくぼみにもう1本の棒を差し込むことができるに過ぎない。しかし人間は、手もとにある棒が短すぎるのであれば、もっと十分に長い何かのパターンが焦点的にインプライされるので、森の繁みを見て、そこにもっと長い棒を見つけ、それを引きちぎって、余分な葉っぱや枝を払い落とすことができる。

パターンをもつということは、イメージをもつということである。VIでは「キネーション (kination)」という用語によって、身体や行動と深く結びついた想像 (イマジネーション) の機能が明らかになったが、ここにはイメージすることのさらなる水準がある。

このようにして私たちは、まるで自分の手に棒をもっているかのように動くことによっても、あるいは自分の手を伸ばして棒の形をインプライすることによっても、棒をジェスチャーすることができるようになる。このような意味でのイメージとはパターンの推進であるが、[ここに生じる] パターンは現実にあるものではない。いや、そのパターンは、あたかも、まったくそれだけで存在しているかのようなものである。見られたもの {seens} とは、本来的にこのような意味におけるイメージなのである。(p.150 邦訳 164-165頁)

とジェンドリンは言う。

n) 連鎖と道具の新鮮な形成 (Fresh Formation of Sequences and Tools)

何かをつくることは、行為の休止を要請する。棒をつくっている間は、バナナは取れない。その間、行為は休止しつつ、ヴァージョン化される (まったく新しい何かをつくることは、新しいダンスのような「第1 (の普遍) の連鎖」であると言える)。同時にそこでは、行為の文脈がもたれ、感じられている。何かをつくることが (「第2 (の普遍) の連鎖」として) 行為文脈の全体に適用される。そうでなければ、なぜ棒がほしかったのかまったくわからなくなってしまうだろう。

しかしこの段階の道具の形成と、そこで生起する連鎖は新鮮なものであり、棒というものの一般的に役立つカテゴリーがもたれ、感じられるところの、「第3 (の普遍) の連鎖」はまだない。したがって、バナナを取った後は棒はその意味を失う。

数 100 万年もの間、人類は狩りの道具を作り、それを狩りの現場に捨てていたのである。居住している場所で狩りの道具が見つかったのは、ずっと後になってからである。つまり、道具が〔狩りの場所から〕家へともち帰られ、とっておかれるようになったのだ。この事実は、ここで発展させている概念と確かに相呼応するものである。

(pp.150-151 邦訳 165 頁)

とジェンドリンは言う。

o) スキーマ的な用語: メッシュ化された、暗在的な機能、ヘルド、再構成化 (Schematic Terms: *Meshed; Implicit Functioning; Held; Reconstituted*)

第Ⅶ章-A の最後では、「メッシュ化された」、「暗在的な機能」、「ヘルド」、「再構成化」といった用語によって、暗在的なものが機能するあり様についての考究が進められる。

o-1) メッシュ化された (Meshed)

ジェンドリンは次のように言う。

私たちは、ある連鎖が暗在的に機能するときに、それが個別性 {individuality} を失わないでいられるような用語を必要としている。それは、相互にインプライし合っている諸連鎖のメッシュの中で機能しているにもかかわらず、それ自身として再開できるのである。私はそれを“メッシュ化された {meshed}”と呼ぶ。(p.151 邦訳165頁)

「メッシュ化された (meshed)」という用語は、新しい連鎖が形成される際に、これまでであった連鎖や新しく形成される連鎖が、どのようにしてその個別性を保持していかれるのか、ということを示す概念である。

これまでにあった古い連鎖は、新しい連鎖の形成の中で暗在的に機能することによって、それ自身も変化していく。相互にインプライしている諸連鎖のメッシュは、古いものから新しいものまでピラミッド化され、層になっている。そのメッシュは、1 つの水準や面の

上にあるのではなく、きわめて複雑なものである。そこに新しい連鎖が発展するとき、それまでの連鎖は新しい連鎖の形成の中で変化する。そして同時に、新しい連鎖が生起しないときには、その変化した以前の連鎖が生起する。

“メッシュ化された {meshed}”とは、“...と...の両方 {both...and}”についての用語である。“それ”は、新しい発展が生起し、それが万事連関化の中で暗在的に機能するときにさらに発展し、そして、それまでに発展していたものが生起できない場合には、そのもとの形における行動の可能性でもある、その両方なのである。(p.152 邦訳167頁)

このようなあり方で、それぞれの連鎖はその個別性を保持しつつ、同時に変化し、発展していく、とプロセスモデルでは考える。

o-2) 暗在的な機能 (Implicit Functioning)

では、暗在的に機能するとは、いったいどういうことなのだろうか？

ジェンドリンは2つの言い方ができる、と言う。1つは「ある連鎖が暗在的に機能している」という不正確なもので、より正確なもう1つの言い方は、「ある連鎖が、生起しているものを形づくりに参加できている限りにおいて、暗在的に機能している」というものである。

もしも連鎖があらゆる点で機能しているのであれば、それは暗在的に機能しているのではなくて、すべて顕在的に生起していることになってしまう。しかし、Vで見たような、水中でもがくこと (thrashing) の中で暗在的に機能している歩行は、陸上で生起している歩行とは同じものではないが、もがくことの中で確かに機能している。したがって、「暗在的」であるということについては、「別の連鎖の生起の形成に参加できている限りにおいて」という言い方をしなくてはいけないのである。そして、ある連鎖が暗在的に機能しているということは、それがそれ自体として機能していたときのあり方とは異なるものになっている、ということでもある。生起している連鎖との相互影響によって、暗在的に機能している連鎖も影響を受け、それが再び生起するときには、かつてそうで「あった」ような連鎖とは異なるものとして生起するかもしれない。

ジェンドリンは次のように言う。

このことは、連鎖とは形成 {forming} である、ということであらためて確認させてくれる。これまでにとらえてきたように、連鎖は万事連関のひと繋がりからなっている {a sequence consists of a string of events}。連鎖それ自体は、それがそのような形成であるので、もしも連鎖が今生じていることだけの形成であるならば、連鎖は生起そのものであることになってしまう。もしも連鎖が暗在的に機能しているのであれば、その事象はその連鎖によってだけ形づくられるのではない。万事連関化 {evening} はそれ以上のものであるので、その連鎖が暗在的に機能するあり様は、その連鎖そのもの以上のものなのである。(p.154 邦訳169頁)

そして続けて、「ある展開が、今展開していることがかつて暗在的で“あった {was}”ときに生じたこと以上の、**多くのあるいは異なった部分**をもっている、これが**展開の第1法則 {the first law of explication}** である」(p.154 邦訳 169 頁) と言う。暗在的に機能していた連鎖が再び生起するとき、かつて以上の、あるいはかつてとは異なる部分をもって生起するとき、それは本当の意味での「展開 (explication)」と言える。これがジェンドリンの言う「展開の第1法則」である（「展開の第2法則」についてはこの後で論じられる）。

o-3) ヘルド (Held)

ジェンドリンは、「ある連鎖がそれ自身のみでは暗在的に機能しないのなら、ある差異が作りだされる」(p. 155 邦訳 170 頁) と言う。

彼は次のように問う。ある連鎖が暗在的に機能しているとき、その中に暗在している諸連鎖も暗在的に機能しており、またその諸連鎖のそれぞれの中に暗在している諸連鎖も暗在的に機能している.....のだろうか。この問いをジェンドリンは、「～する限り (insofar)」という点から解き明かす。すなわち、生起している連鎖の形成に参加している限りにおいて暗在的に機能している連鎖は、その連鎖が暗在的に機能している限りにおいて、その中のほかのすべての暗在的なものが機能しており、そのそれぞれの中でまたすべての暗在的なものが機能している.....のである。つまり、生起している連鎖のあり様とその変化によって、暗在的に機能するもののあり様も絶えず変化する、ということである。

ここからジェンドリンは、あるあり様の中で暗在的に機能している連鎖と、そのあり様の中では暗在的に機能していない連鎖の間に違いがつけられる、と言う。彼は、その暗在的に機能していない連鎖のことを、「ヘルド (held)」と呼ぶ。

私たちが前に、すべての連鎖は相互に暗在的であり、各々の連鎖はその文脈のひと繋がりであり、それらのすべてによってつけられている、と言ったのであれば、私たちは今、“ヘルド {held}” という概念を導入する必要がある。すべての暗在的な諸連鎖は、ある点においては“ヘルド” されており、またある点において暗在的に機能している。これが実際に意味しているのは、1つの連鎖は次の連鎖と同一ではない、ということである。そうでなければ、諸連鎖はすべて同一であり、万事連関化 {everything} は常に同じあり様で機能していることになってしまう。(pp.155-156 邦訳170頁)

この「ヘルド」という——まったく奇妙な⁵³——概念を導入することによって、身体はなぜ、どのようにして変化と新しさを生み出すことができるのかが説明できるようになる。ある連鎖の形成の中では暗在的に機能していなかった連鎖（「ヘルド」）が、異なる連鎖の形成の中では暗在的に機能する、という可能性を常にもっているのである。従来のモデルでは、身体は分割された事象の連鎖から成り立っているように考えられ、暗在的に機能するもの（例えば「無意識」）は、暗いところから明るいところへと移すことができるような固定的な切片として扱われてきた、とジェンドリンは指摘する。

私たちは、身体的な形成 {bodily formation}（そして、あらゆる連鎖がそうである）が、諸連鎖から構成されているのではないことを思い出さなくてはならない。それは諸連鎖をインプライしている。より正確には、それは、**何らかの仕方**でそれ自体が推進されていくことをインプライしているのである。だから私たちは、従来のモデルが導くようなことをするわけにはいかない。私たちは、身体的な万事連関化 {bodily eveving} を、あたかもそれが固定的な諸部分、つまり、諸連鎖そのものから構成されているかのよう

⁵³ 筆者は、2011年に英国のイーストアングリア大学で開催されたサイコセラピー哲学カンファレンスで、この問題——プロセスモデルにおいてなぜこうした奇妙な概念が必要なのか——について研究発表を行った。Suetake (2011) Some odd concepts in Gendlin's Process Model and their clinical implications. (A verbal presentation at Philosophy of Psychotherapy Conference, University of East Anglia, Norwich, UK.)

に考えることはできないのである。そうではなくて、たとえ観察者にとっては馴染みのものに見えたとしても、新しい形成は常に、新たに形づくられるものである。身体は諸連鎖を生み出す。身体は諸連鎖そのものではないし、顕在的に構造化されている諸部分でもない。(pp.156-157 邦訳 171 頁)

そしてジェンドリンは、暗在的に機能していたものが展開することによって、以前は暗在していなかったかもしれない他の何かが暗在的に機能するようになることを、「**展開の第2法則**」と呼ぶ(展開の第1法則と第2法則については、第V章で見た「リーフィング」と「介在する事象」という、生命体が新しさを獲得していく2つのあり様と重ね合わせると理解しやすくなるかもしれない)。

ジェンドリンは、次のようにも言う。

「人格変化の一理論 {A Theory of Personality Change}」において述べたように、ある人の中で今暗在的に機能している何かに応答が試みられて、それが推進されたプロセスとして生起するようになれば、そのときには、それまでは暗在的でさえなかった他の側面が、そのことによって再構成化され、暗在的なものとなるのである。…… [中略] ……このすべてのことは、“無意識 {the unconscious}” の理解と再考にとって、とても大きな重要性をもつものである。(pp.157-158 邦訳172頁)

これは臨床的な問題や現象を考えるうえで、とても示唆的な指摘であり、筆者がジェンドリンと直接に議論し、また彼からの手紙の中でも触れられていた(本論文の第1章の補遺を参照) テーマでもある。「再構成化」という用語は、ジェンドリンの臨床的な論文である「人格変化の一理論」の中でも使用されていたが、プロセスモデルでは「ヘルド」の概念を用いることで、以下でより精緻に概念化される。

o-4) 再構成化 (Reconstituting)

「再構成化」の概念はここまでもプロセスモデルの中で使われてきた。例えば、ある連鎖はそれがバージョン化する文脈を再構成化する、というように。ある連鎖の全体によって文脈が再構成化される時、その文脈はもたれる(感じられる、連鎖化される)よ

うになる。そしてそのような文脈は、実際に生起するものとなる。ある対象が出現するときには、対象だけが出現して、文脈は暗在的であるに過ぎない、ということではない。その文脈も生起しているのである。例えば、猫が鳥を追いかけているとき、対象としての鳥はしっかりと固定されて出現しているが、同時に景色が次々と過ぎ去っていくことも生起している。

これまで、このプロセスモデルでは、文脈とは暗在的に機能している諸連鎖のメッシュであるという言い方がされてきたが、それはまったく生起しないものなのではなくて、ある連鎖が実際に暗在的に機能しているときに限って、それは生起するのである（鳥を追う猫にとっての木々や岩など）。インプライングと生起は、ともに 1 つの現実的な事象であるからである。では、暗在的に機能しているはずの連鎖が生起しなかった、と私たちに思わせるのは何なのか？ ジェンドリンは次のように言う。

それは、私たちが“ヘルド”という用語をもっていなかったこと、そして“ヘルド”と“暗在的に機能している”との間の違いに気がついていなかったことによる。私たちが“暗在的な諸連鎖”について語る時、そこには諸連鎖が生起するあり様と、諸連鎖が生起しないあり様がある。そして、私たちはこれらを区別してこなかったのである。

“暗在的に機能している {implicitly functioning} ”とは、ただ“暗在的 {implicit} ”であることよりも、はるかに特別なことなのである。（p.158 邦訳173頁）

さらにジェンドリンは——ある連鎖が、それがヴァージョン化する文脈を再構成化する、ということが再構成化の第 1 法則であるとするならば——生起する連鎖が、暗在的に機能するものを変化させる、ということ「再構成化の第 2 の法則」と呼ぶ。このような意味で再構成化の概念を使用するとき、再構成化によって、暗在的に機能するものが、①直接に推進される、②間接的に推進される、③直接的にも間接的にも推進されない、という違いが常にあることがわかる。

ジェンドリンはそのことを、スキーマ（図式）的な構造化によって、次のように示している。（p.159 邦訳 174 頁）

直接的に推進された {directly carried forward} : 生起している連鎖、生起している連鎖を構成する諸文脈あるいは諸万事連関 {evevs} の繋がり。ダンスや見られたもの

{seens} におけるような、ヴァージョン化された行動文脈あるいは行為の文脈。

暗在的に推進された {implicitly carried forward}、間接的に推進された

{indirectly carried forward} : 生起している連鎖によって推進されている諸文脈あるいは諸万事連関を構成する、暗在的に機能している諸連鎖。

推進されない {not carried forward} : “ヘルド {held} ”。暗在的に機能する連鎖が機能していないあり様。生起している万事連関の中にはないもの。

この図式で言えば、「ヘルド」されたものは機能しないし、生起もしない。間接的にも推進されない。それは同じものとどまる。しかし別の連鎖の中で、新しい何かが顕在的になったときに、新しい何かは暗在的に機能するようになる。したがって、以前の連鎖の中ではヘルドされていたものが、暗在的に機能するかもしれないのである。

「ヘルド」という概念を導入し、「再構成化」の新しい意味を使用することで、私たちは「想像 (imagination)」や人間の発展について適切に思考することができるようになる、とジェンドリンは言う。どのように身体は、実体的に {physically} 存在していない環境をつくり出すことができるようになるのだろうか。人は、ジェスチャーによって行為文脈と状況を再構成化することによって、その行為文脈と状況をもつ（感じる、連鎖化）することができるのである。狩りの道具をつくっている間、再構成化された狩りという状況が変化しないままで保持される。しかし、狩りで使用した道具を家にもって帰ることや次の狩りに同じ道具を使用することは、とても長い間「ヘルド」されたままだったのだ。狩りの道具を獲物と一緒に家にもって帰るといことは、家に帰るとい状況とともに次の狩りを再構成化しつつ、その中にも生きている、とすることができる。

しかし、このことが小さな変化ではないことに私たちは気づく。新しい人類、つまり現在の私たちが今できないでいることのほとんどは、この方向で発展するものなのである。(p.162 邦訳 177 頁)

とジェンドリンは言う。この「小さな変化ではないもの」を私たち人類はすでに見事に獲得している。それが言語であり文化であるが、その創出のプロセスについては、次のVII-B

で説明される。しかし、「現在の私たちが今できないでいること」——現在のさまざまな閉塞的な状況——の発展の手がかりを考究しようとするのが最終章のⅧであり、「ヘルド」されたものが暗在的に機能するようになるならば、人類にとって新しい展開がありうるはずだ、とプロセスモデルでは考えるのである。

(2) 第Ⅶ章 - B 原言語 (Protolanguage)

a) 内的空間 (Internal Space)

第Ⅶ章の B では、言語がどのように形成され、発展していくのかという問題が、これもプロセスモデル独自の観点から考究される。

Ⅶの空間は、その本来的なあり様として内的でもあり、また外的でもある {VII-space is inherently internal/external}。Ⅶの連鎖 {VII sequences} が、この違いを生み出す。(p.163 邦訳 178 頁)

とジェンドリンは言う。

ジェスチャーは行動文脈（例えば、闘いや狩り）をヴァージョン化するが、それはシンプルな動き（例えば、飛び跳ねることやグルグル回ること）であって、行動文脈の可能性の中にある行動ではない。ジェスチャーは、行動の可能性による「満ちた空間 (filled space)」の中で進行するのではなく、「そのシンプルな動きが、新しい、“虚 (empty)” に見える空間をつくっているのだ」(p.163 邦訳 178 頁) とジェンドリンは言う。

諸万事連関 {evevs} (それは同じ行動文脈の諸ヴァージョンである) における変化は、ただ感じられるだけであって、その行動文脈の中では何も変化しない。この変化は“内的 {internal}” なものである。そのシンプルな動きの空間は“外的” なものであるが、それは同じに保たれた行動空間とは違ったものである。今や、“虚 {empty}” の空間の中の外的な動きと、複雑な満ちた行動の1ヴァージョンとしての動き——それは“内側で {inwardly}” のみ連鎖化される——との間には、ある鮮明な区別が存在している。(p.163 邦訳178頁)

そこで見えるのはシンプルな動きだけであって、その動きが身体の中でヴァージョン化し、推進するものは見えない。このことによって、見える外的なもの（シンプルな動き）と、見えない内的なもの（身体の中で感じられ、連鎖化されるもの）との違いが生まれるのである。ジェンドリンは、「これまでにそうした概念がまったくなかったことに気づかざるを得ないとは本当に驚きである。そしてこの〔内的なものと外的なものの区別について思考することができる概念がなかった〕ことが、多くの哲学における無意味な思考や、人間研究におけるきわめて不十分な理論、物理学におけるあり得ないような観察者を伴う困難などをつくり出してきたのだ」（p.164 邦訳 178 頁）と指摘する。

プロセスモデルでは、シンプルな動きという外的なもの、行為文脈のヴァージョニングという内的なものは、一緒に生み出されるものであるが、この二重化された種類の連鎖が、外的なものと内的なものという区別をつくる、と考えるのである。

「しかしジェスチャーが停止し、再び行為が生じるときには、何が内的なもので、何が外的なものであるのだろうか？」（邦訳180頁）とジェンドリンは問う。

（私がフリップ {FLIP} と呼ぶ）ある（しかし明確にされなければならない）ポイントにおいて、行為は外的な空間の中に存在するようになる。しかしフリップ {FLIP} 以前は、外的／内的なものはジェスチャーの中でのみ生起する（そして行為の中で暗在的に機能する）。（p.164 邦訳190頁）

そして以下では、人間が言語の獲得と形成に向かう大きな分岐点——ジェンドリンはそれを「フリップ (FLIP)」と呼ぶ——について言及される。

b) フリップ (The FLIP)

ジェンドリンは「この新たな内的でもあり外的でもある空間 {this new internal/external space} が、行為とジェスチャーが進行するその空間になるのは、まさにいったいどの地点においてであろうか？」（p.165 邦訳180頁）と問う。VII-Aまでは、あらゆることは行動空間の中で生じていた。行動の文脈はジェスチャーによって精緻化されていたが、ジェスチャーは行動の休止に過ぎなかった。ジェスチャーは二重化されていて、外的な虚の空間

と、再構成化された行動文脈（行為文脈）の連鎖による内的空間がもたれてはいたが、ジェスチャーが終わり、行為が再会されるときには、再び行動空間の中に戻ることになる（実はそこにずっといたのである）。しかし、私たち人間は行動空間とはまったくかけ離れたシンボル空間（虚の空間）の中に生きており、それが消え去る——つまり、完全に行動空間へと戻る——ことはない。

文脈が行動空間という実体的な場（physical settings）から離れて、人間相互のシンボルの文脈（例えば、ジェスチャーの文脈）になる分岐点を、ジェンドリンは「フリップ（FLIP）」と呼ぶ。

フリップ {FLIP} 以後、文脈はもはやその実体的な状態 {physical settings} から離れて、人間内のジェスチャーの文脈 {the inter-human gestural contexts} となる。この文脈間の関係は、…… [中略] ……人々の間の所与のジェスチャーがどのようにその人々の状況——その人々が共有しているもの——を変化させるか、というものである。…… [中略] ……フリップ以後、あらゆることはジェスチャーの外的な虚の空間の中に位置づけられ、ジェスチャーの相互作用が、状況がどうであるかを更新し、規定するようになる。（p.165 邦訳 181 頁）

とジェンドリンは言う。

例えば、この木について、あの鳥について、狩猟の行動文脈の中でジェスチャーすることと、狩猟の文脈にはないところ（例えば住居の中など）でジェスチャーすることには、きわめて大きな違いがある。いったい誰が、住居の中といった間違っただけの文脈の中で狩猟の文脈の中にあつた「見られたもの（seen）」についてのジェスチャーをしたのだろうか。

狩猟に使用する道具を、狩猟の場に捨てていたとても長い間、狩猟の文脈がなくなると道具は道具としての重要性を失っていた。道具をつくることの中にあつたパターンはとても精緻なものではあつたが、それは狩りをする行動の休止であつて、行動文脈以外にも出現するパターンではなかつたのである。そのようなパターンが行動文脈以外に出現することは、ずっと「ヘルド」されたものであつた、とすることができるかもしれない。

そしてそこで——このことすべてが生じた。そこで人々は、もはや行動空間の中ではなくて、ジェスチャーによって規定される相互作用文脈 {gesturally defined

interaction-context} の中で行為したのだ。それがフリップ {FLIP} である。(p.166 邦訳 182 頁)

とジェンドリンは言う。

〔フリップ以後〕行為は他者とともにいる人々の観点から生じるようになる。人々が対象にかかわっているときでも、他者がいないときでさえも、そうなのである。

(p.166-167 邦訳 182 頁)

木が誰かのものである場合、その人がそこにいなくても、その木はその人のものである。その木を切り倒すとしたら、そのことは今や、木を切り倒すことでもたらされる行動の変化の可能性からなされる行為というよりも、木を所有するその人との関係が変化することからなされる行為である。だから、その人が木を切り倒してほしいと望んでいる場合と、切り倒さないでほしいと思っているときでは、木を切り倒すという私の行為はまったく違ったものになる。

ジェンドリンは、フリップ以後に生まれるこのような文脈を「相互作用文脈 (interactional context: iacxt)」と呼ぶ。そして行為は、相互作用文脈 (iacxt) を推進するものとなる。外から観察すると、行為とまったく区別がつかないけれども、相互作用文脈を推進することのないジェスチャーが生起することもある。ジェンドリンはそれを「行い (doing)」と呼ぶ。

例えば、シカゴ穀物商品取引所のバイヤーは、指を 1 本立てることで、貨車数 100 台分の穀物を購入するが、その人が実際に貨車が止めてある線路の引込線に行き、貨車の上に飛び乗り、「これは私のものだ」と叫んでも、貨車の中の穀物を自分のものにはできない。後者は穀物の売買に関連する相互作用文脈を推進しない、ただの「行い (doing)」に過ぎない。堂々巡りの長い議論も、多くの場合は相互作用文脈を推進しない、ただの「行い」である場合が多い。

人は状況——相互作用文脈——の中に生きている。このような相互作用文脈は人間にとっての新たな環境でもある。

c) 秩序 (The Order)

では、フリップ (FLIP) とはどのように導かれるのだろうか？

ジェンドリンは、その発展の秩序的な順序を次のような段階によってとらえている。

1) **最初のダンス**においては、各々の**身体の見えの全体 {whole bodylook}** が他者を推進する。そこでは他者がいないと連鎖は生じない。

2) 個人が対象に向かって単独でジェスチャーを行い、また、その対象の見え {the object's look} を知覚する。(私たちはこのことを“見られたものの形成 {seen-formation}”と呼んだ。) 私はこのことを、“**単独の推進 {lone carrying-forward}**”とも呼ぶことにする。

何人かの人が2〜300ヤード離れて森の中にとしよう。上空を1羽の鳥が飛んでいて、彼らはその鳥に向かってそれぞれ単独にジェスチャーを行い、そしてその鳥の見え {look} を見る。

3) 彼らが再び一緒になり、その中の1人が対象に向かってジェスチャーをしたとき、その人のジェスチャーによって、その人を見ている他の人たちもまた**推進される {also carried forward}**。(彼らはその人が何をジェスチャーしているのか知っている。) 私はこのことを“**波及的な推進 {also carrying-forward}**”と呼ぶ。(p.169 邦訳185頁)

つまり、1) 最初のダンス、2) 単独の推進、3) 波及的な推進、という段階で、フリップへと導かれる発展が生じる、ということである。そしてジェンドリンは、「きわめて根本的な何か、第2段階において (見られたものの形成 {seen-formation} の中で) 生じる」(p.170 邦訳 185 頁) と述べる。そしてここで生じるものを、彼は「パターンそのもの (patterns themselves)」と呼ぶ。これは、第3の普遍の水準である「~のような (such as)」パターンではまだないが、それに至るプロセスの中ではとても重要な段階である。それは「最初のダンス」のような他者とともに生起する「身体の見え - 身体の見えの連鎖 (bodylook-bodylook sequence) ではなく、人と対象の連鎖 (person-object sequence) であり、対象のパターン、および対象に向かってなされるジェスチャーのパターンである。このような「パターンそのもの」の出現と保持 (単独の推進) によって、例えば家の中で木や鳥やウサギをジェスチャーで示すこと (波及的な推進) が可能となるのである。

d) 現前する文脈における欠如した文脈 (Absent Context in this Present Context)

ここでジェンドリンは、もう一度、なぜ誰かは間違った文脈の中で間違ったジェスチャーをするようになったのだろうか、と問う。これは、目の前にあり現前する文脈にいながら、そこにはない、欠如した文脈の中にもいる、というような特別なあり方である。

ジェンドリンは次のように言う。

パターンそのもの {patterns themselves} は、それがどこでつくられたかにかかわらず、推進していく。ジェスチャーは、(図式的に示すと) ジェスチャーがヴァージョン化する文脈を再構成化 {reconstitute} する。ジェスチャーはその文脈の諸ヴァージョンのひと繋がり {a string of versions of that context} であり、それゆえ人々はその文脈をもち、感じ、連鎖化する {have-feel-sequence it}。人々は“欠如した {absent}” 状況の中に生きることが可能となる。(p.172 邦訳 188 頁)

しかし、人が家の中で木や庭についてジェスチャーするときには、自分が家にいるのか、庭にいるのかわからなくなってしまうのだろうか？ ジェンドリンは、ジェスチャーは同じ (ものに見えるとき) でも、庭で木をヴァージョン化することと、家で木をヴァージョン化することは異なる連鎖であるはずだ、と考える。その連鎖の違いによって、同じジェスチャーに見えるものが、異なる相互作用文脈を形成するのである。しかし、ここにはまだ同一のパターンとして繰り返し使用されるものがあるわけではない。そうした同一のパターンの形成と使用は、「フリップ」以後、すなわち言語の形成によって生じるものである。

そしてジェンドリンは、ここまでに明確にわかっているのは、次の4点であると言う。

1) 家の中にいるときと庭にいるときでは、身体全体が異なっているように、その連鎖も異なったものになる。新鮮に形づくられるパターンそのもの {pattern themselves} は、同じものにはならない (それぞれのパターンそのものは、精緻化され、他のパターンの形成の中で暗在的に機能するのだが)。

2) まだ言語はない。同一の、そのようなパターン {patterns-as-such} の集積が使用されることもない。パターンそのものは今、推進しているが、それは異なる文脈の中で

新鮮に、異なって形成される。

3) したがって私たちは、“同じ連鎖”が異なる文脈の中で生じている、と言うべきではない。それは異なる連鎖である。2つの文脈における同じ連鎖という概念は、言語を仮定している。しかし私たちは、こうした連鎖がどのように発展しうるのかを理解したいのだ。それはまだなされていない。また、それは常に異なる文脈でもある。人々が家の中で庭の文脈をバージョン化するようなことになれば、その人たちは自分たちが庭に在ることを体験することになり、家の中に在る記憶を失ってしまうことになる。そうではない。人々は庭の文脈ではなくて、家での庭の文脈 {the garden-at-home context} をバージョン化するのだ。

4) フリップはまだ生じていない。相互作用文脈は発展しつつあるが、それらの文脈はどれも、休止として、まだ行動文脈の中にあるのみである。ジェスチャーの連鎖は、新たな連鎖の形成の中で機能しており、それゆえ、新たな連鎖の中に暗在している。このような暗在的な連鎖は、それが生起するとき、それがバージョン化する行動文脈を再構成化する。しかし、その諸文脈はまだ統一体 {a unity} も、それ自身の空間も形成していない。その形成こそが、まさにフリップ {FLIP} である。(p.174 邦訳190頁)

e) クラスターの交差、およびいわゆる「慣習的」なシンボル (Crossing of clusters, and so-called “conventional symbols)

このセクションのタイトルには、「まさになぜそれ (慣習的なシンボル) がどんな状況においても身体のイコニックなものではないのか、そしてそれにもかかわらずそれはどのように恣意的なものではなく生命体的なものであるのか、つまり、原言語的シンボルの内的関係 (exactly why they are no longer ikonic of the body in each situation, and how they are nevertheless organic rather than arbitrary: The internal relations of protolinguistic symbols)」という長いサブタイトルが付記されている。

そしてこのセクションでは、言語が発達するある段階において、直接的な身体的表現から直接的ではない種類の記号へのシフトがなくてはならないことはよく知られているが、それがどのように生起するのかが考究される。

意味される状況 {the signified situation} の中に身体があるかのように記号が見え、聞

えるとき…… [中略] ……、私はそれを“オノマトペ的 {onomatopoeic}”あるいは“アイコン的 {ikonic}”と呼びたい。…… [中略] ……しかし、いつ、なぜ、どのように記号が変化するのか、そしてどのように記号は、それが意味することに似ていないものを発展させることができるのかについての明確な思考は、これまではほとんど不可能だった。
(p.175 邦訳 191 頁)

とジェンドリンは言う。オノマトペ的ではない、非アイコン的な記号は、「慣習的 (conventional)」なものと言われるが、そうした記号がどのように形成されるのかはこれまで謎であった。

問題は、記号があたかもユニットであるかのように考えられてきたことにある、とジェンドリンは指摘する。そのように考えることで、記号はそれが使用される状況に対する直接的な表現に関係しているか、まったく関係がないかのいずれかであると考えられがちだった。しかし、記号と状況との関係はもつとずっと複雑であるとジェンドリンは言う。

プロセスモデルでは、オノマトペ的な記号が慣習的な記号へとシフトしていくあり様について、次のようにとらえられている。

「最初のダンス」は、ある行為文脈をヴァージョン化する。そこではそのダンスは、その行為文脈にとってオノマトペ的なものであった。そのとき推進されるのは、さまざまな行為の中の1つの行為である。その行為がヴァージョン化されることで、他のさまざまな行為の連鎖は、そのダンスの休止をもつことになる。そのようにして、そのダンスはすべての他の行為の連鎖の中に暗在的なものとなる。そして、他の行為の連鎖が生起する際に、暗在しているそのダンスの、生起できる何かが生起するかもしれないが、そのときのそのダンスは、その異なる行為の連鎖にとってはもはやオノマトペ的なものではなくなっている。

私が、パターンの精緻化 (ジェスチャー、対象のパターン) の全体的な“クラスター {cluster}”と呼ぶものが、それぞれ異なって、しかしその形成の中で機能しているそのダンスとともに形成される。…… [中略] ……こうした最初のクラスターは、最初のダンスそれ自身にとってオノマトペ的であることを除いては、もはやオノマトペ的ではない。(p.176 邦訳 192 頁)

ここで言われる「クラスター」とは、パターンの精緻化によって形成される連鎖の構造のことであり、このようにして形成されるそれぞれのクラスターは互いに交差し、新たなパターンと新たなクラスターを次々に形成していく。例えば、最初に闘いをヴァージョン化したダンスは、その文脈にとってはオノマトペ的だったが、その後、狩りをヴァージョン化するダンスが発展し、この2つのダンスのヴァージョンによるクラスターが交差するとき、最初のダンスは、その交差した相互作用文脈の中ではオノマトペ的ではなくなっていくのである。

しかし、オノマトペ的ではないダンスや記号が、身体的な基礎づけからまったく遊離してしまうわけではない。それらは深い身体との繋がりを保持している。

ジェンドリンは次のように言う。

直接的なアイコン的オノマトペ {directly ikonic onomatopoeia} は、もはやここからは遠く離れたものである。しかし、行為を精緻化する、パターンの連鎖から派生したもの——それらはしばしば交差している——のクラスターは、恣意的ではない身体的かつ環境的な形成を通して生じるのである。異なる文脈において相互に関係するジェスチャーの諸連鎖のシステムは、それゆえに、相互に交差した関係によっても深い身体的な基礎づけをもっている。そのシステムは複雑なものであり、ユニットとしての音や動きの単なる空間的な位置づけをはるかに超えている。それはシンボリックであるが、しかし対象や状況や行為への1対1のラベリングの関係 {one-to-one label relations} によるものではない。(pp.179-180 邦訳196頁)

f) 言語の形成：2種類の交差 (Language Formation: Two Kinds of Crossing)

プロセスモデル第VII章の考究は、ついに、言語がどのように形成されるのかという問題に至る。

f-1) 媒介的推進、言語の使用であるもの (The mediate carrying forward, what language use is)

ジェンドリンは次のように言う。

言語が**使用**されるときには、どの語句も、それがどんな文脈で使用されるかにかかわらず、**それ自身**の普遍的な文脈（そのように見えるもの）を推進する。言葉は**それ自身**の意味をもつので、私たちは、今その言葉が使用されている特定の状況からまったく離れて、その言葉が何を意味するのかを語ることができる。(p.182 邦訳 198 頁)

言葉は、言葉自身の文脈をもち、言葉自身の推進をもっている。ジェンドリンは、「[言語の] **使用**の構造は、ある間接性 {indirectness} をもっている。それは“媒介的 {mediate}”である。私たちは、今や、言葉の推進**それ自身**によって、この現前する状況を推進しているのである」(p.182 邦訳199頁)と述べ、このことを「媒介的推進 (the mediate carrying forward)」と呼ぶ。

f-2) (諸) 文脈の集約、類の形成 (Collecting context(s), the formation of kinds)

では、言葉や語句はどのようにしてそれ自身の文脈を獲得し、形成するようになるのだろうか。

これまでに見てきたのは、次のようなことであった。ジェスチャーによって形成された身体の見え (body-look) の全体からパターンが出現し、特定の見えや聞こえによってパターンそのもの (patterns themselves) が推進されると、そのパターンは、現前しているこの文脈だけを再構成化するだけでなく、他の諸文脈も再構成化するようになる。そこに諸文脈の類 (kind) が形成される、ということである。

言葉の形成のプロセスそのものについては、この後 (f-4) で考察されるが、ジェンドリンはここで、(諸) 文脈 (context(s)) という独特の表記を用いて、言葉や語句がどのようなあり方で文脈を集約し、類を形成するのかについて、次のように述べる。

私は、語句がその (諸) 文脈 {context(s)} を再構成化する、と言う。このような複数の“諸 {s}”という表記は、ある意味では再構成化された数多くの文脈が存在し、同時に、別の意味ではどの文脈もすべて1つの普遍的な種類の文脈である、というあり様を示すものである。(p.183 邦訳200頁)

また彼は、「再構成化 {reconstituting}」によって、パターンは類やカテゴリーを創造するのだ」(p.183 邦訳200頁)とも言う。

すなわち、類似性や共通性があらかじめあり、そこからユニットとしての言葉が生じるのではなく、言葉によって現在の文脈が、他の(諸)文脈と交差することで類似性や共通性といったものが形成されるのである。

類とは——それを再構成化する語句とともに生じる——ある結果である。(p.183 邦訳200頁)

f-3) 側面的交差と集約的交差 (Lateral crossing and collective crossing)

このような、(諸)文脈を集約する交差は新しいものである。

これまでに見てきたような、ジェスチャーがヴァージョン化するパターンの連鎖(新しい暗在的なクラスター)が、以前からあるクラスターと交差するあり方を、ジェンドリンは「側面的交差 (lateral crossing)」と呼ぶ。これは、行動が、行動空間の中で相互に暗在的なクラスターを形成するあり方に基づくものであり、例えば、走ること (running) は行動空間の中では、多くの他の行動と関係しており、立ち止まって水を飲むことと同時に生起できない。木や鳥についてのジェスチャーも、この「側面的交差」の水準では、それまでに形成されていた木や鳥についてのジェスチャーのクラスターと交差することによってのみ意味をもち、推進される。

対照的に、類としての走ることは、走ることのあらゆる実例を集約するし、類としての木や鳥は、それらのあらゆる実例を集約する。このような新しい種類の交差では、集約すること (collecting) が、行動空間のクラスターではなくて、類の(諸)文脈と交差するものであり、ジェンドリンはそれを「集約的交差 (collective crossing)」と呼ぶ。「集約的交差」によって類が形成され、普遍(第3の普遍)が生み出されていく。

このような、「側面的交差」を通じた「集約的交差」によって集約される(諸)文脈の類は、一般に考えられているような、細部が脱落した共通性や抽象化ではなく、身体的に基礎づけられた細部の豊かさと複雑さに満ちている、とジェンドリンは指摘する。

伝統的には、さまざまに異なる状況に共通してある共通性 {a commonality} や抽象化

されたもの {an abstraction} が残って、これらすべての状況の異なる細部 {the different details} は脱落する、と考えられてきた。私は、この伝統的な考えが誤りであり、しかもとてもよくない誤謬であることを示そうと思う。集約された（諸）文脈 {context(s)} はすべて、それぞれの文脈があらゆる新たな文脈と**交差する**豊かさと複雑さに満ちている。交差の中で細部は脱落しない。細部は身体的な事象である万事連関化 {eveving} の部分である。(pp.184-185 邦訳201頁)

f-4) 言語の形成 (Word-formation)

そして、「側面的交差」と「集約的交差」という2つの交差によって、言葉が形成されるあり様が、以下のように示される。

あるダンスから生じたキニックキニック {kinnickinnick} という音が、今、多くの異なる文脈における多くの異なる音の形成の中で機能している、としよう。このタイプの音が今、“ク {k}”あるいは“キン {kin}”の音をもつ多くの異なる音の形成の中で機能している。その“キン {kin}”の音は、ある1つの行動文脈の中で身体があるあり様から引き出されたものであるが、今やこの音は、…… [中略] ……すべての他の行動文脈（それらは最初の行動文脈の中に暗在していた）の中で身体があるあり様と交差する。そしてこれが“側面的交差 {lateral crossing}”と呼ばれるものである。1つの文脈で“キン {kin}”が、別の文脈で“キンド {kind}”が、また別の文脈で“ケン {ken}”が使用される時、これらの音はそれぞれの類を再構成化し、創造する。それぞれがその（諸）文脈 {context(s)} を集約する。“キング {king}”が（諸）文脈を集約するようになり、そして“チャイルド {child}”も（諸）文脈を集約するようになる。(pp.185-186 邦訳202頁)

この例は、原言語の形成ということにとらえると、文字言語が生まれる以前の音声言語の形成のあり様をジェンドリンがイメージで（多分に戯画的に）示したものである。もちろん、「キング」や「チャイルド」といった言葉がこのように生まれたという言語形成の自然史を示そうとしている訳ではないだろう。

むしろジェンドリンは、このような例を示すことで、言葉によって集約された（諸）文

脈とはいったいどのようなものなのかを明確に描き出そうとしているのである。彼は次のように言う。

これらの集約された（諸）文脈は、私たちの論理における普遍のようなものではない。“類”は同族性 {clan} をもつ要素のすべてを再構成化するだけでなく、ある要素が、同族性の外側にある要素に対するものとは異なる仕方で、同族性をもつ要素に影響するあり様をも再構成化する。“ケン {ken}”という音は、その家族〔的類似〕性 {familiarity} の（諸）文脈を再構成化する。集約された（諸）文脈は、……〔中略〕……論理的に純粹に並べられた多数の整然とした個ではない。それどころか、集約され、再構成化された語がどのようなものであるかを論理的に述べることは、終わりのない作業になるだろう。（p.186 邦訳202頁）

つまり、言葉によって集約されるのは、整然と配列された論理的なものと言うよりも、複雑に再構成化され、推進された（諸）文脈であり、類である。普遍（第3の普遍）とは、言葉の形成以前からあらかじめあるような何かではなく、これらの（諸）文脈の交差の結果として形づくられる、とプロセスモデルでは考えるのである

そしてジェンドリンは、言葉の形成の根源的なあり様について、次のように述べる。

言葉は、それが形成されるときにはいつも、集約された（諸）文脈に、ある新鮮で複雑な文脈——そこで形成され得たもの {since it did} ——を加える。（p.186 邦訳202頁）

f-5) 短いユニット (Short units)

言葉は最も短いユニットへ向かう傾向を強くもっていることは知られているが、プロセスモデルでは、集約的交差によって言葉はそのように——短いユニットとして——形成されると考える。

通常の思考方法では、2つの異なる文脈の中で2つの長い文が形成され、その2つの文に同じ音の部分がある場合に、その部分が1つの独立したユニットとして存在するようになり、その音節がそれ自身の意味をもつようになるまで、ユニットはどんどん短くなる、とされる。

しかしジェンドリンは、「そのように考える代わりに、私たちは、集約すること {collecting} によって “部分 {part}” が部分として形成されるようになる、と言う。集約することによって、最初の類似ができるのである。」(p.186 邦訳203頁) と言う。

つまり、あらかじめ長い連鎖 (文) がすでにあったと考える必要も、いくつかの音が似ているとか同じであるものとして存在していると仮定する必要はない、とジェンドリンは言う。「“それ” がまさに、ある音の部分になるのは、その音が、集約された (諸) 文脈を再構成化しているそれ自身を見出すときだけである。すなわちそれは、それ自身として再び生起することができる何か、他の生起とこの生起のいずれでもありうるような何か、つまりそのようにありうる何かとして見出される」(p.187 邦訳203頁) のである。

このようにして、集約的交差は最も短いユニットをつくる。ある不完全な連鎖が集約された (諸) 文脈を再構成化するやいなや、それは “それ” になり、ある独立した実体 {an independent entity}、 “1つの {a}” 部分になり、そのようなものとして現れる。なぜそうなるのかというと、それは今や、**それ自身**の集約された (諸) 文脈を推進したからである。それは、その集約された (諸) 文脈を再構成化する——言い換えると、集約された (諸) 文脈の中での推進である。(p.187 邦訳203頁)

とジェンドリンは言う。

f-6) 言葉の文脈 ; 集約された文脈と相互作用文脈 (The context of a word; collected contexts and interaction contexts)

ある言葉のユニットが現れたとき、それはそれ自身の (諸) 文脈を再構成化するので、他の文脈や他の言葉のユニットとの関係をもつようになる。「したがって、どの言葉のユニットも、それ自身の生起であり、それ自身の (諸) 文脈の推進であるとともに、**互いに暗在的な諸連鎖のきわめて広大なシステムでもあるのだ**」(p.188 邦訳204頁) とジェンドリンは言う。

このようにして、言葉はそれ自身が推進する文脈と、他の暗在的な諸連鎖からなる広大な相互作用文脈の中で機能するようになる。この段階で、言葉は、形成されるというよりも、使用されるようになるのである。言葉は普遍 (第3の普遍) 的なものとなり、個々の

人間が生きている状況や身体からは離れたものになっていくようにも見える。

しかしジェンドリンは、今日の私たちにとっても言葉は身体的な仕方では形成されている、と指摘する。私たちは、ある特定の状況の中にあるとき、常にぴったりとした言葉を必要としている。身体からまったく遊離した言葉や言語というものは、実はありえない架空の構成概念である。

ここには文脈の2つのシステムがある、とジェンドリンは言う。1つは、言語システムとしてのそれぞれの言葉における、互いに暗在的な集約された（諸）文脈であり、彼はそれを、「**集約された生の相互作用文脈 (the collected life interaction contexts) (coliacxt)**」と呼ぶ。これは言葉が使用されることによって生み出される広大なシステムであり、システムとしての文化はこのような相互作用文脈によって構成されている、とジェンドリンは指摘する。もう1つの文脈は、「**相互作用的な生の文脈 (the interaction life context)**」であり、これは、私たちが生きている新鮮な状況そのもののことである。

そしてジェンドリンは、次のように言う。

私たちが生きている新鮮な状況は、集約された生の相互作用文脈を間違いなく超えるものである。なぜなら私たちは新鮮な形成を生きている {we live fresh formations} からだ。しかし、集約された生の相互作用文脈もまた、私たちが応答できるものをはるかに超えている。(p.190 邦訳206頁)

f-7) 統語 (Syntax)

短いユニットが形成され、それ自身の（諸）文脈を推進するとき、そうした短いユニットはその連鎖の続きをインプライするようになる。したがって、どんな言葉の使用も、他の言葉がどのように使用されるのかを変化させる。

ジェンドリンは、次のような例をあげる。友人に「私は疲れた、少し手を休めよう (I'm tired. Let's stop working)」と言う状況で、「私は丸い {I'm round}」と言うことはできない。「丸い (round)」という言葉は、異なる文脈に属しているからである。また、「私は疲れた。しよう (I'm tired. Let's)」と言うこともできなかった。「しよう (Let's)」という言葉は、別の言葉がやってくることをインプライするからである。「しよう (Let's)」と言った後に、例えばドアを指差すといった、何らかのジェスチャーや指示をしていれば、この

「しよう (Let's)」という言葉で文を終えることができたかもしれない。このことは、次にやっておかなければならないのは必ずしも言葉ではなく、ある相互作用のユニットである、ということを示している。

ジェンドリンは次のように言う。

言語の統語的な構造 {the syntactical structure of language} は、意味が求める基準 {the requirements of meaning} によって正当化されるようなものよりも、はるかに複雑であることは、これまでも気づかれてきた。それはまた、明示的な規則に還元することが難しい、奇妙な種類の構造でもある。それは、身体的な行動の諸連鎖と、諸連鎖相互の関係の特徴という、身体的な起源を示している。(p.191 邦訳207頁)

つまり、統語 (syntax) は身体的な複雑さと深い相互関係をもっているのであり、統語の構造は、ある意味では生得的なものでもある、とジェンドリンは指摘する。

f-8) 言語の使用 ; 新しい状況 (Language use; novel situations)

私たちは常に、「集約された生の相互作用文脈 (the collected life interaction contexts) (coliacxt)」の中のいずれかの地点にいると同時に、「相互作用的な生の文脈 (the interaction life context)」の中にも生きている。したがって、状況によって、一連の発話行為が焦点的にインプライされるか、特定のさらなる相互作用が焦点的にインプライされる。状況が日常の場合は、次の発話行為や相互作用も日常的なものである。「しかし、状況が新しいもので、私たちが何を話したり、行えばよいのか正確にはわからないときでも、きわめて見事な、次の相互作用の正確なインプライングがある。唯一のものとして、次の相互作用は新しく、それは以前には生じなかったものである」(p.193 邦訳 209 頁) とジェンドリンは言う。

このプロセスモデルの中で起源的にとらえられてきた、変化した事態の中では身体が死んでしまうか、新しい何かが生じるかのいずれかであるという図式は、言語や文化をもつ人間にとっても基本的に当てはまるのである。

ジェンドリンは次のように言う。

人は常に、その人の相互作用的な生の文脈 {one's interactional life context} の中の所与の地点におり、それゆえに、集約された生の文脈 {the collected life context} の所与の地点にいるのだ。正確な言葉や文が見つからないときでも、相互作用的な生の文脈におけるその人の存在 {one's being} は、明確なあり方でインプライされている。(p.194 邦訳 210頁)

そして、このインプライングが、これまでにあった言葉と、暗在的な諸連鎖の膨大なシステムを「再 - 万事連関化する (re-eveves)」とジェンドリンは表現する。

私たちの図式的な用語においては、言語の使用とは、この再 - 万事連関化 {re-eveving} である。(p.194 邦訳211頁)

f-9) 論述的使用と芸術 ; 再 - 万事連関化と再 - 認識 {Discursive use versus art; re-eveving versus re-recognition}

絵画は、ある視覚的なパターンであり、その描線や色は私たちに影響を与える。音楽のメロディは、その音のパターンの質を通して私たちに影響を与える。対照的に、言葉は、オノマトペ的なものや詩を除いては、その音のパターンの質を通して私たちに影響を与えるのではなく、その言葉が認識される必要がある。言葉の音のパターンも認識されるが、それは聞こえとしての音のパターンの質からは独立したものである。

語りも芸術も、ある新鮮な全体を形成するし、どちらについても、各部分の効果は文脈の中にある場合にはバラバラにあるときとは違ったものになる、とすることができる。しかし、語りのユニットは、いわば自己閉鎖的 {self-enclosed} なものである。各ユニットはまず、**それ自身**の効果をもつ必要があり、その後でのみ、その効果が各々を修正する全体をつくり上げる。(p.195 邦訳 212 頁)

とジェンドリンは言う。

もしも、言葉が音の質によって推進されるのなら、ある言葉に引き続いて生じる言葉はどれも、それまでに蓄積された効果の中に溶け合っていくだろう。ある音の直後に生じる

音は、それが別の違った音の後に生じる場合とは、まったく違った効果をもつ。しかし言葉は、こうした音の溶け合いの効果から独立している。それはなぜかと言うと、言葉の効果は、音によるものではなく、「意味 (meaning)」によるものであるからである。このような言葉の特有なあり様を、ジェンドリンは「自己閉鎖的」と呼ぶのである。

このような新しい関係を指し示すために私が選んだ用語が、“再 - 万事連関化 {re-eveving}”と“レパートリー {repertoire}”である。言葉のユニットは、ある自己閉鎖的な仕方で、**それ自身の万事連関化**であり、それ自身の(諸)文脈 {context(s)} の推進である。そして、その独立した万事連関化は、その発話行為の中で再 - 万事連関化される {is re-eveved in the speech-act}。(p.195 邦訳 212 頁)

f-10) 新しい表現

芸術は、新たな視覚的、音声的、あるいは動きのパターンを創造する。今日でも、新しい芸術は、これまでにヴァージョン化されていなかった私たちの世界の諸側面をヴァージョン化し、新しいパターンを創造する。しかし、「人間にとって最初にパターンが現れたとき、それは芸術ではなかった。それは、文化の形成 (culture-forming) であり、人間が何かをつくること (human-making) だった」(p.196 邦訳 213 頁)とジェンドリンは言う。

ここには、ある大きな違いがある。今や、こうしたパターンは芸術であり、いわば、生ではなく芸術であるような分離した異なる文脈 {a separated and different context} である。しかし、こうしたパターンは、変化してきた芸術ではない——芸術の中では、新たなパターンがこれまでと同じように生じているし、それは私たちの生を新しいあり方でヴァージョン化しており、私たちの生を精緻化し再創造している。変化してきたものは、今や言語が存在するということであり、私たちの生の状況 (私たちの相互作用文脈) は言語によって構造化されている、ということである。(p.196 邦訳213頁)

ジェンドリンは続けて、「今や、(この後に来る、VIIIを除いては) 視覚的、音声的あるいは動きのパターンが“最初のダンス {first dance}”のように働き、文化全体を再創造するようなあり様はない」(p.196 邦訳 213 頁)と言う。

言語が発展したとき、言語と芸術の間の分断も生じたのである。新しい芸術が、常に新たな視覚的で音声的な表現とともにあるのとは対照的に、言語のユニットは自己閉鎖的である。

f-11) 新鮮な文 (Fresh sentences)

論述的なユニットがどんなものであるかを正確に見てきたので、私たちは、言語の使用における新鮮な形成についての議論を終えることができる。(p.196 邦訳 213 頁)

とジェンドリンは言う。

言葉や言語は、私たち人間がもつさまざまな力や可能性を実現してきたかけがえのない創造であると同時に、私たちを縛り、限定し、複雑で豊かな身体性を阻む制限としてとらえられることも少なくない。ジェンドリンも、その自己閉鎖的な特徴については指摘しているし、私たちが生きている状況のほとんどは言語によって構造化されていることも否定しない。

しかし、たとえそうであっても、「通常なものとしての言葉の日常的な使用でさえも創造的である」(p.197 邦訳 214 頁) ののである。

言葉の使用は、すでに存在しているユニットをアレンジすることだけのように見えるし、各ユニットはそれら自身として独立して機能しているように見える。そして各ユニットは、それらが今機能しているあり様の中では再構造化されない(ように見える)。

しかし、新鮮な発話の創造は常に起こりうるものであるし、それは次のようなあり様で生起している、とジェンドリンは言う。

論述的なユニット {discursive units} は、**それ自身の**(諸)文脈の推進として機能しており、そうすることによってのみ、新鮮なプロセスの中で機能しているのだ。論述的なユニットが新鮮に使用されるあり様は、確かに、それ自身の(諸)文脈を付加する(そして、(諸)文脈と交差する)。その結果、語句のどんな使用も、その語句の意味を増やすのである。新鮮な意味が、[今使われているものとしての]この言葉と、その言葉の通常の(諸)文脈が交差することによって創造されるときには、隠喩のような何かが[言葉の]あらゆる使用の中に入って行く。しかし、言葉のユニットはどれも、それ自身を

閉ざしており、他の言葉と音として溶け合う {sound-merged} ことはできない。言葉のユニットはそれ自身の（諸）文脈を推進し、そうすることによってのみ、（音ではなく、意味に関して）ある程度新鮮に修正されるのである。（p.199 邦訳216頁）

f-12) 熟慮的な (Deliberate)

ジェンドリンは、発話はヴァージョニングと同じではないし、ヴァージョニングを超えたものであると位置づける。ヴァージョニングは行為を休止し、行為文脈を同じものに保つが、それが熟慮的に導かれることはない、彼は指摘する。ジェンドリンが言う熟慮的であることとは、どのようなあり様なのだろうか。

熟慮的であること {deliberateness} とは、人が何かをすることを止めて、そこにとどまり {stop}、たくさんの可能性の中からどの1つをなせばよいかを感じ取る、そうした能力 {capacity} のことである。（p.199 邦訳 216 頁）

発話は熟慮的なものであり、そこではほとんどの行為や相互作用も熟慮的なものになる。それらはいつでも休止することができ、休止から新たな行為や相互作用の生起が可能となる。これはもはやヴァージョニングではなく、熟慮を含んだ連鎖である。

熟慮的であることは、VII的な文脈の最も発展した休止のあり様であると言えるかもしれない。しかし「熟慮的であることには病理もある」（p.200 邦訳 217 頁）とジェンドリンは指摘する。それは、その相互作用の中で、身体的な潜在力がまったくもてなくなってしまうような場合である。

ジェンドリンは、それを超えるような身体的で力強い根本的な変化をつくり出せるあり様は、このVIIの中にはなく、次の第VIII章で見出されるものであるとする。

f-13) 1つの文脈以上のもの;人間の時間と空間 (More than one context: human time and space)

ここまで私たちは、人間の空間（内的でもあり外的でもある空間 {internal/external space}、相互作用的な生の文脈 {interaction-life-context}）について議論してきた。そし

て今、次のことを付け加えることができる。つまり、互いにインプライしている相互作用文脈のシステムは、発話（ジェスチャー）の連鎖を内包している、と。これらの相互作用文脈は、文脈間の関係を通じても、そして言葉のユニットとしても、**その両方**において、互いの中で暗在的なものである。……〔中略〕……それぞれの言葉は、それ自身の万事連関化 {eveving} であり、それ自身の（諸）文脈 {context(s)} の推進である。それゆえ人は常に、2 つの文脈の中にいる。言葉それ自身（その類）と、今のこの相互作用文脈（その類化された {kinded} 文脈）である。（p.200 邦訳 217-218 頁）

とジェンドリンは言う。

フリップ以後——つまり言葉が使用されるようになって——人は、存在している相互作用文脈から、実体的には存在してはいないが、存在しているものとしてつくられる相互作用文脈へと生きる、そのようなあり様が可能となったのである。それはあたかも、人が注意を向けることによって、どこへでも、いつのときへも動くことができるようである（実際にはそうはできないのだが）。人間がもつ時間と空間は、このように 1 つの文脈以上のものとしてもたれるのである。

g) フリップとはいつなのか？ 言語の使用における音の形成の中止（When is the FLIP? Cessation of sound-formation in language use）

ジェンドリンは、「**新たな音の形成 {new sound-formation}** が止まったのはいつであり、そしてそれはいったいなぜなのだろうか？」（p.202 邦訳 220 頁）と問う。

この問いは、いつ「新しいダンス」の連鎖はそれ以上生起できなくなるのか、あるいは、いつ芸術は始まるのか、といった問いと同じものである、とジェンドリンは言う。

言語はいったん形成されると、新しい音を取り入れることをしなくなる。それは驚くほど保守的 (conservative) であるように見える。今日でも、純粋な音の表現が身体を推進することは事実であり、私たちはそのような表現を音楽や声のトーンの中にもっているが、そうした表現が言語の中に加わることはない。

「フリップ (FLIP)」の瞬間に、いったい何が生じたのだろうか？ ジェンドリンは、次のような独創的な説明を行う。

身体の音の質 {the body-sound quality} がその文脈をヴァージョン化しなくなる最初のとき、その音の質は、その文脈の中にある。ヴァージョニングとは、その文脈全体の再構成化を意味する——どのビットもその文脈のヴァージョンである。もしも、文脈がパターンによって再構成化されないとしたら、そのパターンは文脈の中にとどまっているのだ。しかし、もう一度このことを振り返ってみよう。何かが妙である。ジェスチャーの連鎖が文脈全体をヴァージョン化する代わりに、初めてその文脈とともにあるまさにそのとき、そのことはまた、ジェスチャーの文脈がその後につき、もはや行動文脈の休止だけではなく瞬間である。これは矛盾ではないのか？ いやそうではない。それは今や、新しい音によって全体的にヴァージョン化されうるには広すぎる相互作用文脈なのである。その新しい音は、相互作用文脈の中にとどまる。そして、その相互作用は行動のヴァージョニングであることを止めて、その代わりに文脈になるのだ。(p.204 邦訳222頁)

つまり、ある音の質が文脈の全体をヴァージョン化しなくなるとき、その音はその文脈の中に残り、あるパターンによって文脈の全体が再構成化されないときには、そのパターンはその文脈の中にとどまる、ということである。そして、ある新しい音によってヴァージョン化され、再構成化される以上の広大な文脈——すなわち、相互作用文脈——が生まれるとき、その新しい音はその相互作用文脈の中にとどまり、その文脈をあらわす音（意味をもった音）になる、ということである。

フリップ {FLIP} までは、相互作用文脈 {interaction-context} はまさに存在していない。それはまだ、精緻化を伴った行動文脈 {a behavior context with elaborations} である。その精緻化が、音がヴァージョン化できる以上に複雑になるとき、それは文脈になる。すなわち、より広くなるのだ。そして音は文脈の中で生じ、相互作用の連鎖の中の1つの連鎖になる。(p.204 邦訳 222 頁)

これがジェンドリンの言う、フリップの瞬間である。

次のようにも言える。フリップ以前も以後も、音のパターンは、パターン化された文脈 {patterned contexts} を再構成化する。しかしフリップ以前では、“パターン化された

{patterned}”とは、文脈がその中にパターンの休止 {pattern-pauses} をもっていることを意味する。フリップ以後は、“文脈”は相互作用文脈 {interaction context}、パターンの文脈 {pattern-context} を意味する。そして文脈は、音のパターンと同じ性質をもつようになり、そのことによってのみ、言葉が“それ自身 {its own}”をもつようになる。集約された（諸）文脈とは、**それ自身**である（フリップ以前にも文脈はもたれてはいたが、“文脈”はそのときには行動文脈だった）。（pp.205-206 邦訳223頁）

フリップは、二重化された文脈を形成する。言葉自身の文脈と、相互作用文脈である。いずれもフリップ以後、膨大で精緻な文脈として発展してきた。そして二重化された文脈のうちの前者、すなわち言葉や文化の文脈の発展と構造化によって、私たちには相互作用文脈の全体を再構成化することが困難になっているのである。「“新たな最初のダンス {new first dances}”はもうないのだ。今あるのは常に、その文脈の中にある {within} 多くの他の可能な連鎖のうちの {among}、1つの連鎖である」（p.206 邦訳 224 頁）とジェンドリンは言う。このような状況から、どのように私たちは先へと進んでいくことができるのだろうか。それはこのプロセスモデルの最終章である第八章のテーマである。

f) の補遺 細部は脱落しない; 普遍とは虚の共通性ではない (Appendix to f) Details do not drop out; universals are not empty commonalities)

ジェンドリンは、この第七章の最後に、上記のようなタイトルによる長い補遺を記し、言語や普遍によって豊かな細部が脱落することはない、ということについての独特の考究を行っている。その論旨はおおよそ次のようなものである。

このプロセスモデルでは、類的な構造が最初からあるとは仮定しない。生きているプロセスそのものの中に、類的構造とは異なる秩序があるのだ。類的構造や類似性とは、あらかじめ存在しているような何かなのではなく、私たちが交差させる複数の経験によって形成され創造されるものである。

どんな経験も、今存在している言葉の類的構造 {the existing verbal kind-structure} よりもはるかに豊かであることは明らかである。（p.208 邦訳227頁）

とジェンドリンは言う。

そして彼は、次のように述べる。

アリストテレスやカントは、どの普遍が、どの個別の文脈の中に適用されるのかについては、分離された“実践知 {practical wisdom}”によって言われなければならないと考えたが、それは誤りだった。所与の文脈がいつ適用されるのかを言うために、別の判断 {another judgment} は必要ないのだ。それが必要であるように思われるのは、普遍というものには、その実例が存在しない、その細部も存在しない {empty of their instances, empty of their detail} ととらえられてきたからである。共通であるものとは、それぞれの事例の中でさまざまであるものから離れた、抽象化されたものであるとされてきたのだ。私たちは、そうではないことを見出した！ (p.212 邦訳 230 頁)

文脈の形成とは、文脈の再構成化であり、他の文脈を変化させる。「これは細部が脱落するようなことではない！」 (p.213 邦訳231頁) とジェンドリンは言う。

シンボルとは結局、単なる“～について [ということの認識] {about}”ではない。シンボルは私たちを変化させ、身体プロセスを生み出す。シンボルは私たちを推進する。普遍は、分離しているものでも、別の水準上にあるものでもない——普遍とは、(諸) 個 {the particular(s)} をもち、生き、感じるあり方なのである。(p.214 邦訳232頁)

7. プロセスモデル第Ⅷ章 暗在するものによる思考 (TINKING WITH THE IMPLICIT)

プロセスモデルの最終章である第Ⅷ章では、人間が構築してきた第Ⅶ章的なあり様を超えて、私たちがどのようなさらなる地平へと向かっていくことが可能であるのかが、これまでの第Ⅰ章から第Ⅶ章までの考究を踏まえたうえで論じられる。

a) 導入 {Introduction}

この第Ⅷ章への導入としてジェンドリンが最初に引用するのは、モダンバレエの先駆者であるイサドラ・ダンカン (Isadora Duncan) の自伝における、次のような記述である。

“何時間も両手を太陽神経叢 {the solar plexus} (胃の下のあたりにあるエネルギーの集結部) の上で組み、じっと立っていることもあった。長時間、まるでトランス状態になったかのように動かずにじっとしている私を見て、母はひどく心配した。しかし、私は求め続け、すべての動きがわき出す源、動力の中心、あらゆる種類の動きが生まれる統合体.....をついに発見した。” (イサドラ・ダンカン『魂の燃ゆるままに』 {Isadora Duncan, *My Life, Liveright, N.Y.: 1927, p.75*} (p.126 邦訳 235 頁) ⁵⁴

ジェンドリンは次のように言う。

イサドラ・ダンカンは、時として、長い時間じっと立ち尽くす。彼女はダンスのステップを感じ、その中へ入ろうとするが、そのステップはぴったりとしたものには感じられない。ぴったりするように感じられるステップはまだそこにはない。上記の引用において彼女が言っているように、彼女は“求め続け {seeking}”ている。ぴったりした感じ {the right feel} が生じるのを探し続け {looking for}、待ち続け {waiting for}、それがやってくるのを心待ちにして {willing to let} いる。この、求め続けること、待ち続け

⁵⁴ この引用箇所訳については、山川 亜希子・山川 紘矢訳 (2004)『魂の燃ゆるままに——イサドラ・ダンカン自伝』(富山房インターナショナル)の邦訳(95-96頁)を参考にした。

ること、探し続けること、やってこさせることは、ある種の行為である。それは.....と関係し、相互作用する、ある仕方である。では、.....とは何か？ それはどこでできるのか？ (p.216 邦訳 235 頁)

ジェンドリンは続ける。

それは、あるぴったりした感じとの相互作用であり、新しい場所にやってくる新たな種類の感じ {a new kind of feel which will come in a new place} である。この感じ、そしてこの新しい場所は、どちらもまさにこの相互作用の中でつくり出される。…… [中略] ……彼女の新たな、探し続けること、待ち続けること、やってこさせること……。これらはやってくるものを変化させるが、やってくるものはまだぴったりしない。彼女は、それまでとは違ったあり方でそれに向き合い、その変化した感じ方 {its changed way of feeling} に応答する。彼女は、自分が踊るはずのものについての感じの、ある面を指し示し {points to}、それをたどる {pursues it}。その、指し示すことや、たどることに応答する中で、その感じ自身がさらにくっきりとしたものになり、以前はそこになかった空間の中にある何か {something in a space that wasn't there before} が、ある与件 {a datum}、ある対象 {an object} のような何かが存在するようになる。それが形成されるにつれて、その“感じ”は、いわばそれ自身を理解するようになる。その感じは、その感じとともに、それ自身の“そう、そうだ...”をもたらす {It carries its own "yes, yes..." with it}。彼女は、以前そこにいた自分ではないような新しいあり方で“彼女自身に触れて {in touch with herself}”いて、待ち続けている。そこには、ある新しい、変化した、よりぴったりとした“感じ”があり、“触れていること”がある。そして彼女は、以前は舞うことができなかったダンスを舞う。(p.216 邦訳 235-236 頁)

イサドラ・ダンカンにおいてこのように生じたことは、どこが新しいものなのだろうか？ そしてそれは、第VII章で見たような生起や連鎖の種類とはどこが違っているのだろうか？ ジェンドリンは次のように指摘する。

そのダンスそれ自体は、私たちがVIIで取り上げた種類の連鎖 {the kind of sequence we took up in VII} である。種類において新しいのは、この新たな種類の“感じ”であり、立

ち尽くしている間に彼女が繋ぐその連鎖 {the sequence she goes through while standing still} の形成である。(p.216 邦訳235頁)

第VII章の最初で見た「新しいダンス」も、身体から発展する新たな連鎖だった。しかし、ダンカンの記述にあるような「長い休止 (long pause)」はなかった。「この新しい休止の中には、新たな種類の“感じ”がある」(p.217 邦訳 236 頁) とジェンドリンは言う。

VIIにおいても感情 (feeling) はあった。しかしVIIでは、人はVII的タイプのシンボルによってのみ感情をもつ。つまり、言葉を使用するか、行為をイメージすることの連鎖の中で感情をもつ。だから、VIIでは、最初に感情をもち、それからダンスをすることが可能になった。

VII的な通常の種類の感情とは、私たちの状況がどのように文化的に構造化されているか、ということの部分である、とジェンドリンは指摘する。彼によれば、文化とは、状況の構造、あるいは人間の相互作用のパターン化と言えるものである。VIIにおいては、私たちは相互作用の中に生じる「スロット (slot)」に感情をもつ。同じ状況の中にいる複数の人々は、その相互作用の「スロット」を共有しているので、同じような感情を感じ、共有することができるのである。ジェンドリンは、このようなVII的な感情を「スロット化された感情 (slotted feelings)」と呼ぶ。また、このようなVII的な感情以外にも、私たちは「行為の中の感情 (in-action feelings)」——VI的な「行動の中の感情 (in-behavior feelings)」を基盤としたもの——をもっている。しかし、「スロット化された感情 {slotted feelings} も、行為の中の感情 {in-action feelings} も、そのようなものとして {as such} の諸文脈のシステム全体についての感情ではない」(p.218 邦訳 237 頁) とジェンドリンは言う。

今、私はVIIIの連鎖が全体を推進すること、そしてVIIIの連鎖はその全体をもつことだということを示そうと思う。その新しい“感じ”は、全体を感じる、もつこと、連鎖化することである {The new "feel" is a feeling, having, sequencing, of the whole}。(p.218 邦訳 237-238 頁)

ジェンドリンは、イサドラ・ダンカンが待ち続けることをせずに、どこかの地点でダンスをすることもできたと言う。しかし彼女は、そうする代わりに、違う何かに専心したのだ。彼女が専心したことは何だったのだろうか。「休止の後のどの新たな瞬間においても、

彼女はその文脈の全体を、ある“感じ”（それは、まだ十分にじっくりとこない）として直接に感知する。私たちがこれまで考察してきた、どの種類の連鎖も、このようなことはできなかった」（p.219 邦訳 238 頁）とジェンドリンは指摘する。

例えば、Ⅶ的な状況（あるいはⅥ的な空間）においても、自分が何かを探して移動するとき、そこで経験される景色は、移動することや探すことによって変化するが、同時に、その変化した景色は自分の移動の仕方や探し方に影響を与える。同じように、ダンカンが「長い休止」の中で行ったすべてのことは、ある「感じ」の形成や、その連鎖化に影響を与えるのである。

私たちの新たな種類の連鎖においては、ダンカンがまだ曖昧な感じに向かってつくる動きは、この感じ——それは一方で、彼女の身体から生じる次の動きに影響を与える——に対する影響をもっている。今はまだ、これらの動きはダンスのステップではないし、言葉でもイメージでもなくて、彼女の、この感じとの相互作用であり、指し示すこと、追い求めること、待ち続けることである。そして、新たな環境の変化は、この“感じ”における変化である。この新しい連鎖のどのビットからも、ダンカンはダンスをすることができただろう。しかし彼女はそうする代わりに、あるダンスが生まれる全体を感じ、まだ十分にぴったりしたものでないこの全体を感じる。彼女は、この感じに向かってある動きを試みる。するとそれは、彼女の身体がさらなる動きへと推進されるように変化する……〔中略〕……。このようにして、その新しい連鎖は、**文脈全体の中の変化**のひと繋がりになり、ダンスによってはつくられ得なかったこの全体における、ある種の変化となる。（p.219-220 邦訳239頁）

とジェンドリンは言う。

ここで生じているのは、Ⅶ的なダンスの状況の休止であり、同じダンスの状況のヴァージョニングである。Ⅶ的な意味感覚では、その状況はずっと同じものにとどまっているのだが、これまでも見てきたように、ある文脈のヴァージョニングからその文脈が再構成化されるとき、そこからまったく新しい何かが出現することがある、とプロセスモデルではとらえる。そしてイサドラ・ダンカンからは（その後、モダンバレエと呼ばれるようになる）まったく新しいダンスを生み出す「何か」が生まれることになったのである。ジェンドリンは、そのような「何か」を「直接照合体（Direct Referent: DR）」と呼び、こうし

た直接照合体が出現する新たな空間を「Ⅷ的空間」と呼ぶ。

その新たな空間は、まだ多くの人たちには馴染みがないものかもしれないが、空間や環境の一部は環境#3として自ら織りなされ、自ら発達するもの (homegrown) であるとするならば、現代の私たちにとって、その空間は確かに形成されつつあるものである、とジェンドリンは指摘するのである。

私たちの新たな連鎖における変化はわずかなものに見えるかもしれないが、その変化はどれも、実際には膨大な変化である。ダンカンはそのを、“動力の中心、あらゆる種類の動きが生まれる統合体 {the crater of motor power, the unity from which all diversity of movements are born}” と呼んだ。それは、新たな種類の源泉である。そこにはⅦのタイプのダンスや語りや行為はない。新たな連鎖は多くの変化をつくり出すことができる。そして、こうした変化のビットが生じた後には、あらゆること {everything} が異なるのだ。どのビットも新しい全体であり、変化した全体である。(p.221-222 邦訳241頁)

ジェンドリンは、「この新たな種類の身体的な“感じ”を、より通常的身體感覚 {the more usual body sensing} から区別しなければならない」(p.223 邦訳 242 頁) と言う。

例えばイサドラ・ダンカンは、クラシックバレエで教えられてきたような、脊椎のいちばん下の軸を中心にして、腕や脚や胴体を左右シンメトリックに動かすような動きではなく、彼女の太陽神経叢がもたらす豊かで複雑でダイナミックな感じや動きの全体に注目した。ジェンドリンは他の典型的な例として、スタニスラフスキー (Stanislavski, K.) やアインシュタイン (Einstein, A.) をあげる。スタニスラフスキーは演劇の中で、「複雑な生命現象の総体を内包する、新たな種類の“感じ” {new kind of "feel" which contains in itself the entire gamut of complex life phenomena}」(p.223 邦訳 243 頁) が形成されることを求めた。また、アインシュタインは、ある確かな感じ——当初は数学的な表現や物理学の測定においては明確にすることができなかったが——に導かれて、その感じをつかんだ 10 数年後に一般相対性理論を提唱することができたのである。

ジェンドリンは次のように言う。

独創的な思索家たち {original thinkers} はおそらく、とても頻繁に、直接的な照合 {direct reference} に専念する。…… [中略] ……この [フェルトセンスへの直接照合という]

方法をシステマティックなものにすることは、思考において有益であるだけでなく、諸規則についての新しい分野の全体、新たな種類の論理、思考の力なるものを理解する新たな仕方や、その力のさらに強力な拡張などを切り拓くものでもある。(p.225 邦訳245頁)

b) 直接照合体とフェルトシフト (Direct Referent and Felt Shift)

ジェンドリンは、フェルトセンスへの直接照合という方法をシステマティックにすることが、なぜさまざまなものを切り拓くのかの理由を明らかにする前に、直接照合体が形成されるあり様を具体的に記述しようとする。

そこに記述されるあり様は、フォーカシングとして(心理臨床の分野では)広く知られているものであるが、しかしここでの記述は、私たちが知っている、いわゆるフォーカシングのプロセスとは質的にかなり異なるものであり、いわば「フォーカシングのための哲学的な原理」とでも言えるような考究が行われている。

ジェンドリンは、「直接照合体は常に形成されるものではない。確かに、私たちがまさに望むときに、必ずしもそれは形成されるわけではない。また、それが形成される時、形成されたどんなものもそれであり、そしておそらくそれは、私たちが望んだり期待したりしていたものではまったくない」(p.225 邦訳 245 頁)と言う。直接照合体は、最初は、意図的につくり出したり、形成したりできるものではない。それは「やってくる (come)」ものである、とジェンドリンは言う。

直接照合体が形成され、やってくる時、何かはジェル化 {jelled} し、何かが生じ、何か——とても多くの——が納まるべきところに納まる {something - a great deal - has fallen into place}。直接照合体の形成 {direct referent formation} は(新しい種類の)推進である。(p.225 邦訳 245 頁)

では、このような新しい種類の推進としての直接照合体の形成は、どのように生じるのだろうか？

最初は、やってくるものは不安定であり、しっかりとつかむことが難しい間 {a period}

がある。人は、“状況全体”もしくは“問題全体”を感知するが、しかしその感覚はまた遠退いてしまう。(p.225 邦訳245頁)

とジェンドリンは言う。

状況や問題の全体についての感じ (feel) や意味感覚 (sense) が一瞬生じるが、それをしっかりとつかむことは難しく、私たちはそれを失ってしまうことも少なくない。しかし、その全体についての感じに何らかの「ハンドル (handle)」——その感じのある側面を指し示す言葉やイメージなど——が見出され、そしてそれがその感じにぴったりとしたものであれば、それをしばらく使い続けることができる。このようなハンドルによって、問題全体のフェルトセンス (felt sense) は何度でも繰り返し「やってくる」ことが可能となる。

そのハンドルが機能すべく機能するときには、直接照合体はより安定的に形成されるだろう。…… [中略] ……このハンドルがまさにぴったりとしているという身体的な感覚がある。…… [中略] ……今や、直接照合体がやってくるときには、そのつど言葉が繰り返され、そのつど直接照合体が待たれるが、そのたびに身体には安堵感や、何かシフトする感覚、開放感、躍動感 {a sense of relief, something shifting, releasing, stirring} が生じる。(p.226 邦訳246頁)

このような推進される感覚を、ジェンドリンは「フェルトシフト (felt shift)」と呼ぶ（これもフォーカシングの中では馴染みの用語であるが、一般にフォーカシングにおいて用いられているものとは、質的な重みにおいてかなり異なる）。それは問題全体についてのある種のヴァージョニングであり、再構成化と言えるものである。このようなヴァージョニングが連鎖化されるようになると、より大きなフェルトシフトが生じ、安堵感や開放感、躍動感はもっと強く生起するようになる。そして、はじめは問題についての個人的な反応に過ぎなかったものが、問題を明らかにし、理解するための複雑かつ新しいあり方を暗在的に包含するようになる。ここで暗在的に機能しているものは、周辺的なものと言うよりも、「私たちが語ったり思考したりしていることの、まさにそのときの中心点そのものである」(p.227 邦訳 247 頁) とジェンドリンは言う。

問題全体についての感覚は、より通常的感情や情動 {the more usual feelings and

emotions}とは全く違っている。……〔中略〕……全体についての感覚は常に、世界の中の可能な諸連鎖の複雑な文脈を推進しているあり方であり、世界の中でまだ可能になっていないものへの唯一の焦点的なあり方なのである。(p.227 邦訳247頁)

このようなあり方は、まだ形成されたり連鎖化されたりしたことのないものであり、それは個である一人ひとりの中から新鮮な実例として生起するものである、とジェンドリンは指摘する。

ジェンドリンは次のような例をあげる。「誰かがあなたを侮辱したとする。今あなたは傷つき、怒り、悔しがっている」(p.228 邦訳248頁)。私たちはVII的な相互作用の中にいるから、その文化的なスロットによって、こうした怒りや悔しさを感じるのである。少なくとも私たちの文化の中では、誰もがこのように感じるだろう。しかし、「あなたと同じように侮辱され、怒りや傷つき、悔しさを感じている他の人たちがいるとする。ここには、その人たちがどうしてそのように感じるのかを尋ねるといふ、もう1つの水準がある」とジェンドリンは言う。「そして、それぞれ違う人たちからは、とても違ったさまざまな具体例 {very different specifics} が現れる」(p.228 邦訳249頁)のである。

例えば、ある人は「冴えない (crummy)」というハンドルによって、次のような焦点化を行う。「“冴えない {crummy}”それはまだそこにあるだろうか? (じっと待つ) ああ、そうだ、もう一度出てきた.....”〔中略〕..... “フーッ.....そうだ、それがそうなんだ.....ちょっと待って.....私は今、言葉にすることができる。”〔中略〕..... “ああ、あの人たちがどう思おうとかまわない。でも、私は間違っていたし、そのことをはっきりさせるのが嫌なんだ。それは、冴えない気持ちそのものだ。おかしいな、私はこのことをさっきから知っていたし、ある意味では知らなかった.....そう、そのとおりなんだ。”〔中略〕..... “ああ.....それはそんなに大きな間違いではなかった。それは、私がいつもこんな冴えない仕方 {this crummy way} でいなくてはならないことに似ているし、自分でそう見せてきたような醜い有様 {the ugly way I've been made to look} の内側に入って、そこにとどまらなくてはいけないんだ。私はそこに戻って、這い上がり続ける。”〔中略〕..... “ああ.....そうだ、フーッ.....私は、そこに戻って這い上がる時には、自分のよいエネルギーをストップさせてしまうんだ、確かに、.....そう、私はその薄汚れた {cruddy} 場所にうまく立つことができるし、それをしっかりと見据えることだってできると思う。でも、このことが起きてから、私は、大丈夫ではないものが何も押し寄せてこないように、

そこに戻って自分をストップさせていたんだ。フーッ……何という安堵感だろう。私には今、そうすることができる。”」(pp.229-230 邦訳249-250頁)。

しかし同じ場所で同じような侮辱を受けた別の人は、次のような焦点化を行うかもしれない。「“そうか……うーん……私は怒っている。” …… [中略] …… “……そうだ、わかった……うーん…… (ため息をつく) 私は奴を殺したいと思う。そのように思うのは、私にとって安全なことではない。そう、そのとおり、(息をつく) 私はバカなことをしようとしている。奴を本当に殺さなくても、バカなことやらかしそうだ。自分のこんな部分が出てくるのは好きじゃない。コントロールするのが難しい。” …… [中略] …… “そう、コントロールできないことが問題なんじゃない。私が嫌なのは、そうしたあり方なんだ。少し時間をとってそれと付き合う気になれば、その怒りはそれほど危険なものではなくなる。でも私は、それをもって、抱えていられることが自分にできるとは思えなかったんだ。フーッ……それを抱えることができれば、自分が何をしたいのか考えることができると思う。”」(p.230 邦訳250-251頁)

このような複雑で一人ひとり微妙に異なる分化 (differentiation) のあり方は、VIIの連鎖の中には見られなかったものである。

通常の決まりきった文化的なパターンは、上に述べたようなことを含んではいない。すでに含まれているならば、これらの人々の行為は [上述のようには] なされないだろう。すでに与えられたパターンの中の連鎖によってではなく、状況全体が新しい種類のあり方で推進されるときにのみ、それらは出現するのだ。ここで語られること、そして可能な具体的な行為は、以前にはそのように生じたことはなかった。それらは世界の歴史において新しいものなのである。(p.230 邦訳 251 頁)

とジェンドリンは言う。

こうした一人ひとり異なる、新鮮で複雑な分化のあり方は、ある詩的 (poetic) な語り方によってなされる、とジェンドリンは指摘する。これはVIIで見た、言語の論述的な使用 (discursive use) と芸術 (art) の分断を、ある意味で乗り越えるあり様である、と言えよう。

直接照合体の形成は、こうした詩的な新しさ {such poetic novelty} を可能にする——しかし、その新しい語り方は結果に過ぎない。それよりも重要な連鎖は、直接照合体の形成であり、直接に感じられる不明瞭な全体としての状況全体をもち、感じていることである。この状況全体をもっていること、この連鎖は推進である——私たちはそれをもち、感じるができるだけである——それは、時を越えて、その全体を休止し連鎖化するあるあり方である。(p.231 邦訳 251 頁)

c) 新たな種類の連鎖 (The New Kind of Sequence)

ではここで生じる新たな種類の連鎖は、いったいどのようなものなのだろうか？

それは、「まだここにはない“感じ” {a not-yet-here "feel"} へと向かう相互作用的な動きが、この“感じ”を生み出し、そしてそれが形成される新たな空間を生み出す、という連鎖である」(p.232 邦訳 252 頁) とジェンドリンは言う。

そしてこうした連鎖は、「同じ」状況の全体をヴァージョン化するものであり、再構成化するものである。ここではVII的なタイプのシンボル生成は休止している。

ジェンドリンは、直接照合体の形成においては、「人は状況を同じものに保つことも、それが変化するようにすることもできる」(p.233 邦訳 253 頁) と言う。

人は、その連関 {the relevance}、そのポイント、事柄全体の意味感覚を同じものに保つことで {by holding}、状況を同じように保つ。私が1つの全体として感じ取りたいのは、この状況（そして、それに含まれるすべてのこと）である。私はこの連関を維持する。しかしまた、私は新しい種類の感じ、問題全体についてのフェルトセンスがやってくるのを待っている。私にできることは、それがやってくるように委ねる {let} ことだけであり、私にはそれをつくり出すことはできない。私は、自分の身体の感じが浮かび上がるままに、動くがままにさせ、私の熟慮的なコントロールの外側でその感じがなすどんなことでも、それがなすままにさせる。その間私は、私の熟慮的なコントロールを、状況、連関が同じものに保たれるように用いるのである。(p.233 邦訳253-254頁)

「保つことと委ねること {holding and letting} は矛盾するもののように思われるかもしれないが、これらは1つの同じ行為である。保つことと待つこととも同様である。人がそ

のようにすると、[初めは] 漠然とした身体的な変化が生じ、そしてそれが少し続いた後で初めて、ある明確な与件 {a distinct datum}、 “これ {this}” と言うことができるフェルトセンス、直接照合体が生じる」(p.233 邦訳 254 頁) とジェンドリンは言う。そして、このような明確な与件が生じるのは、それ自身の新しい空間の中である。それは文字通りの意味での身体の中の空間とは異なるものであり、Ⅷの新たな連鎖によってはじめて形成される新しい空間である。

ジェンドリンは、アイバーグ (Iberg, 1997)⁵⁵ がフォーカシングのプロセスとして概念化した「胎生期的 (parturient)」(シフト以前の段階)、「新生期的 (nascent)」(シフト以後の段階) という用語を用いて、新生期的な直接照合体が形成されると、それまでのような無数の満足できないあり様ではなく、インプライされているものを推進するような焦点化されたあり方で語ったり、行為することができるようになる、と指摘する。

d) 連関と完全なフィードバック対象 (Relevance and Perfect Feedback Object)

このようなⅧの連鎖の新たな推進によって、何がもたらされるのだろうか？

ジェンドリンは次のように言う。

それがやってくる (ジェル化する、出現する、“新生期的 {nascent}” なものになる) とき、私は問題 “だった” ことをもつ (感じる、連鎖化する) ようになる。いわゆる、ある対象 {an object}、ある与件 {a datum} が形成され、それはもう変化したり形成されたりはしない。(p.235 邦訳256頁)

このような対象、与件が形成されると、それは消え去ったり、まったく違った何かに変化したりすることはなく——もちろん、推進され、再構成化されることには開かれているだろうが——、ある「これ (this)」、あるいは「それ (it)」として世界に存在するようになるのである。しかも、直接照合体が形成され、ジェル化するときには、常に大きな身体的な安堵感が生じ、そこで生起するどのビットも、それ以前のビットが焦点的にインプラ

⁵⁵ Iberg, J. M. (1997) Three phases of focusing: An example from a ten-year-old boy. *The Folio*, 16(1-2), 67-74.

イし、求めていたものであることがわかる。身体の中の多くのプロセスが停止から推進へと向かう。「直接照合体がやってくる（形成される、出現する、ジェル化する）とき、それは“完全なフィードバック {perfect feedback}”の連鎖からやってくる」（p. 236 邦訳257頁）とジェンドリンは言う。

直接照合体は完全なフィードバック対象である {The direct referent is a perfect feedback object}。 (p. 236 邦訳257頁)

VIIIの連鎖がなくても、問題が何なのかを語ることはできる、とジェンドリンは言う。しかし、VII的な連鎖によってなされる問題の語りは、先に進んでいくことができないような文脈がどのようなものであるかを語るような、（解決の実例ではなく）問題の実例である。ジェンドリンはこのような語りを「ネガティブな実例化 (negative instancing)」と呼ぶ。一方、直接照合体の形成によるVIIIの連鎖は、このような実例とはまったく異なる実例を生み出す。

直接照合体が形成され、生まれ（ジェル化し）、開かれる（“新生期的 {nascent}”なものになる）とき、推進が生じる。それは、それが生じうるそのあり方でのみやってくる。その特徴は、通常、私たちが予測できるものではなく、私たちがコントロールできるものでもない。ときには、それは1つのそれではなく、2つのものや、3つの側面だったりする。ときには、それはどちらも“それ”ではないような2つのもの——しかしそれらは交差している——の奇妙な結節であったりする。直接照合体は、それ自身の特質をもっている。直接照合体の形成には大きな変化、以前は推進されなかった焦点的なインプライングによる全体の推進がある。(p.237 邦訳258頁)

とジェンドリンは言う。

e) 新しい推進と新たな空間についての図式的概略 (Schematic of the New Carrying Forward and the New Space)

このようなVIIIの連鎖による推進も「二重化 (doubling)」されている。VIIIの推進は、あ

面ではⅧ的なそれまでの連鎖の特別なケースである。それは、問題について身体が感じていることと相互作用すること、それを指し示すこと、それがやってくるのを待つことなどである。こうしたことは特別なことではあるが、それまでの連鎖とまったく切り離されているわけではなくて、その特別なケースなのである。しかし同時に、この新たな種類の古い連鎖の中で、もう 1 つの推進が生じる、とジェンドリンは言う。それは、「身体感覚全体 {the whole body-sense} が、それ自身が推進されているのを見出す」(p.238 邦訳 259 頁) という新たな推進である。そしてこのような身体感覚の変化が連鎖化し、ヴァージョン化され、再構成化されるとき、それは新しい種類のレジストリとなり、新しい環境となる。

このプロセスモデルのスキーマ (図式) では常にそうであったが、新しい水準では単純に見えるものが、古い水準においては膨大な変化を生み出す。ジェスチャーが通常の行動とは異なり、通常の行動によっては生じることのなかった連鎖と推進を形成したように、もはや直接照合体は、通常の感情とは異なるものなのである。

ジェンドリンは次のように言う。

直接照合体は、ある種の (新たな種類の) 表現である。そのどのビットも、人がまさにそうであったことについての新たな種類の身体的な感覚 {bodily sense} であり、人は自分自身が推進されているのを見出す。後で振り返ると、その変化した身体の感じ

{body-feel} は、身体がまさにそうで “あった {was}” ところのものであり、このような関係は新しい推進なのである。この、表現されたそれ自身を見出すこと

{finding-itself-expressed} が、再 - 認識される “感じ” の変化 {a "feel"-change} を再び作り出す身体の変化 {a body-change} であるとき、それが再び、身体によって焦点的にまさにインプライされていたもの (の展開) であるときには、そこには連鎖が生じる。これらの身体の感じの変化は、ある新しい環境であり、新たな種類の連鎖の中につくり出された新しいレジストリである。(p.240 邦訳260-261頁)

ジェンドリンは、Ⅷの連鎖と推進によって生まれる空間も二重化されている、と言う。「直接照合体が形成される空間は、ある意味では虚…… [中略] ……であり、別の意味ではもちろん、ヴァージョン化されている身体的にインプライされた複雑さのすべてである」(p.242 邦訳 262 頁) のだ。

したがって、その空間の広大さを理解することができる。それは、その状況がそうであるような種類の空間ではない。私たちはその中にいる。ここにあるのは、**状況全体が動く**空間である {Here is a space in which THE WHOLE SITUATION MOVES}。私たちはもはや状況の中にいるのではなく、その新しい空間に在るのであり、私たちはここにいて、状況は今や私たちの向こうにある、新しい与件であるような何かである。(p.242 邦訳263頁)

とジェンドリンは言う。問題についての直接照合体が形成されるとき、「人は広大な地平へと開かれる {one comes upon a vast plane}。大きな諸問題は巨大な岩のようにそこにあるが、今やその大きな開かれた空間に比べればそれらは小さなものである」(p.242 邦訳 263頁)。

その空間は、[次のような]連鎖によってつくられる。その連鎖は、この新たな種類(全体 - 全体 - 全体 [の連鎖])の身体的な推進である。ここで身体が感じていること {body-sensing} は、身体が何であり、何をインプライしており、まさに何であったのかの、新しい表出 {the new rendering} であり、新しいレジストリ {the new registry} であり、新しい環境のヴァージョニング {the new environmental versioning} である。…… [中略] …… 私たちにとって、空間とは常に何らかの結果であり、ある連鎖によって生み出される“内部”である {Space, for us, is always a result, an "in" that is generated by a sequence.}。どんな連鎖も、それ自身が生み出す空間の中で進行する。(p.242 邦訳263頁)

とジェンドリンは言う。

そして、ジェスチャーが行動の諸文脈の中から1つの文脈を全体として取り出したのと同様に、Ⅷの連鎖は、人がいる諸状況から1つの状況を1つの全体として取り出すことができる、とジェンドリンは指摘する。

だからこそ、Ⅷの空間は、虚ではあるが、しかし1つの全体的な複雑性として推進される豊かな生の意味 {the life meanings} として感じられるのである。この広大な空間は、

VIIの空間がより大きくなったにとどまらない。それは新たな種類の媒体 {a new kind of medium} を伴った推進によってつくられるのである。出現する対象（直接照合体 {the Direct Referent}）は新たな種類の対象である。その対象と空間は一緒に形成される。それゆえ、その空間は必然的にその対象よりも大きいのである。(pp.243-244 邦訳264頁)

そしてジェンドリンは、このような空間の中にある「自己」もまた、とても広大なものである、と言う。

f) 直接照合体の形成を例証するポイントについての迅速な言明 (Rapid Statements of Points that Instance Direct Referent Formation)

以下にジェンドリンは、直接照合体が形成されたことを例証する 10 のポイントを列挙している。簡潔にその内容を見てみる。

f-1) VIIIの連鎖がVIIの文脈の中に変化をつくり出すあり方 {How an VIII sequence makes changes in the VII-context.}

「新しい連鎖のどのビットも、VIIの文脈全体の変化したヴァージョンである。どのビットも、以前のビットがそうであるために必要だった文脈 {the requirement-context that the previous bit was} を推進する（を満たす）」(p.245 邦訳266頁) とジェンドリンは言う。この新たな種類の推進によってつくられ出される変化は、VIIの連鎖によっては形成されえないものである。「それは、私たちが“メッシュ化された”と呼んだ種類の {of the sort we called "meshed"} (VII-A) 連鎖のすべてにおける変化である。それらの連鎖すべてが変化するが、そのあり方は、それらの連鎖のどれかが他の諸連鎖の中にもたらしうるような変化ではない」(p.245 邦訳266頁) のである。

f-2) 直接照合体 (DR) から生じるどんなVII的連鎖も、そのVIIの文脈との関係においては新たな“第1の”連鎖のようである {Any VII-sequence from the Direct Referent (DR) is like a new "first" sequence in relation to the VII-context.}

ある新化したヴァージョニング {a renewed versioning} によって、新たな「第1の (first)」連鎖が生じる。それが直接照合体 (DR) の形成である。そしてそれは、VIIに「第2の (second)」連鎖をもたらす。「直接照合体から生じるどのような言明も、VIIにおいては新しい最初の連鎖のようである。その言明のどれもが、VIIにおける——所与の状況や問題や理論的トピックのすべてだけでなく—— (タイプaの暗在性として) **あらゆることに対する “適用 {applications}”** のクラスター全体を含んでいる」 (p.246 邦訳267頁) とジェンドリンは言う。そして、このことが、こうした言明が最初は文字通りの意味であったものをはるかに超えていくようになる理由である、と指摘する。

f-3) “モナド” {"Monad"}

ジェンドリンは次のように言う。

私は“モナド”という用語を、直接照合体があらゆること、すなわち、その第2の諸連鎖…… [中略] ……のすべての結果に対して適用されるあり方を指し示すために用いる。私にとって“モナド化すること {to monad}”は動詞であり、私は、直接照合体が“あらゆることの中へモナドアウトする” {a Direct Referent "monads out into everything"}、と言いたい。(p.246 邦訳267頁)

ここでジェンドリンは、かつてライプニッツ (Leibniz, G. W.) が世界を構成する单子であり、宇宙を映す永遠の鏡であるとした「モナド (monad)」の語を使用し、さらに——驚くべきことに——それを動詞として用いることを提案している。モナドについては、第VIII章 - Aの補遺において再びとり上げられる。

f-4) 直接照合体から生じるVII的な言明はその直接照合体を例示する {VII-statements from a Direct referent instance that Direct Referent.}

「直接照合体から生じるVII的な言明が力強い新しい特質をもつ理由は、それがVII的な言明を変化させるからというだけではなく、それが直接照合体から生まれ、直接照合体を間接的に、暗在的に推進するからである。そのような言明はどれも、その言明が例示する直

接照合体を実際にモナドアウトする。この中にこそ、その力は存在している」(p.246 邦訳 267 頁) とジェンドリンは言う。

f-5) 直接照合体の新しい“普遍性” {The new "universality" of the Direct Referent.}

「直接照合体は、新しい水準のヴァージョニングから出現する。それは、VIIにおいてまさしくシンボル化 {symbolization} と呼ばれたものの新しいあり方…… [中略] ……である。…… [中略] ……VIIIにおけるこの種の新しい種類のシンボル化には、私はクォーターションマークを付けることにする。直接照合体は、ある新たな種類の (シンボルによらない) “シンボル化” である! {A Direct Referent is a new kind of "symbolization" (without symbols)! }」(p.247 邦訳268頁) とジェンドリンは言う。それは、今や身体感覚 {body-sense} の中で表出される、VII的な文脈の全体である。

f-6) それまでのVIIの普遍性も暗在している {The old universality of VII is implicit also.}

「その [VIIIの] 新しい普遍性と“シンボル化”を、直接照合体の形成において1つの全体としてのVIIの (諸) 文脈が——推進されていく中で——VII的な普遍のすべてにおける変化をつくり出すという事実と混同しないことが大切である。」(p.247 邦訳268頁) とジェンドリンは言う。それまでのVIIの普遍性もここには暗在しているが、このようなVIIIの新しい普遍性と“シンボル化”は、VIIの普遍——例えば、言明や類化された相互作用——を超えたものである。

f-7) 集約された類だけではないVIIの複雑性の全体は新しいあり方で推進され普遍化される ; 私たちは今やIOFI原理を引き出すことができる {The whole VII-complexity, not just the collected kinds, is carried forward and universalized in the new way; we can now derive the IOFI principle.}

直接照合体の形成は、言語の類のシステム {the language-kind system} が推進するものよりも、はるかに多くを推進する。それは、VIIの普遍 (“第3 [の普遍]” {the "thirds"}、言葉と可能な文、集約された生の相互作用文脈 {the collected life interaction context}、集

約された相互作用的な（諸）文脈 {the collected interaction-context(s)} を推進するだけでなく、相互に暗在的であるすべての諸文脈の複雑性の全体——私たちがすでに見たように、私たちが語るときにそれは脱落しない——をも推進する。そして直接照合体の形成は、言葉の中にはまったく集約されていない諸側面をも推進するのである。(p.248 邦訳269頁)

とジェンドリンは言う。そして、こうしたことから、直接照合体は、変化した今あるⅦの普遍だけでなく、無数の新たなⅦの普遍の源泉でありうる、と彼は指摘する。

ジェンドリンは次のように言う。

このことは、『**体験過程と意味の創造 {Experiencing and the Creation of Meaning}**』の**IOFI原理**を引き出す。……〔中略〕……直接照合体を通してもたらされるどんな言明も、無数の新たな普遍を導くことができる——あるいは、そこで私が述べたように、無数のあり方で**それ自身の実例 {an instance of itself}** でありうるのである (p.248 邦訳269-270頁)

IOFI (instance of itself) 原理については、本論文の第Ⅰ部で考察したが、それは実例が普遍を導くための哲学的な原理のことである。このプロセスモデルにおいては、このIOFI原理は、ようやくⅦのこの段階において引き出された。『体験過程と意味の創造』

(Gendlin, 1962a) と『プロセスモデル』のテーマの連続性や一貫性には驚くべきものがあるが、プロセスモデルの議論から明らかになったのは、IOFI原理はⅦの連鎖に適用されるものというよりも、このⅦの推進の中で出現する原理であるということである。IOFI原理についての理解の困難さは、それがⅦ的な通常の連鎖——例えば、言葉によって集約された諸文脈のクラスター——の中ではたして生じうるものであるのか、といった疑念と無関係ではないだろう。この原理については、このプロセスモデルのⅦの推進との関連において、さらなる考察や議論が求められていると言えよう。

f-8) 直接照合体とその新しい普遍化された複雑性は直接照合体の形成以前はそこにはなかった。直接照合体はそこに以前あったものの“反映”ではない (“1/2から2へ”) {The Direct Referent, and the new universalized complexity, was not there before

Direct-Referent-formation. The Direct Referent is not a "reflecting upon" what was there before. ("From 1/2 to 2.")

直接照合体は、Ⅷの推進から出現するもので、以前からあって、私たちに気づかれることを待っていたような何かではない。Ⅷにおいて推進された複雑性は、Ⅶにおいては推進されなかった複雑性である。それらを「同じ」であると言うことは可能であるが、そのような言い方は、Ⅷの推進が生じた後ではじめて言えるものなのである。

ジェンドリンは次のように言う。

私はこのことを、“1/2 から 2 へ”の原理と呼ぶ。こうした大雑把な命名によって何がもたらされるかという点と、“反映 {reflection}”と大雑把に呼ばれているものが、以前からあったけれども見られてこなかったものを見るようになることではない、という点についての認識である。それは、“1”がそこにあって、鏡の中でそれを反射することで2つのそれが得られて、2となる、といったものではないのだ。そうではなくて、2つのいずれもが、新たな“反射的”なプロセスの中で創造されるのである。以前そこにあったものは“1/2”と呼ぶことができる。(p.249 邦訳 271 頁)

二重化された連鎖において、以前からあったものと、新しく生じているものの関係は、その飛躍や質の違いから見るとこのような「1/2から2へ」の原理と言うことができる。

f-9) 直接的な文脈の交差は新しさをつくり出すが、それはなお欠如を例示している
{Direct context crossing makes novelty but still instances the lack.}

ジェンドリンは次のように言う。

Ⅶにおける新しさ {novelty} も、相互に暗在的な諸連鎖のすべてを変化させるが、新しい行為や語りはその欠如をネガティブに例示することとどまる。…… [中略] ……私たちは上記で示したポイントを、Ⅶにおける新しさとⅧにおける新しさとの間の違いを明確にするために用いることができる。Ⅶの中では新しさがとてもゆっくりと進行し、文化的な文脈がとても長く続き、熟慮的な計画や意思決定によってのみでは個人はそれを

変えることができないのは、この違いのためである——それは解決を例示するというよりも、問題を例示するものばかりである。Ⅶの水準において何らかの分化はつくられるが、直接的な文脈の交差には途方もない分化 {phantastic differentiation} (Ⅷ-Ag を参照) が欠如している。(p.249 邦訳 271 頁)

Ⅷの推進においては、「途方もない分化 {phantastic differentiation}」が生じる、とジェンドリンは言う。「途方もない分化」については、次のセクション g で述べられる。

f-10) Ⅷでは“方向”といった多くの言葉がIOFI的なあり方で用いられる

{Many words, like "direction" are used in an IOFI way in VIII.}

Ⅷにおいては、どんな言葉やどんな文も、直接照合体が例示するあり方の中で用いられる、とジェンドリンは言う。例えば、ある問題についての解決が生じる「方向 (direction)」について、Ⅶ的な言葉の使用においては、その「方向」を決めることは馬鹿げたことであり、せいぜいその問題を例示することが可能であるに過ぎない。

しかし、Ⅷにおいては、こうした言葉をⅦ的な使用を超えたあり方で用いることができるのである。

ジェンドリンは次のように言う。

私はある方向を感知し、それがどのような方向であるかを語るができる。それどころか、私が望んでいるのはこの方向であるが、しかしそれは、Ⅶの中で定義可能なものとしてではなく、Ⅷの推進において今“変化して”いるものとしてある。Ⅶがそれを定義しうる限りの言い方では、それは私が向かっていこうとするこの方向である、と言える。しかし、*それに加えて* {in addition}、その言葉のⅧ的な使用はまだ定義され得ない“方向”を示してもいる。(p.251 邦訳272頁)

ジェンドリンは、このような言葉の使用は、IOFI的なあり方 (an IOFI way) における使用であると言う。それは、すでに存在している、顕在的な構造やユニットや関係に還元されないものを語るあり方である。

この新しいモデルの全体が、ある意味では、顕在的な構造やユニットや関係へと決して還元されない——そして、これまでされなかった——ような何かがどのように発展できるのか、という問題についての事例である。(p.252 邦訳274頁)

とジェンドリンは言う。

このプロセスモデル自体が、Ⅶ的な言明を超えた、Ⅷの言葉の使用のあり方によって形成されてきた、と言うことである（プロセスモデルの難解さ、解読の困難さは、このことにもよるものであろう）。

g) Ⅷ-A. f の付記 (Additions to Ⅷ-A.f)

ジェンドリンは、このⅧ-A——章のタイトルにはAはつけられてはいなかったが——の最後に、Ⅷ-A f の付記として、以下の9点を記載している。

1) 以上見てきたことが、Ⅷにいる人々が実際にものをつくることができる（Ⅶ-Aを参照）理由であり、Ⅵの行動文脈の中でⅦのヴァージョニングが変化させ創造するものが生じる理由である。しかしこうしたことは、顕在的に構造化されたあり方の中で起きるのではない。もしもヴァージョニングが顕在的に構造化されたあり方の中で生じるならば、シンボル化されるものは行動文脈の中で実際に機能することはないだろう。

2) 直接照合体がモナド化されうる {can monad} のは、それがジェル化されること {the jellednes} ——つまり、それがⅧの推進から出現すること——によってだけである。… [中略] ……直接照合体の形成は時間を費やす。驚くべき速さではあるが、それにはある時間が必要である。…… [後略] ……

3) この直接照合体の形成がないところには、IOFI空間 {IOFI space} は存在しない。…… [中略] ……何かを明確にするためには、Ⅶでは用語は切り詰められるだろう {terms in Ⅶ will be cut}。そうすると、他の同様に重要で確かな多くのことが否定されるか、隠蔽されてしまう。Ⅷでは、言葉はこのような否定や隠蔽をもたらす顕在的な構造としてだけでなく、直接照合体の実例として使用される。IOFI空間は、それ自身の規則をもっている。

4) Ⅷの連鎖の空間の中では、自己は推進される内容から“分離して {separate}”い

る。……〔中略〕……自己理解はⅦ的な内容——それが全体的なものであっても——よりもはるかに広い。……〔中略〕……この連鎖の中の自己は、Ⅶの反映された自己ではない(1/2から2へ)。それは、古いⅦ的な対象ではなくて、新しい対象、直接照合体を伴った、より広い新しい自己としてそれ自身を見出す。……〔中略〕……今や自己理解された自己もしくは意識は、もちろん単なる対象ではなく、空間、あるいは文脈の推進 {the context-carrying-forward}、文脈自身の位置づけ {context-self-locating} と並行してある。

5) 私たちのモデルでは、これが常に意識 {consciousness} の特徴だった。つまりそれは、自己の位置づけ {the self-locating} (Ⅵを参照) と同時に形成される新たな空間である。(Ⅶでは、それは内的空間、あるいはむしろ、内的でもあり外的でもある空間 {internal/external} だった。Ⅶ-Baを参照。)

6) すべての文脈……〔中略〕……は常に、どの文脈の中にも暗在的なものであった。しかしこのことは、そのようにもたれたり、感じられることはなかった。もつこと、あるいは感知することは、連鎖化することであり、連鎖の中へと推進することである。…〔中略〕……直接照合体が形成される中では、それは完全に生じる。しかしそれは、新しいそれぞれの直接照合体が形成される中で、異なって生じるのである。それゆえ、そこにはプラトンが考えたような唯一の全体ではなく、多くの全体があるのだ。……〔後略〕……

7) どの直接照合体の形成からも、きわめて多くの新しい普遍が形成されうるが、これらの普遍の中のどの1つからも、それが用いられることで、また新たな直接照合体が生起できる。……〔中略〕……したがって、直接照合体を実例とする普遍は、直接照合体そのものの“システム”の中のみとどまる必要はないのである。直接照合体の形成は、普遍を使用することの中の1つから、さらなる直接照合体の形成を導く。直接照合体は、私たちが示してきたように、普遍的なものであると同時に、ある種の個 {particular} でもある。使用されるどんな普遍 (Ⅶ的な言明) から、あるいは生のどのような地点からも、新たな直接照合体は形成されうる。このようなⅦの意味感覚では、新しい“個”は常に、多くの新たな普遍を導きながら形成されうる。新しい、あるいは古い普遍は、(直接照合体の形成の中で) こうした新しい個を導くことができる。これは、最も根本的なあり方において個が普遍のもとにはない {particulars are not under universals in the most radical way}、そのようなあり様である。……〔後略〕……

8) 途方もない分化 {phantastic differentiation} とは、ヴァージョニングの中で、あ

る段階の複雑性の全体が、その複雑性の全体（のある新しい環境的なヴァージョン）によって推進されるときに生じるものを指し示す用語だった。推進は常に、文脈の交差である {context-crossing}。…… [中略] ……ヴァージョニングは常に、ヴァージョン化されるものを限りなく分化させる。それゆえ、VIとの関連におけるVIIは、限りなく分化し、複雑性を増大させるのである。このような複雑性は常にあり、それは新しい種類の推進でもあるので、推進は常に交差 - 文脈的 {cross-contextual} なのである。…… [中略] ……

9) 動物が、動物の行動の中では機能しない（しかし、人間を推進する新たな環境になる）たくさんの表現的な身体の見え {expressive body-looks} をもっているように、VIIにおいても身体感覚 {body-sense} による推進が存在している。動物の身体の見えの場合、そのいくつかの特性は動物の行動の中ですでに機能していたが、しかしそれは行動としてのみ、しかもその一部が機能していたに過ぎない。同様に、あるVIIの連鎖の中では身体感覚は推進されるが、それはシンボル化されたものとしてのみ、しかも全体としてではなく部分的に推進されるに過ぎない。しかし今や、その全体は新たな環境であり、身体のインプライングの全体を推進する。(pp.253-256 邦訳275-278頁)

第VIII章 - Aの補遺 (APPENDIX VIII-A)

プロセスモデルの第VIII章の最後には、以下のような補遺が付けられている。2001年の頒布版では、このタイトルは「第VIII章 - B (Chapter VIII-B)」となっていたが、その後のインターネット上のPDF版において「第VIII章 - Aの補遺 (APPENDIX TO VIII-A)」に修正された（ちなみに、1997年版では‘APPENDIX TO VIII (VIII-B)’となっていた）。なお、インターネット版にはタイトルが「第VIII章 - Aの補遺」に戻された理由について、次のような注記が記載されている。

第VIII章 - Aの補遺 {Appendix to VIIIA} は新しい頒布版では第VIII章 - B {VIIIB} となっていた。しかし、VIII-Bは世界の中でまだ可能なものではない。VI-Aとの関係におけるVI-Bや、VII-Aとの関係におけるVII-Bを見るとき、VIIIの概念、言明、行い {doings} の文脈全体は、“B”になっていくものとしてはまだ十分に発展していない。(p.263)

この第Ⅷ - A の補遺は、モナド (Monads)、ダイアフィル (Diafils)、結論と始まり (Conclusion and Beginning) という 3 つのセクションから構成されている。その内容はプロセスモデルの難しい記述の中でも、とりわけ難解なものである。以下では、そのエッセンスを解説してみたい。

モナド {Monads}

ジェンドリンは次のように言う。

私たちは“普遍 {universals}”のシステムと、事物のような個々 [の集まり] {thing-like particulars} を、遠く彼方に置き去りにしてきた。すでにⅦ-Bにおいて、私たちは、言葉が (諸) 文脈 {context(s)} を再構成化し、細部を脱落させないこと、そして言葉は“抽象 {abstractions}”ではないことを見た。私たちはまた、過去の経験が機能するあり様についても見た。…… [中略] ……直接照合体は…… [中略] ……、普遍の全体的な新しい範囲を創造する…… [中略] ……普遍は、それ自身の推進によって、Ⅶの普遍として機能し、“個”の文脈を推進することができる。しかし一方では、普遍はまったく異なる種類のシステム、あるクラスター {a cluster} でもある。(p.263 邦訳275頁)

そして彼は、

直接照合体から生じるこのようなⅦの普遍のシステムを、私は“モナド {monad}”と呼ぶ。(p.263 邦訳275頁)

と言う。

Ⅷのf3) では、「モナド (monad)」は動詞として用いられたが、ここではセクションのタイトルが“Monads”と名詞の複数形になっていることからわかるように、名詞としても使用される。おそらくは、直接照合体からモナドアウトして出現し、世界に存在するようになるものを、ジェンドリンは名詞の「モナド (monad)」と呼んでいるのだろう。

彼は続ける。

モナドはⅦの諸連鎖のシステムである——しかし、数多くのそのような諸連鎖がある。人は1つの、あるいは3つの、あるいはとても多くのものをもつかもしれない。それらは、それらが実例であるような直接照合体によって、それぞれが互いの実例となるだろう。…… [中略] ……カントの12のカテゴリーのような網羅的なシステムは存在しないのだ。(p.263 邦訳285頁)

誰もがモナドをもちうる（もちろん、容易にもつことができるわけではないだろうが、誰もがモナドをもちうる可能性に開かれている、ということである）。そしてモナドとは、カント（Kant, I.）がかつて純粋悟性の概念的カテゴリーとして考えたような普遍のシステムを超えて、さまざまに形成されうるのである。

ジェンドリンは、プラトン（Plato）が著した『国家（*Republic*）』の中で、正義についての定義を論破されたポレマルコス（Polemarchus）の例をあげている。自分の誤りに気づいたときポレマルコスは、「彼が定義しようとした最初の感じに戻るのか、それとも彼は今それ以上のものをもっているのだろうか？ 彼を矛盾に導いた文字通りの言明以上の何かについて、彼はここで学んでいるのだろうか？」（p.264 邦訳 286 頁）とジェンドリンは問う。そして、

私は、ポレマルコスは学ぶ {Polemarchus learns} という事実を、1つの原理として掲げたい。（p.264 邦訳 286 頁）

とジェンドリンは言う。ある瞬間において次に生じることは、はじめに感じられていたことの中にあつた何かを述べることではない。新たな連鎖がもたらす変化は、すでにあつた連鎖の中に暗在するようになり、すでにあつた連鎖が再開されるときには、それはそれまでとは違った意味をもつようになるのである。

Ⅷには多くの新しい全体がある。直接照合体のそれぞれは、世界の全体をすでに推進しており、それゆえ、異なるトピックや文脈の世界全体をモナド化する（世界全体と交差し、世界全体に“適用する”）ことができる。そのモナドは、結果として生じる新しい言明のクラスターである。しかし異なる直接照合体は、異なったあり様でモナド化する

だろう。ここにも多くの全体がある。……〔中略〕……タイプaの暗在性の中で直接照合体がモナド化する {A Direct Referent in a type-a implicit monad}。 (p.264 邦訳287頁)

とジェンドリンは言う。

では、このモナド化を伴うⅧにおいては、いわゆる普遍と個の問題はどのように考えられるのだろうか？

このモナド化 {monading} のすべてにおいて、直接照合体は“同じもの {the same}”にとどまる。そしてこのことは、“同じ {same}”ということの新たな意味感覚である。……〔中略〕……今や、直接照合体がモナド化を通して“同じもの”にとどまる別のあり様がある。それは変化する。……〔中略〕……それは“同じ”実例をもった、暗在的に推進された全体であるが、すべての諸連鎖のそれぞれは、実際のモナド化から生じる新しい諸連鎖をインプライするようになるにつれて精緻化される。直接照合体は“同じ”全体にとどまる。

ここには、変化しつつ、精緻化しながら、しかも“同じ”である直接照合体のあり様がある。その直接照合体は、もとは、ある個人の問題への取り組みから出現したものである。ジェンドリンは、「所与の人がもっているⅧの複雑性の**独自の個別性 {unique peculiarities}**」が、直接照合体の形成の間に普遍的に妥当なものになり、その結果、Ⅷの普遍が新しいものになって、さらに誰にとっても妥当なものになる、ということは、いったいどういうことなのだろうか？」 (p.265 邦訳287頁) と問う。

ジェンドリンは、Ⅷの普遍は「そのような (such)」ものとして集約されているが、人間の独自性や個別性を「そのような」ものとしてとらえることは誤りである、と指摘する。「そのような」ものとは、ある普遍的なパターンであるが、それは人間（の身体、が生きること）が作り出してきたものである。

しかし今、振り返ってみて、宇宙あるいは自然が、法則や一般性や普遍から成り立っているという仮定を検討してみよう。私たちには解明できないということ、それがあたかも事実であるかのように、無批判に受け入れないようにしよう。法則、一般性、Ⅷの普遍は**パターン**である。私たちはⅧで、パターンが機能するあり方を見た。もしもパ

ターンをインプライしている空間 {a pattern-implying space} の中へ何かがやってくるなら、そのときには、それはそれ自身のパターン化をもつのだ。(p.265 邦訳288頁)

そして、ジェンドリンは次のように言う。

(私たちがVIII-Aで見た) 直接照合体の形成は、すべての諸側面(分離された数ではない)をとり上げ、それらを(それらの新たな環境的な表出とともに)交差させる。その結果、すべての側面はパターン空間 {pattern-space} (身体によってインプライされるパターン空間)の中へと参入する。(p.265 邦訳288頁)

このようにして、直接照合体の形成とそのモナド化によってVIIの普遍が新しいものになり、精緻化されていくのである。

では、こうしたことの妥当性についてはどのように言われうるのだろうか。ジェンドリンは、彼自身の『体験過程と意味の創造 (*Experiencing and the Creation of Meaning*)』を例として、次のように言う。

『体験過程と意味の創造』において、このすべてのことをただ指し示すことによって(例えば、何かが文字通りの意味では生じなかったところから生じるようになったことを、後から遡って明確化されうるような、そのようなあり方)、私は自分が述べていたことについて完全に確信していた。ここでは、VIIの諸概念でそれを表出することによって、その確信を私はもつことができないように思われる。しかし、ここで私が自分の用語を、直接照合体を実例とするようなあり方 {a Direct Referent-instancing way} で用いるときには、私はそうできるのだ！(p.267 邦訳 298 頁)

そして、直接照合体の形成とそのモナド化の妥当性の基準について、ジェンドリンは次のように述べる。

このようなあり方で、私たちは直接照合体から形成される諸概念に固有の妥当性 {the inherent validity} を——この妥当性を過剰に強調したり、また、概念的な図式についてのVII的な見方に陥ったりせずに——保持するのだ！ VIIIからは、私たちは、文字通りの表

象的な真実 {a literal representational truth} としての概念の力ではなく、はるかにより大きな真実からのモナド化 {a monading} としての概念の力を見る。そのより大きな真実は、VIIの諸連鎖の多くのクラスターを生じさせる。直接照合体はどれも、従来のVIIのあり方の中で等しく普遍的に妥当であるような、無数なほど多くの可能な諸連鎖の1つでもある。そして、私たちがまだ明確に思考することができないような仕方、“1つの全体”を暗に示している。ここでの同等の妥当性 {equal validity} とは、相対的なそれぞれのヴァージョンがもっている真実の程度を価値下げするような相対主義のようなものではない。反対に、直接照合体から生じる諸概念のモナド化されたクラスターは、VIIの意味感覚において十分に真実である。そして、どんな人にとっても、どんな文脈においても真実かつ有意義なあり方で確実に適用される。VIIのタイプの1つの真実だけが存在するという従来のVIIの考えは、あまりに不十分で間違っており、そうでないものが失われてしまう。経験、自然、あるいは実在 {reality} は、従来の見方が求めたものよりも、はるかに豊かである。(p.267 邦訳290頁)

そして、このようにして生まれた概念的な言明の確かさを求めるために、私たちは「創造的な遡行 (creative regress)」——これも『体験過程と意味の創造』で提案された概念である——を行うこともできるし、また「創造的な遡行」を行ったとしても、概念的な言明を失うことにはならない、とジェンドリンは指摘する。私たちは、概念化の後では、文字通りの意味での同じ直接照合体には戻らないが、VIIIの意味での“同じ”直接照合体に戻るのであり、また、概念的な言明に戻るときには（それがモナド化された言明であれば）、それは失われることなく世界に実在し続けるのである。

ジェンドリンは、ハイデッガー (Heidegger, M.) は「いかなる真実も、常にその真実を隠す」と述べたし、プラトンもすべての対話篇の中で、どんな言明も矛盾へと導かれうることを示したが、このようなことは概念的な構造の性質であって、直接照合体から導かれるものではない、と指摘する。

ジェンドリンは次のように言う。

すべての直接照合体からのモナド化 {monading} が“真 {true}”あるいは“妥当 {valid}”であると言うためには、私たちはそれをどう理解することができるのだろうか？ 私が示したいのは、それは世界の中で生きられる {it can be lived in the world}、ということ

である。そして世界はこのようにして、実際に変えられうるし、生きられるのだ。私は少なくともそのことを言いたい。私たちは、直接照合体の形成がこうした新しい言明や行い {such new statements and doings} ——それらは実際に世界や状況や問題の中に生きられる——をなぜ可能にするのか、ということを経験する方法をもっている。(p.270 邦訳 292-293 頁)

ダイアフィル {Diafils⁵⁶}

ジェンドリンは次のように言う。

私が定義したモナドは、VIIIの対象 {VIII-object} の1つの種類である。そして今、私はもう1つの種類について考えたい。私はそれを“ダイアフィル {diafil}”と呼ぶ。(p.271 邦訳293頁)

「ダイアフィル (ス) (diafil(s))」は、ジェンドリンによるまったくの新概念であり、その意味するところをつかむのは難しい。これも動詞としても名詞としても使われるものだが、動詞としては‘diafil’、動名詞としては‘diafiling’と記載されるので、名詞の単数形が‘diafil’で、その複数形が‘diafils’であると考えられる。

ジェンドリンは、「モナドは『体験過程と意味の創造 {*Experiencing and the Creation of Meaning*}』における把握 {comprehension} とほぼ同じであり、ダイアフィルは『体験過程と意味の創造』の隠喩 {metaphor} とほぼ同じである」(p.271 邦訳 293 頁) という言い方をする。

『体験過程と意味の創造』(Gendlin, 1962a)では、「把握 (comprehension)」とはフェルトセンス (ここで言うところの直接照合体) が新たな隠喩的シンボルを導く関係のことであり、フェルトセンスの細部が明らかにされながら、その全体が包括的にとらえられ、ある隠喩的シンボルへと収斂していくことを意味していた。また、「隠喩 (metaphor)」とは、シンボルがフェルトセンスの新たな側面を創造的に引き出す関係であり、「隠喩」に

⁵⁶ ‘diafil(s)’の発音について、これも第2回フォーカシング指向サイコセラピー世界会議の際に、ロブ・パーカー (Robert Parker) 氏に尋ねたところ、「ダイアフィル (ス)」と発音するとのことだった。

よってフェルトセンスは先へと推進されるとされていた（本論文の第 I 部を参照）。

こうした「把握 (comprehension)」と「隠喩 (metaphor)」との関係における類比から考えると、「モナド (monad)」は直接照合体を“同じ”ものとして保持することであり、「ダイアフィル (diafil)」とは直接照合体を、その“同じ”ものではないものへと適用していくこと、だと言することができるだろうか。

ジェンドリンはまた、動詞としての「ダイアフィル (diafil)」を、「モナドアウト (monad out)」と対比させて「モナドイントゥー (monad into)」とも表現する。

[モナドという用語によって]私が意味したいのは、直接照合体がモナドアウトする {the Direct Referent monads out} とき、それは“同じもの {the same} ”にとどまる、ということである。そこから生じる言明のクラスター全体、その実例を示すこと、そしてその言明の“適用 {applications} ”のすべては、直接照合体についての1つの大きな把握にとっても近いものである。すべての領野 {all fields} における、直接照合体の**把握**のすべて。

[これがモナドである。] そうする代わりに、私たちは、トピックや文脈のそれぞれを直接照合体と交差させるようにすることが、直接照合体が“適用”され、モナドアウトするそのようなあり方において**だけでなく**、逆の方向においても、つまり他のトピックを、最初のトピックへとモナドイントゥーするような直接照合体であるようにする

{letting the other topic be a Direct Referent monading into our first one} かもしれない。…
… [中略] ……それはもはやモナド化と“同じもの”ではない。（p.271 邦訳293-294頁）

そしてジェンドリンは、「私たちが新しいトピックを [モナド化とダイアフィル化の] 両方向において交差させることができれば、私たちはやがて**智慧に至る {arrive at wisdom}** だろう」（p.271 邦訳294頁）と言う。

しかし、モナドとダイアフィルという 2 つの方向性をとり上げることは、モナドとダイアフィルを単純に区別することや、モナドとダイアフィル以外には、2 つのことが交差するあり様がないかのように考えてしまうことではない、とジェンドリンは指摘する。

したがって、モナドとダイアフィルを区別することは、実際には可能ではないし、私たちはそれらを分割することはできない。そうできるということは、次のことを意味す

ることになってしまう。すなわち、モノド化の中で、ある連関 {a relevance} (ある万事連関化の全体 {a whole even}) を“同じもの”に保つことと、反対にダイアフィル化の中でそれを変化させることを、私たちが分割できる、と。しかし、2つのものが交差するときには、連関のそれぞれは何らかのあり方で推進される、とも言えるし、何らかのあり方で“同じものにとどまる {kept the same}”とも言えるのである。(p.272 邦訳295頁)

とジェンドリンは言う。

そこでジェンドリンは、「モノド-ダイアフィル化 (monading-diafiling)」という用語を創出することによって、直接照合体の推進や交差のさまざまなあり方の全体的な連続体を指し示そうとする。

すべての連鎖が新たな領野との関係の中で機能するあり方は、私たちがモノド化、あるいはダイアフィル化と概念化したものとまったく同じものにはならないかもしれない。私たちはそれを“モノド-ダイアフィル化 {monading-diafilling}”と呼んで、この用語によって、さまざまなあり方の全体的な連続体 {a whole continuum of different ways} であるものを指し示すことにしよう。…… [中略] ……そしてこの [モノド-ダイアフィル化という] 言い方は、発展を許容しながら、1つのモノドにとどまることの間には、単純な分割はないということを納得する1つの仕方である。(p.274 邦訳 297 頁)

つまり、この「モノド-ダイアフィル化 (monading-diafiling)」という用語によって、直接照合体が生み出す、あらゆる「発展する秩序の全体」とでもいうべきものが見据えられるのである。

結論と始まり {Conclusion and Beginning}

この [プロセス] モデルに関しては、私はこのあたりで終わりにする。私たちのモデルに残されているいくつかの重要な論点に、きわめて広く光をあてるような用語の全体的な発展はこれからも“やってくる {come}”はずではあるが、私はこの [プロセスモデルの構築の作業をここで終える] ことを告げる。(p.276 邦訳 299 頁)

とジェンドリンは言う。

ジェンドリンは、このプロセスモデルによって何が達成できたと考えているのだろうか。

私たちが行ったこのささやかな議論が明確なものである、ということはきわめて重要である。今日、非常に多くの人々が、システムティックに鋭敏に思考するのか、あるいはもっとずっと豊かな生の全体 {the much richer living Whole} を賛美するのかのどちらかを選択しなければならないと信じている。私は、[生の] 全体へと直接照合することの暗在的な機能を用いることで、このいずれもが明確な思考を継続的に豊かなものにしていくことができる、という点を示してきたと思いたい。私たちが明確に考えたいのは、システムティックな言明そのものがそのようなものとしてもっている力に対してだけでなく、その力が、私たちが直接照合するものを豊かにするあり様に対してでもあるのだ。

(p.277 邦訳300頁)

ジェンドリンは、ここでプラトンとアリストテレス (Aristotle) を例にあげる。プラトンは概念そのものよりも概念形成の方法 (弁証法) をはるかに重視した。一方、アリストテレスは概念形成の新鮮なあり方を重視しつつも、諸概念の一貫したクラスターを発展させた。現在の私たちはアリストテレスがクラスター化した諸概念——および、その後に簡略化されたもの——を数多く使用している。

ジェンドリンは次のように言う。

私は自分自身がプラトンであり、かつアリストテレスでありたいと思う。私は、プラトンがなした…… [中略] ……ような方法のみならず、私たちがこれまでもってきたものよりも科学の中でよりよく機能する一貫した諸概念の体系や、私たちがこれまでもってきたもの以上によりよい哲学を提供したいと思う。しかし、私はさらにそれ以上のことを望んでいるのだ！ 私は、私たちのモデルが、歴史の中でアリストテレスから生じたような種類のネガティブな側面をもたないことを望んでいる。私は、新たな概念の力が、概念形成を用いることから新たな概念がどのように形成されたのかを人々が知ることの邪魔をしないように望んでいる。概念形成の方法は、概念 [そのもの] よりもはるかに重要である。また、概念形成の方法が概念と経験の関係について示すことは…… [中

略] ……重要である。(p.278 邦訳301頁)

ジェンドリンはそのためには、「継続する哲学 (continuous philosophy)」が必要であると
とする。彼はハイデッガーを次のように批判する。

ハイデッガーは、彼の一貫したモデル (『存在と時間 {*Being and Time*}』) を仕上げた
後で、それを使用することを拒み、そうする代わりに、新たな諸概念や、不明瞭ではあ
るが生き生きとした洞察 {*vague but vital insights*} を生み出すことへと進んだ。彼は、彼
の新たな基本モデルを人々が適用するように誘うのではなく、[彼がしたことは] むしろ
そうしないように求めたに等しい。ハイデッガーは、彼が歩んだ動きの中で、私がここ
で述べているようなことを知っていた [はずである]。しかし、彼の“モデル”を…… [中
略] ……発展させる方向で取り組まなかったのは重大な誤りだった。ハイデッガーは、
私がここでやってきたような作業に取り組むか、[人々をこうした作業に] 誘うべきだっ
た。しかし彼は、“形而上学の終焉 {*end of metaphysics*}”、つまりシステムや一貫した
体系的な哲学の終焉を宣言することを望んだ。体系学 {*systematics*} の終焉を望む中で、
ハイデッガーは体系学を超え出て行く感覚をもってはいたが、どのようにすればよいか
を知らなかった。だから彼は、より不明確で、より自然に近く {*more naturalistic*}、より
くつろいだ {*more homey*} 語りのあり様へと後退し、そして詩という脇道へそれてしま
ったのである {*and he went sideways to poetry*}。彼は、**継続する哲学 {continuous
philosophy}** ——このような言い方が好まれるのであれば [そう言いたい] ——をど
のようにもつことができるか、という問題を解決しなかった。継続する哲学とは、すな
わち、継続する手入れと再吟味 {*a continuous undercutting and re-examining*}、継続する
概念形成 {*a continuous concept-formation*}、新鮮な型の出現 {*fresh emergence of form*}
——そして同時に、一貫した関連する知識の体系をもつ——のことである。(p.279-280
邦訳303頁)

またジェンドリンは、哲学と科学を、そして哲学者と科学者を安易に分割し続けること
にも反対する。

同じ人が、違うときに哲学と科学の両方——それらが異なる活動であっても——に従

事することができるように、同じ人が、一貫した（諸）モデル {model(s)} と概念形成の両方を取り扱うこともできる。そしてこのことは、哲学においても科学においてもそうできるのである。…… [中略] ……例えば、社会学の中の何か、1つの専門領域で少数の観察者のみによって見出されて報告された、非常に特定の何かが、（直接照合体の形成を通して）他の多くの諸科学に対して重要なきわめて多くの連鎖をもたらす事例となるかもしれない。どんな言明や行為にも哲学的な側面がある。逆に、哲学にとってふさわしくないトピックなどないのだ。社会学は社会について語るもののように思われ、心理学は精神について語るもののように思われ、物理学は物質とその変化について語るもののように思われているかもしれないが、しかし、いずれもそうしたことだけを議論しているのではなくて、常にそうしたことがどのように議論可能であるかについても議論しているのである。だから、そこで語られるどんなことも、哲学的な問題の具体例であるのだ。（p.281, p.282 邦訳303、305頁）

おそらくは、ジェンドリンが哲学研究を——このプロセスモデルの構築といった事例の中で——継続しつつ、同時に長年にわたってサイコセラピーの実践や心理学の研究にも取り組んできたのは、このような確信によるものだったのだろう。そしてジェンドリンは、彼の直接照合体からフォーカシングや体験過程についての研究を生み出し、サイコセラピーの分野に大きな貢献をつくり出してきた。

「直接照合体 (Direct Reference: DR)」というものを核として展開されてきた、そして今後も継続していくジェンドリンの哲学は、こうした彼の確信に基づく取り組みから発展してきたのである。ジェンドリンはこのプロセスモデルを、次のような言葉で締めくくっている。

同様に、哲学とどのような科学の間にも違いが存在している。哲学は常に、基本的な用語に手を入れ、吟味し、その位置を変える。哲学は、トピックに直接に関心をもつよりも、人がそこで使用する概念の種類に関心を寄せる。しかし、直接照合体には語られることのすべての水準 {all levels of discourse} が含まれているのである。そこで私たちは、確かに、私たちの用語 (IOFI空間における事例としての、VIIIのすべての用語) が図式的に分解されないこと {that our terms (all VIII terms qua instancing in IOFI space) do not resolve schematically} は、崩壊 {breakdown} でも限界 {limit} でもない、というこ

とがわかる。そうではなくて、私たちは継続的な哲学であるもの {what is continuous philosophy} の中へと進んでいく。(p.282 邦訳305頁)

8. (第Ⅱ部の補遺) プロセスモデルの臨床的意義を抽出するための基礎的作業

以上、ジェンドリンのプロセスモデルの第Ⅰ章から第Ⅷ章にわたる、その全体像の解読と考察を行ってきた。これまで世界的に見ても、プロセスモデルの全貌を明らかにしつつ考察を加えた研究は存在しないので、筆者にとっては1つの大きな作業をやり遂げた達成感がある。また、以上の解読と考察が今後のプロセスモデルの理解の一助となることを心から願っている。

しかし同時に、以上の考察は、ジェンドリンのプロセスモデルのすべてを取り上げたわけではないし、解読し尽くしたわけでもない。プロセスモデル自体は、以上の筆者の解読と考察をはるかに超えて、今後ともさまざまな検討や議論が行われていくことは間違いない。

そこで、この第Ⅱ部を終えるにあたっては、筆者はプロセスモデルがもたらす広大な地平の上で議論を拡散させていくよりも、本論文の主題であるその臨床的意義に絞って、今後の検討のための基礎となる素材をまとめておきたい

以下は、ジェンドリンのプロセスモデルの中から、サイコセラピーをはじめとした臨床実践や臨床的な議論に関連していると言える文章をピックアップしたものである。⁵⁷

*

1. シニフィアンとシニフィエについて

「シニフィアン {signifiers} とシニフィエ {signified} という言い方がされることもあるが、そこでのシニフィアンとは浮遊するものである {the signifiers float} [と考えられている]。言語 {language} と記号表意作用 {signifying} についての従来の用語は、それら自身を内的に説明することもなければ、それらが生きている身体 {living body} と関係していることを説明することもなかった。」(Ⅲ p.17 邦訳 21 頁)

2. 母性剥奪の影響

⁵⁷ 以下の記述は、2011年10月8日に愛知教育大学で開催された日本人間性心理学会第30回大会のワークショップ「ジェンドリン哲学事始め」において、「臨床的問題としてのジェンドリン哲学とプロセスモデル」のテーマで筆者が発表した内容を大幅に拡充したものである。

「子羊が誕生時に母親から離され、崖の手前で止まるようになる月数まで母親と接することなく育てられたとき、その子羊は崖の手前で止まることができない。その子羊が目隠しをされていなくても、そうなのである。つまり、〔早期に〕母親から切り離されると、十分な空間的な知覚の経験があっても、正常な“知覚的・運動的なシステム”を十分に発達させることができないのである。“〔そんなことは〕ありえない”と、最初多くの人は反論した。“知覚運動システムは生殖システムとは別個のものである”と。……〔中略〕……それにもかかわらず、その影響は確かに見出されたのである。」(IV-Ap.24 邦訳30頁)

3. インプライングとフォーカシング

「このようにして、インプライングは常に、全体としての身体の1つのインプライングである。このことは後にまた、例えばフォーカシングにとって重要なものとなる。諸プロセスは分離していない。それぞれのプロセスがそれ自身をまさにインプライする仕方は、それが他の諸プロセスとそれ自身によってどのようにインプライされているかということではなく、いわば身体の1つのインプライングなのである。」(IV-Ap.25 邦訳 30 頁)

4. フォーカシングがもたらすもの

「私たちの概念は、**インタラクショファースト** {interaction first} という企図から生まれている。私たちは身体と環境が1つの事象であるとして〔このモデルを〕開始し、それらが分離可能となる、ある特定の制限された仕方を漸進的に発展させてきた。“インタラクショファースト”は、多くの起源に遡ることができる。ここで私は、それらのいくつかについて引用しておきたい。〔まず〕その多くのことは**ECM** [『体験過程と意味の創造』]から出てきている。〔そして〕フォーカシングから生じた実例や語りは、私たちを大きく動かしてきた。」(IV-Ap.29 邦訳 35 頁)

5. フロイトの転移の考え方に沿った過去

「過去の役割が、フロイトの転移の考え方に沿ってとらえられることもある。例えば、私はあなたを“現実に”知覚したり感じたりしているのではなく、私の父を見るように知覚し、感じている、というように。このような考え方に對抗して、現代の多くの心理学者は“今、ここで {here and now}”を強調している。しかし心理学者たちの“現在”や“過去”のとらえ方は、私が“ユニットモデル {unit model}”と呼ぶものから来ている。そこ

では、現在は現在としてだけ考えられ、過去もまた別の事柄であるとされる。」(IV-A p.32 邦訳 39 頁)

6. ウィニコット、その他

「新しさの形成は、“移行対象 {transitional objects}” (ウィニコット)、“曖昧 {ambiguity}” (エンプソン) あるいは異様な誇張 {bizarre exaggerations} (バクティン、バタイユ) などの中に隠されていた。そして思想家たちは、自然はグラフ用紙の中にあると確信していたのである。何と奇妙なことだろう！ 論理、数学、グラフ用紙は人間が作り出した典型的なものである。自然であるものは、論理的なスロット {slots} に代入されるようなユニットとイコールではない。すべての葉や細胞もわずかに異なっている。人間だけがグラフ用紙をつくった。自然の中にグラフ用紙を見たことがあるだろうか？」(IV-A pp.36-37 邦訳 44 頁)

7. 生起の法則

「秩序はインプライングと生起から生じる。…… [中略] …… “可能である” という言葉は、より複雑に使用される必要がある。インプライングと生起の中で可能なものは、あらかじめ決定されているのではない。…… [中略] ……それが生起したから、それは可能だったのである。所与の結節点で生起しうるものが、生起したのだ。私はこれを“生起の法則”と呼ぶ。(What could occur at the given juncture, did. I call this the “law of occurrence” .)」(IV-A p.52. 邦訳 64 頁)

8. デリダ、ヴィトゲンシュタイン、隠喩

「デリダは、[言語には] 形而上学的な使用だけがあるのであって、いわゆる正しい使用などない、ということをもまったく適切に示した。しかし、隠喩についての従来の理論が、隠喩についてのその理論自身を再構築する {re-establish} と論じた点では、彼はまったく間違っていた。ヴィトゲンシュタインが明らかにしたように、言葉の使用は、哲学的な分析が読み直すような概念によって実際に規定されるのではない。かつての文字通りの命題が伝統的に要請していたことを、私たちが再び主張する必要はない。そんなことをしても、その要請は実現不可能であるため、行き詰ってしまうだろう。そうする代わりに、私たちは、コンピュータが隠喩を解釈することも生み出すこともできない、という事実に気づく

ことができる。この事実は、状況の中で用いられる日常の言語や行為は論理よりももっと複雑な秩序をもっている、ということを示している。」(IV-A p.53 邦訳 61 頁)

9. 記憶と過去

「私がカリフォルニアに行ったときに、誰かが私の頭を殴って私の財布と身分証明書を盗み、私は記憶喪失になったとする、そして、違う名前で新しい人生を送るようになったとする——そのときに、私が過去を失ってはいないと言えるのは何によってなのか？過去とは身体である。身体は幼少期の傷跡をもたらすものである。身体は昨夜の二日酔いをもっている。身体は、私の過去の諸経験、そして民族や種としての諸経験をもっている（である……）。」(IV-B p.64 邦訳 73 頁)

10. 病理とポジティブなインプライニング

「私たちが人間の諸プロセスのための概念を引き出すようになるとき、私たちのモデルが、劇的で醜悪に見える病理的状态（空腹での腹部の膨張のような）をも、そこに欠如している、まったく健康であるようなプロセスの再開のインプライニングとして概念化できることは、私たちにとって有益になるだろう。病理的な生起が、あるまったくポジティブなインプライニング（それは変化せずに保たれている）をもたらすかもしれないのである。」(IV-B p.69 邦訳 79 頁)

11. リーフィング

「自然は、繰り返し反復する、同じような、しかしまったく同じではない、諸ビットのたくさんの実例を示してくれる。心臓の鼓動、まばたき、神経インパルスなどがそうであり、そして構造的にもそうである。生命体の“サブプロセス {sub-processes}” の概念 (IV-Ac) は、このことが身体の構造——皮膚の細孔、毛髪、樹木の葉といったもの——の中に反映されているあり様を、私たちに考えさせる。私はこうした介在する生起 {intervening occurring} を、1つの動詞として用い、それを“リーフィング {leafing}” と呼ぶ。私たちはここで、律動 {rhythm}、つまりリーフィングである多くの身体プロセスを引き出す {derived}。後に、生命体のいかに多くのさらなる発展が、律動を、リーフィングを背景としているか、について見ていくことになる。……虫が、光のある方へ飛び出そうとして、窓ガラスに何度も何度も当たり、痛々しくガラスにぶつかっている。しかし、しばらくす

ると、その〔ガラスにぶつかることの〕せいでその〔飛び出そうとする〕試みをほとんどしなくなり、ブーン、ブーン、ブーン、ブーン {bzzz, bzzz, bzzz, bzzz} と羽音をたてる。窓ガラスにぶつかっていたときには、その身体は太陽の方へと飛び出すことをインプライしていたが、もはや最初のひどい衝突ではなくなっている。今や、窓ガラスにぶつかるという律動的な始まりではなくなり、ほとんど連続的に、窓の表面に沿ってまるで探索しているかのように、開いているところを見つけるチャンスを最大化するようになる。」(V-A pp.76-77 邦訳87-88頁)

12. 介在する事象

「新しい諸事象の2つめの種類は、いわゆる“停止した {stopped}”プロセスの中で生起する。1つの例として、歩いている動物が水の中に落ちることをあげてみよう。地面の抵抗がなくなるので、水中での歩行は瞬時に、通常のものとは違う形態になる。足が地面から受ける圧力もなくなる。したがって、その動きはとて幅広いものになる。私たちはそれを“もがくこと {thrashing}”と呼ぶ。この例は、通常の事象が生じえないとき、生じうることはとても多いものようだ、ということを示している。……〔中略〕……あるいは、もっと注意深い用語を使うと、次のように言える。環境が異なるとき、(変化していない)インプライングの中へ生起する {occurs into the (unchanged) implying} ものが異なるのだ、と。それもまた、インプライングの中への生起である。……〔中略〕……このような新しい形成は神秘ではない。私たちの単純な例においては、インプライされた歩行に水がプラスされて、もがくことが形成された。インプライされた歩行は生起しない。歩行が水中では生起しないので、文字通りに、歩行はどこに行ったのか、と問うとする。それは、もがくことの中にあるが、文字通りあるのではなくて、あるインプライングとしてあるのだ。これまでも述べてきたように、インプライングは、ある特定の顕在的な形式ではない。今、この単純な例の中で、私たちはそのことを明確に見た。歩行そのものは生起していないが、インプライされた歩行が、もがくことの形成に関与しているのである。……〔中略〕……別の例である。細胞壁に損傷を与える化学物質が、生きている細胞に溶解をもたらすとき、細胞は細胞壁の損傷を確実に修復する新たな化学物質を生み出す。その細胞は、その新しい化学物質に自分自身を順応させるのに数百万年以上を要することはない。この〔損傷を与える〕化学物質の中で、〔細胞壁を修復する〕化学物質がまったく初めて作られる。それは異なるパターンのあり様でつくられるのである。」(V-A pp.78-79)

邦訳 88-89 頁)

13. メルロ - ポンティのカブト虫

「メルロ・ポンティ {Merleau-Ponty} は次のような例をあげている。誰かがカブト虫の足の下半分を切り取ると、カブト虫はそれでも歩く.....しかしそれは、これまでにはなかったような歩き方である。その動きは奇妙であり、とても複雑である。それまでとは違う重力がカブト虫に影響を及ぼす。今や、その身体全体が左右に揺れ、足以外の部分はその揺れを抑えるように動いている。しかし、この奇妙な歩行は、それまでのレパトリーの中にはなかったものである。身体と環境の相互作用とは次のようなものである。そのいずれかが変化するなら、それらの相互作用も異なって形成される。カブト虫の変化した身体は、その環境に違った形で関与したのである。…… [中略] ……私はこの種の新しい事象を、“**介在する事象 {intervening events}**” と呼ぶ。通常のプロセスが停止するとき、こうした事象が介在することができる。」(V-Ap.79 邦訳90頁)

14. 進化論への示唆

「私たちは今、最初の問いに回答している。私たちは、環境によって影響を受ける、増大する能力 {increasing capacity to be affected by the environment} を見出したのである。あるいは次のようにも言える。すなわち、身体は新たな仕方でその環境に関与する(環境 #0 が環境#2 になる)、と。ここには、進化論への重要な示唆がある。新しさや発達を説明するために、伝統的な進化論は突然変異 {mutations} の概念を用いている。突然変異はランダムなものであると考えられており、自然選択が、適応するものだけが生き残り再生されるということに従って選択をする、とされる。……こうした [ランダム] 理論は、適応的な突然変異がしばしば観察されているから、突然変異によって進化を説明しているのではない(ショウジョウバエ {fruit flies} に見られるような実際の突然変異を観察した研究者たちは、その突然変異は常に発育が止まった形態であり、新しさはないことを報告している。)(V-A pp.82-83 邦訳 93-94 頁)

15. 開かれた循環

「リーフィングおよび他の介在する事象は、それ自身が機能的循環なのではない。これらは、全体としての身体の事象の1つのインプライングのすべての部分であって (IV-Ab)、

それ自身に引き続いて生じる連鎖を伴うような、新しいプロセスの新たなインプライングではない。その新たな精緻化は、それ自身ではどこにも進んでいかない。あるいは、次のようにも言える。すなわち、それらはブルーの中へ **{into the blue}** 進んでいく、と。それは、停止し、広がりつつある川の枝分かれのようなもの **{like the fingers of a river}** である。それは進むことができるかぎりにおいて進んでいくが、停止も続いているので、それは生起しつつ反復する。それはまたインプライされる。それはまた、生起しうるかぎりにおいて、生起する。しかし先ほどの生起とはわずかに違って生起するのである。II で見た機能的循環 **{functional cycle}** が円環であった（私たちはその例として消化を取り上げたが、それは、食べること、満腹になること、排泄すること、休息をとること、空腹になること、食べ物を探すこと、の循環だった）のに対して、この新しい反復するクラスターは円環的なものではない。その代わりに、この反復する文脈は開かれている **{open}**。手の指を開いて伸ばしてみる時のように、それは開く限り開いて、そして停止する。それは、機能的循環である指から構成されているので、私はそれを、**開かれた機能的循環(opfucy)** **{open functional cycle (opfucy)}**、あるいは単に“開かれた循環 **{open cycle}**”と呼ぶ。反復する文脈 **{reiterative context}**、とすることもできる。」(V-B pp.85-86 邦訳 96-97頁)

16. 見ること

「私たちの基本的な変化の概念から、安定した恒常的な何かをどのように引き出すのか、ということを見ることがとても大きなことである。従来のモデルでは、静力学 **{statics}** と同質性 **{sameness}** の基本概念から変化を説明しようとして（そして失敗して）きた。私たちが、静的に見えるものを、プロセスから、すなわち反復する変化のパルスからどのように引き出しているのかを、明確に見きわめよう。これらは、観察者には静的な状態に見えるかもしれないものである。例えば、目で何かを見ること **{seeing}** は、ただ影響を受けるだけの恒常的で安定した受容性 **{steady receptivity}** のように考えられがちだが、実際には、連続する律動的なスキヤニング **{rhythmic scanning}** である。多くの恒常的な身体の状態は、1つかそれ以上のプロセス——それは、おおよそ反復的に生起している——によってまさに形づくられており、維持されている。」(V-B pp.86-87 邦訳98頁)

17. 知覚

「通常の思考方法に従うと、知覚 {perception} とは、写真の撮影や電波の受信と同じような、ある種の取り入れ {intake} であるとされる。そうしたアプローチでは、結局のところうまくいかない。それは、多くの論争を招いてきただけではない。最も重要なのは、従来の思考方法では、私たちは、知覚を行動そして身体プロセスに明確に関係づけることができない、ということである。」 (VI-A p.90 邦訳 101 頁)

18. 行動

「身体は、身体がどのように環境#2の中にあるのかということにおける変化を通り抜けるようになる。そしてその変化は、開かれた循環のセクターの中にある身体のあり様を変化させている。開かれた循環の変化はどれも、身体をさらに変化させる、そしてこのことが再び、その開かれた循環の中にある身体のあり様を変化させるのである。身体は、新しい種類の身体環境 {b-en} の変化の連鎖を通して、自分自身を動かすようになる。その変化の連鎖は、身体と、その変化のレジストリによる身体自身の反復的なセクターの間に生じるものであり、その変化はそのレジストリによって作り出されたものである。身体は2つの環境をもつ。その環境#2と、その反復的なセクターである。身体は、1つの全体としてのそれ自身 (身体 - 環境#2) と、それが自ら織りなす環境 {home-made environment} における変化との間のフィードバック関係の中で、こうした変化をつくり出し、そしてその変化に応答する。身体はそれ自身を変化させ、その変化を通してそれ自身を動かす。私たちはここに、行動を引き出す！ {We have derived behavior !}」 (VI-A p.92 邦訳103頁)

19. 感情

「身体は、それがどのように動いたのかについてのレジストリの影響として、さらに動いていく。身体は動く、そして身体が何をしたのかを再 - 認識することによって影響される。その連鎖の各ビットは、それがまさにどのようにあったのかについての身体的インパクト {the bodily impact} (そのレジストリ) を包含する (によって形成される)。私たちは、身体が、身体自身がやっていることを感じている {the body feels its own doing}、ということができる！ 私たちは、このことを“感情 {feeling}”と呼ぼう。」 (VI-A, p.94 邦訳 106 頁)

20. シンボル

「動物がもたない、言語が含まれるような種類の経験とはどのようなものなのか？ 私はそれを“～について [ということの認識] {aboutness}”呼ぶ。例えば、メアリーは1人暮らしで、猫を飼っている。メアリーが棚からスーツケースを取り出すと、猫は寂しそうな様子になる。猫はそれが、メアリーがもうすぐ旅行に出かけて、自分が何日間か1人ぼっちになるのを意味していることを知っているからである。しかし、メアリーがスーツケースの中に何かを詰めているだけだとしても、そのことを猫に話してわからせる手立てはない。実際にメアリーがスーツケースを棚の中に戻す以外には。」(VII-A p.123 邦訳 136 頁)

21. ヴァージョニングとダンス

「2匹の猿が出会うが、(例えば、2匹の間に川があるとか、新しい何か**が形づくられた**、といった理由で) どちらも背中を向けず、しかも闘いの連鎖も形成されないと仮定してみよう。次のように想像してみよう。闘うことや背中を向けることの代わりに、最初の“威嚇のジェスチャー {threat gesture}”が、わずかに異なる形で繰り返される、と。その“威嚇のジェスチャー”は、闘いの連鎖に関連する最初のビットである。しかもそのビットは同時に、闘いの準備という大きな身体的シフトでもある。(私たちのスキーマでは常にそうなのだが、ある最初のビットが生じると、その連鎖全体のインプライングが変化する。その連鎖の続きが生起しないと、その続きはインプライされたままである。その続きが再開できるようになると、それは再び生じ始める。このように、最初のビットは、ある変化したあり方で、再現されることを保ち続けるのである。) “威嚇のジェスチャー”は、身体をシフトさせる大きな効果をもっている。この“ジェスチャー”、つまり身体が見え、聞こえ、腕を動かすそのあり様が、それまでとはどこか違ったものであれば、相手の猿に与える効果もまた違ったものになる。それは相手の猿の身体の見えや聞こえや動きをわずかに違ったものへと変化させるだろう。そしてその変化は、今度は最初の猿をわずかに違った何かへと推進するだろう。ここで私たちは、同じ“ジェスチャー”のわずかに異なる**諸ヴァージョン {versions}** の連鎖を得たことになる。私はこれを**ダンス {a dance}** と呼ぶ。(それは新たな種類の連鎖のヴァージョニング {versioning} である)。(VII-A pp.124-125 邦訳 138 頁)

22. 新しい種類の推進

「ここで初めて、私たちは“～の {of}”、あるいは“～について {about}”という言葉

を使用することができる。ダンスは闘いをインプライする行動文脈についてのものである。ダンスは闘いそのものでも、また闘いの準備でも、闘いの終わりでもない。ダンスは、行動文脈をつくる行動の連鎖の中にはないが、行動の連鎖についてのものなのである。共感 {empathy}、表象、類似性 {likeness}、普遍性 {universality}、シンボル、意味、像 {picture}、さらにもっととても多くのことがここから現れる。それらをじっくりととり上げていこう。」(VII-A p.127 邦訳 140-141 頁)

23. 共感

「しばしば共感については、自分があるあり様で何かを感じているときに、自分自身の身体がどのように見えているのかをあらかじめ知っていることであるかのように語られる。そして、他の誰かが同じようなあり様に見えるときに、その人たちの様子を見て、自分が感じるようにその人たちも感じているだろう、と思う、とされる。だが、このような見方では、自分が自分の身体を外から見るとはほとんどないということを考えると、自分の身体がどのように見えるのかが、いかにして知られうるのかを説明できない。G. H. ミード以降、多くの人々はここにある秩序を反転させてきたのだ。最初に私がどのように見えるのかに対する他者の反応があり、そこで初めて私の身体の感情が、ある見えをインプライするようになるのである。すなわち、共感が最初に来る。最初に、**他者**の身体がどのように見えるかによって作り出される身体的なシフトがある。それから自分の身体が他者の見えをインプライするようになり、次に自分の身体がそれ自身の見えをインプライするようになるのだ。(私たちは、この〔自分の中だけで生じる〕単独のインプライング {lone implying} について、後でさらに検討しなければならない。ここでは、〔単独ではなく〕他者をともなう連鎖がインプライされているのである。)」(VII-A p.127 邦訳 141 頁)

24. シンボル空間

「行動は行動空間、つまり、あらゆるインプライされた行動の連鎖からなる、ある“満ちた {full}” (と私たちが言った) 空間の中で進行する。しかし、単純なジェスチャーの動きはそれとは**別の空間**、つまり、身体の見えの空間、あるいはジェスチャーの空間、もしくは**単純な動きの空間**の中で進行する。そしてこの空間は二重化されている。それは単純な動きの二重化された空間である。そこでは、行動文脈は、行動が続くときに変化したようには変化しない。むしろ、それは“同じもの”でありながら、ヴァージョン化され、表

出され、連鎖化され、もたされ、感じられる（もちろん、このことはまた、ある大きな身体的変化の連鎖であるが、行動がその行動文脈を別の行動文脈へと推進していくようなものではない。） 私たちは、あるシンボリックな空間 {symbolic space}、いわば二重化された空間、シンボル化される動きの空間を見出したのだ。その行動文脈はヴァージョン化されている。そこでは行動は進行しない。動きは、動きそのものとしては、インプライされた行動の可能性、暗在的な行動、および焦点的にインプライされた次の行動を変化させない。したがって、これらの動きは、ある虚の空間 {empty space} の中で動いているのである。今や、純粋な動き {pure movement} というものが、私たちのスキーマに初めて存在するようになった。初めて私たちのモデルに虚の空間、いわば純粋な動きの空間が現れた。」(VII-A p129 邦訳 142-143 頁)

25. 最初のダンス

「身体は、その行動文脈の {of} 諸ヴァージョンの {of} 意識である。（ここには2つの“～の {of}”の関係がある。） 身体は、行動文脈を（行動がなすように）推進することなしに、その行動文脈の中にいることを感じを（時間のスパンを越えて）感じるのだ。行動する中での感情の変化において、1つのビットになりうるものだけが、ここでは、諸ヴァージョンのひと繋がりを越えて“同一のもの”になる。その文脈において、以前には生じなかった感情の感じ {a feel of the feeling} がここにはある。身体の諸変化の1つの連鎖だけが感じられる。行動の中ではこうした1つのビットは、それが違ったものへと推進される時以外には、感じられなかったのである。このモデルにおいて、これまで私たちは3種類のインプライングの中への生起 {occurring into the implying} を発展させてきた。それらはすなわち、身体プロセス、行動、そしてジェスチャーである。行動の中では、身体がまさにどのように身体-環境 {b-en} であったのか、身体がまさにどのように変化し行動したのかによって、開かれた循環が生起し推進される。ジェスチャーは行動における1つの休止である。身体の見えは、ある新しい種類の環境の表出である。身体の見え {bodylooks} が生起するとき、それは、身体が感じている行動文脈を感じることに身体を推進する。このような連鎖と身体の見えを通して、身体は行動文脈を感じていることを感じるのである。あるヴァージョニングの連鎖の中で、自分たちが人間であると突如気づいた最初の動物たちは、ある昂揚した時間 {an exciting time} をもったに違いない。自己を意識しながら！ 互いに動く中で、ダンスをする中で、その動物たちは突如、自分たちが気づいている

ことに気づいたのである {they were aware of being aware}。」(VII-A p.133 邦訳 146-147 頁)

26. 見られたもの (seens)

「こうしたこと〔見られたもの〕があらゆる対象によってたちまち生じたのか、それとも最初にそのような見られたものの連鎖 {seen sequence} が特定の対象によってのみ形成されたのか、私にはわからない。もしも后者である場合は、私たち人間である猿はダンスをしている間にのみ、この対象をとて貴重なものとして見出したことだろう。そしてその対象は、私たちの猿を断続的に {intermittently} に人間へと切り替わらせる力をもっていたはずである。確かにそれは、あるきわめて高い価値をもつ対象であったはずである。ここにはその対象についての自己意識がある。1人であるときでさえ、それはあるのだ。」(VII-A p.138 邦訳 151-152 頁)

27. 分離された感覚

「人間だけが“音”を聞き、視覚的であるだけの何かを見ることができる。像であるということはただ視覚的であるということである。たとえそれが目の前にある対象の見えや音であったとしても、それは見えや音として取り出される。もちろん、純粋に視覚的な何かや、聴覚的な何かといったものは存在しないのだ！ ある分離 {disjunction} が、いわば実際にある1枚の紙と、そこに像として描かれた人や木との間につくり出されるのである。」(VII-A p.139 邦訳153頁)

28. 暗在性のタイプa

「暗在的であるものは、2つのあり様で暗在的でありうる。暗在性の**タイプa** {implicit type a} は、すでに形成されているがまだ連鎖化されていないものを指す。私はそれを、前形成的、あるいは“タイプa”と呼ぶ。暗在性のタイプ**b** {implicit type b} は、すでに連鎖化されているものを意味する。暗在性タイプaの連鎖は、それがまだ形成されていないとしても、あるあり方で暗在的に機能している。」(VII-A p.145 邦訳159頁)

29. 展開の第1法則と第2法則

「ある展開が、今展開していることがかつて暗在的で“あった {was}”ときに生じたこと以上の、**多くのあるいは異なった部分**をもっている、これが**展開の第1法則** {the first

law of explication} である。」(VII-A p.154 邦訳 169 頁)

「今、暗在的な諸連鎖の1つが実際に生起するならば、その万事連関化(その文脈)が実際に生起しつつあり、そして他の諸連鎖が実際に機能するあり様は異なったものになる。これを私たちの**展開の第2法則**とする。暗在的に機能していたものを展開することによって、以前は暗在していなかったかもしれない他の何かが暗在的に機能するようになるのだ。」(VII-A p.157 邦訳172頁)

30. ヘルド (held)

「私たちが前に、すべての連鎖は相互に暗在的であり、各々の連鎖はその文脈のひと繋がりであり、それらのすべてによってつくられている、と言ったのであれば、私たちは今、“ヘルド {held} ” という概念を導入する必要がある。すべての暗在的な諸連鎖は、ある点においては“ヘルド”されており、またある点において暗在的に機能している。これが実際に意味しているのは、1つの連鎖は次の連鎖と同一ではない、ということである。そうでなければ、諸連鎖はすべて同一であり、万事連関化 {everything} は常に同じあり様で機能していることになってしまう。」(VII-A pp.155-156 邦訳170頁)

31. 再構成化(その第2法則)

「(再構成化に関する) 私たちの第2の法則がここに示される。生起する連鎖はまた、暗在的に機能するものを変化させる。私たちはすでにそのことを見てきた。そして今や、生起している連鎖が再構成化する文脈の観点からそれを見ることができるようになったのだ。“ヘルド”されたものは機能しないし、生起しない。そして間接的に推進されもしない。それは同じものとどまる。別の連鎖の中で、新しい何かが顕在的になったときに、新しい何かはまた暗在的に機能する。したがって、以前の連鎖の中でヘルドされていたものが今や暗在的に機能するかもしれないのである。」(VII-A p.160 邦訳174頁)

32. フリップ (FLIP)

「ここで古生物学 {paleontology} は次のような例証を私たちに示してくれる。すなわち、本当に長い間、道具はどの新たな狩場においても新しくつくられ、そして[狩りが終わった後は] 道具はそこに捨てられていた、ということ。狩りの文脈 {hunt-context} がもはや狩りの文脈でなくなると、道具は道具としてのその重要性を失っていたのだ。何かを保

持するあり様が存在しなかったので、私たちの理論で言うところの、それは常に新しい形成であった。道具をつくることの中にあったパターンは、〔まだこの段階では〕狩りをする行動の休止であったに過ぎない。そのパターンはとても精緻なものではあったが、それは行動空間の中にあるもので、1つの相互作用空間の中にあるものではなかった。そのパターンは、それが休止させた行為文脈 {action-context} の中に存在しないときには、たとえばそのパターンがすでにそこにあり、対象に対してあったとしても、推進する力は失われたままである。また、こうしたパターンはその実体的な文脈 {physical contexts} から形成されるのではない。そしてそこで——このことすべてが生じた。そこで人々は、もはや行動空間の中ではなくて、ジェスチャーによって規定される相互作用文脈 {gesturally defined interaction-context} の中で行なしたのだ。それがフリップ {FLIP} である。〔フリップ以後〕行為は他者とともにいる人々の観点から生じるようになる。人々が対象にかかわっているときでも、他者がいないときでさえも、そうなのである。木が誰かのものである場合、その人がそこにいなくても、その木はその人のものである。もしも、その木を切り倒したら、今やそのことは、倒れた木によってもたらされる行動の変化の可能性からなされる行為ではない。そうではなくて、その木を切り倒すことは、そうすることによってその人との関係が変化することからなされる行為である。そして、その人がその木を切り倒してほしいと望んでいる場合の〔私の〕行為と、その人が切り倒さないでほしいと思っいるときの〔私の〕行為とでは、まったく違ったものになる。」 (VII-B p.166 邦訳 182 頁)

33. 相互作用文脈 (interaction context: iacxt)

「私たちはその文脈を、相互作用文脈 (iacxt) {interaction contexts (iacxt)} と呼ぶことにしよう。」 (VII-B p.167 邦訳 183 頁)

34. 言葉の形成

「あるダンスから生じたキニックキニック {kinnickinnick} という音が、今、多くの異なる文脈における多くの異なる音の形成の中で機能している、としよう。このタイプの音が今、「ク {k}」あるいは「キン {kin}」の音をもつ多くの異なる音の形成の中で機能している。その「キン {kin}」の音は、ある1つの行動文脈の中で身体があるあり様から引き出されたものであるが、今やこの音は、(すぐ前のセクションで見たように) すべての他の行動文脈 (それらは最初の行動文脈の中に暗在していた) の中で身体があるあり様と交差す

る。そしてこれが“側面的交差 {lateral crossing}”と呼ばれるものである。1つの文脈で“キン {kin}”が、別の文脈で“キンド {kind}”が、また別の文脈で“ケン {ken}”が使用されるとき、これらの音はそれぞれの類を再構成化し、創造する。それぞれがその(諸)文脈 {context(s)} を集約する。“キング {king}”が(諸)文脈を集約するようになり、そして“チャイルド {child}”も(諸)文脈を集約するようになる。」(VII-B pp.185-186 邦訳 202頁)

35. 相互作用的な生の文脈と集約された生の相互作用文脈

「ここには文脈の2つのシステムがある。[1つは]私が**相互作用的な生の文脈 {the interaction life context}**と呼ぶ、互いに暗在的な状況であり、[もう1つは]言語システムとしての、それぞれの言葉における、互いに暗在的な集約された(諸)文脈であり、私はそれを、集約された生の相互作用文脈 {the collected life interaction contexts} (coliacxt)と呼ぶ。このようにして、言葉は常に**それ自身の**生の諸文脈を推進する。そして私たちは、自分たちが生きているこの今の新鮮な文脈を推進するために言葉を使用する。」(VII-B p.189 邦訳205頁)

36. 統語

「**統語 {syntax}** は、身体の特徴である複雑さと相互関係性 {mutual interrelatedness} をもっている。私たちは、ある言葉が必要であることを、自分がいる状況からだけでなく、そうした地点までに使い切った言葉からも**感じる**ことができる。息を吸い込んだときに息を吐くことがインプライされ、空腹のときに食べることがインプライされるのと同じように、その言葉は焦点的にインプライされる。それが言葉にならない場合でも、そうなのである。」(VII-B p.190 邦訳 207-208頁)

37. 熟慮的な

「熟慮的であること {deliberateness} とは、人が何かをすることを止めて、そこにとどまり {stop}、たくさんの可能性の中からどの1つをなせばよいかを感じ取る、そうした能力 {capacity} のことである。…… [中略] ……発話は熟慮的なものであり、[したがって]ほとんどの行為や相互作用も熟慮的なものになる。それらはいつでも停止する {stop} ことができ、実際にあらゆるときに休止している {pausing} のである。それらのどのビット

も、ある休止である。行動であったものは〔その休止の中に〕吸収され、その（フリップ {FLIP} 以後の）休止 {the pausings} が主要なプロセス、相互作用になり、単独のジェスチャーや何かをつくること {lone gestures and makings} になったのである。……〔中略〕……熟慮的であることには病理もある。それは“薄まり {thinning}”によるもので、空間全体がもっとシンプルだったときよりも、相互作用の各ビットが、身体的な潜在力 {bodily potent} をまったくもてなくなってしまうようなものである。」（VII-B pp.199-200 邦訳 216-217 頁）

38. VIIIのダンス（イサドラ・ダンカンの例）

「“何時間も両手を太陽神経叢 {the solar plexus}（胃の下のあたりにあるエネルギーの集結部）の上で組み、じっと立っていることもあった。長時間、まるでトランス状態になったかのように動かずにじっとしている私を見て、母はひどく心配した。しかし、私は求め続け、すべての動きがわき出す源、動力の中心、あらゆる種類の動きが生まれる統合体……をついに発見した。”（イサドラ・ダンカン『魂の燃ゆるままに』 {Isadora Duncan, My Life, Liveright, N.Y.: 1927, p.75}）（VIII p.126 邦訳 235 頁）

39. 直接照合体（Direct Referent: DR）と完全なフィードバック対象

「直接照合体は完全なフィードバック対象である {The direct referent is a perfect feedback object}。」（VIII p.236 邦訳 257 頁）

40. モナド（modad）

「私は“モナド”という用語を、直接照合体があらゆること、すなわち、その第2の諸連鎖（私たちが先ほど言ったように、そのどれもがVIIIの中では、ある“第1の”連鎖である）のすべての結果に対して適用されるあり方を指し示すために用いる。私にとって“モナド化すること {to monad}”は動詞であり、私は、直接照合体が“あらゆることの中へモナドアウトする” {a Direct Referent "monads out into everything"}、と言いたい。」（VIII p.246 邦訳267頁）

41. “1/2から2へ”の原理

「私はこのことを、“1/2から2へ”の原理と呼ぶ。こうした大雑把な命名によって何がも

たらされるかということ、“反映 {reflection}”と大雑把に呼ばれているものが、以前からあったけれども見られてこなかったものを見るようになることではない、という点についての認識である。それは、“1”がそこにあって、鏡の中でそれを反射することで2つのそれが得られて、2となる、といったものではないのだ。そうではなくて、2つのいずれもが、新たな“反射的”なプロセスの中で創造されるのである。以前そこにあったものは“1/2”と呼ぶことができる。」(VIII p.249 邦訳271頁)

42. ダイアフィル

「私が定義したモナドは、VIIIの対象 {VIII-object} の1つの種類である。そして今、私はもう1つの種類について考えたい。私はそれを“ダイアフィル {diafil}”と呼ぶ。モナドは『体験過程と意味の創造 {*Experiencing and the Creation of Meaning*}』における把握 {comprehension} とほぼ同じであり、ダイアフィルは『体験過程と意味の創造』の隠喩 {metaphor} とほぼ同じである。[モナドという用語によって] 私が意味したいのは、直接照合体がモナドアウトする {the Direct Referent monads out} とき、それは“同じもの {the same}”にとどまる、ということである。そこから生じる言明のクラスター全体、その実例を示すこと、そしてその言明の“適用 {applications}”のすべては、直接照合体についての1つの大きな把握にとっても近いものである。すべての領野 {all fields} における、直接照合体の**把握**のすべて。[これがモナドである。] そうする代わりに、私たちは、トピックや文脈のそれぞれを直接照合体と交差させるようにすることが、直接照合体が“適用”され、モナドアウトするそのようなあり方において**だけでなく**、逆の方向においても、つまり他のトピックを、最初のトピックへとモナドイントゥーするような直接照合体であるようにする {letting the other topic be a Direct Referent monading into our first one} かもしれない。そうするときには、私たちは自分の直接照合体との連関を失うし、それはもはやモナド化と“同じもの”ではない。」(VIII p.271 邦訳293-294頁)

43. モナド - ダイアフィル化 (monading-diafilling)

「すべての連鎖が新たな領野との関係の中で機能するあり方は、私たちがモナド化、あるいはダイアフィル化と概念化したものとまったく同じものにはならないかもしれない。私たちはそれを“モナド - ダイアフィル化 {monading-diafilling}”と呼んで、この用語によって、さまざまなあり方の全体的な連続体 {a whole continuum of different ways} であるも

のを指し示すことにしよう。」(Ⅷ p.274 邦訳297頁)

*

以上、ジェンドリンのプロセスモデルの中から、サイコセラピーをはじめとした臨床的問題への示唆と言えそうな箇所を抽出してみた。これらは、これだけではプロセスモデルからの断片的なピックアップに過ぎず、断章(フラグメント)の域を出ていないが、今後ジェンドリンのプロセスモデルの臨床的意義をさまざまに解釈し、議論していく際の手がかりとしては、重要な情報源となると考えられる。

第Ⅲ部 プロセスモデルの臨床的 意義を実例化する試み

——パーソンセンタード/フォーカシング

指向セラピーにおいて生起する

プロセスの理論化——

1. はじめに——研究の意図——

(1) 研究の背景について

この第Ⅲ部では、第Ⅰ部および第Ⅱ部での理論的な検討をふまえたうえで、ジェンドリンのプロセスモデルがサイコセラピーをはじめとした臨床実践にもたらす意義について実践的な視野から検討を行う。第Ⅰ部の5「インプライング、生起、進化——プロセスモデルの臨床的含意について——」においては、純粋な哲学的作品としてのプロセスモデルがサイコセラピーの臨床実践にもたらす含意について考察したが、そこではその可能性を抽出したにとどまっていた。

第Ⅱ部での考察（および資料として掲載したプロセスモデルの全訳）を経て、ジェンドリンのプロセスモデルの全体像が明らかになり、その臨床的意義についても本格的な検討と議論を行う準備が整った（第Ⅱ部の8「(第Ⅱ部の補遺) プロセスモデルの臨床的意義を抽出するための基礎的作業」では、プロセスモデルの全体の中から、サイコセラピーや心理学、臨床実践に関連するような示唆的な文章をピックアップすることを試みたが、それはまだ断片的な抽出に過ぎないものである)。

そこで以下では、パーソンセンタード／フォーカシング指向セラピーのサイコセラピストとして実践を行ってきた筆者自身の臨床経験を素材としながら、プロセスモデルから導き出された理論構築法としての TAE (thinking at the edge) (Gendlin, 2004; Gendlin & Hendricks, 2004) を方法論として用いることで、プロセスモデルの臨床的意義を具体的に検討することにしたい。これは、ある意味では、ジェンドリンのプロセスモデルと筆者の臨床経験の交差の試みでもあり、また、プロセスモデルの臨床的意義を筆者の臨床経験から実例化する試みでもある。

*

筆者はサイコセラピスト (カウンセラー) として約 25 年の臨床経験をもっている。この間の主な実践の場は、民間のカウンセリングセンター (精神・神経科のクリニックの提携機関として開設されている心理相談室) であり、自主来談およびクリニックから依頼されたクライアントの人たちとのセラピー (カウンセリング) 面接に携わってきた。

筆者の基本的なオリエンテーションは、パーソンセンタードセラピー (person-centered therapy) およびフォーカシング指向セラピー (focusing-oriented therapy) である。ロジャーズ (Rogers, C. R.) のクライアント中心セラピーやパーソンセンタードアプローチの系譜を引くパーソンセンタードセラピーと、ジェンドリンの理論的・方法的な流れを汲むフォーカシング指向セラピーに対しては、これらを異なる立場として区別しようとする考えもあるが (こうした議論については、例えば Sanders, 2004 等を参照)、筆者はこの 2 つのセラピーは実践の中で統合できると考えており、実際にその統合的な臨床実践を行っていると自負している。

ロジャーズの非指示的カウンセリングに端を発するパーソンセンタードセラピーは、現在でもセラピストによる傾聴や非指示的なスタンスを重視する傾向が強く、セラピストが主導する働きかけや介入に慎重であることが少なくない。ジェンドリンのフォーカシングやフォーカシング指向セラピーに対しても、そのような非指示的なスタンスから、それらの手法を実践の中に取り入れることにはネガティブな意見もある。

しかし、さまざまなエピソードに触れてみても、(また、実際にロジャーズのことを尋ねたときにジェンドリンが聞かれる言葉からも) ロジャーズとジェンドリンの間には深い信頼関係や尊敬の念こそ見出せても、2 人の方向性の違いを見つけることは難しい (これは、例えばフロイト (Freud, S.) とユング (Jung, C. G.) の間に生じた亀裂とは対照的である)。かつてロジャーズは、理論的な問題で自分とジェンドリンが違うことを言っていたら、ジ

ジェンドリンの方が正しいことを言っていると思ってほしいと、関係者に語っていたようだし、また2011年11月の第2回フォーカシング指向サイコセラピー世界会議の際には、ジェンドリンは別れ際に「生前のカール〔・ロジャーズ〕もよく言っていたが、決して私の真似はしないでほしい。あなた方はそれぞれ自分の道を歩まなくてはならないのだから」⁵⁸と述べていた。

ジェンドリンは、傾聴を中心としたロジャーズの方法から、次のようなことが生起するのを見出した。「彼〔ロジャーズ〕の示すやり方で耳を傾けると、どの人も内面からの広がりを経験し、私たちの眼前で、複雑になり、精緻になり、美しくなる」(Gendlin, 2002 p.xix)。そして、ジェンドリンが発展させたフォーカシングは、より多くの人々が、もっと内面からの広がりを経験し、複雑になり、精緻になり、美しくなるための方法であり智慧であると言える。こうしたことは、ジェンドリンがロジャーズに最後に会ったときのパネルディスカッション(1986年、シカゴ大学)で、ロジャーズが「私はいわゆるクライアント中心の方法を見出したかったわけではない、私は人々を援助するあり方を見出したかったのだ」(Ibid., p.xxi)と語っていたこととも相通じるだろう。他のどんな分野でも同じだろうが、時とともにサイコセラピーの援助のあり方は洗練され、ヴァージョンアップしていくものなのだ。

しかし、フォーカシングが常に効果を発揮するわけでもない。ジェンドリンも、「セラピーで、第1に重要なのは関係(その中にいる人)であり、第2が傾聴で、ようやく3番目にくるのがフォーカシングの教示である」(Gendlin, 1996 邦訳 497頁)と言う。これもジェンドリン自身が語っていたことだが、「セラピーの介入技法はとても大切なもので、人々をよりよく援助するために発展させていかなければならないが、セラピー関係はもっと大事なものである、なぜなら技法がなくても私たちは生きていけるが、関係がないところでは生きていけないからである」と彼は言っていた。「そのように大切な人間関係の要因をセラピーの中に含まなくていい、技法だけで十分だ、という議論はナンセンスである」と。⁵⁹

ジェンドリンも、ロジャーズが、そしてパーソンセンタードセラピーが大切にしてきたセラピーの中の関係的な要素や人間的な要因を重視する。筆者もそのことについては深く

⁵⁸ これは2011年11月12日に私たち日本からの参加者がジェンドリンの自宅を訪問して談話したときのジェンドリンの言葉である。

⁵⁹ 2009年11月に開催された第1回フォーカシング指向サイコセラピー世界会議でのジェンドリンの講演における発言である。

同意する。こうしたことから、筆者は自分の臨床的なオリエンテーションを、パーソンセンタード／フォーカシング指向セラピー (person-centered / focusing- oriented therapy: PC/FOT) と呼ぶことが最も適切であると考えている。この PC/FOT という表記は、現在のところそれほど一般的なものではないが——しかし、国際学会の名称は WAPCEPC (World Association for Person-Centered and Experiential Psychotherapy and Counseling) であり、その学会誌は *PCEP* (*Person-Centered and Experiential Psychotherapies*) と表記されるように、パーソンセンタードセラピーという名称だけでは、発展しつつあるこの立場の全体を指し示すことが難しくなっていることも事実である——、ロジャーズとジェンドリンの理論的な系譜の全体を表現するには最も妥当なものだと考えられる。

*

本論文の第Ⅲ部として、筆者自身の臨床経験を素材とした研究を取り上げることには、以下のような背景と意図がある。

筆者の中には、サイコセラピーの実践や研究に携わる者の1人として、いずれは自分がやってきたことを振り返り、何らかの形でまとめなくてはならないだろう、といった漠然とした気持ちは以前からあった。しかし、筆者がイメージしていたのは、自分が担当したセラピーのケースを一覧表にしてみても、どんな主訴や問題を抱えた人たちと、どのくらいの期間、どのようなセラピーを行い、どういった結果を提供しているのかを考察するような、ある意味で常識的な分析や記述の仕方だった(そのようなものしか思いつかなかった、と言うほうが正確だろう)。もちろん、そうした作業にも意味がないわけではないだろう。しかし、このような常識的な分析を始めるにも、クライアントの人たちへのインフォームドコンセントをどのように行ったらよいか——あるいは、プライバシーに触れないような一覧表の書き方がはたしてあるのか——や、膨大な量の面接記録をどのような観点からどのようにまとめたらよいかなど、現実的な課題は多かった。そうした状況の中で筆者は、いくつかのケース研究(末武 1991, 2003)を行った以外には、自分の実践の全体を振り返るような作業は長い間棚上げにしてきたのである。

転機が訪れたのは、臨床実践とあわせて筆者自身のライフワークの1つとなっていたジェンドリンの理論的な業績を解説する作業——その成果が、本論文の第Ⅰ部と第Ⅱ部である——に取り組む中で、ジェンドリンのプロセスモデルと出会い、そこに書かれるはずであった「理論構築 (Theory Construction)」のセクションが、その後 TAE として提案さ

れたことを知ったことだった。TAE を理解し、また、この方法がいわゆる質的研究の方法論（得丸 2010）として活用され始めるのを目の当たりにして、これを臨床実践の研究にも適用できるのではないかとの確信をもつようになっていった。

しかし、ジェンドリンのプロセスモデルの解読にもそれ相当の時間が必要だったが、TAE の理解と習熟にもかなりの時間を要した。最初は、得丸さと子（智子）氏の協力を得て、共同研究の形でパイロットスタディに取り組み（末武・得丸 2012）、そしてその後、筆者自身によって研究を継続した。

以下では、その研究によって得られた成果を、特にパーソンセンタード／フォーカシング指向セラピーにおいて生起するプロセスの理論化を試みる、とい形でまとめることにするが、その前に、TAE とはどのような方法なのかについて触れておきたい。

（2）方法としての TAE

TAE (thinking at the edge) は、2004 年にジェンドリンとメアリー・ヘンドリクスがステップ化した概念形成 (concept-formation) と理論構築 (theory-construction) のための思考法 (thinking method) である (Gendlin, 2004; Gendlin & Hendricks, 2004)。

本論文の第Ⅱ部でも指摘したように、プロセスモデルには当初、「理論構築 (Theory Construction)」というセクションが書かれる予定だったようだが、結局のところプロセスモデルの中にその内容は収録されなかった。そしてそれは、2004 年になってフォーカシング・インスティテュートの学術誌 *The Folio* の中で、2 つの論文（「TAE の序文」と「TAE ステップ」）として発表された。

付表Ⅲ - 1 に、TAE のステップの主な指示を示した（なお、原著には主な指示のほかに留意事項が記載されているが、そちらは割愛した）。

付表Ⅲ - 1. TAE の主なステップ (村里訳 http://www.focusing.org/jp/tae_steps_jp.html の表現に多少の修正を加えた)

TAE ステップ (主な指示)

パート I : ステップ 1～5 フェルトセンスから語る

1. フェルトセンスに出てきてもらう

- ・あなたが「知っている」が、いまだそれを表現できない (それは言葉にしてもらいたがっているが) ことを選ぶ。このあなたが「知っている」ことを、いつでもそこに戻れるように、フェルトセンス (はっきりとからだに感じられる曖昧なエッジ) として感じなさい。
- ・それをあなたのフェルトセンスから大まかに、数段落に書きとめる。
- ・あなたのフェルトセンスから、いちばん重要な所 (核心) を、キーワード (鍵になる語か句) を含む**短い一文**(その文がそれを本当に言えてなくても)にきなさい。
- ・その文の中のその**キーワード**あるいは句に下線を引く。
- ・具体例をひとつ書きとめる。

2. あなたのフェルトセンスの中に論理以上のものを見つける

- ・普通の意味で論理にかなっていないところを見つけ、非論理的な一文を書きなさい。
- ・非論理的な文が書けなかったら、逆説的な一文を書いてよい。

3. あなたは通常の語義を言いたいのではないことに気づく

- ・ステップ 1 の下線を引いた語の通常の(辞書的)語義を書き、そしてそれが自分の言いたかったことと異なることに留意する。
- ・ステップ 1 の文から下線を引いた語を取り出し、空所のある文を作りなさい。
- ・あなたのフェルトセンスに戻り、あなたが言いたいことを表現する別の語・句が現れるのを待ちなさい。
- ・二番目の語・句の通常の語義も書く。
- ・また自分のフェルトセンスに戻り、三番目の語・句が現れるのを待ちなさい。
- ・三番目の語・句の通常の語義も書きとめる。
- ・自分が知っているこのことを表現できる通常の確立した語・句はない事実を認める。

4. これら三つの語にあなたが言わせたかったことを表現する文あるいは新鮮な語句を書く

- ・最初の語をステップ 1 の文の空所に戻しなさい。
- ・その公的言語を変えることはできないけれど、その語にあなたが言わせたかったことを表現する全く新

しい文や句を書くことはできる。あなたがその語に語らせたかったこと、その語が（他の二つの語ではなくて）あなたのフェルトセンスから引き出すことを書きなさい。

・二番目の語を空所に入れなさい。それがあなたのフェルトセンスから引き出したことを正確に語る句や文を作りなさい。

・三番目の語についても同様にする。

5. あなたが各語に言わせたかったことを、言語学的には普通ではない新しい語句を書くことによって、再度拡張すること

・ステップ4の主たる語あるいは句を用いて、三つの語あるいは句それぞれによって今あなたが言いたいことをさらに拡張するために、いささか奇妙な文章を一つあるいは二つ作りなさい。

・それらの文のそれぞれの中で、新たに重要な語句に下線を引きなさい。

・最初の三つの語と新しい主たる語句の全てを一続きにして、ステップ1の下線を引いた空所に書き込みなさい。そして一続きの語句の最後に「...」を加えなさい。今やあなたはあなたが言おうとしていることを洗練させているだろう。

パートII：ステップ6～9：側面（具体例）から型（パターン）を見つける

6. 側面（具体例）を集める

・側面を集めなさい。実際に起こったどんな具体例でもよい。

・その中から三つの側面（具体例）を選んで、あなたのフェルトセンスに関係するその細部をあわせて書きなさい。あなたが取っておきたいことに関係する細部に下線を引く。

・ステップ1にあなたが書いた最初の側面もここに書き写す。これで4つの側面ができたことになる。

7. 各側面（具体例）が詳細な構造を与えるようにする

各側面のそれぞれにおいて：

・これらの細部の間には多くの複雑な関係があることに注目しなさい。あなたのフェルトセンスに響く細部間の関係を見つけなさい。

・この関係を全く異なる状況に適応すること。

・この関係を、それが他の多くの状況にも該当する型（パターン）になるように、一般的な用語で言い換えること。

8. 各側面（具体例）を交差させる

・次のように自問してみたらどうだろう？「第1の側面からだけでは見えなかったが、第2の側面から見ることによって、第1の側面の中に見えるものは何だろうか？」

・あなたが保持したい新しい型（パターン）をとらえる一文を書きなさい。

9. 自由に書く

- ・この時点であなたが考えていることを自由に書きなさい。

パートⅢ：ステップ 10 - 14：理論形成

TAE の一つの目的——暗在的な知を文章にし、人に伝えられるようにすること——は今達成されたことになる。もしあなたが望むなら、あなたはさらに形式的、論理的理論形成の段階に進むことができる。

10. 三つの用語を選び、それを連結する

- ・三つの語あるいは句を選んで、それらをあなたの当座の主たる用語にしなさい。その用語を「A」、「B」、「C」とする。
- ・次に A を B に関連させて、そしてまた C に関連させて定義しなさい。先ず各等式を内容と無関係に、ただ等式として書く。A=B。A=C。この=を「である」に書き換える。A、B、Cに語句を入れる。これで、全く正しいか、全く間違っているかであろう二つの文ができる。
- ・必要ならできた文を部分的に修正しなさい。新しい型（パターン）が生じる場を保つために、繋辞の「である」はそのままにしておきなさい。この関係を古いなじみの関係で代用しないこと。この作業の間、あなたのフェルトセンスの中核を保ち続けること。
- ・各用語を関係付ける文をできるだけ多く作って遊んでみよう。A=BかつA=Cだから、もしかしたら B はある種の C であるかもしれないし、C はある種の B であるかもしれない。あるいは A を含む B はある特殊な仕方 C であるかもしれない。このように、あなたは固定しない開いた論理を使って遊ぶことができる。
- ・論理を用いないで、用語を分けたり、結合したり、あるいは一つ二つ新しい用語を作ったりして自由に文を作ってみよう。
- ・あなたのフェルトセンスを中心的に表明する用語間の「～である」に注意を集中することで、これらの作業が進むかもしれない。
- ・二つあるいは三つの用語がその間に繋辞を挟んでできた文があなたのフェルトセンスの中核を表現するように感じたらステップ 10 を終える。
- ・その文 A=B、A=C を書きなさい。

11. 各用語の間の本来的な関係を問う

- ・あなたの二つの文において、「～である」の前に「本来」という語を加えて「Aは本来Bである」、「Aは本来Cである」という文に書き換えなさい。この文が結局何を意味することになるか、あなたにははまだ解らない。
- ・さてあなたのフェルトセンスの中へと浸り、なぜ A が本来 B であるのかを見つけなさい。なぜこの両者

は本来関連し合っているのか？ AがBでなければならない、あるいはBとこの関係になければならない
そのようなAの性質とは何だろうか？ あなたが気づいたことを書きとめなさい。その本来の関係をあげ
なさい。今やAとBの間には繋ぐ言葉がある。

・「Aは本来Cである」に関しても同じことをしなさい。

12. 最終的な用語を選び、それらを相互に関係づける

・あなたの「非論理的な」中核を新たに作りなさい。次のように自問する：どのようにすれば私のこの中
核を、用語の中の三つか四つとステップ11で見出した本来的繋がりとを用いて述べることができるだろ
うか？ その文を定式化する際に、一つ用語があなたの中核を述べるために選ばれた他の諸用語の組み合
わせ「である」ようにしなさい。

・上の中核の記述から「～である」の直前の用語を取り出すこと。そしてこの二番目の用語が記述の中の
他の諸用語の組み合わせであるように、中核の記述を修正しなさい。

・このことを第三の用語に関してもしなさい。今や各用語は他の用語全ての組み合わせからなる記述によ
って定義される。

・この循環で各文を考えなさい。それは本当にあなたの用語の意味であると言えるだろうか？ それら複数
の文が同じことを述べているように思われても、順序が違えば、その用語があなたが言いたい意味を表現
するには、さらに固有な繋がり言葉が必要である、そういう特殊な場合もあるのではないか？

・あなたが文章にもっと多くの特殊な意味を作り出していたら、他の記述にもその付け足した意味を入れ
て見なさい。そうすれば他の記述が定義されるその仕方に、さっきの用語に加えた変化や意味が含まれる。
このようにすれば、あなたの理論はさらに発展するだろう。

・以前のステップの中のどの語句をあなたの理論は次に必要としているだろうか？と自問しなさい。あなた
が言い始めたことをそれが言うことができるために、それらの語句をひとつひとつ加えること。それら
あなたがさっき定義した用語から引き出しなさい。ここで言う「引き出す」とは、新しい用語と以前の用
語との間の固有な関係を見出すことである。その固有な関係を説明し、書きとめなさい。

・これらの用語はあなたの奇妙な型（パターン）によって論理的かつ体験的に繋がられているのだから、
次のように各用語を置き換えることによって興味深い文章ができるだろう： $F=A$ でかつ $A=B$ であるな
らば、 $F=B$ である。この $F=B$ は新しい文である。あるいはもし $F=G$ を含む A で、かつ $A=B$ ならば、
 $F=G$ を含む B である。

・人は置き換えによって、文の形式的な展開の推論に基づく力を発展させ、さまざまな結論に至ることが
できる。それらの結論をあなたのフェルトセンスは受け入れるかもしれないし、受け入れないかもしれな
い。もし受け入れない場合は、あなたのフェルトセンスにもう一度浸ってみて、さらにはっきりさせなけ

ればならない。このように論理と体験の力はあなたの論理を精緻化するのに役立つのである。

- ・これらの指示に必要なだけ繰り返し従って、以前の諸ステップからあなたに必要な用語を導入しなさい。
- ・あなたがまだ使用していない以前の語や句の中には、正式にはなくても、それが等価でありうる主たる用語のあれやこれやにグループ分けできるものもあるだろう。それらを置き換えて、論理的に導出可能な文をあなたはもっと多く作ることができるだろう。このようにしてあなたはあなたの新しい型（パターン）によって生み出される多くの文章を作ることができる。

13. あなたの理論をあなたの分野の外に適用すること

- ・このステップは一休みのステップである。
- ・あなたの用語の中の新しい型（パターン）はモデルとして役に立つかもしれない。その型（パターン）を、一つあるいはそれ以上の大きな分野、例えば芸術、宗教、教育、比喩といった領域に応用してみなさい。
- ・次の形の文を書きなさい。： ...（ある問題の局面）は ...（あなたの型（パターン））に似ている。その文を真とする何かが浮かんでくるのを待ちなさい。あなたが気がついたことを説明する文を書きなさい。
- ・ささやかな話題や出来事であっても、あなたの理論を通せば、新しく面白い仕方理解されるかもしれない。

14. あなたの理論をその分野で拡張し、応用する

- ・ここはあなたの理論をしっかりと展開する場所である。数年かけてもよいだろう。あなたの理論を拡張するために、次のように自問してみよう：次に生じる問いは何だろう？ この理論はどんな次の理解に繋がるだろうか？ あるいは密に関連するはずのどんな要素がまだ足りないだろうか？
- ・あなたが加える新たな用語が更に導出されるために、必要なら本来的な繋がりを書き加えなさい。
- ・新しい用語が繋がれた後で、置き換えによってあなたの他の用語がそれに関して何を語りうるかを検討しなさい。
- ・このようにしてあなたはあなたの理論をさらに次々と拡張できる。
- ・あなたの専門領域においてあなたが説明したいあるいは明確化したい関連領域や観察対象にあなたの理論を適用しなさい。どこにあなたの理論は重要な相違を創り出すだろうか？ その相違を、あなたの理論の諸用語で新たに定義しなさい。

(以上、付表Ⅲ - 1)

付表Ⅲ - 1 に載せた TAE の主なステップを見るとわかるように、TAE それ自体はかなり複雑で綿密な思考法あるいは理論構築法であり、これが何にどのような形で適用できるのかについて、わかりやすく記載されているわけではない。それゆえ、このステップを何にどのように用いるのかについては、かなり自由度が高く、私たちの目的や課題に応じて幅広く活用できるものなのである。

したがって、TAE の具体的な活用については、いわゆる質的研究の方法論だけに限定されるものではないし、もちろん以下に示すようなサイコセラピーの臨床実践の分析だけに用いられるものではない。その点を断ったうえで、しかしこの TAE という方法が——さらに、プロセスモデルで構築された哲学的視野によって用いられるとき——どのような成果をもたらしうるのか、その実例を示そうとするのが、この第Ⅲ部の意図である。

2. パーソンセンタード／フォーカシング指向セラピーにおいて生起するプロセスの理論化——TAE を用いた質的分析から——⁶⁰

(1) 問題

サイコセラピー研究の動向

近年、サイコセラピーの研究には注目すべきいくつかの動向が生じている。ここでは、2008年に英国で出版されたミック・クーパー (Cooper, 2008) の著書、*Essential Research Findings in Counselling and Psychotherapy* (清水・末武監訳『エビデンスにもとづくカウンセリング効果の研究』) から、その主要なものをピックアップしてみる。

第1にあげられるのは、サイコセラピーの分野においていわゆるエビデンスベースト (evidence-based) の動向が浸透してきていることである (APA, 2006 ほか)。どのようにエビデンスを見出すかという点でも、例えば、セラピーを受けた臨床群の効果を統制群や待機群と比較した無作為統制試験 (randomized controlled trials) のデータについて、複数の研究を総合的に検証するメタ分析 (meta analysis) の手法が活用されるなど、その方法論も発展している。このような動向によって、サイコセラピーの効果に実証的な検証の光があてられ、そこから得られたエビデンスがインフォームドコンセントやセラピーの選択において活用されるようになってきている。

こうした動向に関連して第2にあげられるのは、例えば薬理的な治療と比較した場合における、サイコセラピー独自の効果を特定しようとする研究動向である。詳細はクーパーの著書 (特にその第2～3章) を参照してほしいが、例えば軽度から中程度の鬱、不安、強迫、パニックといった症状に対して、また、対人関係や社会的スキルの不全といった種々の問題に対して、(クライアントのニーズや動機づけにもよるが) 薬物療法に比べて相対的にサイコセラピーの方が効果的であることが明らかにされてきている。サイコセラピーに特有の効果やプロセスの特定は、その役割や存在意義にもかかわる問題であるので、今後さらに洗練された手法とともに追求されていくはずである。

さらに第3に、このような研究動向の中で大きな論争となってきたのが、サイコセ

⁶⁰ この章は、末武 (2013) 「パーソンセンタード／フォーカシング指向セラピーにおいて生起するプロセスの理論化の試み——TAE を用いた質的分析から——」 (現代福祉研究 13, 23-45 頁) に大幅な加筆修正をしたものである。

ラピーの立場や方法によってその効果に違いがあるのか、という問題である。これは、実効性格差 (differential effectiveness) 仮説——特定の心理的苦悩に対して、認知行動療法 (CBT) のような特定のセラピーが他のものよりも効力があるという見方——と、ドードー鳥判定 (dodo bird verdict) ⁶¹ 仮説——種々の真正 (bona fide) なサイコセラピーは、効果や効力においてほぼ同等であるという見方——の議論に象徴されるものである。今のところ、どちらの仮説が妥当であるかを示す決定的な証拠は見出されていないが、こうした論争は、従来からサイコセラピーの分野が抱える大きな問題の1つであった、流派間の対立やディスコミュニケーションといった課題を克服するためにも、生産的な方向で議論が進展していくことが望まれる。

実効性格差仮説とドードー鳥判定仮説のいずれの立場を支持するにしても、以上のような研究動向を受けとめるときに、サイコセラピー研究者や実践者に求められるのは、実際のセラピーがクライアントにどのような効果やプロセスをもたらしているのかを絶えず明らかにしていくことであろう。現在でもそれぞれ特色をもつ各種の流派や方法が並存して実践されている状況を考えると、効力があるとされる各セラピーの共通点と差異を明確にしていくことが、この分野のさらなる発展のために必要である。そしてその際に、セラピーの効果を測定しようとする量的な研究のみならず、各セラピーの臨床実践の中で、実際にどのようなことが具体的に生起しているのかを探求するための質的な研究の蓄積があわせて求められていると言えよう (McLeod, 2000 ほか)。

パーソンセンタード/フォーカシング指向セラピーの特質と研究動向

そこでまず、PC/FOT とはどのような特色をもつサイコセラピーであり、これまでにどのようなエビデンスが明らかになっているのかを要約しておく。

PC/FOT は、1940 年代前半にカール・ロジャーズ (Rogers, 1942) によって創始されたサイコセラピーであり、当初は非指示的な方法を重視するセラピーとして誕生した。その後、非指示という用語がセラピストの受身性を強調しているように受け取られたこともあって、ロジャーズはその名称をクライアント中心療法 (Rogers, 1951) に修正し、セラピストの自己一致した、受容的で、共感的な態度を重視するようになった (Rogers, 1957)。

⁶¹ ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』の中で、ドードー鳥が、湖の周りを走るレースを判定して「みんな優勝、全員にごほうびを」と宣言した場面から、各サイコセラピーの効力や実効性はほぼ同程度であるという主張の代名詞として使用されている (Cooper, 2008 清水・末武監訳, 66 頁参照)。

この間、ロジャーズはサイコセラピーの分野における実証研究のパイオニアの1人として研究成果を公表し、研究の方法論の開発にも取り組んだ (Rogers & Diamond, 1954 ほか)。さらにロジャーズらの研究は、セラピーの効果研究にとどまらず、セラピーの中で何が生起しているのかを明らかにしようとするプロセス研究へと進展していった。その中で提案されたのが、クライアントの変化や成長へと向かう過程を概念化したプロセス概念 (process conceptions) (Rogers, 1961) だったが、ここでその理論の中核を担うようになったのがロジャーズの共同研究者ユージーン・ジェンドリンによる体験過程 (experiencing) (Gendlin, 1964) の概念である。この概念を用いた研究や実践によって、クライアントの変化は体験過程——感じられる体験の流れ——の推進・進展によって生起することが明らかになった。しかし同時に、1950～60年代に彼らが取り組んだウィスコニン・プロジェクト——統合失調症患者へのサイコセラピー実践研究——等の研究結果 (Rogers, Gendlin, Kiesler & Truax, 1967) からは、体験過程の水準が深まらない個人にはセラピーの効果が生じにくい、といった課題も浮き彫りになった。こうした課題に応える形で、1970年代以降、ジェンドリンは体験過程の感じられる意味 (フェルトセンス) に焦点をあわせるフォーカシング (Gendlin, 1978/1981) を開発し、現在のフォーカシング指向セラピー (Gendlin, 1996) へと発展していく動向が生じた。また他の研究者や臨床家たちも、体験過程の推進・進展を援助するための種々の体験的な方法を提案するようになり (Greenberg, Rice & Elliott, 1996; Sanders, 2004 ほか)、今日に至っている。こうして展開してきた PC/FOT は現在、世界各地の数多くのセラピストたちによって共有され実践されており、サイコセラピーの主要な1つの形態および方法としてその立場を確立している。

では、このような PC/FOT においては、これまでにどのようなエビデンスが見出されているのだろうか。ここでは、冒頭にあげたクーパー (Cooper, 2008) の著書より、近年明らかにされているそのエビデンスのいくつかをピックアップしてみる。まず、PC/FOT を含むヒューマニスティックなセラピーのメタ分析では、全体的にみて、セラピー前後の平均効果量は Cohen's d ⁶² で 0.99 であり、待機群および統制群との比較では 0.89 だった。このような結果は、CBT や精神力動的セラピーと同程度であり、鬱、トラウマ、統合失調

⁶² 効果量 (effect size) を示すために広く用いられている指標で、背景となっている変量と比較した際の2群間の差の総和を示す数値。約 0.2 で小の効果量、約 0.5 で中の効果量、約 0.8 で大の効果量を示す。

症、心身の健康に関する問題などに有効であることを示唆するエビデンスが得られている (Elliott, Greenberg & Lietaer, 2004)。また、純正 (pure) なパーソンセンタードセラピーに関する 52 の研究データのメタ分析では、統制群との比較で 0.78 の平均効果量があり、フォローアップ時にも効果が維持されていることが見出されている (Elliott, 2007)。特定の心理的問題に焦点をあてると、パーソンセンタードセラピーは他のセラピーに比べて、成人および青少年の軽度あるいは中程度の鬱に最も効力をもつというエビデンスがある (King et al., 2000)。さらに、純正なパーソンセンタードセラピーと、フォーカシングの考えや教示を取り入れたセラピーの比較では、相対的にフォーカシングを活用したセラピーの方が効果が高いこともいくつかの研究から示唆されている (Hendricks, 2002 ほか)。

サイコセラピー研究の方法論の課題

PC/FOT に限らず、現在までのところサイコセラピーの研究は、その実効性のエビデンスを明らかにしようとする効果研究が主流であり、用いられるデータも標準化されたアセスメントツールや客観的な尺度による量的なものが圧倒的に多い。その背景には、純粋に科学的で実証的な真理追究の意図だけでなく、研究資金獲得や医療保険制度の中でより優位なポジションを得ようとする競争原理も働いていると考えられるが、このような量的データを扱う効果研究のみでは、サイコセラピーがもつさまざまな側面に十分な光をあてるのが難しいことも明らかである。

前述した実効性格差仮説とドードー鳥判定仮説の議論の中で明らかになった事実の 1 つは、サイコセラピーの流派間の平均的な差よりも、同じ流派に属するセラピストの腕の違いによる効果の差の方がかなり大きい (Wampold, 2001 ほか) ということである。つまり、PC/FOT の立場からすると、その平均的な効果量を算出して CBT や精神力動的セラピー等と比較することも確かに重要であるが、それとともに、個々のセラピーの中で実際に生起している事象やプロセスを明らかにすることが不可欠であると言えよう。例えば、PC/FOT が成果をあげているときクライアントにはどのようなプロセスやインパクトが生じているのか？ PC/FOT が十分に機能しないのはどのようなときなのか？ さらに、こうした PC/FOT のプロセスは CBT や精神力動的セラピー等と比較するとどのような共通点や差異をもっているのか？ といった問題についての探求である。

翻って日本におけるサイコセラピーの研究動向や方法論を考えてみると、欧米に比べて量的な効果研究の蓄積はそれほど多くはなく、むしろ 1 つのケースの開始から終結までを

記述し、それに考察を加えた事例研究法が主流である。特に、(医療の分野よりも) 心理臨床の領域でその傾向が顕著である。例えば、かつて河合(1986)は、「ひとつの症状について何例かをまとめ、……〔中略〕……普遍的な法則を見出すような論文よりも、ひとつの事例の赤裸々な報告の方が、はるかに実際に“役立つ”(p.291)と述べるなど、サイコセラピー研究における事例研究(特に1事例研究)の意義を主張し、こうした研究の進展を後押しした。確かに、事例研究は現象を抽象化することなくありのままに記述し考察する方法論であり、そのような「事例の赤裸々な報告」は、サイコセラピーが社会的に認められ定着していく時期には、ある意味で必要なものであったと言えるだろう。

しかし、事例研究にも弱点がないわけではない。1つには、かねてより投げかけられてきた疑問であるが、1ケースの分析から明らかになった知見をどの程度一般化することができるか、という問題がある。“個性的なものの中にこそ普遍性がある”といった言い方がされることもあるが、先の河合の発言からは、事例研究によって一般化や普遍化を目指すよりも、実際的な有用性が重視されていたことがわかる。もちろんそうした方向は否定されるべきではないが、しかし、個別性と一般化の間のギャップをどう埋めていくのか、あるいは事例研究をエビデンスベーストの量的研究とどう結びつけていくのか、といった課題は現在も残されたままになっている、と言わざるを得ない。事例研究のもう1つの問題点としては、研究の遂行とプライバシーの尊重のバランスをどうとっていけばよいかという、こちらは時代の推移とともに無視することができなくなっている今日的な課題がある。事例研究は、現象のあるがままの記述という方法的特徴からして、対象者の個人情報やプライバシーに触れざるをえないという側面をもっている。しかし、サイコセラピーという対人援助の営みにおいては、クライアントやその関係者のプライバシーの保護と、事例研究による研究成果の公表のいずれかを選択しなければならない場合、優先されるべきはもちろん前者である。インフォームドコンセントによる信頼の形成や、個人情報の記載にあたって最大限の倫理的な配慮をすることで、人権と研究の両立が図られなくてはならないのは当然であるが、しかしクライアントや関係者の同意が得られない場合は、いかにそのケースの中で重要な出来事が生じたとしても、その事例研究(特にその成果の公表)は断念せざるを得ない。ここには事例研究が必然的に内包している弱点がある。

このように見てくると、サイコセラピー研究においては、これまで行われてきた量的な効果研究とも、ケースをありのままに記述する事例研究とも異なる、第3の研究方法論が求められていると言える。それは、PC/FOTをはじめとしたサイコセラピーの中で実際に

どのようなことが生起しているのかを分析することのできる、しかも事例研究のような個人のプライバシーへの侵襲性を伴わない、新たな研究方法論であり、それは近年発展してきているいわゆる質的研究の中に見出すことができるのではないだろうか。このような観点から、質的研究の方法としてアレンジされている TAE (thinking at the edge) をサイコセラピー研究の中に活用できないかと考えて、筆者はまず、得丸さと子 (智子) 氏との共同研究の形で 1 つのパイロット研究に取り組んだ。以下にその概要と課題を示す。

末武・得丸 (2012) のパイロット研究の成果と課題

末武・得丸 (2012) では、PC/FOT の中で生起する現象の特徴を描き出すことを目的として、セラピスト TAE——サイコセラピー実践を検討するために TAE をアレンジした方法——を用いた質的分析のパイロット研究の成果を報告した。

そのパイロット研究の手順と結果は次のとおりである。研究の目的は、セラピスト TAE⁶³ を用いて PC/FOT の中で生起する現象を質的に分析し、その理論化を試みることだった。そして、「成功した PC/FOT においてはクライアントにどのような変化が生じているのか？」というリサーチクエスチョンによって、筆者がセラピー (カウンセリング) を担当した 6 名のクライアント⁶⁴ との PC/FOT の面接記録をデータとしながら、筆者自身の

⁶³ 「セラピスト TAE」とは、セラピストの臨床体験、すなわちその体験知を研究対象とし、TAE ステップを適用しながらそれを検討する質的分析法である。「セラピスト TAE」の手順は、基本的にはオリジナルの TAE と同様であるが、テーマやリサーチクエスチョンに応じて TAE 実施者 (セラピスト) の事前の準備が必要になる。すなわち、どのような体験に焦点をあてようとするのか、どのような現象を詳細に検討しようとするのか、といったことについての準備であり、必要に応じて面接記録や面接の録音データ等を入念に整理したり振り返ることが大切な事前作業となる。その際に、クライアントや関係者のプライバシーを保護するための倫理的な配慮を行うことも重要である。「セラピスト TAE」のセッションで使用されるデータには、できる限り個人情報をカットした面接記録の抜粋や逐語記録が用いられるべきである。また、「セラピスト TAE」セッションを実施する際に、セラピストとガイドの間で、個人情報についての守秘義務を確認しておくことも必要である。

「セラピスト TAE」は、セラピスト自身が TAE のステップに習熟していれば一人で実施することも可能であるが、そうでない場合は、TAE を熟知したガイドとともに「セラピスト TAE」セッションをもった方が有効に進めることができる。なお、「セラピスト TAE」におけるステップの進行にあたっては、オリジナル TAE を質的分析に適用するために得丸 (2010) が開発した各種のシート (マイセンテンスシート、パターンシート、交差シート等) が活用される。ガイドを立てた「セラピスト TAE」セッションにおいては、これらのシートへの記入をガイドが行えば、TAE 実施者 (セラピスト) は TAE プロセスにより集中することができる。(以上は、末武・得丸 2012 からの抜粋)

⁶⁴ 次のような基準で 6 名のクライアントの臨床ケースが選択された。①真正 (bona fide) な PC/FOT のセラピーであること。つまり、研究のために募集したクライアントを対象とした実験的なセラピーや試行カウンセリングではなく、何らかの主訴や心理的苦悩のためにセラピー

臨床体験についてセラピスト TAE によって質的な分析を試みた。そこから、現象の骨格を表現するためのいくつかのタームが導き出され、次のような理論化を行った。

成功した PC/FOT においてはクライアントに次のような変化が生じる。すなわち、その「律動的個体化 (rhythmic individualizing)」は、「ノイズによる混乱 (dissonant confusions)」が鎮まったときに、「シンボリック閃光 (symbolic gleam)」が繰り返されて「隠喩的な調律 (metaphoric rhyming)」として響き合い、「個人文法的型 (personal grammatical form)」に沿って「未構成な身体的インプライング (pre-constituted bodily implying)」の中へ「姿を為す (emerge itself)」。(末武・得丸, 2012 p.155)

このパイロット研究では、ロジャーズ (Rogers, 1942, 1951, 1961) およびジェンドリン (Gendlin, 1964) のパーソンセンタードセラピーやフォーカシング指向セラピーのプロセスについての理論を拠りどころとしながらも、これまでの PC/FOT において十分に考慮されてきたとは言えない、次のようないくつかの点を重視した理論化の必要性について問題提起を行った。それは、PC/FOT の中で生起する現象やプロセスの理論化において、

1. 個々のクライアントがもつさまざまな特徴や要因を取り入れること
2. 現象に密着した、より詳細な概念化を行うこと
3. 多くの研究者や臨床家が共有できる方法論を開発し、活用すること

といった点を考慮することの重要性である。

第1の点について言うと、これまでの PC/FOT のプロセス理論においては、個々のクライアントがもつさまざまな特徴や要因にあまり関心が払われてこなかった、という問題を指摘した。現在、セラピーの成否を予測する最も大きな要因はクライアントの側の諸要因であることが明らかにされている (Asay & Lambert, 1999 ほか) 中で、クライアントの

を求めて来談したクライアントとの臨床ケースであること。②いわゆる成功したケースであること。客観的な検査や心理尺度等の数量的なデータは取られていないが、セラピーの中でクライアントから主訴や心理的苦悩に改善があったとの具体的な言及がなされた (かつ、その言及がその後否定あるいは訂正されていない) こと、クライアントおよびセラピストの両者にとって満足のいく終結を迎えたこと、クライアントが終結後に同じ機関へ再来談していないこと、をここでの成功の目安とした。③比較的最近行われたものであり、いずれかと言えば短期間で終結したケースであること。今回は主に、過去5年以内にセラピーが開始され、かつ終結しているケースの中から選択された。また、短期間で終結したケースを選んだ理由は、本研究は1つのパイロットスタディとして計画されたので、面接記録等の資料があまりに膨大になるのを避けつつ、同時に PC/FOT のプロセスの特徴が明確に現れていたケースに絞って分析を行うことがベターであると考えられたからである。

さまざまな側面——心理的苦悩のタイプ、ニーズ、社会的背景など——を考慮に入れた理論化が行われなくてはならない、ということである。第2の点では、従来のPC/FOTのプロセス理論では、セラピーを受ける以前の状態像からセラピーを受けた後の状態像についての概念化において、その変化がいずれかと言うと1次元的に——つまり、ネガティブな状態からポジティブな状態への（たとえばロジャーズの「自己不一致で、傷つきやすく、不安な状態」から「十分に機能する人間」への、ジェンドリンによる体験過程の「構造拘束的」な様式から「過程進行中」への）変化として——記述されており、はたしてすべてのあるいは多くのクライアントがセラピー終了後にそのような状態を獲得しているのかについては、当然のことながら疑問が残る、ということだった。そこで、PC/FOTの中で生じる多様で複雑なプロセスについて、十分な結果がもたらされなかったケースや中断（ドロップアウト）のケースなどを含めて、現象に密着した詳細な概念化を行うことが求められている点を指摘した。そして第3には、ロジャーズやジェンドリンは主にセラピーの録音記録を聴き返すことを通して理論をつくり上げてきたが、その理論化は彼らのすぐれた知性や感性によるところが大きく、多くの人々が共有できるような具体的な方法論があったわけではなかった、という点を問題として取り上げた。そしてそこから、セラピーの中で生起する事象やプロセスをより深く詳細に分析することができる方法論の開発もまた重要な課題であることが確認された。

パイロット研究では、上記の3つの課題のうち、第3の「多くの研究者や臨床家が共有できる方法論を開発し、活用すること」については、共同研究者の得丸さと子（智子）氏の協力を得てセラピスト TAE という新たな方法論の適用可能性が確認できたことによって、ある程度達成されたと考えている（このパイロット研究以降に報告された TAE を用いたセラピストの体験分析の研究については、高橋（2012）などがある）。

しかしながら、上記の第1および第2の課題については、先のパイロット研究の中で十分に取り扱われ、達成されたわけではなかった。なぜならその研究は、サイコセラピーの分析にセラピスト TAE を用いるパイロットスタディ——先行研究がほとんどなく、新たな領域を開いていくための試験的で先導的な研究——として遂行されたので、データとして用いたケースが6つと比較的少なく、またどれもいわゆる成功ケースであったために、さまざまなケースの中に見られる多様なクライアント要因や、複雑なプロセスを十分に理論化の中に取り入れることができなかったからである。

末武・得丸（2012）では、残された課題について次のように記述した。「今回のパイロ

ット研究から得られた結果を起点として、今後さまざまな研究が積み重ねられる必要があることは言うまでもない。…（中略）…今回データとして取り上げられなかった数多くのケースについても分析を加えることが必要である。長期間のセラピーを要したケースや、十分な成功に至らなかったケース、中断（ドロップアウト）ケース、明らかな失敗のケース等をデータに加えることで、PC/FOT が十分に機能することができない場合の諸要因——クライアント要因、関係や相互作用の要因、PC/FOT の方法上の要因等——を特定していくことも求められる。そうすることによって、これまで1次元的に描かれがちであったサイコセラピーのプロセスを、より複雑で多様なものとしてとらえ直すことが可能になるだろう。」(pp. 159-160)

研究の意図

そこでこの研究では、PC/FOT の多様なケースに関するデータを、先のパイロット研究（末武・得丸, 2012）で得られた理論に組み込むことによって、PC/FOT で生起するプロセスについてさらに統合的な理論化を試みることにする。

その作業の前に、こうした PC/FOT で生起するプロセスの理論化がなぜ必要であるのかを、サイコセラピーの研究や実践をめぐるもう少し広い文脈から考えてみたい。

1 つには、最近の関連する重要な研究の方向性として、サイコセラピーにはどのような独自の効果があるのかを特定していこうとする研究動向がある。例えば米国の定評ある消費者雑誌コンシューマーレポートは、メンタルヘルスの専門的な援助を受けた経験をもつ 4000 名を超える読者に調査を行い、その結果を報告している (*Consumer Reports*, 1995)。調査対象者は、鬱、不安、パニック、恐怖といった症状に悩んだり、家族や仕事に関する問題、ストレス関連問題、性的な問題、アルコールや薬物への依存などの問題を抱えて専門家に援助を求めた経験のある人々だった。調査の結果、大半の人々は自分が受けた援助によって当初の困難な状態を改善することができていたが、特にメンタルヘルスの専門家に一定期間のサイコセラピーを受けた人たちの満足度が高かった。さらにコンシューマーレポートは次のように指摘している。「私たちはまた、[サイコセラピーを受けた] 人々が 3 つの明確な仕方でよくなっていることを見出したが、この 3 種類の改善はどれも、治療が [早期に終結した場合よりも、継続して] 追加されることによって増大していた。第 1 にセラピーは、人々が治療を受けるために抱えてきた問題を緩和していた。第 2 にセラピーは、人々が他者と関係をもち、仕事で生産的になり、日々のストレスに対処するための

能力を改善し、よりよく機能できるように援助していた。さらにセラピーは、“人間的成長 (personal growth)” と呼べるようなものを高めていた。セラピーを受けた人々は、自信や自尊心をより強くもつようになり、自分自身をよりよく理解するようになり、人生をより楽しむようになっていた」(p.739、〔 〕内は筆者による補足)。この指摘は、サイコセラピーには、

1. 心理的苦悩の緩和
2. 心理社会的機能の改善
3. 人間的成長の促進

といった特有の効果があることを示すものであり、特に2と3は、薬物療法などとは異なるサイコセラピーに独自の特徴であると言えよう。これ以外にもサイコセラピーがもつ独自の効果を示唆する研究は数多くあり (King et al., 2000; Simpson et al., 2000; Hansen et al., 2002; Elkin et al., 2006 ほか)、その固有の特徴が明らかにされつつある。

しかしその一方で、サイコセラピーにおいて生じるどのようなプロセスがクライアントに変化や効果をもたらすのかといった側面については、これまで十分な研究や議論が行われてきたとは言えない。一例をあげると、近年の認知療法に関する研究の中で、非機能的な思考の修正がもたらされる以前に抑鬱などの気分の改善が生起するようなケースが報告されていて、思考修正が気分の変容をもたらすというよりも、むしろ気分の改善が思考の変容を導いているのではないかと指摘がなされたり、思考修正と気分の改善の間には未知の第3の変数が介在しているのではないかと議論が生じている (Burns & Spangler, 2001; Cooper, 2008 邦訳 pp.177-178 参照)。認知療法をはじめとする認知行動療法 (CBT) の研究においては、セラピストが行う介入の効果を実証しようとする研究が主流のため、ある特定の心理的苦悩をもつすべてのクライアントに対して特定の介入が効果を有する、という仮定のもとにセラピーの効果とプロセスを明らかにしようとする傾向が強い。しかし当然のことながら、個々のクライアントの動きや変化を見ていくと、仮定どおりには効果やプロセスが生じないケースも少なからずある。第3の変数に関する議論は、思考修正が先か、気分の改善が先か、はたまた別の第3の変数が先に生じているのかという議論であると同時に、クライアントの心理的苦悩とセラピストの介入だけでないさまざまな側面——クライアントにセラピーがどのように体験されているのかといった質的側面や、セラピストとクライアントの相互作用など——を考慮したサイコセラピーのプロセス研究が必要であることを示唆するものでもある。とりわけ CBT を中心とした近年の

エビデンスベーストのサイコセラピー研究に付加されなければならないのは、個々のクライアントによって複雑かつ微妙に異なる、セラピー中での体験や動きについてのいわゆるクライアント中心 (Rogers, 1951) の観点であり、さらにはクライアントとセラピストの双方に具体的に生起している一人称のプロセス (Gendlin, 2009) を研究の中に取り入れていくことであろう。

翻って、サイコセラピーで生起するプロセスをなぜ理論化することが必要であるのかを PC/FOT の立場から考えてみると、次のようなことが言える。それは、これまでの PC/FOT のプロセス理論には、事実として生起している現象そのものの記述と、サイコセラピーの中で向かうべきであると考えられる方向性についての概念化が複雑に混ざり合っており、そのことから派生している問題があるのではないか、という点である。ここでは、前者を「現象としてのプロセス」、後者を「当為としてのプロセス」と呼ぶことにする。サイコセラピーのプロセス理論は、その実証性や公共性からすると、本来的にあくまでも「現象としてのプロセス」をベースにして組み立てられなくてはならないはずである。ロジャーズが繰り返し述べていたように、「事実は常に味方である」という原則はサイコセラピー研究においても重要な基盤であるからである。もちろんロジャーズ自身、彼のプロセス理論を概念化するにあたって、「現象としてのプロセス」を重視し、その記述から出発したことは間違いない。例えば、ロジャーズによる初期のクライアントセンタードセラピー (非指示的カウンセリング) のプロセスについての記述を要約的に示すと、

1. 個人が援助を求めて来談する
2. 面接場面は明確に設定される
3. カウンセラーは問題に関する感情を自由に表現するように促進する
4. カウンセラーは否定的な感情を受容し、理解し、明確化する
5. (かすかに、ためらいながらも) 成長へと向かう肯定的な衝動が表現される
6. カウンセラーは否定的な感情と同様に肯定的な感情の表現も受容し理解する
7. クライアントに自己洞察、自己理解、自己受容が生じる
8. 可能性のある選択や行為の方向が明確化される
9. 意味のある肯定的な行為がはじまる
10. より完全で正確な自己洞察と自己理解が発展する
11. クライアントの肯定的な行為がますます統合される

12. クライアントには援助を求める気持が減少し、関係の終結が認識される

と表現されていた (Rogers, 1942)。この記述は、いくぶん素朴ではあるが、当時のロジャーズが体験し観察していたサイコセラピー (カウンセリング) の中で生起する「現象としてのプロセス」が描写されたものであると言えよう。もちろん、当時のケースの中にも、このような段階どおりには進まなかったクライアントは存在していただろうし、最後の段階まで至らずに途中で中断したケースもあっただろう。しかし、このプロセス論には「当為としてのプロセス」の考えがそれほど入り込んでいないため、途中までしか進展しなかったケースに対して——特にクライアントの成長や自分と向き合う態度などについて——いわゆる良し・悪しや、望ましい・望ましくないを判断するような指標としてのニュアンスはあまりない。しかし、その後のロジャーズは、自己理論 (Rogers, 1951) やセラピーの必要十分条件 (Rogers, 1957) などの理論化を経て、サイコセラピーがクライアントにもたらす変化やプロセスについてかなり独自の概念化を行うようになった。例えば、1961年に出版された *On Becoming a Person* (『ロジャーズが語る自己実現の道』) の中で彼は、サイコセラピーにおける確かな方向性として、

1. 潜在的な自己 (potential self) を体験する
2. 情緒的関係を十分に体験する
3. 自分自身を好きになる
4. パーソナリティの中核は肯定的なものであるという発見をする
5. 自らの生命体となり、自らの体験になる

という記述を行っている。そしてこのような方向性の終極点にあるような人間のあり方を、「十分に機能する人間 (fully functioning person)」と呼び、サイコセラピーがもたらしうる理想的な人間像について議論を展開した。ロジャーズにとっては、サイコセラピー——特にクライアント (パーソン) センタードセラピー——がもたらすユニークな方向性をそれまでに表現されなかったような仕方でも記述し、人間の変容の可能性を追求しようとする意図があったのだろう。確かに上述したコンシューマーレポートの指摘にもあるように、サイコセラピーには心理的苦悩を緩和するという治療的な効果だけでなく、クライアントの人間的成長を促進するというようなポジティブな働きがあり、ロジャーズが描き出した

方向性はサイコセラピーのそうした側面に光をあてるものとして評価されるべきだろう。しかし反面では、こうしたいずれかと言えばヒューマニスティックな概念化は、「当為としてのプロセス」を色濃く包含するものとなり、はたして多くのクライアントがセラピー終結時にそうした状態を獲得しているのか、また、そのような状態に至ることができないクライアントをどのように受け止めればよいのか、といった疑問を生むことにもなってしまった。

他方ジェンドリンは、ロジャーズの理論に内在している内容モデル——そこに当為的な内容も含まれていた——を批判しつつ、独自のプロセスについての理論的観点から、サイコセラピーにおいて生じる変化を次のような焦点づけ（フォーカシング）の4つの位相（four phases of focusing）として記述した（Gendlin, 1964）。

1. 直接のレファレンス（direct reference フォーカシングの位相Ⅰ）
——概念的にはおぼろげだが、体験する感じとしてははっきりしている、ある感じられた意味への直接の照合
2. ひらけ（unfolding フォーカシングの位相Ⅱ）
——いくつかの局面のひらけと象徴化
3. 全面的な適用（global application フォーカシングの位相Ⅲ）
——全面的適用がどっと押し寄せてくること
4. レファレントの移動（referent movement フォーカシングの位相Ⅳ）
——はじめに感じられていたレファレントが移動し、かくて過程は再び位相のⅠから始まるのが可能となる

このジェンドリンのフォーカシングについての概念化は、位相のⅣからまたⅠへと循環するという記述からも理解できるように、あくまでも「現象としてのプロセス」を表現したものであり、「当為としてのプロセス」は強くは含まれていないと言える。ただ、この理論（「人格変化の一理論」）の難点をあえて指摘すると、そこでは人格変化が生起する際の2つの観察事実について、フォーカシングを中核とする感情のプロセスと、パーソナルな関係の重要性に分けて論じてあるため、フォーカシングが生起するためにはどのようなパーソナルな関係性や相互作用が求められるのかについて読み取りにくく、このようなフォーカシングの位相が生起しない（あるいは生起しにくい）ケースにどのように対応すれば

よいのかが明確でないと言える。そこで、フォーカシングのプロセスだけを重視してしまうと、フォーカシングがうまく進展しないクライアントの動きをネガティブなものとして見なしてしまうような当為的な判断が入り混じる可能性もあるだろう。

さらに、上記のようなプロセス理論に基づいて開発されたプロセススケール (Walker, Rablen & Rogers, 1960) や体験過程スケール (Klein, Mathieu, Gendlin & Kiesler, 1969) の研究からは、体験過程の水準の深化がサイコセラピーのよりよい結果をもたらす要因であるという重要な研究知見が導かれた一方で、体験過程の水準が深まらないクライアントにはセラピーの効果が生じにくいといった PC/FOT にとって最も困難なアポリアも同時に浮き彫りになった。言い換えると、PC/FOT のプロセス理論の中に「当為としてのプロセス」が包含されることによって、その当為の方向性へと向かうことが難しいクライアントにセラピストはどのようにかわり、どのようなプロセスが生じているのかが逆に見えにくくなってしまった、ということである。

末武・得丸 (2012) でも指摘したように、ロジャーズやジェンドリンによるプロセス研究以降、PC/FOT の実証研究は主に効果研究、そしてフォーカシングなど特定の手法や、カップルセラピーや家族セラピーなどへの適用に関する研究が中心であり、PC/FOT に特徴的なプロセスについての研究はあまり行われていない (Cooper, Watson & Hölldampf, 2010 ほかを参照)。しかしここまでの検討から明らかなように、PC/FOT のプロセスを現象そのものに立ち返って、しかも、個々のクライアントがもつさまざまな要因を取り入れながら詳細な概念化を行うことは、現在においても、そしてまた PC/FOT の今後を考えるためにも必要なものであると言えよう。

そこで以下では、筆者自身のセラピスト体験から PC/FOT の多様なケースをピックアップし、PC/FOT で生起する「現象としてのプロセス」に関する統合的な理論化を試みることにする。

(2) 目的

本研究の目的は、PC/FOT のさまざまなケースに生起した現象を質的に分析し、そこから得られた知見を末武・得丸 (2012) で導かれた理論の中に組み込むことによって、PC/FOT で生起するプロセスについてさらに統合的な理論化を試みることである。

(3) 方法

データの選択

本研究の中でデータとして用いたのは、PC/FOT のセラピストである筆者による、計 25 名のクライアントとのセラピーで書き記された面接記録とセラピー体験の振り返りである。これらのセラピーはすべて真正 (bona fide) な——つまり、マニュアル化された実験的なセラピーや、クライアントをボランティアとして募った試行カウンセリングなどではない——PC/FOT として実施されたものであり、クライアントはいずれも何らかの主訴や心理的苦悩のためにセラピーを求めて来談した人たちである。筆者は PC/FOT のセラピスト (カウンセラー) として約 25 年の臨床経験をもち、その間に数多くのクライアントとのセラピー面接を行ってきた。その中から今回のデータとしては、過去 5 年以内にセラピーが終結もしくは中断したケースのうち、セラピーのプロセスや進展をその特徴によって 6 つのカテゴリーに分け、25 ケースをピックアップした。⁶⁵

データのカテゴリー分け

以下にデータのカテゴリー分けの手続きと、各カテゴリー内のデータの内訳を示す。

A 群 (成功群) : まず、前回のパイロット研究でデータとしてピックアップした 6 名のクライアントとの——比較的短期間で、クライアントとセラピストの双方にとって満足のいく終結を迎えた——ケースを本研究のデータとしても用いた。本研究ではこの 6 ケースを「A 群 (成功群)」とした。6 名の内訳は、男性 2 名、女性 4 名で、初回来談時の年齢は 20 歳代 3 名、40 歳代、50 歳代、60 歳代各 1 名であった (平均約 39 歳)。セラピーセッション数は 3 回~12 回 (平均約 6 回) であり、セラピー期間は 1 ヶ月弱~11 ヶ月 (平均約 4 ヶ月) だった。主訴あるいは心理的苦悩は、不安、アイデンティティ関連問題、ストレス関連問題、家族問題、親子間の問題、夫婦間の問題等であった。精神的な不調で医療機関を受診した経験をもつ人は 6 名中 1 名だった。なお、前回の研究では触れなかったが、この 6 名は最近のサイコセラピー研究の中で注目されている現象としての「突然の進展 (sudden gain)」(Andrusyna et al, 2006; Cooper, 2008 邦訳 p.35 参照) ——あるセラピ

⁶⁵ 過去 5 年以内のケースに絞ったのは、5 年間のケース記録の保管を定めている臨床心理士の倫理綱領によるものである。ただし、今回の 25 ケースの中には長期間セラピー面接を実施したものがあり、セラピーの開始時が過去 5 年より以前のケースがいくつか含まれている。

セッションと次のセッションの1回のインターバル間にクライアントが大きな肯定的変化を示すこと——を体験していた可能性が高いと考えられる。

B 群（準成功群）：次に、一定の期間セラピーを継続し終結に至ったケースで、突然の進展はなかった可能性が高く、セラピーへの満足度はA群ほどは高くないと推定されるが、ある程度の満足が表明され、合意によって終結へと至った5名のクライアントを「B群（準成功群）」とした。5名の内訳は、男性3名、女性2名で、初回来談時の年齢は20歳代2名、30歳代3名であった（平均約30歳）。セラピーセッション数は3回～22回（平均約10回）であり、セラピー期間は約1ヵ月～15ヵ月（平均約9ヵ月）だった。主訴あるいは心理的苦悩は、抑鬱、情動のコントロール、ストレス関連問題、死別・離別の問題、親子間の問題等であった。精神的な不調で医療機関を受診した経験をもつ人は5名中4名（うち1名が入院経験あり）だった。

C 群（長期継続群）：2年以上にわたり、かつ50回を超えてセラピー面接を継続して行ったケースであり、さまざまな経過をたどりながらも、最終的にはクライアントからの申し出と合意によって終結に至った2名のクライアントのケースを「C群（長期継続群）」とした⁶⁶。内訳は男性1名、女性1名で、初回来談時の年齢は1名が10歳代後半、1名が20歳代前半だった（平均約21歳）。セラピーセッション数は2ケースの平均が約61回、セラピー期間は2ケースの平均で約3年2ヵ月だった。主訴はいずれも、家庭環境の問題を背景とした心理的苦悩（抑鬱および解離性の問題）で、2名ともその症状の治療のために医療機関を受診した経験をもち、うち1名は心理的なセラピー（カウンセリング）の実施中にも並行して医学的な治療を受け続けていた。

D 群（期間限定群）：クライアントがもつ何らかの理由（職場復帰や部署移動、転勤など）で、セラピーの回数や期間が限定されていて、その回数や期間に至って終結になった4ケースを「D群（期間限定群）」とした。内訳は男性3名、女性1名で、初回来談時の年齢は4名全員が30歳代だった（平均約36歳）。セラピーセッション数は4回～15回（平均約9回）であり、セラピー期間は約1ヵ月～7ヵ月（平均約4ヵ月）だった。このD群のクライアントはいずれも常勤の職についており、主訴あるいは心理的苦悩は職場関連の問題で、休職状態からの職場復帰、部署移動や転勤のためのキャリアアイデンティティの

⁶⁶ C群（長期継続群）のケース数が2名と他の群よりも少ないのは、この群にカテゴライズされるクライアントは断続的にセラピーが再開される可能性が高く、研究のデータとして用いることは臨床的にも倫理的にも好ましくないと考えられたので、セラピーが完全に終結していて、再開される可能性はほぼないと考えられた2名のデータのみを使用した。

再確認などであった。精神的な不調で医療機関を受診した経験をもつ人は5名中1名だった。

E 群 (中断群) : ある程度セラピーを継続しながら、ある回のセラピー面接がキャンセルされて、その後のセラピーが途絶えてしまったいわゆるドロップアウトのケースを、ここでは「E 群 (中断群)」として、その典型例と考えられる4ケースをピックアップした。その内訳は男性1名、女性3名で、初回来談時の年齢は20歳代、30歳代、40歳代、50歳代各1名だった (平均約38歳)。セラピーセッション数は4回~20回 (平均約9回) であり、セラピー期間は約2ヵ月~6ヵ月 (平均約4ヵ月) だった。主訴あるいは心理的苦悩は、情動のコントロール、カップル間の問題、パーソナリティ関連問題等であった。精神的な不調で医療機関を受診した経験をもつ人は4名中2名だった。

F 群 (その他) : その他、上記のA~E群にはカテゴライズされないが、統合的な理論化のためのデータとして必要だと思われた4ケースを「F 群 (その他)」としてピックアップした。その主訴あるいは心理的苦悩は、DV問題や修復困難な夫婦関係などのカップルおよび家族問題だった。内訳は、最初の来談者は男性2名、女性2名で、初回来談時の年齢は30歳代3名、40歳代1名だった (平均約36歳) セラピーセッション数は2回~7回 (平均約3回) であり、セラピー期間は約1ヵ月~5ヶ月 (平均約2ヵ月) だった。この4ケースのうち3ケースでは、個人セラピーとあわせてカップルあるいは家族セラピーを行った。精神的な不調で医療機関を受診した経験をもつ人 (あるいは家族) はいなかったが、4ケース中2ケースでは家族が何らかの相談援助機関への来談経験をもっていた。

以上が本研究においてデータとして取り上げた6つのカテゴリーによる25ケースである。

分析方法

データの分析方法としては、末武・得丸 (2012) のパイロット研究において用いた TAE (Gendlin, 2004; Gendlin & Hendricks, 2004; 得丸 2010) ——特にセラピストの体験分析のために開発されたセラピスト TAE——を今回も活用した。ただし、今回はガイドを立てたセラピスト TAE ではなく、筆者が個人で TAE を行いながらデータと筆者自身の体験を分析した。なお今回の分析方法は、セラピストの体験を TAE で分析するという点ではセラピスト TAE と呼べるが、基本的には TAE を質的研究に適用する方法と同一の手順に基づいているので、以下では煩雑さを避けるためにセラピスト TAE ではなく、TAE とい

う表記を用いる。

また、今回の分析においても TAE を質的研究に適用するために得丸 (2010) が開発した各種のシート (マイセンテンスシート、パターンシート、交差シート) を用いて質的分析を行った。

分析の手続き

今回の分析は、2012 年 7 月～11 月にかけて筆者の研究室で行った。リサーチクエスションは、「PC/FOT の中でクライアントに生起している体験とそれと相互作用するセラピストのあり様」であった。

まず末武・得丸 (2012) のパイロット研究で取り上げた A 群 (成功群) についてデータ

⁶⁷ 末武・得丸 (2012) のパイロット研究における、セラピスト TAE による分析過程の概要を以下に示す。

パート I : ここでの作業の中心は、データの全体から IU (implicit understanding) (Gendlin, 2009b) のフェルトセンスを形成し、その IU をその後の分析の中核として活用できるように直接照合体 (DR) としてジェル化させることである。具体的には、今回のリサーチクエスション「成功した PC/FOT においてはクライアントにどのような変化が生じているのか？」を最初のテーマとして設定し、TAE のステップ 1～5 の手順に従って、マイセンテンスへと文章化していった。最終的に得られたマイセンテンスは、「**まだらぎこちなく生起し始める、その人そのものの動き**」であった。TAE を質的研究に用いるときにマイセンテンスとして活用される文章は、研究そのものを力強く推進していく揺るぎなさや、現象の細部の豊かさをすくい取ることができるしなやかさをもつことが望ましいと考えられるが、このマイセンテンスはそうした条件を満たしていると考えられた。

パート II : 次に、再度データの全体を見直し、マイセンテンスを手がかりとしてリサーチクエスション (テーマ) の実例を選び出しながら、TAE のステップ 6～7 に従って、その実例の中に暗在しているパターンを文章化していった。同様にして、ケースの 2～6 についても、その実例からパターンが抽出され、全体で 6 つのパターンが抽出された。さらに、TAE のステップ 8～9 に従って以上の 6 つのパターンをそれぞれ交差させ (P1×P2、P1×P3、……P6×P5)、計 30 の交差によるパターンが生成された。上記の 6 パターンとあわせて、計 36 のパターンが得られた。

パート III : ここまでの作業を踏まえて、TAE の 10 以降のステップによる作業を行うために、まず理論構築のための暫定的なタームが (上記の 36 パターンの中に含まれている 100 近い語句の中から) 選定された (A : 「片鱗的な出現」、B : 「個人文法的型」、C : 「未構成な身体的インプライング」)。そして、各ターム間の相互関係を、A=B、B=C、C=A、B=A、C=B、A=C、さらには、A は本来 B、B は本来 C、……A は本来 C、と相互関係を見ていくステップによって、新しいタームが生み出されていった。以下に、A は本来 B の相互関係を見る作業から「律動的個体化」という新用語が生成された際のプロセスを示す。

<ターム間の相互関係を見る作業の抜粋>

A は本来 B : 「片鱗的な出現」は本来「個人文法的型」である。

(メモ) 「片鱗的な出現」のあり様は、そもそもその個人本来のものである。個人本来というのは、個人が自分の心身の機能を十分に活用して作り上げてきたもの。そういう意味での個人本来のもの。十分に機能する個、機能する本来的個、本来的個の律動、律動的機能、機能

ームの中の「シンボリックな閃光」は、「シンボリックな閃光」に修正された。またセラピストのあり様として「混乱の鎮静化」と「隠喩的調律への推進」が追加された。

次にA群とは——セラピーの結果としても、生じたプロセスにおいても——最も対照的であると考えられたE群（中断群）について焦点を当てて分析を行った。その後、B群（準成功群）、C群（長期継続群）、D群（期間限定群）、F群（その他）の順でそれぞれ分析を行った。

分析の作業としては、まず各ケースの面接記録を読み返し、IPA（解釈学的現象学的分析、Smith & Osborn, 2004; 神戸・末武, 2011）の手法を活用して、各ケースのプロセスに特徴的に現れているテーマをピックアップした。そして群ごとにテーマをマイセンテンスシートに書き入れ、TAEのパートI（ステップ1～5）の作業を行った。次にパートIIとして、再度データを見直し、マイセンテンスを手がかりとしてリサーチクエスションの実例を選び出しながら、TAEのステップ6～7に従って、その実例の中に暗在しているパターンを文章化していった（E群で10のパターンが抽出された。また、B群で6、C群で12、D群で8、F群で4のパターンがそれぞれ抽出された）。さらに、TAEのステップ8～9に従って、各パターンをそれぞれ交差させた。（例えばE群では90パターンが交差によって生成された）。さらにパートIIIとして、各群の暫定的なタームを選定し、TAEのステップ10～11によって最終的なタームが生成され、それらのタームを用いてA群のデータから導かれた先のパイロット研究におけるタームとの統合化を試みた。⁶⁸

的律動、律動的個、個過程、個律動、個機能、個発働、律動的個性化、律動的個体化、→
新用語：「律動的個体化」

このような作業を通して、暫定的なタームから新しいタームが生成され（O：「姿を為す」、P：「律動的個体化」、Q：「シンボリックな閃光」、さらにこれらのターム間の相互連結（OをPとQから定義する、PをOとQから定義する、……）を行う中で不足しているタームがおぎなわれ（R：「ノイズによる混乱」、S：「個人文法的型」、T：「未構成な身体的インプライング」）、理論を構築するための基本的なターム（概念）が選定された（最終的に「シンボリックな閃光」は「シンボリックな閃光」と「隠喩的調律」という2つのタームに分けられた）。

<選定されたターム>：「律動的個体化」「シンボリックな閃光」「隠喩的な調律」「ノイズによる混乱」「個人文法的型」「未構成な身体的インプライング」「姿を為す」

⁶⁸ この研究の手続きについては、先のパイロット研究（末武・得丸, 2012）を行った際に、法政大学大学院人間社会研究科研究倫理審査委員会へ審査免除を申請し、承認されている。ここで言う審査免除の申請とは、個人情報の開示を伴わないために、インフォームドコンセント等の手続きを踏む必要がないことの確認の申請である。

なお、本論文ではクライアントの個人情報の保護のためにマイセンテンスシートやパターンシートを掲載することは控えた。これらの例示については、末武・得丸（2012）および、末武（2013）「パーソンセンタード/フォーカシング指向セラピーにおいて生起するプロセスの理論化の試み——TAEを用いた質的分析から——」（現代福祉研究 13, 23-45 頁）を参照されたい。

(4) 結果と考察

TAE の分析から導き出されたターム

A 群 (成功群) のデータの確認から得られたタームは、先のパイロット研究の分析で選定されたものとほぼ同じの、「律動的个体化」「ノイズによる混乱」「シンボリックな閃光 (symbolic gleam)」⁶⁹「隠喩的な調律 (metaphoric attunement)」⁷⁰「個人文法的型」「未構成な身体的インプライング」「姿を為す」だった。また、セラピストのあり様として「混乱の鎮静化」「隠喩的調律への推進」が追加された。

次に分析を行った E 群 (中断群) からは、「未構成な身体的インプライング」「歪形 (デフォルメ) された構造 (deformed structure)」「反復する非律動的ヴァージョニング (repetitional nonrhythmic versioning)」「歪形をもたらす関係への怖れと憎悪」「歪形をもたらさない関係の希求」「スロット化されている自身の芯 (slotted core of self)」「脆弱な閃光 (fragile gleam)」「引き裂く／引き裂かれる」、またセラピストのあり様として「(反復する非律動的ヴァージョニングへの) 共感的な響応 (empathic resonating)」⁷¹「歪形をもたらさない関係の提供」「身を引く」というタームが導かれた。

以下、B、C、D、F 群から得られたタームから、他の群と重複するものを除いた主要なものを示す。

B 群 (準成功群) : 「反復と反復の間にもたらされる停止」「微かなシンボリックな閃光」「徐々に蓄積される身体的レジストリ (bodily registry)」、セラピストのあり様 : 「治療的停止 (therapeutic stoppage)」「安全な相互作用の提供」。

C 群 (長期継続群) : 「反復しつつ姿を変える非律動的ヴァージョニング」「歪形をもたらす関係による傷つき」「傷つけられない関係の希求」「明滅するシンボリックな閃光 (glimmering symbolic gleam)」「同行者からの巣立ち」、セラピストのあり様 : 「(反復しつつ姿を変える非律動的ヴァージョニングへの) 共感的響応」「安全な同行者」。

D 群 (期間限定群) : 「混乱の鎮静化の不十分さ」「希求と焦燥」、セラピストのあり様 :

⁶⁹ 「シンボリックな閃光」は、‘symbolic flashing’ から ‘symbolic gleam’ に修正した (プロセスモデル第八章における、ジェンドリンの「フラッシュモデル」に対する批判を受けて)。

⁷⁰ 「隠喩的な調律」は、‘metaphoric rhyming’ から ‘metaphoric attunement’ に修正した。

⁷¹ はじめは「響応 (responsive resonating)」としていたが、「共感的 (な) 響応 (empathic resonating)」に修正した。

「ニーズの同定と限界の伝達」。

F群（その他）：「差し迫った崖」「取り返しのつかない事態を修復しようとする」、セラピストのあり様：「混乱の鎮静化」。

タームの連結による理論化の試み

以上の6カテゴリー（25ケース）についてのTAEによる質的分析から導かれたタームを用いて、PC/FOTのプロセスの理論化を試みる。

ここでは図式的に、プロセスを下記の5つの様相に分けて概念化を行うことにする。5つの様相に分けた理由は、今回の25ケースにおけるセラピーの進行とプロセスを説明するためには、このような5つの段階が必要だった、ということである。

様相Ⅰ：反復する非律動的なヴァージョニングへの共感的響応

様相Ⅱ：混乱の鎮静化

様相Ⅲ：シンボリックな閃光の発現

様相Ⅳ：隠喩的な調律

様相Ⅴ：律動的個体化が個人文法的型に沿って姿を為す

様相Ⅰ：反復する非律動的なヴァージョニングへの共感的響応

まず今回の分析結果から、すべてのカテゴリーに共通していたタームが、**未構成な身体的インプライング**である。これは生命体が生きていく原動力でもあり、先へと開かれている可能性でもある何かである。サイコセラピーの体験や現象もまた、まだ明確な形としては顕在化していないこうした未構成のインプライングに導かれて先へと進んでいく（プロセスモデルの「インプライングの中への生起（occurring into implying）」を参照）。

ただし、何らかの主訴や心理的苦悩を抱える個々のクライアントにとっては、**反復する非律動的ヴァージョニング**によって未構成のインプライングの意味や可能性が見出されにくい状態にあることが多い。ヴァージョニングとは、ある症状や思考、行為などの決まったヴァージョンが繰り返し現れること（プロセスモデル第Ⅶ章を参照、プロセスモデルでは直接このような意味では使用されないが、ここではⅦ的な病理としてのヴァージョニングの連鎖をこのようにとらえる）であり、クライアント自身にはそれが固定化され変容困難な**歪形（デフォルメ）された構造**のように体験されていることも少なくない。この構

造は、変わりにくく動かしがたいものとしてクライアント自身にもセラピストにも感じられ体験される（いわゆる「構造拘束的（structure-bound）」な体験である）が、その実相的な様式は非律動的な反復である。非律動的なものとは、生起が断片的かつバラバラで非秩序的なため、生命体の心身の機能を十全に推進することができない動きのことであり、そのために、一見固定化された構造のように見える場合（例えば儀式的で強迫的な思考や行為など）でも、本人および（あるいは）周囲に混乱や不全感をもたらし続ける。セラピストは、その反復する非律動的なヴァージョニングに**共感的に響応**する——それを傾聴する、それに触れる、それをなぞる、それを感じてみる、それに共振する、それに共感する、それに応答する…… ———— ことを試みるが、その共感的響応がどの程度可能であり、クライアントの未構成な身体的インプライングに律動的な方向でのインパクトをもたらさうかの見極めによって、サイコセラピーが継続されるかどうか判断される。ここで言う共感的響応とは、クライアントの非律動的なヴァージョニングにできる限り波長を合わせつつ反応しながらも、セラピストにおいては律動性や秩序を失わないような相互作用のあり様のことである。

パーソナリティや対人関係の様式などに深い問題を抱えるクライアントとの間にもセラピーが継続されることは少なくないが、こうしたクライアントは背景として、自分の中に歪形された構造を形成させた（養育者をはじめとした）**人間関係への葛藤や憎悪**を抱えていることがままあり、セラピストとの関係の中にもそうした**体験が再現される怖れ**を抱くことが多い。こうしたクライアントは**自分の芯**になるような何かを探そうとするが、歪形された構造と非律動的なヴァージョニングに圧倒され、その**芯はスロット化**されている——実体として存在しない——（プロセスモデル第Ⅶ章参照、プロセスモデルでは「スロット化（slotted）」もこのような意味では使用されていないが、クライアントの「芯」は欠如ではなくてインプラインされているものなので、ここではスロット化という言葉を使う）ように見える。セラピストは、クライアントの中に**歪形をもたらさない関係の希求**があることを理解し、そのような関係を提供しようとする。セラピストによる響応と**安全な相互作用の提供**によってセラピー関係が次第に安定していく場合もあれば、満足と不満足、安心と不信などが反転しながら体験され、シンボリックな閃光（何らかの気づき）がもたらされても、それは歪形された構造の中で**脆弱な閃光**にとどまり、**歪形をもたらす関係への怖れ**は、クライアントの中ではお互いが**引き裂く／引き裂かれる**ような恐怖へと至り、セラピーを受け続けることが困難になる場合もある。セラピーからのドロップアウトがどの

ように体験されるのかはクライアントによってケースバイケースであろうが、引き裂く／引き裂かれるような体験や、その不安を回避するためのドロップアウトであるような場合には、クライアントとセラピストの双方がいったん**身を引く**ような中断が必要であることもある。

中断（ドロップアウト）に至るケースとは対照的に、長期間セラピーが継続されるケースの場合には、やはり（養育者をはじめとした）人間関係の問題を背景として抱えているクライアントが少なくないが、憎悪や怖れといったものよりも**関係による傷つき**を経験している場合には、**傷つけられない関係を希求**していることが多く、そのような関係が維持できればセラピーは安定して継続されるようである。この場合、セラピストは**安全な同行者**になることが求められる。そうしたセラピー関係が保たれるとき、セラピストはクライアントの**反復しつつ姿を変える非律動的ヴァージョニング**に**響**しつつ、混乱を鎮静化させ、**シンボリックな閃光の明滅**を見守ることによって、クライアントの中には徐々に**安定した身体的レジストリ**（プロセスモデル第VI章を参照、クライアントによっては、セラピーの影響は認知的側面というよりも、身体的——あるいは心身的——な側面で体験されるようであり、ある種の身体的インパクトの蓄積によって安定していくようである）が蓄積されていき、やがては**同行者からの巣立ち**が可能となる（この様相Ⅰの中で記述したが、このような段階は、ある種の様相Ⅱ～Ⅳとして理解することもできるものである）。

様相Ⅱ：混乱の鎮静化

様相のⅠとⅡは連動しており、段階的に生じる場合もあれば、ⅠとⅡの様相がほぼ同時に生起するケースもある。

様相Ⅰで見たような、非律動的なヴァージョニングが反復的に表出され、歪形（デフォルメ）された構造が支配的な体験の様式を見せるクライアントの場合、その混乱がなかなか鎮静化されずに中断（ドロップアウト）してしまうケースもあることを見た。別の例では、様相Ⅰのような動きはそれほど強くは見られないが、また違った要因や背景によって混乱の鎮静化が困難なケースもある。それは、何らかの理由でセラピーの期間や回数が限定されていたり、修復困難な家族関係などによって差し迫った状況にあるようなケースに見られる。期間や回数が限定されている場合、セラピーでの達成目標が設定しやすく、それに向かった協働作業の目安を立てやすいという利点もある一方で、ケースによっては

混乱の鎮静化が不十分であったり、目標達成への希求がかえって**焦燥**をもたらしてしまうこともある。あるクライアントは回数を限定したセラピーのある回の面接時に「こういう悩みは、いつかフツと問題ではなくなるような気がする」と話しながら、最終回のセッションではそれが得られなかった不満足感を語っていた（このような例は、微かな形では様相Ⅲは体験されているのだが、それが連鎖化する以前にセラピーが終結してしまったケースであると見ることもできる）。

なお、期間や回数を区切らずにセラピーを開始したが、比較的少ない期間や回数で満足いく終結を迎えたケースもあるので、物理的な意味での期間や回数が問題なのではなく、セラピー体験の中身や質が重要な要素であることは指摘しておかねばならない。また、**差し迫った崖**のような問題を抱え、**取り返しのつかない事態を修復しようとする**ようなケースにおいても、そうした混乱を十分に鎮静化することが困難で、その先へと進んでいくことが難しい場合もある。クライアントの**ニーズの同定と限界の伝達**によって、終結（あるいは中断）されることもある。こうした差し迫った課題を抱えるケースへのよりよい援助は、解決指向的（solution-focused）と言うよりも、関係や体験の深まりによってセラピーを進展させていこうとする PC/FOT の 1 つの課題であるかもしれない。

ただし、多くのクライアントは PC/FOT の中で混乱を鎮静化させていく。クライアントの混乱の要因がパーソナリティや対人関係様式の深い問題というよりも、いずれかと言えは**一過性のストレスや不安、周囲との関係不全**などから引き起こされる**ノイズ**——ここでは、心身の律動的な動きをかき乱すような外的（および内的に取り込まれた）刺激の意味でこの言葉を使用する——によるものである場合には、PC/FOT が用いる傾聴やフォーカシング（特にクリアリング・ア・スペース）などの働きかけは、その鎮静化に際立って援助的であることは間違いない。ケースによっては、**反復しつつ姿を変える非律動的ヴァージョニングへの響応や、反復と反復の間に停止をもたらすこと（治療的停止）**——これらは、クライアントの状況や変化に応じたセラピストの臨機応変な働きかけを指す（なお、停止および治療的停止についてはプロセスモデル第Ⅱ～Ⅳ章、さらには本論文の第Ⅱ部を参照）——などが求められることもあるが、混乱が鎮静化されるとき、次の様相であるシンボリックな閃光が必ずと言ってよいほど発現する。

様相Ⅲ：シンボリックな閃光の発現

様相Ⅲは様相Ⅱと連動しており、ⅡとⅢがほぼ同時に生じることもあれば、まれにはⅠ

とⅡとⅢが一度にあるいは連続して起きることもあるが、Ⅱが生起せずにⅠからⅢが生じることがほとんどないと言ってよい。

様相Ⅲが生起する際の典型的な動きは、次のようなものである。クライアントは混乱が鎮静化したときには、場合によってはかすかに、ある場合にはかなり強い形で、**シンボリックな閃光**と呼べるような気づきを体験する。これは、クライアントにとって独特の象徴的な意味合いをもつ気づきであり、驚きや意外さといった細部の新鮮さを伴う体験である。例えばクライアントは「自分でもびっくりしている」とか、「こういうことに気づくとは思ってもいなかった」といった言い方をする。シンボリックな閃光は、多くの場合、クライアントのその後の変化を先取りした意味をもつことが多く、**未構成な身体的インプライン**を秩序的に再構成化し（再構成化については、プロセスモデル第Ⅶ章を参照）、推進する可能性をもつものである。シンボリックな閃光はセラピー面接の中で生起することもあれば、セラピーを受けた日の帰宅途中や、次の面接との間の日常場面で生じることもある——という報告を何人ものクライアントから受けてきた——が、セラピーでの自己探求や話し合いをきっかけとして生起していることは多くのケースに共通している。ケースによっては、シンボリックな閃光がかなり強い形で発現し、一気に次の様相ⅣやⅤをもたらすこともあり、これは最近のサイコセラピー研究で注目されている現象としての「突然の進展」と深い関連があるはずである。⁷²

しかし、この様相Ⅲだけに限定して見てみると、シンボリックな閃光は、クライアントにとっては一瞬のしかも部分的な、つまりまだ全体的なものではない気づきであり、ケースによっては混乱の鎮静化が不十分であったり、一度鎮静化していた混乱が再燃したり、あるいは反復する非律動的なヴァージョニングによって、**脆弱な／微かな／明滅するような閃光**——まだ不確かな閃光の特徴は、クライアントその人とその状況によって、さまざまな表現で言い表すことができる——にとどまる場合もある。様相Ⅲからその後の様相へと進展していくクライアントに対しては、**シンボリックな閃光**がヴァージョン化され連鎖化していき、**隠喩的調律へと推進**される時空間と相互作用を提供することがセラピストの最も大切な役割と言えるだろうが、様相ⅡやⅠの動きを併せもつクライアントの場合には、**混乱の鎮静化や治療的停止、非律動的なヴァージョニングへの響応**などを提供しつつ、シンボリックな閃光が消失したり、混乱や非律動的な動きにかき消されることを防ぐ必要が

⁷² エビデンスによれば、突然の進展を体験するクライアントの割合は全体の約 40%であると推定されている（Tang et al., 2007; Cooper, 2008 邦訳 p.35 参照）。

あるだろう。確かに、中断（ドロップアウト）のケースの多くにも何らかの形でのシンボリックな閃光は発現しているが、しかしその後それが消失したり、その動きが定着しないことがセラピーの中断に結びついている場合が少なくないことは指摘されなければならない。

様相IV：隠喩的な調律

様相IVは様相IIIと連動しており、様相IIIが生起しなければ、様相IVは生じないと言える。

隠喩的な調律とは、クライアントの中の**シンボリックな閃光**が確かなものとして**ヴァージョン化**され連鎖化していき、それがさまざまな出来事や体験と交差し、隠喩的にその意味が響き合い、連関していくような動きのことである。（交差と連関についてはプロセスモデル第IV章を、ヴァージョン化、連鎖化については第VII章を参照）。クライアントの表現としては、「なかなか組み合わせることができなかったパズルの全体的な絵柄が見えてきた」とか「悩んでいた問題がまったく違ったものとして感じられる」などと語られる。ここに生じるのは、反復する非律動的なヴァージョニングとはまったく対照的な、**シンボリックな閃光のヴァージョニング**であり、その連鎖化である。このヴァージョニングはまだ部分的なものかもしれないが、それはもはや断片的かつバラバラで非秩序的なものではなく、律動的で秩序的な特徴をもったものであり、**未構成な身体的インプライングを推進するもの**である。つまり、これはクライアント本人や周囲に混乱や不全感をもたらすようなヴァージョニングではもはやない。

この様相をサイコセラピー以外の例で説明すると、例えばある問題の解法がまったくわからない状態や、ダンスやスポーツの動きを取ることができなかつたり、乗り物を乗りこなすことができない段階、外国語の習得がうまくいかないような状況など（様相I）を想像してほしい。その混乱した状態から抜け出すためには、とにかくあせらずに落ち着いてそのことに取り組む必要があるだろう（様相II）。そうするうちに、何かがわかつたり、一瞬ではあるが動きを取ることができたり、言葉のいくつか聞き取れたりすることが訪れる（様相III）。そしてそれを手がかりに先に進んでいくと、解法の方が見えてきたり、どこちなくても何とか動きを取ることができたり、文の一部が聞き取れるようになったり、たどたどしくても言葉が口をついて出てきたりするようになる。この段階がここで言う様相IVである。

この様相IVに至ったクライアントからは、かなり明確な形で自信や喜び、肯定的な自己

評価などが表現される。隠喩的な調律がクライアントの全体的な側面に行き渡るような場合には、直ちに様相Vへと向かい、クライアント自身やセラピストがはじめに予想していたよりも早く終結を迎えるケースもある。そのようなクライアントからは「もっと解決には時間がかかると思っていた」といった表現が聞かれることがある。しかし一方で、隠喩的な調律がクライアントの問題や苦悩のまだ一部にしか適用できないような場合もある。そのようなケースでは、様相III（場合によってはIやIIを含めて）とIVの行きつもどりつを繰り返す作業を見守りながら、**安全な相互作用を提供**し続けることが求められる。

様相V：律動的個体化が個人文法的型に沿って姿を為す

最後の様相Vは、様相IVと連動して現れる。

律動的個体化とは、生命体が一人ひとり微妙かつ複雑に異なるその心身の機能をよりスムーズに秩序的に発現する動きである。その生起は、**個人文法的型**と呼べるようなその人独特の構造と機能の現れ方のパターンに沿って**姿を為す**ようになる。シンボリックな閃光のヴァージョニングとしての隠喩的な調律は、問題解決や心理的苦悩の緩和にとどまらずに——もちろん、それらが得られた時点で終結となるケースも少なくないが——、さらに全体的でポジティブな力をクライアントにもたらすようである。各人から生まれるさまざまな表現が微妙に異なるように、一人ひとりの生命体がもつ未構成のインプライングはその推進が秩序化されるときには、個人文法的型と呼べるようなパターンを顕在化しながら、じつに個性的に律動化していく。しかもそのパターンや律動的な動きは、ある種の汎用性をもっているため、さまざまな問題や生き方にそれらを適用していくことができる自信や効力感があわせて獲得される。本当の意味で、クライアントにはもはやサイコセラピーは必要とされなくなると言えるだろう。「自分の道ができたと思う」「自分のやり方でやっていきたい」「揺るぎのない自分を見出すことができた」など、様相Vに至ったクライアントからはしばしば明確な達成感や満足感が表明される。

＊

以上、TAEを用いた分析から導き出されたタームを連結化することによって、PC/FOTのプロセスについての理論化を試みた。

上記の理論化の試みは、あくまでも筆者自身のケース分析と臨床経験の振り返りによる一人称のプロセスをデータとするもので、この結果をどのくらい一般化できるかについては検討すべきさまざまな課題もある。クライアントの人たちがPC/FOTの中で体験したこ

とや、筆者との相互作用については、できる限り現象学的な態度と方法によって事実をあるがままに想起することを心がけたが、筆者の主観的な思い入れや記憶の断片化などが結果に影響していることは否定できないだろう。また、今回の分析は可能な限り「現象としてのプロセス」を明らかにすることを意図していたが、筆者の中にある「当為としてのプロセス」が多少なりとも入り混じっていることも考えられる。今後は何らかの形でクライアントの人たちが PC/FOT をまさにどのように体験しているのかについての研究も——どのようにプライバシーを尊重するかという点を考慮しながら——必要であろう。また、筆者以外のさまざまなセラピストの臨床経験とのつき合わせや議論も不可欠であると考えられる。

また今回の結果については、各タームをさらに入念に定義していくことや、理論化の妥当性について臨床的および実証的に検討していくことなどの課題も残されている。今後の概念的妥当性の検討の手がかりとして1点だけ指摘しておく、上記の理論化を例えば先に引用したコンシューマーレポート (Consumer Report) の指摘と照らし合わせてみると、次のようなことが言えるのではないだろうか。コンシューマーレポートが指摘しているサイコセラピー特有の効果は、「1. 心理的苦悩の緩和」「2. 心理社会的機能の改善」「3. 人間的成長の促進」の3点であったが、上記のⅠ～Ⅴの様相のうち、「Ⅰ：反復する非律動的なヴァージョニングへの共感的響応」と「Ⅱ：混乱の鎮静化」は主に「1. 心理的苦悩の緩和」に、「Ⅲ：シンボリックな閃光の発現」と「Ⅳ：隠喩的な調律」は「2. 心理社会的機能の改善」に、そして「Ⅴ：律動的個体化が個人文法的型に沿って姿を為す」は「3. 人間的成長の促進」に対応し、そうした効果を生み出す PC/FOT のプロセスであると言える可能性である。

こうした点——つまり、サイコセラピーとはどのような援助なのか、という問題——については、PC/FOT のみならず認知行動療法や精神力動的サイコセラピーなど、さまざまな立場のセラピストや研究者との議論を通して検討していかなければならない課題であると言えるだろう。

3. プロセスモデルの臨床的意義の実例化

前章では、筆者自身の臨床経験を素材としながら、TAE を方法論として活用することによって、パーソンセンタード／フォーカシング指向セラピー（PC/FOT）において生起するプロセスの理論化を試みた。これは、ある意味では、ジェンドリンのプロセスモデルと筆者の臨床経験の交差の試みでもあり、さらには、プロセスモデルの臨床的意義を筆者の臨床経験から実例化する試みとも言えるものだった。

この章では、前章での理論化が、プロセスモデルの臨床的意義の実例としてどのような成果となり得ているのかについてさらに検討を加えたい。以下では、前章の理論化の中で——TAE を活用することによって、またプロセスモデルの概念と交差させることで——導き出された主要なタームをとり上げ、それらを定義し、その意味づけを行う。そして、そうすることによって、これらのタームがこれからの PC/FOT——およびサイコセラピー全般の実践や研究——の中にどのような意義をもたらしうるのかを考察する。また、各タームの検討の最後に、導き出された重要な論点を仮説的命題として抽出する。

1. 未構成な身体的インプライング（pre-constituted bodily implying）

ジェンドリンのプロセスモデルにおいて、「インプライング（implying）」の概念は、生命体が生きているということをあらわすための最も基本的かつ根源的な用語である。このインプライングの中へ事象が生起することによって、生命体の生きているプロセスは推進されていく。サイコセラピーにおいても、クライアントを先へと導くのはこうした身体的なインプライング（bodily implying）である。

しかしセラピーの開始時や初期において、クライアントにとっては、特に主訴や問題に関連するような身体的なインプライングは「未構成（pre-constituted）」な——今後どのように推進されていくのかというその姿がまだ明確になっていない——ものである。こうした身体的インプライングの未構成な側面は、クライアントに心理的苦悩や不全感をもたらすことが少なくない。だが、そのような未構成な身体的インプライングに導かれて、あるいは、その未構成な側面に焦点があてられることによってセラピーは先へと進んでいく。未構成な身体的インプライングは、ある意味ではクライアントの心理的苦悩の源泉であるとも言えるし、セラピーを進展させていく原動力とも言えるものである。

言い換えると、クライアントをセラピーの進展に導くのは、いわゆる「無意識 (unconsciousness)」(Freud, 1923) や、あるいは「実現傾向 (actualizing tendency)」(Rogers, 1961) といったものというよりも、この身体的なインプライングである、と行うことができる。無意識とインプライングの違いは、前者が人間の中の、抑圧され隠された何かだとされるのに対して、インプライングとは、新鮮な生起をもたらしながら、それ自身も変化していくものである、という点にある。つまり、無意識は掘り起こされ、発見される何かであるとされるが、インプライングはそれ自身も変化しながら、新たな生起や推進をもたらすものである。

また、ロジャーズの「実現傾向」に対しては、かねてよりそれが楽観主義的な人間観であるかのような批判や誤解が生じてきた (Kirschenbaum & Henderson, 1990) が、生命体を推進する力としての身体的インプライングは、はじめからポジティブな方向だけに働く実現傾向というよりも、それが未構成なときには症状や心理的苦悩をも生み出す根源的な何かである。しかし、それは本来的には、破壊的で病的なものなのではなく、非律動的な混乱として動く場合もあれば、律動的で秩序的な推進として動くこともあるものである。

未構成な身体的インプライングという概念を用いることで、サイコセラピーの分野に古くからある論争——すなわち、症状の消失だけで人格の変容が達成されない場合、他の症状への置換が起こるか否か、というもの——に、1つの決着をもたらされる可能性がある。つまり、ある適応的に見える変化が生じたとしても、それが未構成な身体的インプライングを推進するものではなく、未構成なものが秩序化されなければ、そのインプライングには混乱ないしは逆もどりが生じる、ということである。「インプライングの中への生起 (occurring into implying)」は、生命体の生のプロセスの根本原理であり、セラピーのプロセスもそれにあらがうことはできないのである。

仮説的命題 1 : PC/FOT ——そして、多くのサイコセラピー ——は、クライアントの「未構成な身体的インプライング (pre-constituted bodily implying)」が、より律動的で秩序的、調和的な動きによって推進されていくプロセスを援助しようとする働きかけである。

2. 反復する非律動的ヴァージョニング (repetitional nonrhythmic versioning)

「ヴァージョニング (versioning)」は、ヴァージョン (version) を動詞化、さらに動

名詞化したプロセスモデル独自の用語であり、ほとんど同じ動き（例えばジェスチャー）が——わずかに違って——繰り返されることを指し示す用語である。ヴァージョニングによって、私たちはそこに、同じものとしてのシンボルやパターンや行為を形成する。この意味では、ヴァージョニングはおそらく人間だけがなしうることであろうし、人間に特有の心理的な苦悩も、個々人のヴァージョニングによって形づくられるとすることができる。純粋な身体因的、生理学的な病理は別にして、人間のさまざまな心理的苦悩や精神症状は、このようなヴァージョニングによって連鎖化されているものと見なすことが可能だろう（例えば、精神力動的な概念としての「対象表象」や、ベックが発見した「自動思考」などは、いずれもある種のヴァージョニングとしてとらえられる）。⁷³

心理的苦悩や精神症状をヴァージョニングとしてとらえることの利点は、それらを固定した動かないものではなく、絶えず動いている——しかし反復している——ものであると見ることができるところにある。それらが動かない構造——しかも、歪形（デフォルメ）した構造——のように見えるのは、その動きがほとんど同じように反復して生起しているからである。そして、それらが歪形（デフォルメ）しているように見える（あるいは感じられる）のは、その反復が非律動的な特徴をもっているからである。非律動的な反復とは、生起が断片的かつ断続的（intermittent）であり非秩序的であるので、身体的なインプライングを推進することができず、心身の機能を十全に発揮させない動きの連続である。そのためその反復は、本人および（あるいは）周囲に混乱や不全感をもたらし続ける。

プロセスモデルの観点からすると、このような反復する非律動的なヴァージョニングが再構成化され、それまでとは異なるヴァージョンが生起して連鎖化していく可能性は常にあり、と考えられる。その道筋は多様にあるだろうが、以下では、反復する生起と生起の間に停止をもたらす「治療的停止」と、非律動的ヴァージョニングをより全体的に再構成化するための「共感的な響応」について見ていきたい（その前に仮説的命題を取り出しておく）。

仮説的命題 2：人間のさまざまな心理的苦悩や精神症状は、それらが動かない歪形（デフォルメ）された構造のように見える場合でも、非律動的なヴァージョニング（nonrhythmic versioning）によって反復されているのであり、そのヴァージョニングの

⁷³ もちろん、私も、そしてジェンドリンも、人間の内因性の精神疾患の存在を否定しているのではない。おそらく、動物にも人間の精神疾患と非常に近い状態はあるだろう。ただし、人間の場合には、（言語やイメージなど）操作できる要素の複雑さや、それらを使用したヴァージョニングによって、苦悩のあり様は動物とはかなり違ったものであるはずである。

連鎖は再構成化される可能性に常に開かれている。

3. 治療的停止 (therapeutic stoppage)

「治療的停止 (therapeutic stoppage)」という用語は、プロセスモデルの「停止 (stoppage)」の概念に触発されて筆者 (Suetake, 2010) が提案し、本論文の第 I 部で論じたように、ジェンドリン本人とも議論したものである。

プロセスモデルにおける停止とは、生命プロセス全体のストップ (つまり個体の死、あるいはプロセスがまったく無くなってしまうこと) を意味するのではなく、生命プロセスを複雑に分化させ——推進されるプロセスと停止したプロセスの分化——、分化したプロセス間に新たな相互作用と協働をもたらすような、生命体の変化や進化にかかわる契機を指し示す概念として用いられる。つまり、停止によって変化した次のプロセスが生起する、とプロセスモデルでは考えるのである。そこで、セラピーにおいてクライアントに見られる心理的苦悩を反復する非律動的なヴァージョニングとしてとらえる場合、そこに何らかの停止——治療的停止——がもたらされるときには、それまでの反復とは異なる何か——プロセスモデルではそれを「介入する事象 (intervening event)」と呼ぶ——が生起する可能性が高まる、と考えられる。特に、クライアントの動きが、自らそれをストップさせようと思っても止めることができないような「停止の不全」あるいは「止まらないプロセス」であるような場合、治療的停止と言えるような働きかけが重要な意味をもつだろう。

具体的な働きかけはさまざまにありうる。しばらくの間沈黙や静寂に身を置くこと、クリアリング・ア・スペースを試みること、呼吸への意識の集中、瞑想などである。

繰り返しになるが、この治療的停止をめぐるジェンドリンと議論した後に、彼から届いた手紙の中から、関連する箇所を抜粋する。

……あなたは私に、プロセスモデルにおける“停止 (stoppage)”の概念 (新たな可能性を暗在的に含意している) が“構造拘束的 (structure-bound)”の概念とどのような関係にあるのか質問しましたね。私はあなたが帰ってから、そのことについて考えました。“人格変化の理論”の中で、構造拘束の概念は“再構成化 (reconstituting)”の概念と関係をもっていました (つまり、クライアントの体験過程の中にすでに暗在しているものを展開するだけでは不十分であるときに、失われている体験過程のプロセス (a missing experiencing process) を再構成化するためには相互作用から何かそれ以上のもの

のが生まれる必要がある、と)。そこで私は今、次のように言いたいのです。プロセスモデルでは、いかに再構成化が機能するかを説明しているのだ、と。相互作用は失われている体験過程のプロセスを再構成化します。ある失われている体験過程のプロセスが、ある停止です。プロセスモデルでは、ある停止とはプロセスがないことを意味しているのではなく、プロセスのコンスタントな（継続する、不断の）インプライング（暗在的含意）なのです。そしてそれはまだ形づくられていませんが、いずれそのインプライング（暗在的含意）は推進され得るものです。…… [中略] …… “ストップ” と言うことで相手を訪れ、相手に届こうとしているあなたは、その種の相互作用そのものです。病理的プロセスの中にいる私の中からこのことが感じられるときには、その“停止”は私の中にとっても安心をもたらすでしょう！ 誰かがケアしてくれている、誰かがそこにいる、リアルな誰かがいる、自分がこの止まらないプロセス（this running process）の中にはめ込まれていることを理解してくれている誰かがいる、自分が今も存在していることを知っている誰かがいる、この止まらないことが自分のすべてではないことを知っていて、自分の中には多くの多くの意味があり、暗在的に推進されている、ということを知っている誰かがいてくれる。ああー（深いため息）。……

(2008年4月7日にジェンドリンから届いた私信より)

仮説的命題 3 : クライアントの非律動的なヴァージョニングの動きが、自らそれをストップさせようとしても止めることができないような「停止の不全」あるいは「止まらないプロセス」であるような場合、治療的停止（therapeutic stoppage）と呼ぶような働きかけが重要な意味をもつ。これはクライアントの混乱の鎮静化のための重要な1つの道筋である。

4. 共感的響応 (empathic resonating)

もちろん、治療的停止だけでセラピーが進展していくわけではない。より重要な別の道筋がある。響応 (resonating) というタームはプロセスモデルの中にあるものではなくて、筆者が自身の臨床経験を TAE によって分析する中で導き出されたものであるが、プロセスモデルで言うところの「相互作用 (interaction)」や「再構成化 (reconstituting)」に結びつくものでもある。

PC/FOT においてセラピストが最も重視する働きかけについては、共感的傾聴

(empathic listening)、共感的理解 (empathic understanding)、共感的応答 (empathic response) などとよく言われてきている。しかしその働きかけの実相は、単にクライアントの話を傾聴するだけのものではないし、ただ理解したり、応答するだけのものでもない。そこには、深いうなずきや、呼吸のやりとり、クライアントの苦悩の文脈に身を置いてみて感じることを表現したり、ときにはクライアントが表出する身体言語（身振りや表情、姿勢など）をなぞったりすることもあるような、きわめて身体的でダイナミックな相互作用である。セラピーにおけるそうした相互作用の特質を指し示すために、ここでは共感的響応という用語を使用する。

こうした共感的響応によって何が生起するのだろうか、あるいは生起する可能性が高まるのだろうか？ 共感的響応は、ある意味では、クライアントの反復する非律動的なヴァージョニングに対して、セラピストがそれを正確にヴァージョン化することである。しかもセラピストは、その諸ヴァージョンをなぞり、再現しながらも、セラピスト自身においては律動性を失わずにヴァージョン化しているのである。そこで形成されるのは、クライアントの非律動的なヴァージョニングの再現であると同時に、律動性を失わないヴァージョニングでもあるという二重化されたヴァージョニングである。

このような共感的響応は、クライアントにとってそれまでに経験したことのない新鮮な相互作用をもたらす可能性がある。あるヴァージョニングの、二重化された新しいヴァージョン化は、以前のものとほとんど同じであるが、しかしどこか微妙に違ったヴァージョニングであると言える。この微妙に異なる新しいヴァージョニングの連鎖の中で、それまでには生じることのなかった新しい生起——シンボリックな閃光——が生まれる可能性が高まるのである。⁷⁴

仮説的命題 4：共感的響応 (empathic resonating) とは、PC/FOT のセラピーにおける最も核心的な働きかけの 1 つであり、それは、クライアントの反復する非律動的なヴァージョニングに対して、セラピストがそれを正確に、身体的に、相互作用的にヴァージョン

⁷⁴ ここに、1つの疑問が生じる。PC/FOT においては、セラピストが自身の律動性を失わずに、クライアントの非律動的なヴァージョニングに共感的に響応する、と言ったが、それが PC/FOT の援助の限界であろうか。響応することによって、自らの律動性を失ってしまうような状況の場合、PC/FOT による援助は継続することが不可能なのだろうか。ここには率直に認めざるを得ない PC/FOT のエッジとでも言うべきものが現れているが、逆に言うと、PC/FOT の力や今後の発展の可能性を考えるための重要な手がかりが得られたと言うこともできるだろう。プロセスモデル的に思考すると、「自らの律動性を失わない限りにおいて」というあり様には、それ自身さまざまな再構成化や発展の可能性が開かれているだろうから。

化する——しかも自らの律動性を失わずに——ことである。そこにはヴァージョニングの二重化——非律動的であり、かつ律動的であるような——が生起する。

5. シンボリックな閃光 (symbolic gleam)

「シンボリックな閃光 (symbolic gleam)」というタームも、プロセスモデルの中にあるものではなく、TAEによる筆者のPC/FOTのケース分析の中から生まれたものである。これはフォーカシングでは(またプロセスモデルにおいても)「シフト (shift)」と呼ばれているものであり、さらにプロセスモデルにおいて、「感じていることを感じる」、「気づいていることに気づく」、「意識していることを意識する」といった言い方によって表現される「増大する感受性 (increasing sensitivity)」とも深く関係する用語である。

プロセスモデルでは、ある連鎖や文脈が新たにヴァージョン化される時、これまではそこにはなかった(見えなかった、感じられなかった)ものが、ある瞬間にそこに「あった (was)」ものとして見出される(感じられる)ようになる、と考える。そこに「あった」ものは、そこに隠されていたというよりも、ある意味では、その瞬間に新鮮に生起したのである。

行為やジェスチャーや言葉によって、文脈や状況をきわめて複雑にヴァージョン化することができる私たち人間は、こうした新鮮な生起——それをここでは「シンボリックな閃光」と呼ぶ——の可能性に常に開かれている。セラピーにおいては、このような「シンボリックな閃光」は、クライアントに変容や推進をもたらす重要で貴重な事象として生起する。それは、クライアントにとって独特の象徴的な意味合いをもつ気づきであり、驚きや意外さといった細部の新鮮さを伴う体験である。シンボリックな閃光は、多くの場合、クライアントのその後の変化を先取りした含意をもつことが多く、それまでの非律動的なヴァージョニングとは異なる連鎖を生み出し、未構成な身体的インプライングを秩序的に再構成化し、推進する可能性をもつものである。

しかし、こうしたシンボリックな閃光は、それだけでは一瞬のしかも部分的な気づきであり、まだ連鎖化されていないものである。それをどのように連鎖化していくのかが、セラピーの展開期における重要な課題であると言えよう。図式的に示すと、シンボリックな閃光はほとんどのケースで何らかの形で生起するが、その後の方向は、およそ次の3つのいずれかに進んでいくと考えられる。

①シンボリックな閃光のヴァージョン化と連鎖化(隠喩的な調律への推進)

②シンボリックな閃光は十分に連鎖化していかないが、断片的で部分的であっても、その閃光のインパクトが少しずつ蓄積されていく（身体的レジストリの拡大）

③シンボリックな閃光の消失や拡散

筆者自身のケースの振り返りからは、①は満足のいくセラピーの終結へと向かう可能性が高く、②は長期のセラピーを要することも少なくないが、安定したセラピー関係の中で次第に自立の方向へと向かっていく可能性が高い、しかし、③はセラピーの中断や失敗に繋がる可能性がある、ということが示唆された（③のような動きが生じるとき、それをもたらす要因がどのようなものなのか、またどのような対応が求められるのか、今後検討しなければならない課題であると言えよう）。

仮説的命題5：PC/FOTにおいては、「シンボリックな閃光（symbolic gleam）」は、クライアントに変容や推進をもたらす重要で貴重な事象として生起する。シンボリックな閃光は、非律動的なヴァージョニングとは異なる連鎖を生み出し、未構成な身体的インプライニングを秩序的に再構成化し、推進する可能性をもつものである。

6. 隠喩的な調律（metaphoric attunement）

「隠喩的な調律（metaphoric attunement）」は、ジェンドリンが「人格変化の一理論」（Gendlin, 1964）の中で「全面的な適用（global application）」と呼んでいた概念に近いものであり、プロセスモデルではⅦの「再構成化」および、Ⅷの「直接照合体（Direct Referent: DR）」のジェル化とも関連する用語である。

隠喩的な調律とは、クライアントの中のシンボリックな閃光が確かなものとしてヴァージョン化され連鎖化していき、それがさまざまな出来事や体験と交差し、隠喩的にその意味が響き合い、連関していくような動きのことである。ここに生じるのは、反復する非律動的なヴァージョニングとはまったく対照的な、シンボリックな閃光のヴァージョニングであり、その連鎖化である。このヴァージョニングはまだ部分的なものかもしれないが、それはもはや断片的で非秩序的なものではなく、律動的で秩序的な特質をもったものであり、未構成な身体的インプライニングを推進するものである。つまり、これはクライアント本人や周囲に混乱や不全感をもたらすようなヴァージョニングではもはやない。

これはジェンドリンが、「どの人も内面からの広がりを経験し、私たちの眼前で、複雑になり、精緻になり、美しくなる」（Gendlin, 2002 p.xix）と表現するような、PC/FOTのプロセスにおいて——そして、おそらくは他の多くのサイコセラピーの中にも——典型的

に見られる変容と推進の動きである。

しかしケースによっては、こうした動きが、ある瞬間に鮮明に生起する場合もあれば、それほど明確な形では確認できない場合もある。過剰な期待は禁物であろう。隠喩的な調律と呼ぶことができるような動きは、PC/FOT がもたらしうる 1 つの典型的な変容の実例であると言えるだろうが、5 で見たように、シンボリックな閃光のインパクトが少しずつ蓄積されていくような「身体的レジストリの拡大」と呼べる比較的ゆっくりとした変容の道筋もある。これは、シンボリックな閃光が顕在的に連鎖化され、推進していく——これが隠喩的な調律である——というよりも、シンボリックな閃光が何らかの暗在的なあり方で機能するような動きであると理解することができるだろう。

仮説的命題 6：隠喩的な調律 (metaphoric attunement) とは、クライアントの中のシンボリックな閃光がヴァージョン化され連鎖化していき、それがさまざまな側面と交差し、隠喩的にその意味が響き合い、連関していくような動きのことである。ここに生じるのは、反復する非律動的なヴァージョニングとはまったく対照的な、シンボリックな閃光のヴァージョニングであり、その連鎖化である。

7. 律動的个体化 (rhythmic individualizing)

律動的个体化 (rhythmic individualizing) というタームも、プロセスモデルには出てこないが、あらゆる現象は動きをもったプロセスであるというプロセスモデルの基本的モチーフから、成功した PC/FOT におけるクライアントの最終的な実相をこのように概念化した。

この律動的个体化とは、生命体が一人ひとり微妙かつ複雑に異なるその心身の機能をよりスムーズに秩序的に発現する動きである。その生起は、個人文法的型 (personal grammatical form) と呼べるようなその人独特の構造と機能の現れ方のパターンに沿って姿を為すようになる。シンボリックな閃光のヴァージョニングとしての隠喩的な調律は、問題解決や心理的苦悩の緩和にとどまらずに——もちろん、それらが得られた時点で終結となるケースも少なくないが——、さらに全体的でポジティブな力をクライアントにもたらしようである。各人から生まれるさまざまな表現が微妙に異なるように、一人ひとりの生命体もつ未構成のインプライングは、その推進が秩序化されるときには、個人文法的型と呼べるようなパターンを顕在化しながら、じつに個性的に律動化していく。

ここで、セラピー以外の例でイメージ化してみると、幼い子どもが自転車に乗れるよう

になるプロセスを観察したことがある人であればわかるように、瞬間的に乗れたこと（シンボリックな閃光）の連鎖化によって、次第に調律的で律動的な動きが形成されていくが、その連鎖化のプロセスで見せるや姿勢や動作は、ほんとうに一人ひとり独特で個性的なものである。まだ自転車に乗れない間は、自転車に乗るという連鎖は暗在的なもの（まだ連鎖化されたことのないタイプ a の暗在性）であるが、その連鎖化が生起するときには、個人文法的な型としか呼べないような独特の型に沿ってヴァージョン化されていく。この個人文法的型とは、もともと各自の中に備わっているというよりも、何かの連鎖化の中で暗在的に機能し、それ自体も変化し発展していくような何かである。そして、その連鎖が十分に形成され精緻化した後では、動きはスムーズになるので、他者との違いはそれほど目立たなくなる（それでも微妙に違っている）が、連鎖化のプロセスの真ただ中ではそれはまさに個性的な再構成化である。

自転車に乗るという身体的な動きの獲得に限らず、算数の解法の学習や、言語の習得などの認知的な発達においても、そのプロセスのただ中では、同じように一人ひとり独自の型に沿ってヴァージョン化と連鎖化が形成されているはずである。

サイコセラピーにおける変容や課題達成も、こういった例に見られるような動きとの共通性をもっている。以前には連鎖化されていなかったものが再構成化され、連鎖化される時、そこに生起するのは個人文法的な型に沿って姿を為す律動的个体化と言えるものである（もちろん、それが顕在的に明確に形成される場合と、暗在的に少しずつ形成される場合があるだろうが）。

仮説的命題 7：律動的个体化 (rhythmic individualizing) とは、生命体が一人ひとり微妙かつ複雑に異なるその心身の機能をよりスムーズに秩序的に発現する動きである。その生起は、個人文法的型 (**personal grammatical form**) と呼べるようなその人独特の構造と機能の現れ方のパターンに沿って姿を為すようになる。このような動きが十分に獲得される時、それはさまざまな問題への汎用性をもつようになるので、サイコセラピーは真の意味で終結される。

*

以上、ジェンドリンのプロセスモデルと筆者自身の臨床経験との——TAE を方法として介した——交差によって導き出されたいくつかの用語を定義し、これらの用語によって PC/FOT——および、多くのサイコセラピー——のプロセスがどのように説明され、意義づけられるかについて、仮説的な命題を記述した。

これらの用語と仮説的命題が、今後どのような形で PC/FOT や他のサイコセラピーの実践と研究の中で機能していくようになるのか、その探求は筆者自身にとっても今後の課題としたいが、そのどれかが何らかの方向で機能し始めるとき、それはジェンドリンのプロセスモデルの臨床的意義の実例として、まさにモナドアウトしていくものとなると言えるだろう。

結 論

1. 本論文の成果

「序論」において述べたように、ジェンドリンのプロセスモデルは近年、さまざまな形で注目されるようになってきており、一部の哲学者によって議論されたり、国内外のフォーカシング指向セラピーをはじめとするサイコセラピーの実践や研究の中で引用されたり、言及されるようになってきている。しかし、これまでのところジェンドリンのプロセスモデルの全体を明らかにした考察や議論は世界的にもほとんどなく、その全体像を包括的に把握し、このモデルがいったいどのようなものであり、私たちに何をもたらすものであるのかを解明することは、大きな課題だったと言える。

そこで本論文では、このジェンドリンのプロセスモデルの全貌を解明することを企図し、さらに、このモデルがサイコセラピーをはじめとする私たちの臨床実践にとってもたらす意義を明らかにすることに取り組んだ。

本論文における考察と議論によって、少なくとも以下の諸点は明らかになったと言えるだろう。

*

「本論」第 I 部では、ジェンドリンの哲学が、『体験過程と意味の創造』（1962a）から『プロセスモデル』（1997a）へと、どのように展開されてきたのかを、特に臨床的な問題関心との繋がりが深い代表的な論文に焦点をあてることによって考察した。第 I 部の 1 と 2 では、ジェンドリンの体験過程（*experiencing*）という根本概念が、どのような背景から、どのように創出されたのかを検討し、また『体験過程と意味の創造』の主要な論点を明らかにした。『体験過程と意味の創造』の中でジェンドリンが論じた、感じられる意味（フェルトセンス）とシンボルの機能的関係——直接照合（*direct reference*）、再認（*recognition*）、展開（*explication*）、隠喩（*metaphor*）、把握（*comprehension*）、連関（*relevance*）、婉言（*circumlocution*）——の提示は、私たちのあらゆる意味の形成や使

用にはフェルトセンスが必ず何らかの形で関与している、ということ为例証するための論考だった。また、そのことから導かれた IOFI (instance of itself) 原理——私たちのフェルトセンスからもたらされる実例は、新しいカテゴリーや普遍性を生み出す可能性をもっている、とする原理——についても、その企図するところを明らかにした。

また第 I 部の 3 および 4 では、ジェンドリンの哲学が臨床的な問題——夢の解釈やナルシズムの概念に潜む仮定など——に適用され、交差することによって展開されていった軌跡について論じた。このような問題への取り組みは、哲学者であり、かつサイコセラピストでもあるジェンドリンによる、きわめてオリジナリティに富んだ論考である。こうしたジェンドリンの仕事について、できるだけ哲学や思想と、またサイコセラピー実践のいずれをも広く見渡すことができるような立ち位置から考察を行った。考察の結果明らかになったのは、夢の解釈においても、ナルシズム問題の把握においても、私たちの身体感覚——フェルトセンス、体験の複雑性、…… ——が創造的に機能するあり方を見出そうとするジェンドリンの意図であり、そこからその創造的な機能のあり方が浮き彫りになった。

また第 I 部の 5 では、ジェンドリンのプロセスモデルの主に前半部の考察に基づきながら、その臨床的含意を明らかにした。その結果、プロセスモデルには、①人間の根源的な体験世界についての新たな認識、②人間がもつ表象やイメージについての新たな理解、③精神病理について新たな概念や理論が生み出される可能性、④「治療的停止 (therapeutic stoppage)」などのサイコセラピーの実践にもたらす示唆、といった臨床的含意が認められることが明確になった。さらに第 I 部の補遺では、(上記の議論にかかわる問題についての) ジェンドリン本人から筆者に届いた手紙を訳出し、その内容に解説と考察を加えた。

*

第 II 部では、ジェンドリンのプロセスモデルの第 I 章から第 VIII 章までの全体について、その解説と考察を行った。まず、ジェンドリンによってプロセスモデルが執筆された経緯と、その全体的な構成について論じ、さらに、このモデルが要請する基本的な視座——①インタラクションファースト、②過去と未来が現在において機能する時間のモデル、③プロセス事象、④非ラプラス的連続、⑤1 つの事象を形成する多数の要因、⑥ユニットの出現、および異なる仕方での再出現——を抽出し、検討した。そして、第 I 章「身体 - 環境」、第 II 章「機能的循環」、第 III 章「対象」、第 IV 章「身体と時間」、第 V 章「進化、新しさ、安定性」、第 VI 章「行動」、第 VII 章「文化、シンボル、言語」、第 VIII 章「暗在するものによる思

考」のそれぞれについて、次々に創出される新しい用語や概念の意味を解説しつつ、その難解な内容について、できる限り理解が及ぶような形で考察していった。

ではこのプロセスモデルとは、いったい何についてのどのようなモデルであり、理論なのだろうか？ 本論文の解説と考察から明らかになったのは、次のことである。すなわち、ジェンドリンのプロセスモデルとは、生命体や人間、そして自然がまさにこのようにあるあり様を、このあり様において——つまり、何かほかのあり様に還元したり、転換したりせずに——正確に描き出し、そしてそのあり様から、いったいどのようなさらなるあり様が生起できるのかを見通そうとする、そのような哲学的作業の結晶である、ということである。

一般に何かの「モデル」とは、数学的・論理的なモデルや、構造的な型としてのモデルの意味で使用されることが多い。しかし、ジェンドリンのプロセスモデルでは、そのような還元的なモデルはいっさい描かれない（『プロセスモデル』の中で唯一の図は、時間の生成と進行を表す「シータ（ θ ）の図」という奇妙なもののみである）。むしろ、「インプライミングの中への生起（*occurring into implying*）」という起源的な表現に始まる独特の記述によって、これまでに言語化されたりモデル化されたことのない、しかし生命体や人間にとって根源的であり、まさにそのようなあり様でしかあり得ないようなあり方が、徐々に明らかにされていく。

ジェンドリンのプロセスモデルは、ある意味では、生命体と人間の進化論と呼べるような哲学である。もちろんこの作品は、一般的な意味での生物学的な進化を論じたものではないが、少なくとも生命体や人間の発展や進化は、このプロセスモデルにおける重要なテーマの一部である。そしてジェンドリンは、プロセスの「停止（*stoppage*）」あるいは「休止（*pause*）」によって、プロセスに分化——それまでのプロセスの停止と、それまでにはなかったプロセスの生起——が生じ、新しいプロセスが形成されていくようになる、という根源的なあり様から生命体の発展や進化をとらえようとしている。このようなプロセスの停止と分化、その発展から行動が生じ、またシンボルや言語が形成されるようになる、という第VI章から第VII章にかけての論述はまさに圧巻である。これまでこのような形で、行動の発生や言語の形成のプロセスを連続的に解明した理論や哲学は存在したのだろうか。きわめて難解で複雑な第VII章の記述のためか、ジェンドリンのプロセスモデルにおける言語の形成の考究については、これまでほとんど考察や議論が行われてこなかったが、本論文の第II部の考察によって、今後さまざまな議論が行われると考えられる。

しかし、ジェンドリンのプロセスモデルの最大の成果あるいは真骨頂は、言語や文化が形成され発展した第Ⅶ章を超えて、その先へとどのように進展していくことができるのかを明らかにしようとする、その第Ⅷ章にある。第Ⅵ章や第Ⅶ章における停止（あるいは休止）のあり方と、第Ⅷ章のそれが明らかに違うのは、Ⅷにおける（長い）休止が、人間の意思によるものであり、そこには真の意味での主体性が存在している、ということだろう。ジェンドリンは、それに取り組んだ先駆者として、モダンバレエの祖であるイサドラ・ダンカン、演劇界の改革者スタニスラフスキー、相対性理論のアインシュタインら（および、その人たちが残した自伝や文章）を例示する。そして、このⅧにおける新しい連鎖の形成を導くのが「直接照合体（Direct Reference:DR）」という、全体的で創造的な身体感覚である、とジェンドリンは言う。第Ⅷ章では、この直接照合体に導かれる新たな連鎖について、「モノド（monad）」および「ダイアフィル（diafil）」といったタームを用いて考究されている。このプロセスモデル第Ⅷ章における考究が、今後どのように——哲学やサイコセラピーの領域などで——理解され、インパクトを与えていくことになるのか、これからの議論を見守りたいと思う。

＊

第Ⅲ部では、第Ⅰ部および第Ⅱ部での理論的な検討をふまえたうえで、ジェンドリンのプロセスモデルがサイコセラピーをはじめとした臨床実践にもたらす意義について実践的な視野からの検討を行った。第Ⅲ部の1では、筆者自身の臨床経験について、それを「パーソンセンタード／フォーカシング指向セラピー（person-centered/focusing-oriented therapy: PC/FOT）」と位置づけることの意図と背景を論じ、また、研究の方法論としてのTAE（thinking at the edge）——プロセスモデルから導き出された理論構築法——の特徴を考察した。

第Ⅲ部の2では、PC/FOTのサイコセラピストとして実践を行ってきた筆者自身の臨床経験を素材としながら、TAEを質的分析の方法論として活用することによって、PC/FOTにおいて生起するプロセスの理論化を試みた。具体的には、真正（bona fide）なPC/FOTとして筆者が担当した25ケースについての面接記録と筆者の振り返りをデータとして、TAEによる質的分析を行い、PC/FOTのプロセスについての概念化と理論化を試みた。そして、次のような5つの様相からなるPC/FOTのプロセスが記述された。

様相Ⅰ：反復する非律動的なヴァージョニングへの共感的響応

様相Ⅱ：混乱の鎮静化

様相Ⅲ：シンボリックな閃光の発現

様相Ⅳ：隠喩的な調律

様相Ⅴ：律動的個体化が個人文法的型に沿って姿を為す

第Ⅲ部の3では、上記の理論化の中で導き出された主要なタームをとり上げ、それらの意味づけを行い、これらのタームがPC/FOT、およびサイコセラピー全般の実践や研究の中にどのような意義をもたらしうるのかを考察した。そこから重要な論点が導き出され、それを仮説的命題として記載した。

仮説的命題 1：PC/FOT——そして、多くのサイコセラピー——は、クライアントの**未構成な身体的インプライング (pre-constituted bodily implying)** が、より律動的で秩序的、調和的な動きによって推進されていくプロセスを援助しようとする働きかけである。

仮説的命題 2：人間のさまざまな心理的苦悩や精神症状は、それらが動かない歪形（デフォルメ）された構造のように見える場合でも、**非律動的なヴァージョニング (nonrhythmic versioning)** によって反復されているのであり、そのヴァージョニングの連鎖は再構成化される可能性に常に開かれている。

仮説的命題 3：クライアントの非律動的なヴァージョニングの動きが、自らそれをストップさせようとしても止めることができないような「停止の不全」あるいは「止まらないプロセス」であるような場合、**治療的停止 (therapeutic stoppage)** と呼ぶような働きかけが重要な意味をもつ。これはクライアントの混乱の鎮静化のための重要な1つの道筋である。

仮説的命題 4：**共感的響応 (empathic resonating)** とは、PC/FOT のセラピーにおける最も核心的な働きかけの1つであり、それは、クライアントの反復する非律動的なヴァージョニングに対して、セラピストがそれを正確に、身体的に、相互作用的にヴァージョニン化する——しかも自らの律動性を失わずに——ことである。そこにはヴァージョニングの二重化——非律動的であり、かつ律動的であるような——が生起する。

仮説的命題 5：PC/FOT においては、**シンボリックな閃光 (symbolic gleam)** は、クライアントに変容や推進をもたらす重要で貴重な事象として生起する。シンボリックな閃光は、非律動的なヴァージョニングとは異なる連鎖を生み出し、未構成な身体的インプライングを秩序的に再構成化し、推進する可能性をもつものである。

仮説的命題 6：**隠喩的な調律 (metaphoric attunement)** とは、クライアントの中の

シンボリックな閃光がヴァージョン化され連鎖化していき、それがさまざまな側面と交差し、隠喩的にその意味が響き合い、連関していくような動きのことである。ここに生じるのは、反復する非律動的なヴァージョニングとはまったく対照的な、シンボリックな閃光のヴァージョニングであり、その連鎖化である。

仮説的命題 7: **律動的個体化 (rhythmic individualizing)** とは、生命体が一人ひとり微妙かつ複雑に異なるその心身の機能をよりスムーズに秩序的に発現する動きである。その生起は、個人文法的型 (personal grammatical form) と呼べるようなその人独特の構造と機能の現れ方のパターンに沿って姿を為すようになる。このような動きが十分に獲得されるとき、それはさまざまな問題への汎用性をもつようになるので、サイコセラピーは真の意味で終結される。

この第Ⅲ部の議論は、ジェンドリンのプロセスモデルと筆者の臨床経験の交差の試みでもあり、また、プロセスモデルの臨床的意義を筆者の臨床経験から実例化する試みでもあった。その成果については、さらに今後とも検討していきたい。

2. 今後の課題

本論文のタイトル「ジェンドリンのプロセスモデルとその臨床的意義に関する研究」が示すとおり、本論文の目的は大きく分けると、ジェンドリンのプロセスモデルについての解明、そしてその臨床的意義の考察、の2つであったと言える。最後に、この2つの問題について、今後も取り組んでいかねばならない課題を記しておきたい。

第1の課題——ジェンドリンのプロセスモデルの解明——については、これまでほとんど行われてこなかったプロセスモデルの全体を考察し、このモデルが何を切り拓こうとするものであるのかを明らかにした。また、資料として『プロセスモデル (*A Process Model*)』(Gendlin, 1997a)の全訳を作成した。このジェンドリンのプロセスモデルが、哲学やサイコセラピーの領域にとどまらず、今後さまざまな専門分野の中に取り入れられ、議論されることは間違いないだろう。ごく最近になって、ジェンドリンのプロセスモデルが、哲学や心理学関係以外の研究にも引用される例が少しずつ見られるようになってきている（例えば、音楽教育研究における Hasty, 2012 ほかを参照）。おそらくは、今後かなり飛躍的に、ジェンドリンのプロセスモデルの意義が注目され議論されるようになっていくのではないかと筆者は予測している。しかし本論文では、このジェンドリンのプロセスモデルがさまざまな専門領域に与える意義や可能性については十分な議論を行うことができなかった。それは学問全般に対する筆者の理解の不足にもよるものであるので、今後種々の専門分野の研究者と交流する中で、ジェンドリンのプロセスモデルの価値を発信するとともに、各分野の内容を真摯に学び、考察を深めていきたいと考えている。

そして第2の、ジェンドリンのプロセスモデルの臨床的意義の考察については、本論文の第Ⅲ部において、ジェンドリンが提案する理論構築法としての TAE を用いることで、筆者自身の臨床経験を振り返ることができ、筆者にとっては意義深い検討を行うことができた。しかし、今回の研究は何かを実証的に確証していくものというよりも、セラピーで生起するプロセスについての理論化に焦点をあてたものであったので、成果として取り出すことができたのは、まだ仮説的な命題にとどまっている。今後、よりデータグラウンデッドな方法や、実証的な仮説検証の手続きを踏むことで、さらに妥当性の高い理論化を行っていきたいと考えている。また、本論文ではパーソンセンタード/フォーカシング指向セラピー (PC/FOT) のプロセスを理論化することを通して、ジェンドリンのプロセスモデルの臨床的意義を明らかにしようとしたが、本論文の研究成果が、これまでの PC/FOT

のプロセス論（例えば、清水 2004 ほか）や、さらには PC/FOT 以外のサイコセラピーのプロセス論（例えば、Jones, 2000 守屋・皆川監訳 2004; 長山・清水 2006 ほか）と、どのような関係にあるのかについての検討も、今後の大きな課題である。

また、そのような研究を進めていく中で、PC/FOT をはじめとしたサイコセラピーの実践と研究が、多くの人びとの福祉にさらに貢献できるような発展の道筋を提案していきたいと考えている（ジェンドリンがロジャーズのサイコセラピーをさらに豊かで創造的なものにしてきたように。またジェンドリン本人から、「私の真似はしないでほしい」と言われた言葉を胸に刻んで）。

(完)

あとがき

筑波大学大学院に在籍していた1985年に、修士論文「ジェンドリン、E. T. における体験過程論の展開の研究——特にロジャーズのカウンセリング理論との関係から——」を提出してから30年近い月日が流れた。ジェンドリンの臨床理論や哲学に関する研究をまとめて、1つの形にしたいという気持ちはかなり以前からあったが、ずいぶん時間がかかってしまった。修士論文提出以降も、自分の中で細々とジェンドリン研究を継続してはいたが、今回のような形でまとめることができたのは、多くの人たちとの出会いや交流があったおかげである。

2005年に勤務校である法政大学から研究休暇（サバティカル）を与えられ、1年間をどのように使おうかと思案していたところ、得丸さと子（智子）さん（現・宮崎大学教授）らから、村里忠之さん（現・早稲田大学講師）を囲んでジェンドリンのプロセスモデルを読む会を開くのだが、参加しないかとの打診を受けた。渡りに船とはまさしくこのことで、ひとりではなかなか困難だったプロセスモデルの読解に、1年間じっくりと取り組むことができた。1年をかけてもジェンドリンのプロセスモデルの全文は読破できなかったが、本腰を入れてこの作品に取り組む構えができたのは、研究休暇の機会と研究仲間の存在のおかげである。このような巡り合わせのチャンスをつくって下さった方々に心よりお礼申し上げたい。

2006年頃からは、国内外でジェンドリンのプロセスモデルやTAEに関するワークショップやカンファレンス、研究報告などが次第に行われるようになり、筆者も可能な限りそのような場に参加して、研究交流の機会をもってきた。本論文が完成できたのは、まず何よりもEugene Gendlin氏ご本人とそのパートナーMary Hendricks氏の温かい御協力のおかげである。お二人に深く感謝したい。そして池見陽氏、三村尚彦氏（いずれも関西大学教授）、Campbell Purton氏、Judy Moore氏（いずれも英国University of East Anglia, Counseling Centerスタッフ）、Ann Weiser Cornell氏、Robert Parker氏（いずれも米国The Focusing Instituteスタッフ）、Christiane Geiser氏、Donata Schoeller氏（いずれもSwitzerland Focusing Professionalsスタッフ）らとは貴重な研究交流を行ってきている。こうした人々はジェンドリン研究にともに取り組む仲間であり、ある面では筆者にとっての指導者である、以上の方々に心より感謝したい。

そしてそうこうするうちに、以前からジェンドリン研究を一緒にやっていた諸富祥彦さ

ん（明治大学教授）の企画によって、2009年に『フォーカシングの原点と臨床的展開』（岩崎学術出版社）、『ジェンドリン哲学入門——フォーカシングの根底にあるもの——』（コスモス・ライブラリー）といった研究書を共著で上梓することになった。この2冊の本は、筆者にとってジェンドリンの哲学や臨床理論の解読の成果を公表するまたとない機会となったが、プロセスモデルの全体の解読など、残った課題も大きいものだった。

このように多くの方々との研究交流もあって、筆者のジェンドリン研究は少しずつ進んできたのだが、プロセスモデルの全体の解読はなかなかはかどらなかった。転機は2011年の立春の日だった。その日、筆者の中に「今日からジェンドリンのプロセスモデルの全訳に取り組もう」という気持ちが突如芽生えた。理由は自分でもよくわからないが、「人まかせにばかりしてはいけない」といった気持ちも同時に湧いてきたことを記憶している。本論文第Ⅲ部で論じた「シンボリックな閃光」のようなものだったのだろう。そして翌月に東日本大震災が発生し、プロセスモデルの解読と訳出は、筆者にとって鎮魂と復興を祈る写経のような行為となり、連鎖化されていった。

また、筆者が日々の研究教育を行ううえでお世話になっている、法政大学の教職員の方々にもお礼申し上げたい。特に本論文の提出を勧めてくださった、人間社会研究科の長山恵一教授と清水幹夫教授には心から感謝の気持ちをお伝えしたい。このような形でまとめることができたのは、両氏と、臨床心理学専攻の専任教員（皆川邦直教授、服部環教授、小野純平教授、丹羽郁夫教授、久保田幹子教授、佐藤篤司助教）、および現代福祉学部専任教員と事務課職員の方々のご厚意のおかげである。また、解読し訳出した『プロセスモデル』は、大学院人間福祉専攻（臨床心理学研究領域）博士後期課程の特殊講義のテキストとしてここ数年取り上げ、講読してきた。文意の取り違えや変換ミスなどを指摘してくれた大学院生の酒井茂樹さん、大迫久美恵さん、宮田はる子さん、研究生の木村喜美代さんほか、ゼミに参加した院生諸氏にお礼申し上げる。

最後に、いつも支えてもらっている妻と子どもたちにも感謝の気持ちを伝えたい。

2013（平成25）年 5月10日

末武 康弘

文 献

- American Psychological Association (2006) Evidence-based practice in psychology. *American Psychologist*, **61**(4), 271-285.
- Asay, T. P. & Lambert, M. J. (1999) The empirical case for the common factors in therapy: Quantitative findings. In M. Hubble, B. L. Duncan & S. D. Miller (eds.) *The Heart & Soul of Change: What Works in Therapy*. Washington, D.C.: American Psychological Association, 33-55.
- Beck, A. T. (1976) *Cognitive Therapy and the Emotional Disorders*. Madison, Conn.: International Universities Press. (ベック、A. T. 大野裕訳 1990 認知療法——精神療法の新しい発展—— 岩崎学術出版社)
- Burns, D. D. & Spangler, D. L. (2001) Do changes in dysfunctional attitudes mediate changes in depression and anxiety in cognitive behavioral therapy? *Behavior Therapy*, **32** (2), 337-369.
- Consumer Reports (1995, November) Mental health: Does therapy help? 734-739.
- Cooper, M. (2008) *Essential Research Findings in Counselling and Psychotherapy: The Facts Are Friendly*. London: Sage Publications. (クーパー、M. 清水幹夫・末武康弘監訳 2012 エビデンスにもとづくカウンセリング効果の研究——クライアントにとって何が最も役に立つのか—— 岩崎学術出版社)
- Cooper, M., Watson, J. C. & Hölldampf, D. (eds.) (2010) *Person-Centered and Experiential Therapies Work*. Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Elkin, I., Falconnier, L., Martinovich, Z. & Mahoney, C. (2006) Therapist effects in the NIMH Treatment of Depression Collaborative Research Program. *Psychotherapy Research*, **16**(2), 144-160.
- Elliott, R. (2007) Person-centred approaches to research. In M. Cooper, P. Schmid, M. O'Hara & G. Wyatt (eds.) *The Handbook of Person-Centred Psychotherapy and Counselling*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 327-340.
- Elliott, R., Greenberg, L. S. & Lietaer, G. (2004) Research on experiential therapies. In M. J. Lambert (ed.) *Bergin and Garfield's Handbook of Psychotherapy and*

- Behavior Change* (Fifth Edition). New York: John Wiley & Sons, 439-539.
- Freud, S. (1923) The ego and the id. In *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*. Vol. I (12-66), London: The Hogarth Press, 1961. (フロイト、S. 本間直樹他訳 2007 自我とエス・みずからを語る (フロイト全集 18) 岩波書店 所収)
- Friedman, N. (1976) From the experiential in therapy to experiential psychotherapy. *Psychotherapy: Theory, Research and Practice*, **13**(3), 6-23.
- Geiser, C. (2010) Moments of movement: Carrying forward structure-bound processes in work with clients suffering from chronic pain. *Person-Centered and Experiential Psychotherapies*, **9**(2), 95-106.
- Gendlin, E. T. (1950) Wilhelm Dilthey and the problem of comprehending human significance in the science of man. Unpublished MA thesis, Department of Philosophy, University of Chicago.
- Gendlin, E. T. (1958) The function of experiencing in symbolization. Unpublished doctoral dissertation. University of Chicago.
- Gendlin, E. T. (1961) Experiencing: A variable in the process of therapeutic change. *American Journal of Psychotherapy*, **15**, 233-245. (ジェンドリン、E. T. 村瀬孝雄訳 1981 体験過程と心理療法 ナツメ社 所収)
- Gendlin, E. T. (1962a) *Experiencing and the Creation of Meaning: A Philosophical and Psychological Approach to the Subjective*. New York: Free Press of Glencoe. (Reprinted by Macmillan, 1970) (ジェンドリン、E. T. 筒井健雄訳 1993 体験過程と意味の創造 ぶっく東京)
- Gendlin, E. T. (1962b) Client-centered developments and work with schizophrenics. *Journal of Counseling Psychology*, **9**(3), 205-212.
- Gendlin, E.T. (1963) Subverbal communication and therapist expressivity: Trends in client-centered therapy with schizophrenics. *Journal of Existential Psychiatry*, **4**(14), 105-120. (ジェンドリン、E. T. 村瀬孝雄訳 1981 体験過程と心理療法 ナツメ社 所収)
- Gendlin, E. T. (1964) A theory of personality change. In P. Worchel & D. Byrne (eds.) *Personality Change*. New York: John Wiley and Sons, 100-148. (ジェンドリン、E.

- T. 池見陽・村瀬孝雄訳 1999 セラピープロセスの小さな一步 金剛出版 所収)
- Gendlin, E. T. (1965-66) Experiential explication and truth. *Journal of Existentialism*, **6**, 131-146.
- Gendlin, E. T. (1966) Existentialism and experiential psychotherapy. In C. Moustakas (ed.) *Existential Child Therapy*. New York: Basic Books, 206-246. (ムスターカス、C. 編 北見芳雄・國分康孝監訳 1980 思春期の実存的危機 岩崎学術出版社 所収)
- Gendlin, E. T. (1968) The experiential response. In E. Hammer (ed.) *Use of Interpretation in Treatment*. New York: Grune & Stratton, 208-227. (ジェンドリン、E. T. 日笠摩子・田村隆一訳 体験的応答 <http://www.focusing.org/jp/expresj.htm>)
- Gendlin, E. T. (1971) A phenomenology of emotions: Anger. In D. Carr & E. S. Casey (eds.) *Explorations in Phenomenology: Papers of the Society for Phenomenology and Existential Philosophy*. The Hague: Martinus Nijhoff, 367-398.
- Gendlin, E. T. (1973) Experiential phenomenology. In M. Natanson (ed.) *Phenomenology and the Social Sciences*. Vol. I, Evanston: Northwestern University Press, 281-319.
- Gendlin, E. T. (1977) Phenomenological concept versus phenomenological method: A critique of Medard Boss on dreams. *Soundings*, **60**, 285-300.
- Gendlin, E. T. (1979/1981) *Focusing*. New York: Bantam Books. (ジェンドリン、E. T. 村山正治・都留春夫・村瀬孝雄訳 1982 フォーカシング 福村出版)
- Gendlin, E. T. (1978-79) Befindlichkeit: Heidegger and the philosophy of psychology. *Review of Existential Psychology and Psychiatry*, **16**(1-3), 43-71.
- Gendlin, E. T. (1981) *A Process Model*. Unpublished manuscript (422 pp.).
- Gendlin, E. T. (1983) Dwelling. In R. C. Scharff (ed.) *Heidegger Conference Proceedings*. Durham: The University of New Hampshire.
- Gendlin, E. T. (1986) *Let Your Body Interpret Your Dreams*. Wilmette, IL: Chiron.
- Gendlin, E. T. (1987) A philosophical critique of the concept of narcissism: The significance of the awareness movement. In D. M. Levin (ed.) *Pathologies of the Modern Self: Postmodern Studies on Narcissism, Schizophrenia, and Depression*. New York: New York University Press, 251-304.
- Gendlin, E. T. (1991a) Thinking beyond patterns: Body, language and situations. In B.

- den Ouden & M. Moen (eds.) *The Presence of Feeling in Thought*. New York: Peter Lang, 21-151.
- Gendlin, E. T. (1991b) Crossing and dipping: Some terms for approaching the interface between natural understanding and logical formulation. In M. Galbraith & W. J. Rapaport (eds.) *Subjectivity and the Debate over Computational Cognitive Science*. Buffalo: State University of New York, 37-59.
- Gendlin, E. T. (1996) *Focusing-Oriented Psychotherapy*. New York: Guilford Press. (ジェンドリン、E. T. 村瀬孝雄・池見陽・日笠摩子監訳 1998～1999 フォーカシング指向心理療法 (上) (下) 金剛出版)
- Gendlin, E. T. (1997a) *A Process Model*. New York: The Focusing Institute. 末武康弘訳 プロセスモデル 全 324 頁 (未公刊、なお、研究のためにこの全訳を参照されたい場合は、suetake@hosei.ac.jp までご連絡ください)
- Gendlin, E. T. (1997b) The responsive order: A new empiricism. *Man and World*, **30**(3), 383-411. (ジェンドリン、E. T. 斎藤浩文訳 1998 応答の秩序——新しい経験主義—— 現代思想 **26**(1) <特集: ウィトゲンシュタイン> 172-201 頁)
- Gendlin, E. T. (1997c) What happens when Wittgenstein asks "What happens when ...?" *The Philosophical Forum*, **28**(3), 268-281.
- Gendlin, E. T. (1997d) Preface to the paper edition. In *Experiencing and the Creation of Meaning: A Philosophical and Psychological Approach to the Subjective*. Evanston, Illinois: Northwestern University Press (pp. xi-xxiii).
- Gendlin, E. T. (2002) Foreword. In C. R. Rogers & D. E. Russell (2002) *Carl Rogers: The Quiet Revolutionary*. Reseville, California: Penmarin Books. pp.xi-xxi. (ジェンドリン、E. T. 序文 ロジャーズ、C. R. & ラッセル、D. E. 畠瀬直子訳 2006 カール・ロジャーズ 静かなる革命 誠信書房 i-xii 頁)
- Gendlin, E. T. (2003) Beyond postmodernism: From concepts through experiencing. In Roger Frie (ed.) *Understanding Experience: Psychotherapy and Postmodernism*. Routledge, 100-115.
- Gendlin, E. T. (2004) Introduction to 'Thinking At the Edge'. *The Folio*, **19**(1), 1-8.
- Gendlin, E. T. (2009a) A changed ground for precise cognition. Unpublished manuscript (35 pp.).

- Gendlin, E. T. (2009b) What first and third person processes really are. *Journal of Consciousness Studies*, **16**(10-12), 332–362.
- Gendlin, E. T. (2009c) We can think with the implicit, as well as with fully formed concepts. In Karl Leidlmair (ed.) *After Cognitivism: A Reassessment of Cognitive Science and Philosophy*. Springer, 147-161.
- Gendlin, E. T. (2012a) Implicit precision. In Z. Radman (ed.) *Knowing without Thinking: The Theory of the Background in Philosophy of Mind*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Gendlin, E. T. (2012b) Process generates structures: Structures alone don't generate process. *The Folio*, **23** (1), 3-13.
- Gendlin, E. T. (2013) Arakawa and Gins: The organism-person-environment process. In J. Keane & T. Glazebrook (eds.) *Arakawa and Gins Special Issue of Inflexions Journal*, **6**, 225-236. <http://www.inflexions.org/>
- Gendlin, E. T. & Zimring, F. (1955) The qualities or dimensions of experiencing and their change. *Counseling Center Discussion Paper*, **1**(3). Chicago: University of Chicago Library (27 pp.).
- Gendlin, E. T. & Johnson, D. H. (2004) Proposal for an international group for a first person science. Available at http://www.focusing.org/gendlin_johnson_iscience.html
- Gendlin, E. T. & Hendricks, M. (2004) Thinking at the edge (TAE) steps. *The Folio*, **19** (1), 12-24.
- Greenberg, L. S., Rice, L. N. & Elliott, E. (1993) *Facilitating Emotional Change*. New York: Guilford Press. (グリーンバーグ、L. S.、ライス、L. N. & エリオット、R. 岩壁茂訳 2006 感情に働きかける面接技法 誠信書房)
- Hansen, N. B., Lambert, M. J. & Forman, E. M. (2002) The psychotherapy dose-response effect and its implications for treatment delivery services. *Clinical Psychology and Science Practice*, **9**(3), 329-343.
- Hasty, C. F. (2012) Learning in time. *Visions of Research in Music Education*, **20**. Retrieved from <http://www-usr.rider.edu/vrme~/>
- 島瀬直子他編 (1986) カール・ロジャーズとともに 創元社
- Hendricks, M. N. (2002) Focusing-oriented/experiential psychotherapy. In D. J. Cain &

- J. Seeman (eds.) *Humanistic Psychotherapies: Handbook of Research and Practice*. Washington, DC: American Psychological Association, 221-252.
- 池見陽 (1999) 体験と実存 ジェンドリン、E. T.・池見陽 (池見陽・村瀬孝雄訳) セラピープロセスの小さな一歩——フォーカシングからの人間理解—— 金剛出版 139-162 頁
- Ikemi, A. (2005) Carl Rogers and Eugene Gendlin on the Bodily Felt Sense: What they share and where they differ. *Person-Centered and Experiential Psychotherapies*, **4**(1), 21-42
- 池見陽 (2010a) 僕のフォーカシング=カウンセリング——ひとときの生を言い表す—— 創元社
- 池見陽 (2010b) イメージ——体験の辺縁に動くもの—— 心理臨床の広場 第4巻第2号 12-13 頁
- Ikemi, A. (2010) An explication of focusing-oriented psychotherapy from a therapy case. *Person-Centered and Experiential Psychotherapies*, **9**(2), 107-117.
- Jones, E. E. (2000) *Therapeutic Action: A Guide to Psychoanalytic Therapy*. Northvale, NJ: Jason Aronson. (シヨーンズ、E. E. 守屋直樹・皆川邦直監訳 2004 治療作用——精神分析的な精神療法の手引き—— 岩崎学術出版社)
- Joseph, S. & Worsley, R. (eds.) (2005) *Person-centred Psychopathology: A Positive Psychology of Mental Health*. Ross-on-Wye, UK: PCCS Books.
- 河合隼雄 (1986) 心理療法論考 新曜社
- 神戸早紀・末武康弘 (2011) 質的研究法としての解釈学的現象学的分析 (IPA) の具体的な手続きについて 神奈川大学心理相談センター紀要 心理相談研究 第2号 119-132 頁
- King, M., et al. (2000) Randomised controlled trial of non-directive counselling, cognitive-behaviour therapy and usual general practitioner care in the management of depression as well as mixed anxiety and depression in primary care. *Health Technology Assessment*, **4**(19), 1-83.
- Kirschenbaum, H. (2007) *The Life and Work of Carl Rogers*. Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Kirschenbaum, H. & Henderson, V. L. (eds.) (1989) *The Carl Rogers Reader*. Boston:

- Houghton-Mifflin. (カーシェンバウム、H. & ヘンダーソン、V. L. 編 伊東博・村山正治監訳 ロジャーズ選集 (上) (下) 誠信書房)
- Kirschenbaum, H. & Henderson, V. L. (eds.) (1990) *The Carl Rogers Dialogues*. London: Constable and Robinson.
- Klein, M. (1952) Some theoretical conclusions regarding the emotional life of the infant. In *Envy and Gratitude & Other Works* (The Writings of Melanie Klein, Vol.3). New York: Delacorte Press, 1975, 61-93. (小此木啓吾・岩崎徹也監訳 2000 妄想的・分裂的世界 (メラニー・クライン著作集 4) 誠信書房 所収)
- Klein, M. H., Mathieu, P. L., Gendlin, E. T. & Kiesler, D. J. (1969) The experiencing scale: A research and training manual volume1. Wisconsin Psychiatric Institute, 56-63.
- Korbei, L. (1994) Eugen(e) Gend(e)lin. In O. Frischenschlager (Hg.) *Wien, wo sonst! Die Entstehung der Psychoanalyse und ihrer Schulen*. Wien/Köln/Weimar: Böhlau, 174-181. (E. Zinchitz, Trans. 2007. Eugen(e) Gend(e)lin. Unpublished manuscript. http://www.focusing.org/gendlin/docs/gol_2181.html (コーバイ、L. 桜本洋樹、村里忠之、諸富祥彦、大迫久美恵、末武康弘、得丸智子訳 2011 オイゲン・ゲンドリン (ユージン・ジェンドリン) http://www.focusing.org/jp/eugene_gendlin.pdf)
- Krycka, K. C. (2008) The nature of our exceeding. *The Folio*, **21** (1), 93-105.
- Krycka, K. C. (2010) Multiplicity: A first-person exploration of dissociative experiencing. *Person-Centered and Experiential Psychotherapies*, **9**(2), 143-156.
- Lazarus, A. A. (1989) *The Practice of Multimodal Therapy*. New York: McGraw-Hill. (ラザラス、A. A. 高石昇他訳 1999 マルチモード・アプローチ——行動療法の展開—— 二瓶社)
- Levin, D. M. (ed.) (1997). *Language Beyond Postmodernism: Saying and Thinking in Gendlin's Philosophy*. Evanston: Northwestern University Press.
- Lou, N. (2008) Passageway into the implicit. *The Folio*, **21** (1), 73-81.
- Mearns, D. (1994) *Developing Person-Centred Counseling*. London: Sage Publications . (メアーンズ、D. 諸富祥彦監訳 2000 パーソンセンタード・カウンセリングの実際 コスモス・ライブラリー)

- Mearns, D. & Cooper, M. (2005) *Working at Relational Depth in Counselling and Psychotherapy*. London: Sage Publications.
- Mearns, D & Thorne, B. (2000) *Person-Centred Therapy Today*. London: Sage Publications.
- Nelson, K. (2008) The body which loves what it loves: Why the philosophy of the implicit matter. *The Folio*, 21 (1), 106-120.
- 三村尚彦 (2009a) ジェンドリンとフッサール——進展 (carrying forward) の現象学——
ディルタイ研究 第20号 63-79頁
- 三村尚彦 (2009b) ジェンドリンとポストモダニズム——プロセスの論理—— 関西大学
文学論集 第59巻第3号 1-26頁
- 三村尚彦 (2011) そこにあつて、そこにはないもの ——ジェンドリンが提唱する新しい現象学——
フッサール研究 第9号 15-27頁
- 三村尚彦 (2012a) 追体験によって、何がどのように体験されるのか——ディルタイとジェンドリン——
関西大学文学論集 第62巻第2号 27-48頁
- 三村尚彦 (2012b) 記述的分析的心理学と体験過程理論——ジェンドリンがディルタイから継承したもの——
ディルタイ研究 第23号
- 三村尚彦 (2013) ジェンドリン哲学における IOFI 原理の考察 関西大学文学論集 第62巻第4号
- 諸富祥彦 (1997) カール・ロジャーズ入門 コスモス・ライブラリー
- 諸富祥彦 (2008) E. T. ジェンドリンの心理療法の基盤としての哲学 明治大学人文科学研究所紀要 第63巻 249-263頁
- 諸富祥彦編著 (2009) フォーカシングの原点と臨床的展開 岩崎学術出版社
- 諸富祥彦・村里忠之・末武康弘編著 (2009) ジェンドリン哲学入門——フォーカシングの根底にあるもの——
コスモス・ライブラリー
- Murasato, T. (2008) On a book of hope: A Process Model. *The Folio*, 19(1), 82-92.
- 村里忠之 (2009) プロセスモデルのVIII章について——フォーカシング & TAE の真の用途——
諸富祥彦・村里忠之・末武康弘編著 ジェンドリン哲学入門 コスモス・ライブラリー 293-370頁
- 村里忠之 (2011) E. T. ジェンドリンによる心理療法とフォーカシング & TAE の基礎としての暗在性 (the Implicit) 哲学についての研究 2010年度法政大学大学院人間

社会研究科提出博士論文

- 村瀬孝雄 (1981) 本書理解のために ジェンドリン、E. T. 村瀬孝雄訳 体験過程と心理療法 ナツメ社 viii-xxxvi 頁
- 村山正治編 (1991) フォーカシング・セミナー 福村出版
- 長山恵一・清水康弘 (2006) 内観法——実践の仕組みと理論—— 日本評論社
- Prouty, G. (1994) *Theoretical Evolutions in Person-Centered/Experiential Therapy: Applications to Schizophrenic and Retarded Psychoses*. Westport, Conn.: Praeger.
(プラウティ、G. 岡村達哉・日笠摩子訳 2001 プリセラピー 日本評論社)
- Purton, C. (2004a) A brief guide to a process model. *The Folio*, **19** (1), 112-120.
- Purton, C. (2004b) Ethology and Gendlin's a process model. *The Folio*, **19** (1), 137-145.
- Purton, C. (2004c) Differential response, diagnosis, and the philosophy of the implicit. *Person-centered and Experiential Psychotherapies*, **3** (4), 245-255.
- Purton, C. (2004d) *Person-Centred Therapy: The Focusing-Oriented Approach*. Basingstoke: Palgrave Macmillan. (パートン、C. 日笠摩子訳 2006 パーソン・センタード・セラピー——フォーカシング指向の観点から—— 金剛出版)
- Purton, C. (2004e) Differential response, diagnosis, and the philosophy of the implicit. *Person-Centered and Experiential Psychotherapies*, **3**(4), 244-255.
- Purton, C. (2004f) Focusing-oriented therapy. In P. Sanders (ed.) *The Tribes of the Person-Centred Nation: An Introduction to Schools of Therapy related to the Person-Centred Approach*. Ross-on-Wye: PCCS Books, 45-65.
- Purton, C. (2010) Introduction to the special issue on focusing-oriented therapy. *Person-Centered and Experiential Psychotherapies*, **9**(2), 89-94.
- Riveros, E. (trs. in Spanish) (2009) *Un Modelo Procossal*. Santiago de Chile: Instituto Ecuatoriano de Focusing.
- Rogers, C. R. (1942) *Counseling and Psychotherapy: Newer Concepts in Practice*. Boston: Houghton-Mifflin. (ロジャーズ、C. R. 末武康弘・保坂亨・諸富祥彦訳 2005a カウンセリングと心理療法 岩崎学術出版社)
- Rogers, C. R. (1951) *Client-Centered Therapy: Its Current Practice, Implications, and Theory*. Boston: Houghton-Mifflin. (ロジャーズ、C. R. 保坂亨・諸富祥彦・末武康弘訳 2005b クライアント中心療法 岩崎学術出版社)

- Rogers C R. (1957) The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **21**(2), 95-103. (伊東博・村山正治監訳 2001 ロジャーズ選集 (上) 誠信書房 所収)
- Rogers, C. R. (1961) *On Becoming a Person*. Boston: Houghton-Mifflin. (ロジャーズ、C. R. 諸富祥彦・末武康弘・保坂亨訳 2005c ロジャーズが語る自己実現の道 岩崎学術出版社)
- Rogers, C. R. (1981) *A Way of Being*. Boston: Houghton-Mifflin. (ロジャーズ、C. R. 畠瀬直子監訳 1984 人間尊重の心理学 誠信書房)
- Rogers, C. R. & Diamond, R. F. (1954) *Psychotherapy and Personality Change*. Chicago: University of Chicago Press. (ロジャーズ、C. R. ほか、友田不二男編訳 1967 パースナリティの変化 岩崎学術出版社)
- Rogers, C. R., Gendlin, E. T., Kiesler, D. J. & Truax, C. B. (eds.) (1967) *The Therapeutic Relationship and its Impact: A Study of Psychotherapy with Schizophrenics*. Madison: University of Wisconsin Press.
- Rogers, C. R. & Russell, D. E. (2002) *Carl Rogers: The Quiet Revolutionary*. Reseville, California: Penmarin Books. (ロジャーズ、C. R. & ラッセル、D. E. 畠瀬直子訳 2006 カール・ロジャーズ 静かなる革命 誠信書房)
- Sanders, P. (ed.) (2004) *The Tribes of the Person-Centred Nation: An Introduction to Schools of Therapy related to the Person-Centred Approach*. Ross-on-Wye: PCCS Books. (サンダース、P. 編 近田輝行・三國牧子監訳 2007 パーソンセンタード・アプローチの最前線 コスモス・ライブラリー)
- Schroeder, H. W. (2008) The felt sense of natural environments. *The Folio*, **21**(1), 63-72.
清水幹夫 (2004) クライアント中心カウンセリングのプロセス観と“プロセス化” 法政大学大学院臨床心理相談室報告紀要 第1号 55-69頁
- Simpson, S., Corney, R., Fitzgerald, P. & Beecham, J. (2000) A randomised controlled trial to evaluate the effectiveness and cost-effectiveness of counselling patients with chronic depression. *Health Technology Assessment*, **4**(36).
- Smith, J. A. & Osborn, M. (2004) Interpretative phenomenological analysis. In G. M. Breakwell (ed.) *Doing Social Psychology Research*. Maiden, Mass: BPS, 229-254.
- Stern, D. N. (1995) *The Motherhood Constellation: A Unified View of Parent-Infant*

- Psychotherapy*. New York: Basic Book. (スターン、D. N. 馬場礼子・青木紀久代訳
2000 親 - 乳幼児心理療法——母性のコンステレーション—— 岩崎学術出版社)
- Sterner, W. (2004) A Process Model is unique in its conceptual co-generativity. *The Folio*, 19(1), 121-123.
- 末武康弘 (1985a) ジェンドリン, E. T. における体験過程論の展開の研究——特にロ
ジャーズのカウンセリング理論との関係から—— 昭和 59 (1984) 年度筑波大学教
育学研究科提出修士論文
- 末武康弘 (1985b) クライエント中心療法理論の発展におけるジェンドリンの役割 筑波
大学教育学研究集録 第9号 69-81頁
- 末武康弘 (1986) 人格およびその変化をめぐる理論的課題——ロジャーズ派人格理論の推
移の検討を中心として—— 教育方法学研究 第7号 137-159頁
- 末武康弘 (1987) ジェンドリンにふれてみて考えたこと——フォーカシングを越えて——
ENCOUNTER 第6号 29-36頁
- 末武康弘 (1988) 離人感をはじめとする内的苦悩を訴えた女子学生とのカウンセリング—
—学生相談室でのかかわりから—— 筑波大学臨床心理学論集 第6集 115-136頁
- 末武康弘 (1990) 来談者中心療法と夢解釈 (その一) ——ジェンドリンによる夢の世界へ
の参入—— 女子美術大学紀要 第20号 11-29頁
- 末武康弘 (1992、改訂版 2004) ロジャーズ—ジェンドリンの現象学的心理学 氏原寛・
小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕編 心理臨床大事典 培風館 140-144頁
(改訂版 131-135頁)
- 末武康弘 (1993) ジェンドリンによるナルシズム概念批判 (1) ——体験の複雑性
(experiential intricacy) の意味—— 明治学院論叢 第524巻15号 85-99頁
- 末武康弘 (1994) ジェンドリンによるナルシズム概念批判 (2) ——自我と非自我との
新たな関係—— 明治学院論叢 第541巻16号 23-38頁
- 末武康弘 (2000) ナルシズムと身体——ジェンドリンによるナルシズム概念批判 (3)
—— 法政大学文学部紀要 第45号 115-144頁
- 末武康弘 (2003) 舞踏家をこころざす青年とのカウンセリング 東山紘久編著 来談者中
心療法 ミネルヴァ書房 113-129頁
- 末武康弘 (2009a) 臨床的問題としてのジェンドリン哲学 諸富祥彦編著 フォーカシン
グの原点と臨床的展開 岩崎学術出版社 89-146頁

- 末武康弘 (2009b) 身体 - 環境、暗在的含意と生起、進化そして行動——『プロセスモデル』第 I 章～第 VI 章—— 諸富祥彦・村里忠之・末武康弘編著 ジェンドリン哲学入門 コスモス・ライブラリー 191-254 頁
- 末武康弘 (2009c) ジェンドリンからの手紙とそこから得られた応答的秩序 現代福祉研究 第 9 号 99-119 頁
- 末武康弘 (2010) プロセスとしてのイメージ——フォーカシングとジェンドリンの哲学から—— 心理臨床の広場 第 4 巻第 2 号 26-27 頁
- Suetake, Y. (2010) The clinical significance of Gendlin's process model. *Person-Centered and Experiential Psychotherapies*, 9(2), 118-127.
- 末武康弘 (2011) How can interactional bodily impact lead a person to therapeutic change? : A clinical viewpoint brought by Gendlin's process model. 現代福祉研究 第 11 号 113-123 頁
- 末武康弘・得丸さと子 (智子) (2012) パーソンセンタード/フォーカシング指向セラピーでは何が生起するのか?——「セラピスト TAE」による質的分析のパイロット研究—— 現代福祉研究 第 12 号 141-163 頁
- 高橋寛子 (2012) セラピストの「実践知」を言葉へと開く試み——「TAE」(Thinking At the Edge)の心理臨床実践研究への適用—— 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要 第 15 号 69-82 頁
- 高橋寛子・得丸さと子 (智子) (2011) セラピストの「実践知」を言葉に開く 日本人間性心理学会第 30 回大会発表論文集 186-187 頁
- 田中秀男 (2004) ジェンドリンの初期体験過程に関する文献研究 (上) (下) 明治大学図書館紀要 第 8 巻 56-81 頁、第 9 巻 58-87 頁
- Tang, T. Z., DeRubeis, R. J., Hollon, S. D., Amsterdam, J. A. & Shelton, R. C. (2007) Sudden gains in cognitive therapy of depression and depression relapse/recurrence. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 75, 404-408.
- 得丸さと子 (2008) TAE による文章表現ワークブック 図書文化
- 得丸さと子 (2009) 『プロセスモデル』第 VII 章にみるジェンドリンの言語論 諸富祥彦・村里忠之・末武康弘編著 ジェンドリン哲学入門 コスモス・ライブラリー 255-292 頁
- 得丸さと子 (2010) ステップ式質的研究法——TAE の理論と適用—— 海鳴社

- 友田不二男 (1956、新版 1996) カウンセリングの技術 誠信書房
- Walker, A. M., Rablen, R. A. & Rogers, C. R. (1960) Development of a scale to measure process changes in psychotherapy. *Journal of Clinical Psychology*, **16**(1), 79-85.
- Walkerden G. (2004a) How I read the structure of the A Process Model. *The Folio*, **19**(1), 124-130.
- Walkerden G. (2004b) Excerpts from a study session on A Process Model. *The Folio*, **19**(1), 132-136.
- Wampold, B. E. (2001) *The Great Psychotherapy Debate: Models, Methods and Findings*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Warner, M. S. (2000) Person-centred therapy at the difficult edge: A developmentally based model of fragile and dissociated process. In D. Mearns & B. Thorne *Person-Centred Therapy Today*. London: Sage Publications, 144-171.
- Yamaguchi, Y. & Tokumaru, S. (2010) A TAE-based qualitative study of subjective well-being for aged Japanese men. *The Folio*, **22**(1), 165-180.
- 矢野キエ (2012) クライエントの自己理解が生まれ、生が進展するプロセス 心理臨床学研究 第30巻第5号 609-620頁

ジェンドリンのプロセスモデルとその臨床的意義に関する研究

末武 康弘

論文の要旨

本論文では、米国の哲学者そしてサイコセラピストであるユージーン・T・ジェンドリン (Gendlin, Eugene T., 1926～) の代表的な哲学的作品『プロセスモデル (A Process Model)』 (Gendlin, 1997) の内容を解明し、あわせて、このプロセスモデルがサイコセラピーをはじめとした臨床実践にもたらす意義について考察した。

「序論」では、本論文の研究意図、ジェンドリンのプロセスモデルの概略を論じ、また国内外の先行研究を検討した。

序 論

1. 本論文の意図
2. ジェンドリンのプロセスモデル
3. 先行研究
4. 本論文の内容と構成

「本論」の第 I 部「臨床的問題としてのジェンドリン——プロセスモデルへの展開——」では、『体験過程と意味の創造』から『プロセスモデル』へと至るジェンドリンの哲学的な仕事の展開を、特に臨床的な問題関心との繋がりが深い論文に焦点をあてることによって考察した。

本 論

第 I 部 臨床的問題としてのジェンドリン哲学——プロセスモデルへの展開——

1. はじめに——ジェンドリン哲学へのアプローチ——
2. 体験過程、シンボル、意味——体験過程論の展開——
3. 夢、身体、隠喩——現象学的方法による夢解釈——
4. 体験の複雑性、自我と非自我、身体感覚が導くプロセス——ナルシズム概念批判と社会的提言——
5. インプライング、生起、進化——プロセスモデルの臨床的含意について——

6. (第I部の補遺) ジェンドリンからの手紙とそこから得られた応答的秩序

第II部「ジェンドリンのプロセスモデル——その解説と考察——」では、ジェンドリンの哲学的な仕事の頂点と言えるプロセスモデルに焦点をあて、その第I章から第VIII章にわたる全体を解説し考察を加えることで、このプロセスモデルがどのような視座から、どのような問題に取り組み、何を明らかにしているのかを解明した。(第II部の執筆のために、ジェンドリンのプロセスモデルの全訳を行った)。

第II部 ジェンドリンのプロセスモデル——その解説と考察——

1. はじめに
2. プロセスモデル第I章、第II章、第III章
3. プロセスモデル第IV章 身体と時間
4. プロセスモデル第V章 進化、新しさ、安定性
5. プロセスモデル第VI章 行動
6. プロセスモデル第VII章 文化、シンボル、言語
7. プロセスモデル第VIII章 暗在するものによる思考
8. (第II部の補遺) プロセスモデルの臨床的意義を抽出するための基礎的作業

第III部「プロセスモデルの臨床的意義を実例化する試み——パーソンセンタード/フォーカシング指向セラピーにおいて生起するプロセスの理論化——」では、サイコセラピストとして実践を行ってきた筆者自身の臨床経験を素材としながら、プロセスモデルから導き出された理論構築法としてのTAE (thinking at the edge) を方法論として用いることで、プロセスモデルの臨床的意義を具体的に検討した。

第III部 プロセスモデルの臨床的意義を実例化する試み——パーソンセンタード/フォーカシング指向セラピーにおいて生起するプロセスの理論化——

1. はじめに——研究の意図——
2. パーソンセンタード/フォーカシング指向セラピーにおいて生起するプロセスの理論化の試み
3. プロセスモデルの臨床的意義の実例化

「結論」では本論文の成果をまとめ、また今後の課題を述べた。

結 論

1. 本論文の成果
2. 今後の課題

A Study on Gendlin's Process Model and its Clinical Significance

Yasuhiro Suetake

Abstract.

The purpose of this thesis is to investigate the whole content of Gendlin's *Process Model* (Gendlin, 1997) and to elucidate the clinical significance of this model. Although it does not directly discuss issues in psychotherapy, Gendlin's Process Model inspires us with clinical implications and suggestions.

The contents of this thesis are as follows:

Introduction

Part I : The Clinical Implications of Gendlin's Process Model

Part II : The Decipherment of Gendlin's Process Model

Part III : An Empirical Study to Illustrate the Clinical Significance of Gendlin's Process Model

Conclusion

The whole content and the clinical significance of Gendlin's Process Model are examined through theoretical and empirical study, including a new conceptualization of the process of person-centered/focusing-oriented therapy.